
桶 川 市

諏訪野遺跡 I

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う
桶川地区埋蔵文化財発掘調査報告
(第1分冊)

2 0 1 4

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第 26 号住居跡出土遺物



2 第 40 号住居跡出土遺物



1 第27号住居跡出土遺物(1)



3 第31号住居跡出土遺物



2 第27号住居跡出土遺物(2)



4 第40号住居跡出土遺物

序

国土交通省が整備を進める首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、首都圏の交通渋滞の緩和と産業活力の向上に加え、大規模災害発生時における避難や救助、その後の復旧活動等にも大きな役割を果たすことが期待されております。

埼玉県にとっても圏央道のような高規格幹線道路の整備は、生活の利便性を向上させるとともに、産業振興をより一層促進するものとして、埼玉県5カ年計画の施策にも位置付けられております。

さて、桶川市を東西に貫く圏央道の建設予定地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しております。今回発掘調査を行なった諏訪野遺跡もその一つです。発掘調査は、圏央道の新設事業に伴う事前調査であり、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、70軒を超える縄文時代の竪穴住居跡が発見され、県内屈指の大規模集落跡であることが明らかになりました。竪穴住居跡はいずれも非常に状態が良く、内部からは大量の遺物も出土しており、大宮台地の縄文文化を知るうえで類いまれな資料といえます。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、桶川市教育委員会、並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 中 村 英 樹

例 言

1. 本書は、埼玉県桶川市に所在する諏訪野遺跡（第1・2次調査）の発掘調査報告書である。
2. 当該調査では極めて多量の遺構・遺物が出土したため、報告書は2回に分けて刊行する。本書はその第1回目にあたり、第2回目は平成27年度に刊行する予定である。
3. 遺跡の略号と代表地番・発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
諏訪野遺跡第1次（SWN）
桶川市大字川田谷字本沢6178 - 2他
平成19年5月10日付け教生文第2 - 24号
諏訪野遺跡第2次（SWN2）
桶川市大字川田谷字本沢5775 - 4他
平成20年5月30日付け教生文第2 - 14号
4. 発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。調査は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI - 3に示した組織により実施した。
発掘調査は第1次調査は本戸春夫・大屋道則・渡辺清志・坂田敏行が平成19年5月1日から平成20年3月24日まで、第2次調査は山本靖・渡辺・坂田・大和田隆が平成20年5月1日から平成20年9月30日まで実施した。
整理報告書作成作業は渡辺が担当し、平成23年10月1日から平成24年3月31日まで、平成24年4月9日から平成25年3月29日まで、平成25年4月8日から平成26年3月31日まで実施した。平成26年3月20日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第410集として印刷・刊行した。
6. 発掘調査における基準点測量は、第1次調査を株式会社シン技術コンサル、第2次調査を株式会社ヤマト測建に委託した。
7. 発掘調査における空中写真は、株式会社シン技術コンサルに委託した。
8. 遺跡の巻頭写真は小川忠博氏および合資会社池澤・土器展開写真を小川忠博氏に委託した。
9. 発掘調査における写真撮影は各担当が行い、出土遺物の写真撮影は渡辺が行った。
10. 出土品の整理・図版作成は渡辺が行った。
11. 本書の執筆は、I - 1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、他を渡辺が行った。
12. 本書の編集は渡辺が行った。
13. 本書にかかる諸資料は、平成26年4月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
14. 発掘調査、本書の作成にあたり、桶川市教育委員会をはじめ、北本市教育委員会などの関係機関の皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

凡 例

1. 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系国土地標準平面直角座標第IX系（原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図内における方位はすべて座標北を示している。

A 1 グリッド南西隅の座標は、 $X=1020.000$ 、 $Y=-27580.000$ 。北緯36°00′38.82″、東経139°16′20.31″である。（小数点第3位以下切り捨て）

2. 調査で使用したグリッドは、前記座標軸に基づく10m×10mを基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
3. グリッド名称は、北西隅を起点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C・・・）、西から東方向に数字（1・2・3・・・）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばA-1グリッド等と呼称した。

また、調査進行上の必要に応じ2m×2mの小グリッドを設定した。小グリッドの名称は、北西隅を起点として東方向に進行する並行式を採用し、1グリッドにつき25の小グリッドを設定、例えばA-1-1グリッド等と呼称した。

4. 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

SJ 住居跡 SB 掘立柱建物跡
SK 土壕 SC 集石土壕 SE 井戸跡
SD 溝跡 SO 道路跡 P ビット

5. 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。

遺構図

住居跡・掘立柱建物跡・土壕・集石土壕
・井戸跡 1:60
溝跡・道路跡 1:80～1:200
ビット 平面=1:100
断面=1:60

遺物実測図

縄文土器 1:4
土器拓影図 1:3
石器 2:3～1:3
土製品・陶磁器 1:3
鉄製品・古銭 1:2

遺物出土状況図・遺跡位置図・周辺地形図・遺跡全体図等は個別に縮尺率を設定した。

6. 遺構断面図に付した水準数値は海拔標高（単位m）を示す。本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/50,000・1/25,000地形図および桶川市発行の1/2,500都市計画図を使用した。

目 次

(第一分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	2
3 発掘調査・報告書作成の組織	4
II 立地と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6
III 遺跡の概要	10
IV 遺構と遺物	17
1 縄文時代の遺構と遺物	17
(1) 住居跡	17

(第二分冊)

(2) 土壌	387
(3) 集石土壌	425
(4) ビット集中区	427
2 近世の遺構と遺物	442
(1) 掘立柱建物跡	442
(2) 井戸跡	453
(3) 土壌	454
(4) 溝跡	472
V 調査のまとめ	480
1 調査の成果	480
2 遺構出土縄文土器について	480
3 縄文時代中期の竪穴住居跡について	489

写真図版

挿図目次

第1図	埼玉県の地形図	5	第30図	第2号(新)住居跡	
第2図	周辺の遺跡	7		出土遺物(1)	39
第3図	諏訪野遺跡と周辺の遺跡	8	第31図	第2号(新)住居跡	
第4図	遺跡位置図	11		出土遺物(2)	40
第5図	グリッド配置図	12	第32図	第2号(新)住居跡	
第6図	諏訪野遺跡 全体図(1)	13		出土遺物(3)	41
第7図	諏訪野遺跡 全体図(2)	14	第33図	第2号(新)住居跡	
第8図	諏訪野遺跡 全体図(3)	15		出土遺物(4)	42
第9図	諏訪野遺跡 全体図(4)	16	第34図	第2号(新)住居跡	
第10図	第1号住居跡柱穴変遷図	17		出土遺物(5)	44
第11図	第1号住居跡(1)	18	第35図	第2号(古)住居跡(1)	45
第12図	第1号住居跡(2)	19	第36図	第2号(古)住居跡(2)	46
第13図	第1号住居跡(3)	20	第37図	第2号(古)住居跡	
第14図	第1号住居跡柱痕	20		遺物出土状況	47
第15図	第1号住居跡		第38図	第2号(古)住居跡出土遺物	48
	遺物出土状況(1)	21	第39図	第3号住居跡	49
第16図	第1号住居跡		第40図	第3号住居跡柱穴変遷図	50
	遺物出土状況(2)	22	第41図	第3号住居跡	
第17図	第1号住居跡			遺物出土状況(1)	51
	遺物出土状況(3)	23	第42図	第3号住居跡	
第18図	第1号住居跡			遺物出土状況(2)	52
	遺物出土状況(4)	24	第43図	第3号住居跡出土遺物(1)	53
第19図	第1号住居跡出土遺物(1)	26	第44図	第3号住居跡出土遺物(2)	55
第20図	第1号住居跡出土遺物(2)	27	第45図	第3号住居跡出土遺物(3)	56
第21図	第1号住居跡出土遺物(3)	29	第46図	第4号住居跡(1)	57
第22図	第1号住居跡出土遺物(4)	30	第47図	第4号住居跡(2)	58
第23図	第1号住居跡出土遺物(5)	31	第48図	第4号住居跡	
第24図	第1号住居跡出土遺物(6)	32		遺物出土状況(1)	59
第25図	第1号住居跡出土遺物(7)	33	第49図	第4号住居跡	
第26図	第2号(新)住居跡(1)	35		遺物出土状況(2)	60
第27図	第2号(新)住居跡(2)	36	第50図	第4号住居跡	
第28図	第2号(新)住居跡			遺物出土状況(3)	61
	遺物出土状況(1)	37	第51図	第4号住居跡出土遺物(1)	62
第29図	第2号(新)住居跡		第52図	第4号住居跡出土遺物(2)	63
	遺物出土状況(2)	38	第53図	第4号住居跡出土遺物(3)	64

第54图	第5号住居跡 (1) ······ 66	第81图	第7号住居跡出土遺物 (2) ······ 99
第55图	第5号住居跡 (2) ······ 67	第82图	第7号住居跡出土遺物 (3) ······ 100
第56图	第5号住居跡柱穴変遷图 ······ 68	第83图	第7号住居跡出土遺物 (4) ······ 101
第57图	第5号住居跡 遺物出土状況 (1) ······ 70	第84图	第8号住居跡 (1) ······ 102
第58图	第5号住居跡 遺物出土状況 (2) ······ 71	第85图	第8号住居跡 (2) ······ 103
第59图	第5号住居跡 遺物出土状況 (3) ······ 72	第86图	第8号住居跡 遺物出土状況 (1) ······ 104
第60图	第5号住居跡 遺物出土状況 (4) ······ 73	第87图	第8号住居跡 遺物出土状況 (2) ······ 105
第61图	第5号住居跡 遺物出土状況 (5) ······ 74	第88图	第8号住居跡 遺物出土状況 (3) ······ 106
第62图	第5号住居跡 遺物出土状況 (6) ······ 75	第89图	第8号住居跡 遺物出土状況 (4) ······ 107
第63图	第5号住居跡出土遺物 (1) ······ 76	第90图	第8号住居跡出土遺物 (1) ······ 108
第64图	第5号住居跡出土遺物 (2) ······ 77	第91图	第8号住居跡出土遺物 (2) ······ 109
第65图	第5号住居跡出土遺物 (3) ······ 78	第92图	第8号住居跡出土遺物 (3) ······ 110
第66图	第5号住居跡出土遺物 (4) ······ 79	第93图	第8号住居跡出土遺物 (4) ······ 111
第67图	第5号住居跡出土遺物 (5) ······ 80	第94图	第8号住居跡出土遺物 (5) ······ 112
第68图	第5号住居跡出土遺物 (6) ······ 81	第95图	第8号住居跡出土遺物 (6) ······ 113
第69图	第6号住居跡 ······ 82	第96图	第8号住居跡出土遺物 (7) ······ 114
第70图	第6号住居跡 遺物出土状況 (1) ······ 83	第97图	第8号住居跡出土遺物 (8) ······ 114
第71图	第6号住居跡 遺物出土状況 (2) ······ 84	第98图	第9号住居跡 ······ 117
第72图	第6号住居跡出土遺物 (1) ······ 86	第99图	第9号住居跡 遺物出土状況 ······ 118
第73图	第6号住居跡出土遺物 (2) ······ 88	第100图	第9号住居跡出土遺物 (1) ······ 119
第74图	第6号住居跡出土遺物 (3) ······ 89	第101图	第9号住居跡出土遺物 (2) ······ 120
第75图	第6号住居跡出土遺物 (4) ······ 90	第102图	第10号住居跡 (1) ······ 121
第76图	第7号住居跡 (1) ······ 92	第103图	第10号住居跡 (2) ······ 122
第77图	第7号住居跡 (2) ······ 93	第104图	第10号住居跡 遺物出土状況 ······ 123
第78图	第7号住居跡 遺物出土状況 (1) ······ 94	第105图	第10号住居跡出土遺物 (1) ······ 124
第79图	第7号住居跡 遺物出土状況 (2) ······ 95	第106图	第10号住居跡出土遺物 (2) ······ 126
第80图	第7号住居跡出土遺物 (1) ······ 98	第107图	第11号住居跡 (1) ······ 127
		第108图	第11号住居跡 (2) ······ 128
		第109图	第11号住居跡 遺物出土状況 (1) ······ 129
		第110图	第11号住居跡

	遺物出土状況 (2)	130	第140図	第14号住居跡柱穴変遷図	165
第111図	第11号住居跡出土遺物 (1) . . .	131	第141図	第14号住居跡 (3)	165
第112図	第11号住居跡出土遺物 (2) . . .	133	第142図	第14号住居跡 遺物出土状況 (1)	166
第113図	第11号住居跡出土遺物 (3) . . .	134	第143図	第14号住居跡 遺物出土状況 (2)	167
第114図	第11号住居跡出土遺物 (4) . . .	135	第144図	第14号住居跡 遺物出土状況 (3)	168
第115図	第12号住居跡 (1)	136	第145図	第14号住居跡出土遺物 (1) . . .	170
第116図	第12号住居跡 (2)	137	第146図	第14号住居跡出土遺物 (2) . . .	171
第117図	第12号住居跡 (3)	138	第147図	第14号住居跡出土遺物 (3) . . .	172
第118図	第12号住居跡 遺物出土状況 (1)	140	第148図	第14号住居跡出土遺物 (4) . . .	173
第119図	第12号住居跡 遺物出土状況 (2)	141	第149図	第14号住居跡出土遺物 (5) . . .	174
第120図	第12号住居跡 遺物出土状況 (3)	142	第150図	第15号住居跡 (1)	175
第121図	第12号住居跡出土遺物 (1) . . .	144	第151図	第15号住居跡 (2)	176
第122図	第12号住居跡出土遺物 (2) . . .	145	第152図	第15号住居跡柱穴変遷図	176
第123図	第12号住居跡出土遺物 (3) . . .	146	第153図	第15号住居跡 遺物出土状況 (1)	177
第124図	第12号住居跡出土遺物 (4) . . .	147	第154図	第15号住居跡 遺物出土状況 (2)	178
第125図	第12号住居跡出土遺物 (5) . . .	148	第155図	第15号住居跡 遺物出土状況 (3)	179
第126図	第13号住居跡 (1)	149	第156図	第15号住居跡出土遺物 (1) . . .	180
第127図	第13号住居跡 (2)	150	第157図	第15号住居跡出土遺物 (2) . . .	181
第128図	第13号住居跡 遺物出土状況 (1)	151	第158図	第15号住居跡出土遺物 (3) . . .	183
第129図	第13号住居跡 遺物出土状況 (2)	152	第159図	第15号住居跡出土遺物 (4) . . .	184
第130図	第13号住居跡 遺物出土状況 (3)	153	第160図	第15号住居跡出土遺物 (5) . . .	185
第131図	第13号住居跡 遺物出土状況 (4)	154	第161図	第15号住居跡出土遺物 (6) . . .	186
第132図	第13号住居跡出土遺物 (1) . . .	155	第162図	第16号住居跡	188
第133図	第13号住居跡出土遺物 (2) . . .	157	第163図	第16号住居跡 遺物出土状況 (1)	189
第134図	第13号住居跡出土遺物 (3) . . .	158	第164図	第16号住居跡 遺物出土状況 (2)	190
第135図	第13号住居跡出土遺物 (4) . . .	159	第165図	第16号住居跡出土遺物 (1) . . .	190
第136図	第13号住居跡出土遺物 (5) . . .	160	第166図	第16号住居跡出土遺物 (2) . . .	191
第137図	第13号住居跡出土遺物 (6) . . .	161	第167図	第16号住居跡出土遺物 (3) . . .	192
第138図	第14号住居跡 (1)	163	第168図	第16号住居跡出土遺物 (4) . . .	192
第139図	第14号住居跡 (2)	164			

第169图	第18号住居跡	193	遺物出土狀況	223
第170图	第18号住居跡		第199图	第27号住居跡
	遺物出土狀況	194		遺物出土狀況
第171图	第18号住居跡出土遺物 (1)	195	第200图	第25・27号住居跡
第172图	第18号住居跡出土遺物 (2)	196		出土遺物 (1)
第173图	第18号住居跡出土遺物 (3)	197	第201图	第25・27号住居跡
第174图	第19号住居跡	198		出土遺物 (2)
第175图	第19号住居跡		第202图	第25・27号住居跡
	遺物出土狀況	199		出土遺物 (3)
第176图	第19号住居跡出土遺物	199	第203图	第25・27号住居跡
第177图	第20号住居跡 (1)	201		出土遺物 (4)
第178图	第20号住居跡 (2)	202	第204图	第25・27号住居跡
第179图	第20号住居跡			出土遺物 (5)
	遺物出土狀況 (1)	203	第205图	第26・79号住居跡 (1)
第180图	第20号住居跡		第206图	第26・79号住居跡 (2)
	遺物出土狀況 (2)	204	第207图	第26・79号住居跡柱穴変遷図
第181图	第20号住居跡出土遺物 (1)	205	第208图	第26号住居跡
第182图	第20号住居跡出土遺物 (2)	207		遺物出土狀況 (1)
第183图	第20号住居跡出土遺物 (3)	208	第209图	第26号住居跡
第184图	第20号住居跡出土遺物 (4)	209		遺物出土狀況 (2)
第185图	第23・24号住居跡 (1)	210	第210图	第26号住居跡
第186图	第23・24号住居跡 (2)	211		遺物出土狀況 (3)
第187图	第23・24号住居跡		第211图	第26号住居跡
	遺物出土狀況	212		遺物出土狀況 (4)
第188图	第23号住居跡		第212图	第26号住居跡出土遺物 (1)
	遺物出土狀況	213	第213图	第26号住居跡出土遺物 (2)
第189图	第24号住居跡		第214图	第26号住居跡出土遺物 (3)
	遺物出土狀況	214	第215图	第26号住居跡出土遺物 (4)
第190图	第23号住居跡出土遺物 (1)	215	第216图	第26号住居跡出土遺物 (5)
第191图	第23号住居跡出土遺物 (2)	216	第217图	第26号住居跡出土遺物 (6)
第192图	第23号住居跡出土遺物 (3)	217	第218图	第28号住居跡 (1)
第193图	第24号住居跡出土遺物 (1)	217	第219图	第28号住居跡 (2)
第194图	第24号住居跡出土遺物 (2)	218	第220图	第28号住居跡柱穴変遷図
第195图	第24号住居跡出土遺物 (3)	220	第221图	第28号住居跡
第196图	第25・27号住居跡 (1)	221		遺物出土狀況 (1)
第197图	第25・27号住居跡 (2)	222	第222图	第28号住居跡
第198图	第25・27号住居跡			遺物出土狀況 (2)

第223图	第28号住居跡 遺物出土状況 (3)	252
第224图	第28号住居跡 遺物出土状況 (4)	253
第225图	第28号住居跡出土遺物 (1) . . .	254
第226图	第28号住居跡出土遺物 (2) . . .	256
第227图	第28号住居跡出土遺物 (3) . . .	257
第228图	第28号住居跡出土遺物 (4) . . .	258
第229图	第28号住居跡出土遺物 (5) . . .	259
第230图	第28号住居跡出土遺物 (6) . . .	261
第231图	第29号住居跡 (1)	262
第232图	第29号住居跡 (2)	263
第233图	第29号住居跡 遺物出土状況 (1)	264
第234图	第29号住居跡 遺物出土状況 (2)	265
第235图	第29号住居跡出土遺物 (1) . . .	266
第236图	第29号住居跡出土遺物 (2) . . .	267
第237图	第31号住居跡 (1)	268
第238图	第31号住居跡 (2)	269
第239图	第31号住居跡変遷図	270
第240图	第31号住居跡 遺物出土状況 (1)	271
第241图	第31号住居跡 遺物出土状況 (2)	272
第242图	第31号住居跡出土遺物 (1) . . .	274
第243图	第31号住居跡出土遺物 (2) . . .	275
第244图	第31号住居跡出土遺物 (3) . . .	276
第245图	第31号住居跡出土遺物 (4) . . .	277
第246图	第34・35号住居跡概念図	278
第247图	第34号住居跡 (1)	279
第248图	第34号住居跡 (2)	280
第249图	第34号住居跡柱穴変遷図	281
第250图	第34号住居跡 遺物出土状況 (1)	282
第251图	第34号住居跡 遺物出土状況 (2)	283

第252图	第34号住居跡 遺物出土状況 (3)	284
第253图	第34号住居跡出土遺物 (1) . . .	285
第254图	第34号住居跡出土遺物 (2) . . .	286
第255图	第34号住居跡出土遺物 (3) . . .	287
第256图	第34号住居跡出土遺物 (4) . . .	289
第257图	第34号住居跡出土遺物 (5) . . .	290
第258图	第34号住居跡出土遺物 (6) . . .	291
第259图	第35号住居跡 (1)	293
第260图	第35号住居跡 (2)	295
第261图	第35号住居跡 遺物出土状況 (1)	296
第262图	第35号住居跡 遺物出土状況 (2)	297
第263图	第35号住居跡 遺物出土状況 (3)	298
第264图	第35号住居跡出土遺物 (1) . . .	299
第265图	第35号住居跡出土遺物 (2) . . .	300
第266图	第35号住居跡出土遺物 (3) . . .	301
第267图	第35号住居跡出土遺物 (4) . . .	302
第268图	第35号住居跡出土遺物 (5) . . .	303
第269图	第37・38号住居跡 (1)	304
第270图	第37号住居跡柱穴変遷図	305
第271图	第37・38号住居跡 (2)	305
第272图	第37号住居跡 遺物出土状況	307
第273图	第38号住居跡 遺物出土状況	308
第274图	第37号住居跡出土遺物 (1) . . .	309
第275图	第37号住居跡出土遺物 (2) . . .	310
第276图	第37号住居跡出土遺物 (3) . . .	311
第277图	第37号住居跡出土遺物 (4) . . .	312
第278图	第38号住居跡出土遺物	312
第279图	第39号住居跡	313
第280图	第39号住居跡 遺物出土状況	314
第281图	第39号住居跡出土遺物 (1) . . .	315

第282图	第39号住居跡出土遺物 (2) ···	316	第310图	第43号住居跡 遺物出土狀況 (3) ···	346
第283图	第40号住居跡 (1) ···	317	第311图	第43号住居跡 遺物出土狀況 (4) ···	347
第284图	第40号住居跡 (2) ···	318	第312图	第43号住居跡出土遺物 (1) ···	348
第285图	第40号住居跡柱六変遷图 ···	319	第313图	第43号住居跡出土遺物 (2) ···	349
第286图	第40号住居跡 遺物出土狀況 (1) ···	320	第314图	第43号住居跡出土遺物 (3) ···	350
第287图	第40号住居跡 遺物出土狀況 (2) ···	321	第315图	第43号住居跡出土遺物 (4) ···	351
第288图	第40号住居跡 遺物出土狀況 (3) ···	322	第316图	第43号住居跡出土遺物 (5) ···	351
第289图	第40号住居跡 遺物出土狀況 (4) ···	323	第317图	第44・45号住居跡 ···	352
第290图	第40号住居跡出土遺物 (1) ···	324	第318图	第44・45号住居跡 遺物出土狀況 (1) ···	354
第291图	第40号住居跡出土遺物 (2) ···	325	第319图	第44・45号住居跡 遺物出土狀況 (2) ···	355
第292图	第40号住居跡出土遺物 (3) ···	326	第320图	第44・45号住居跡 出土遺物 (1) ···	356
第293图	第40号住居跡出土遺物 (4) ···	328	第321图	第44・45号住居跡 出土遺物 (2) ···	357
第294图	第40号住居跡出土遺物 (5) ···	329	第322图	第51号住居跡 (1) ···	358
第295图	第40号住居跡出土遺物 (6) ···	330	第323图	第51号住居跡柱痕 ···	359
第296图	第42号住居跡 (1) ···	331	第324图	第51号住居跡 (2) ···	359
第297图	第42号住居跡 (2) ···	332	第325图	第51号住居跡 遺物出土狀況 ···	360
第298图	第42号住居跡 遺物出土狀況 (1) ···	333	第326图	第51号住居跡出土遺物 (1) ···	361
第299图	第42号住居跡 遺物出土狀況 (2) ···	334	第327图	第51号住居跡出土遺物 (2) ···	362
第300图	第42号住居跡 遺物出土狀況 (3) ···	335	第328图	第51号住居跡出土遺物 (3) ···	363
第301图	第42号住居跡出土遺物 (1) ···	336	第329图	第78号住居跡 (1) ···	364
第302图	第42号住居跡出土遺物 (2) ···	337	第330图	第78号住居跡 (2) ···	365
第303图	第42号住居跡出土遺物 (3) ···	338	第331图	第78号住居跡 遺物出土狀況 ···	366
第304图	第42号住居跡出土遺物 (4) ···	339	第332图	第78号住居跡出土遺物 ···	367
第305图	第43号住居跡 (1) ···	341	第333图	第80号住居跡 (1) ···	369
第306图	第43号住居跡 (2) ···	342	第334图	第80号住居跡 (2) ···	370
第307图	第43号住居跡柱痕 ···	343	第335图	第80号 (新) 住居跡 遺物出土狀況 ···	371
第308图	第43号住居跡 遺物出土狀況 (1) ···	344	第336图	第80号 (古) 住居跡 遺物出土狀況 (1) ···	372
第309图	第43号住居跡 遺物出土狀況 (2) ···	345			

第337図	第80号(古)住居跡 遺物出土状況(2)	373	第370図	土城出土遺物(10)	422
第338図	第80号住居跡出土遺物(1)	374	第371図	土城出土遺物(11)	423
第339図	第80号住居跡出土遺物(2)	376	第372図	土城出土遺物(12)	424
第340図	第80号住居跡出土遺物(3)	378	第373図	第1号集石土城	425
第341図	第80号住居跡出土遺物(4)	380	第374図	第1号集石土城微細図	425
第342図	第80号住居跡出土遺物(5)	382	第375図	第2号集石土城	426
第343図	第80号住居跡出土遺物(6)	383	第376図	ピット集中区(1)	428
第344図	第80号住居跡出土遺物(7)	384	第377図	ピット集中区(2)	429
第345図	第80号住居跡出土遺物(8)	386	第378図	ピット集中区(3)	430
第346図	土城(1)	388	第379図	ピット集中区(4)	431
第347図	土城(2)	389	第380図	ピット集中区(5)	432
第348図	土城(3)	392	第381図	ピット集中区(6)	433
第349図	土城(4)	393	第382図	ピット集中区(7)	434
第350図	土城(5)	396	第383図	ピット集中区(8)	435
第351図	土城(6)	397	第384図	ピット集中区出土遺物(1)	436
第352図	土城(7)	400	第385図	ピット集中区出土遺物(2)	439
第353図	土城(8)	401	第386図	ピット集中区出土遺物(3)	441
第354図	土城(9)	404	第387図	第1号掘立柱建物跡(1)	443
第355図	土城(10)	405	第388図	第1号掘立柱建物跡(2)	444
第356図	土城(11)	408	第389図	第2号掘立柱建物跡	445
第357図	土城(12)	409	第390図	第3号掘立柱建物跡	446
第358図	土城 遺物出土状況(1)	410	第391図	第4号掘立柱建物跡	447
第359図	土城 遺物出土状況(2)	411	第392図	第5号掘立柱建物跡	448
第360図	土城 遺物出土状況(3)	412	第393図	第6号掘立柱建物跡	449
第361図	土城出土遺物(1)	413	第394図	第7号掘立柱建物跡	450
第362図	土城出土遺物(2)	414	第395図	第8号掘立柱建物跡	451
第363図	土城出土遺物(3)	415	第396図	第9号掘立柱建物跡	452
第364図	土城出土遺物(4)	416	第397図	第1・2号井戸跡	453
第365図	土城出土遺物(5)	417	第398図	土城(1)	456
第366図	土城出土遺物(6)	418	第399図	土城(2)	457
第367図	土城出土遺物(7)	419	第400図	土城(3)	458
第368図	土城出土遺物(8)	420	第401図	土城(4)	459
第369図	土城出土遺物(9)	421	第402図	土城(5)	460
			第403図	土城(6)	461
			第404図	土城(7)	462
			第405図	土城(8)	463
			第406図	土城(9)	464

第407図	土城 (10)	465	第419図	第6・7・8号溝跡 (1)	477
第408図	土城 (11)	466	第420図	第6・7・8号溝跡 (2)	478
第409図	土城 (12)	467	第421図	第9・10・11号溝跡	479
第410図	土城 (13)	468	第422図	土器変遷図 (1)	481
第411図	土城 (14)	469	第423図	土器変遷図 (2)	482
第412図	土城 (15)	470	第424図	土器変遷図 (3)	483
第413図	土城 (16)	471	第425図	V期 周辺遺跡資料 (1)	487
第414図	土城 (17)	472	第426図	V期 周辺遺跡資料 (2)	488
第415図	第1～3・13号溝跡 (1)	473	第427図	集落変遷図	489
第416図	第1～3・13号溝跡 (2)	474	第428図	住居跡集成図 (1)	491
第417図	第1～3・13号溝跡 (3)	475	第429図	住居跡集成図 (2)	492
第418図	第4・5号溝跡	476	第430図	住居跡集成図 (3)	493

表 目 次

第1表	第1号住居跡柱穴計測表	17	第23表	第26号住居跡柱穴計測表	230
第2表	第2号住居跡柱穴計測表	46	第24表	第28号住居跡柱穴計測表	246
第3表	第3号住居跡柱穴計測表	50	第25表	第29号住居跡柱穴計測表	261
第4表	第4号住居跡柱穴計測表	56	第26表	第31号 (新) 住居跡柱穴計測表	269
第5表	第5号住居跡柱穴計測表	68	第27表	第31号 (古) 住居跡柱穴計測表	269
第6表	第6号住居跡柱穴計測表	82	第28表	第34号住居跡柱穴計測表	280
第7表	第7号住居跡柱穴計測表	93	第29表	第35号住居跡柱穴計測表	294
第8表	第8号住居跡柱穴計測表	103	第30表	第37号住居跡柱穴計測表	305
第9表	第9号住居跡柱穴計測表	118	第31表	第39号住居跡柱穴計測表	313
第10表	第10号住居跡柱穴計測表	120	第32表	第40号住居跡柱穴計測表	318
第11表	第11号住居跡柱穴計測表	126	第33表	第42号住居跡柱穴計測表	330
第12表	第12号住居跡柱穴計測表	138	第34表	第43号住居跡柱穴計測表	340
第13表	第13号住居跡柱穴計測表	150	第35表	第44・45号住居跡柱穴計測表	353
第14表	第14号住居跡柱穴計測表	162	第36表	第51号住居跡柱穴計測表	359
第15表	第15号住居跡柱穴計測表	176	第37表	第78号住居跡柱穴計測表	364
第16表	第16号住居跡柱穴計測表	188	第38表	第80号住居跡柱穴計測表	368
第17表	第18号住居跡柱穴計測表	193	第39表	集石土城 礫重量分佈/石材比率	426
第18表	第19号住居跡柱穴計測表	198	第40表	ピット集中区計測表	427
第19表	第20号住居跡柱穴計測表	203	第41表	掘立柱建物跡柱穴計測表	442
第20表	第23号住居跡柱穴計測表	209	第42表	土城視察表 (1)	454
第21表	第24号住居跡柱穴計測表	209	第43表	土城視察表 (2)	472
第22表	第27号住居跡柱穴計測表	220	第44表	時期別住居跡一覧表	488

写真図版目次

巻頭図版 1	第15号住居跡出土遺物	3	第5号住居跡炉跡
	第80号住居跡出土遺物	4	第5号住居跡遺物出土状況 (1)
巻頭図版 2	第26号住居跡出土遺物	5	第5号住居跡遺物出土状況 (2)
	第40号住居跡出土遺物	図版10	1 第6号住居跡
巻頭図版 3	第27号住居跡出土遺物 (1)	2	第6号住居跡炉跡
	第27号住居跡出土遺物 (2)	3	第6号住居跡遺物出土状況 (1)
	第31号住居跡出土遺物	4	第6号住居跡遺物出土状況 (2)
	第40号住居跡出土遺物	5	第6号住居跡遺物出土状況 (3)
図版 1	1 諏訪野遺跡遠景 (1) (東から)	図版11	1 第7号住居跡
	2 諏訪野遺跡遠景 (2) (南から)	2	第7号住居跡炉跡
図版 2	1 諏訪野遺跡空中写真 (1) (東から)	3	第7号住居跡遺物出土状況 (1)
	2 諏訪野遺跡空中写真 (2) (南から)	4	第7号住居跡遺物出土状況 (2)
図版 3	1 諏訪野遺跡空中写真 (3) (西から)	5	第7号住居跡遺物出土状況 (3)
図版 4	1 諏訪野遺跡竪穴住居跡群 (東から)	図版12	1 第8号住居跡
図版 5	1 第1号住居跡	2	第8号住居跡炉体土器
	2 第1号住居跡遺物出土状況	3	第8号住居跡遺物出土状況 (1)
	3 第1号住居跡床面検出状況	4	第8号住居跡遺物出土状況 (2)
	4 第2号 (新) 住居跡遺物出土状況	5	第8号住居跡遺物出土状況 (3)
	5 第2号 (新) 住居跡炉跡	図版13	1 第9号住居跡
図版 6	1 第2号 (古) 住居跡	2	第10号住居跡
	2 第2号 (新) 住居跡	図版14	1 第10号住居跡遺物出土状況 (1)
図版 7	1 第3号住居跡	2	第10号住居跡遺物出土状況 (2)
	2 第3号住居跡炉跡	3	第11号住居跡床面完掘状況
	3 第3号住居跡床面検出状況	4	第11号住居跡炉体土器
	4 第3号住居跡柱穴完掘状況	5	第11号住居跡
	5 第3号住居跡遺物出土状況	図版15	1 第12号住居跡
図版 8	1 第4号住居跡	2	第12号住居跡炉跡
	2 第4号住居跡遺物出土状況	3	第12号住居跡炉体土器
	3 第4号住居跡炉跡	4	第12号住居跡遺物出土状況 (1)
	4 第5号住居跡遺物出土状況	5	第12号住居跡遺物出土状況 (2)
	5 第5号住居跡床面検出状況	図版16	1 第13号住居跡
図版 9	1 第5号住居跡	2	第14号住居跡
	2 第5号住居跡炉体土器	図版17	1 第15号住居跡

	2	第16号住居跡		4	第35号住居跡埋甕
図版18	1	第18号住居跡		5	第34・35号住居跡遺物出土状況
	2	第19号住居跡	図版28	1	第37・38号住居跡
図版19	1	第23・24号住居跡		2	第37号(古)住居跡
	2	第23号住居跡	図版29	1	第37号(新)住居跡
図版20	1	第24号住居跡		2	第37号(古)住居跡床面検出状況
	2	第23号住居跡炉跡		3	第37号(古)住居跡炉跡
	3	第24号住居跡炉跡		4	第37号(新)住居跡炉跡検出状況
	4	第23・24号住居跡遺物出土状況(1)		5	第39号住居跡床面検出状況
	5	第23・24号住居跡遺物出土状況(2)	図版30	1	第39号住居跡
図版21	1	第25・27号住居跡		2	第40号住居跡
	2	第27号住居跡		3	第40号住居跡炉跡
図版22	1	第27号住居跡炉跡		4	第40号住居跡炉体土器
	2	第27号住居跡遺物出土状況(1)		5	第40号住居跡遺物出土状況(1)
	3	第27号住居跡遺物出土状況(2)	図版31	1	第40号住居跡遺物出土状況(2)
	4	第27号住居跡遺物出土状況(3)		2	第40号住居跡遺物出土状況(3)
	5	第26・27号住居跡		3	第40号住居跡遺物出土状況(4)
図版23	1	第26号住居跡炉跡検出状況		4	第42号住居跡炉跡
	2	第26号住居跡炉跡		5	第42号住居跡
	3	第26号住居跡遺物出土状況(1)	図版32	1	第43号住居跡炉跡
	4	第26号住居跡遺物出土状況(2)		2	第43号住居跡埋甕1出土状況
	5	第26号住居跡遺物出土状況(3)		3	第43号住居跡埋甕2出土状況
	6	第26号住居跡遺物出土状況(4)		4	第43号住居跡埋甕2断面
	7	第28号住居跡炉跡		5	第43号住居跡
	8	第28号住居跡遺物出土状況	図版33	1	第44号住居跡
図版24	1	第28号住居跡		2	第45号住居跡
	2	第29号住居跡	図版34	1	第45号住居跡炉跡
図版25	1	第31号住居跡		2	第45号住居跡遺物出土状況(1)
	2	第31号(古)住居跡炉跡		3	第45号住居跡遺物出土状況(2)
	3	第31号(新)住居跡炉跡		4	第51号住居跡炉体土器
	4	第31号住居跡遺物出土状況(1)		5	第51号住居跡
	5	第31号住居跡遺物出土状況(2)	図版35	1	第78号住居跡
図版26	1	第34・35号住居跡		2	第80号(古)住居跡
	2	第34号住居跡	図版36	1	第80号(新)住居跡
図版27	1	第35号住居跡		2	第80号(新)住居跡炉跡検出状況
	2	第34号住居跡炉跡		3	第80号(新)住居跡炉体土器
	3	第35号住居跡炉跡		4	第80号(古)住居跡炉跡

	5 第80号(古)住居跡遺物出土状況		5 第191号土城
図版37	1 第6・7・8号土城		6 第192号土城
	2 第25号土城		7 第193号土城
	3 第34号土城		8 第194号土城
	4 第56号土城	図版42	1 第197・204・205号土城
	5 第105号土城遺物出土状況(1)		2 第198号土城
	6 第105号土城遺物出土状況(2)		3 第199号土城
	7 第129号土城		4 第200・201号土城
	8 第138・139号土城(1)		5 第202号土城
図版38	1 第138・139号土城(2)		6 第206・207号土城
	2 第140号土城		7 第208号土城
	3 第140・211・212号土城		8 第210号土城
	4 第141号土城(1)	図版43	1 第214号土城
	5 第141号土城(2)		2 第215号土城
	6 第143号土城(1)		3 第222号土城
	7 第143号土城(2)		4 第244号土城
	8 第144号土城		5 第246号土城
図版39	1 第145号土城		6 第247号土城
	2 第145・195・196号土城		7 第249号土城
	3 第149号土城		8 第250・251号土城
	4 第150号土城	図版44	1 第252号土城
	5 第152号土城		2 第254号土城
	6 第154号土城		3 第256号土城
	7 第156号土城		4 第260・261号土城
	8 第172・173号土城		5 第263号土城
図版40	1 第174号土城		6 第264号土城
	2 第175号土城		7 第265A・266号土城
	3 第176号土城		8 第267号土城
	4 第177・178号土城	図版45	1 第268号土城
	5 第179・180号土城		2 第273号土城
	6 第181号土城		3 第274号土城
	7 第182・183号土城		4 第277号土城
	8 第184号土城		5 第280号土城
図版41	1 第186号土城		6 第284号土城
	2 第187号土城		7 第332号土城
	3 第188・189号土城		8 第332号土城遺物出土状況
	4 第190号土城	図版46	1 第345号土城

	2	第353号土城	7	第18号土城
	3	第356号土城	8	第19・20・21・22・23号土城
	4	第358号土城	図版51	1 第24号土城
	5	第361号土城	2	第26号土城
	6	第363号土城	3	第29・30号土城
	7	第373号土城遺物出土状況	4	第31・35・36・37・38号土城
	8	第378号土城	5	第32号土城
図版47	1	第1号集石土城検出状況	6	第39・40・41・42・43号土城
	2	第1号集石土城	7	第44・45・46・50・51・52号土城
	3	第1号集石土城掘り方	8	第47・97・98号土城
	4	第2号集石土城検出状況	図版52	1 第48・96号土城
	5	第2号集石土城	2	第58~68・237号土城
	6	第2号集石土城掘り方	3	第69号土城
	7	第1号掘立柱建物跡	4	第70・71・72・73号土城
	8	第2号掘立柱建物跡(1)	5	第74・75・76号土城
図版48	1	第2号掘立柱建物跡(2)	6	第77号土城
	2	第2号掘立柱建物跡(3)	7	第78号土城
	3	第2号掘立柱建物跡炉跡1	8	第80~92号土城
	4	第2号掘立柱建物跡炉跡2	図版53	1 第94号土城
	5	第2号掘立柱建物跡炉跡2完掘	2	第95号土城
	6	第3号掘立柱建物跡	3	第100・101号土城
	7	第4・5号掘立柱建物跡(1)	4	第103号土城
	8	第4・5号掘立柱建物跡(2)	5	第104号土城
図版49	1	第6号掘立柱建物跡	6	第106・107号土城
	2	第7号掘立柱建物跡	7	第108号土城
	3	第1号井戸跡断面	8	第110・111号土城
	4	第1号井戸跡工具痕(1)	図版54	1 第113号土城
	5	第1号井戸跡工具痕(2)	2	第114・115号土城
	6	第1号井戸跡	3	第116・117号土城
	7	第2号井戸跡断面	4	第119号土城
	8	第2号井戸跡	5	第121号土城
図版50	1	第9・10・11号土城	6	第122号土城
	2	第12・13号土城	7	第123号土城
	3	第14号土城(1)	8	第124・133号土城
	4	第14号土城(2)	図版55	1 第125号土城
	5	第15号土城	2	第126・127号土城
	6	第17号土城	3	第128号土城

	4	第130号土城		2	第1号住居跡 (第20図7)
	5	第131号土城		3	第1号住居跡 (第20図8)
	6	第132号土城		4	第1号住居跡 (第20図9)
	7	第134号土城		5	第1号住居跡 (第20図10)
	8	第142号土城		6	第1号住居跡 (第20図11)
図版56	1	第148号土城		7	第1号住居跡 (第20図12)
	2	第155号土城		8	第1号住居跡 (第20図13)
	3	第161号土城	図版61	1	第1号住居跡 (第20図14)
	4	第163号土城		2	第1号住居跡 (第21図15)
	5	第164号土城		3	第1号住居跡 (第21図16)
	6	第167号土城		4	第1号住居跡 (第21図17)
	7	第168・169号土城		5	第1号住居跡 (第21図18)
	8	第170号土城		6	第1号住居跡 (第21図19)
図版57	1	第171号土城		7	第1号住居跡 (第21図20)
	2	第203号土城		8	第1号住居跡 (第21図21)
	3	第223号土城	図版62	1	第1号住居跡 (第21図22)
	4	第224号土城		2	第1号住居跡 (第21図23)
	5	第243号土城		3	第2号住居跡 (第30図1)
	6	第278号土城		4	第2号住居跡 (第30図2)
	7	第279号土城		5	第2号住居跡 (第30図3)
	8	第289号土城		6	第2号住居跡 (第31図4)
図版58	1	第350号土城		7	第2号住居跡 (第31図5)
	2	第351号土城		8	第2号住居跡 (第31図6)
	3	第347・348・349号土城	図版63	1	第3号住居跡 (第43図1)
	4	第357号土城		2	第3号住居跡 (第43図2)
	5	第7・8号溝跡		3	第3号住居跡 (第43図3)
	6	第9号溝跡		4	第3号住居跡 (第43図4)
	7	第10号溝跡		5	第4号住居跡 (第51図1)
図版59	1	第1号溝跡		6	第4号住居跡 (第51図2)
	2	第2・3号溝跡		7	第5号住居跡 (第63図1)
	3	第4号溝跡		8	第5号住居跡 (第63図2)
	4	第1号住居跡 (第19図1)	図版64	1	第5号住居跡 (第63図3)
	5	第1号住居跡 (第19図2)		2	第5号住居跡 (第63図4)
	6	第1号住居跡 (第19図3)		3	第5号住居跡 (第63図5)
	7	第1号住居跡 (第19図4)		4	第5号住居跡 (第63図6)
	8	第1号住居跡 (第19図5)		5	第5号住居跡 (第63図7)
図版60	1	第1号住居跡 (第19図6)		6	第5号住居跡 (第63図8)

7 第5号住居跡 (第63図9)
 8 第5号住居跡 (第63図10)
 図版65 1 第5号住居跡 (第64図11)
 2 第5号住居跡 (第64図12)
 3 第5号住居跡 (第64図13)
 4 第5号住居跡 (第64図14)
 5 第5号住居跡 (第64図15)
 6 第5号住居跡 (第64図16)
 7 第5号住居跡 (第64図17)
 8 第5号住居跡 (第64図18)
 図版66 1 第5号住居跡 (第64図19)
 2 第5号住居跡 (第64図20)
 3 第5号住居跡 (第65図21)
 4 第5号住居跡 (第65図22)
 5 第5号住居跡 (第65図23)
 6 第5号住居跡 (第65図24)
 7 第5号住居跡 (第65図25)
 8 第5号住居跡 (第65図26)
 図版67 1 第5号住居跡 (第65図27)
 2 第6号住居跡 (第72図1)
 3 第6号住居跡 (第72図2)
 4 第6号住居跡 (第72図3)
 5 第6号住居跡 (第72図4)
 6 第6号住居跡 (第72図5)
 7 第7号住居跡 (第80図1)
 8 第7号住居跡 (第80図2)
 図版68 1 第7号住居跡 (第80図3)
 2 第7号住居跡 (第80図4)
 3 第7号住居跡 (第80図5)
 4 第7号住居跡 (第81図6)
 5 第7号住居跡 (第81図7)
 6 第7号住居跡 (第81図8)
 7 第7号住居跡 (第81図9)
 8 第7号住居跡 (第81図10)
 図版69 1 第7号住居跡 (第81図11)
 2 第7号住居跡 (第81図12)
 3 第7号住居跡 (第81図13)

4 第8号住居跡 (第90図1)
 5 第8号住居跡 (第90図2)
 6 第8号住居跡 (第90図3)
 7 第8号住居跡 (第90図4)
 8 第8号住居跡 (第91図5)
 図版70 1 第8号住居跡 (第91図6)
 2 第8号住居跡 (第91図7)
 3 第8号住居跡 (第91図8)
 4 第8号住居跡 (第91図9)
 5 第8号住居跡 (第91図10)
 6 第8号住居跡 (第92図11)
 7 第8号住居跡 (第92図12)
 8 第8号住居跡 (第92図13)
 図版71 1 第8号住居跡 (第92図14)
 2 第8号住居跡 (第92図15)
 3 第8号住居跡 (第92図16)
 4 第8号住居跡 (第93図17)
 5 第8号住居跡 (第93図18)
 6 第8号住居跡 (第93図19)
 7 第8号住居跡 (第93図20)
 8 第8号住居跡 (第93図21)
 図版72 1 第8号住居跡 (第93図22)
 2 第9号住居跡 (第100図1)
 3 第9号住居跡 (第100図2)
 4 第9号住居跡 (第100図3)
 5 第9号住居跡 (第100図4)
 6 第10号住居跡 (第105図1)
 7 第10号住居跡 (第105図2)
 8 第10号住居跡 (第105図3)
 図版73 1 第10号住居跡 (第105図4)
 2 第10号住居跡 (第105図5)
 3 第10号住居跡 (第105図6)
 4 第10号住居跡 (第105図7)
 5 第10号住居跡 (第105図8)
 6 第11号住居跡 (第111図1)
 7 第11号住居跡 (第111図2)
 8 第11号住居跡 (第111図3)

图版74	1	第12号住居跡 (第121图1)	图版79	1	第15号住居跡 (第156图4)
	2	第12号住居跡 (第121图2)		2	第15号住居跡 (第156图5)
	3	第12号住居跡 (第121图3)		3	第15号住居跡 (第156图6)
	4	第12号住居跡 (第121图4)		4	第15号住居跡 (第156图7)
	5	第12号住居跡 (第121图5)		5	第15号住居跡 (第156图8)
	6	第12号住居跡 (第122图6)		6	第15号住居跡 (第156图9)
	7	第12号住居跡 (第122图7)		7	第15号住居跡 (第157图10)
	8	第12号住居跡 (第122图8)		8	第15号住居跡 (第157图11)
图版75	1	第12号住居跡 (第122图9)	图版80	1	第15号住居跡 (第157图12)
	2	第12号住居跡 (第122图10)		2	第15号住居跡 (第157图13)
	3	第12号住居跡 (第122图11)		3	第15号住居跡 (第157图14)
	4	第12号住居跡 (第122图12)		4	第15号住居跡 (第157图15)
	5	第12号住居跡 (第122图13)		5	第15号住居跡 (第157图16)
	6	第13号住居跡 (第132图1)		6	第16号住居跡 (第165图1)
	7	第13号住居跡 (第132图2)		7	第16号住居跡 (第165图2)
	8	第13号住居跡 (第132图3)		8	第18号住居跡 (第171图1)
图版76	1	第13号住居跡 (第132图4)	图版81	1	第20号住居跡 (第181图1)
	2	第13号住居跡 (第132图5)		2	第20号住居跡 (第181图2)
	3	第13号住居跡 (第132图6)		3	第20号住居跡 (第181图3)
	4	第13号住居跡 (第133图7)		4	第20号住居跡 (第181图4)
	5	第13号住居跡 (第133图8)		5	第20号住居跡 (第181图5)
	6	第13号住居跡 (第133图9)		6	第20号住居跡 (第181图6)
	7	第13号住居跡 (第133图10)		7	第23号住居跡 (第190图1)
	8	第13号住居跡 (第133图11)		8	第23号住居跡 (第190图2)
图版77	1	第13号住居跡 (第133图12)	图版82	1	第24号住居跡 (第193图1)
	2	第13号住居跡 (第133图13)		2	第25・27号住居跡 (第200图1)
	3	第13号住居跡 (第133图14)		3	第25・27号住居跡 (第200图2)
	4	第13号住居跡 (第133图15)		4	第25・27号住居跡 (第200图3)
	5	第14号住居跡 (第145图1)		5	第25・27号住居跡 (第200图3裏)
	6	第14号住居跡 (第145图2)		6	第25・27号住居跡 (第201图4)
	7	第14号住居跡 (第145图3)		7	第25・27号住居跡 (第201图5)
	8	第14号住居跡 (第145图4)		8	第25・27号住居跡 (第201图6)
图版78	1	第14号住居跡 (第145图5)	图版83	1	第25・27号住居跡 (第201图7)
	2	第14号住居跡 (第146图6)		2	第25・27号住居跡 (第201图8)
	3	第14号住居跡 (第146图7)			
	4	第14号住居跡 (第146图8)			
	5	第14号住居跡 (第146图9)			

图版84	3	第26号住居跡 (第212图1)	图版88	8	第28号住居跡 (第227图19)
	4	第26号住居跡 (第212图2)		1	第28号住居跡 (第227图20)
	5	第26号住居跡 (第212图3)		2	第28号住居跡 (第227图21)
	6	第26号住居跡 (第212图4)		3	第28号住居跡 (第227图22)
	7	第26号住居跡 (第212图5)		4	第28号住居跡 (第227图23)
	8	第26号住居跡 (第212图6)		5	第28号住居跡 (第227图24)
	1	第26号住居跡 (第213图7)		6	第28号住居跡 (第227图25)
	2	第26号住居跡 (第213图8)		7	第28号住居跡 (第227图26)
图版85	3	第26号住居跡 (第213图9)	图版89	8	第31号住居跡 (第242图1)
	4	第26号住居跡 (第213图10)		1	第31号住居跡 (第242图2)
	5	第26号住居跡 (第213图11)		2	第31号住居跡 (第242图3)
	6	第26号住居跡 (第213图12)		3	第31号住居跡 (第242图4)
	7	第26号住居跡 (第213图13)		4	第31号住居跡 (第242图5)
	8	第26号住居跡 (第214图14)		5	第31号住居跡 (第242图6)
	1	第26号住居跡 (第214图15)		6	第31号住居跡 (第242图7)
	2	第26号住居跡 (第214图16)		7	第34号住居跡 (第253图1)
图版86	3	第26号住居跡 (第214图17)	图版90	8	第34号住居跡 (第253图2)
	4	第26号住居跡 (第214图18)		1	第34号住居跡 (第253图3)
	5	第26号住居跡 (第214图19)		2	第34号住居跡 (第254图4)
	6	第28号住居跡 (第225图1)		3	第34号住居跡 (第254图5)
	7	第28号住居跡 (第225图2)		4	第34号住居跡 (第254图6)
	8	第28号住居跡 (第225图3)		5	第34号住居跡 (第254图7)
	1	第28号住居跡 (第226图4)		6	第34号住居跡 (第254图8)
	2	第28号住居跡 (第226图5)		7	第34号住居跡 (第254图9)
图版87	3	第28号住居跡 (第226图6)	图版91	8	第34号住居跡 (第254图10)
	4	第28号住居跡 (第226图7)		1	第34号住居跡 (第254图11)
	5	第28号住居跡 (第226图8)		2	第34号住居跡 (第255图12)
	6	第28号住居跡 (第227图9)		3	第34号住居跡 (第255图13)
	7	第28号住居跡 (第227图10)		4	第35号住居跡 (第264图1)
	8	第28号住居跡 (第227图11)		5	第35号住居跡 (第264图2)
	1	第28号住居跡 (第227图12)		6	第35号住居跡 (第264图3)
	2	第28号住居跡 (第227图13)		7	第35号住居跡 (第264图4)
图版88	3	第28号住居跡 (第227图14)	图版92	8	第34号住居跡 (第265图5)
	4	第28号住居跡 (第227图15)		1	第34号住居跡 (第265图6)
	5	第28号住居跡 (第227图16)		2	第34号住居跡 (第265图7)
	6	第28号住居跡 (第227图17)		3	第34号住居跡 (第265图8)
	7	第28号住居跡 (第227图18)		4	第37号住居跡 (第274图1)

	5	第39号住居跡 (第281図1)		2	第51号住居跡 (第326図1)
	6	第40号住居跡 (第290図1)		3	第51号住居跡 (第326図2)
	7	第40号住居跡 (第290図2)		4	第80号住居跡 (第338図1)
	8	第40号住居跡 (第290図3)		5	第80号住居跡 (第338図2)
図版93	1	第40号住居跡 (第290図4)		6	第80号住居跡 (第338図3)
	2	第40号住居跡 (第290図5)		7	第80号住居跡 (第338図4)
	3	第40号住居跡 (第290図6)		8	第80号住居跡 (第338図5)
	4	第40号住居跡 (第290図7)	図版98	1	第80号住居跡 (第338図6)
	5	第40号住居跡 (第290図8)		2	第80号住居跡 (第338図7)
	6	第40号住居跡 (第291図9)		3	第80号住居跡 (第338図8)
	7	第40号住居跡 (第291図10)		4	第80号住居跡 (第338図9)
	8	第40号住居跡 (第291図11)		5	第80号住居跡 (第339図10)
図版94	1	第40号住居跡 (第292図12)		6	第80号住居跡 (第339図11)
	2	第40号住居跡 (第292図13)		7	第80号住居跡 (第339図12)
	3	第40号住居跡 (第292図14)		8	第80号住居跡 (第340図13)
	4	第40号住居跡 (第292図15)	図版99	1	第80号住居跡 (第340図14)
	5	第40号住居跡 (第292図16)		2	第80号住居跡 (第340図15)
	6	第42号住居跡 (第301図1)		3	第80号住居跡 (第340図16)
	7	第42号住居跡 (第301図2)		4	第80号住居跡 (第340図17)
	8	第42号住居跡 (第301図3)		5	第80号住居跡 (第341図18)
図版95	1	第42号住居跡 (第301図4)		6	第80号住居跡 (第341図19)
	2	第42号住居跡 (第301図5)		7	第80号住居跡 (第341図20)
	3	第43号住居跡 (第312図1)		8	第80号住居跡 (第341図21)
	4	第43号住居跡 (第312図2)	図版100	1	第80号住居跡 (第341図22)
	5	第43号住居跡 (第312図3)		2	第194号土壌 (第361図1)
	6	第43号住居跡 (第312図4)		3	第195号土壌 (第361図2)
	7	第43号住居跡 (第312図5)		4	第260号土壌 (第361図3)
	8	第43号住居跡 (第312図6)		5	第265 A 号土壌 (第361図4)
図版96	1	第43号住居跡 (第313図7)		6	第332号土壌 (第361図5)
	2	第43号住居跡 (第313図8)		7	石器 第105号土壌 (第372図361)
	3	第43号住居跡 (第313図9)			第244号土壌 (第372図360)
	4	第43号住居跡 (第313図10)		8	グリッド (第383図1)
	5	第43号住居跡 (第313図11)	図版101	1	第1号住居跡出土土器 (1)
	6	第43号住居跡 (第313図12)		2	第1号住居跡出土土器 (2)
	7	第44・45号住居跡 (第320図1)	図版102	1	第1号住居跡出土土器 (3)
	8	第44・45号住居跡 (第320図2)		2	第1号住居跡出土土器 (4)
図版97	1	第44・45号住居跡 (第320図3)	図版103	1	第1号住居跡出土土器 (5)

	2	第1号住居跡出土土器 (6)	図版122	1	第13号住居跡出土土器 (1)
図版104	1	第2号 (新) 住居跡出土土器 (1)		2	第13号住居跡出土土器 (2)
	2	第2号 (新) 住居跡出土土器 (2)	図版123	1	第13号住居跡出土土器 (3)
図版105	1	第2号 (新) 住居跡出土土器 (3)		2	第13号住居跡出土土器 (4)
	2	第2号 (新) 住居跡出土土器 (4)	図版124	1	第13号住居跡出土土器 (5)
図版106	1	第2号 (古) 住居跡出土土器		2	第14号住居跡出土土器 (1)
	2	第3号住居跡出土土器 (1)	図版125	1	第14号住居跡出土土器 (2)
図版107	1	第3号住居跡出土土器 (2)		2	第14号住居跡出土土器 (3)
	2	第3号住居跡出土土器 (3)	図版126	1	第14号住居跡出土土器 (4)
図版108	1	第4号住居跡出土土器 (1)		2	第15号住居跡出土土器 (1)
	2	第4号住居跡出土土器 (2)	図版127	1	第15号住居跡出土土器 (2)
図版109	1	第4号住居跡出土土器 (3)		2	第15号住居跡出土土器 (3)
	2	第5号住居跡出土土器 (1)	図版128	1	第15号住居跡出土土器 (4)
図版110	1	第5号住居跡出土土器 (2)		2	第15号住居跡出土土器 (5)
	2	第5号住居跡出土土器 (3)	図版129	1	第15号住居跡出土土器 (6)
図版111	1	第5号住居跡出土土器 (4)		2	第16号住居跡出土土器 (1)
	2	第6号住居跡出土土器 (1)	図版130	1	第16号住居跡出土土器 (2)
図版112	1	第6号住居跡出土土器 (2)		2	第16号住居跡出土土器 (3)
	2	第6号住居跡出土土器 (3)	図版131	1	第18号住居跡出土土器 (1)
図版113	1	第6号住居跡出土土器 (4)		2	第18号住居跡出土土器 (2)
	2	第7号住居跡出土土器 (1)	図版132	1	第18号住居跡出土土器 (3)
図版114	1	第7号住居跡出土土器 (2)		2	第19号住居跡出土土器
	2	第8号住居跡出土土器 (1)	図版133	1	第20号住居跡出土土器 (1)
図版115	1	第8号住居跡出土土器 (2)		2	第20号住居跡出土土器 (2)
	2	第8号住居跡出土土器 (3)	図版134	1	第20号住居跡出土土器 (3)
図版116	1	第8号住居跡出土土器 (4)		2	第20号住居跡出土土器 (4)
	2	第8号住居跡出土土器 (5)	図版135	1	第23号住居跡出土土器 (1)
図版117	1	第9号住居跡出土土器		2	第23号住居跡出土土器 (2)
	2	第10号住居跡出土土器	図版136	1	第24号住居跡出土土器 (1)
図版118	1	第11号住居跡出土土器 (1)		2	第24号住居跡出土土器 (2)
	2	第11号住居跡出土土器 (2)	図版137	1	第25・27号住居跡出土土器 (1)
図版119	1	第11号住居跡出土土器 (3)		2	第25・27号住居跡出土土器 (2)
	2	第11号住居跡出土土器 (4)	図版138	1	第25・27号住居跡出土土器 (3)
図版120	1	第12号住居跡出土土器 (1)		2	第25・27号住居跡出土土器 (4)
	2	第12号住居跡出土土器 (2)	図版139	1	第26号住居跡出土土器 (1)
図版121	1	第12号住居跡出土土器 (3)		2	第26号住居跡出土土器 (2)
	2	第12号住居跡出土土器 (4)	図版140	1	第26号住居跡出土土器 (3)

	2	第26号住居跡出土土器 (4)	図版159	1	第51号住居跡出土土器 (1)
図版141	1	第28号住居跡出土土器 (1)		2	第51号住居跡出土土器 (2)
	2	第28号住居跡出土土器 (2)	図版160	1	第78号住居跡出土土器
図版142	1	第28号住居跡出土土器 (3)		2	第80号住居跡出土土器 (1)
	2	第29号住居跡出土土器 (1)	図版161	1	第80号住居跡出土土器 (2)
図版143	1	第29号住居跡出土土器 (2)		2	第80号住居跡出土土器 (3)
	2	第31号住居跡出土土器 (1)	図版162	1	第80号住居跡出土土器 (4)
図版144	1	第31号住居跡出土土器 (2)		2	第80号住居跡出土土器 (5)
	2	第31号住居跡出土土器 (3)	図版163	1	土城出土土器 (1)
図版145	1	第31号住居跡出土土器 (4)		2	土城出土土器 (2)
	2	第31号住居跡出土土器 (5)	図版164	1	土城出土土器 (3)
図版146	1	第34号住居跡出土土器 (1)		2	土城出土土器 (4)
	2	第34号住居跡出土土器 (2)	図版165	1	土城出土土器 (5)
図版147	1	第34号住居跡出土土器 (3)		2	土城出土土器 (6)
	2	第34号住居跡出土土器 (4)	図版166	1	土城出土土器 (7)
図版148	1	第35号住居跡出土土器 (1)		2	土城出土土器 (8)
	2	第35号住居跡出土土器 (2)	図版167	1	土城出土土器 (9)
図版149	1	第35号住居跡出土土器 (3)		2	土城出土土器 (10)
	2	第37号住居跡出土土器 (1)	図版168	1	土城出土土器 (11)
図版150	1	第37号住居跡出土土器 (2)		2	土城出土土器 (12)
	2	第37号住居跡出土土器 (3)	図版169	1	土城出土土器 (13)
図版151	1	第37号住居跡出土土器 (4)		2	土城出土土器 (14)
	2	第38号住居跡出土土器	図版170	1	土城出土土器 (15)
図版152	1	第39号住居跡出土土器 (1)		2	土城出土土器 (16)
	2	第39号住居跡出土土器 (2)	図版171	1	土城出土土器 (17)
図版153	1	第40号住居跡出土土器 (1)		2	ビット集中区出土土器 (1)
	2	第40号住居跡出土土器 (2)	図版172	1	ビット集中区出土土器 (2)
図版154	1	第40号住居跡出土土器 (3)		2	ビット集中区出土土器 (3)
	2	第40号住居跡出土土器 (4)	図版173	1	ビット集中区出土土器 (4)
図版155	1	第42号住居跡出土土器 (1)		2	ビット集中区出土土器 (5)
	2	第42号住居跡出土土器 (2)	図版174	1	土製品 第1号住居跡
図版156	1	第42号住居跡出土土器 (3)			第2号 (新) 住居跡
	2	第43号住居跡出土土器 (1)			第4号住居跡
図版157	1	第43号住居跡出土土器 (2)		2	土製品 第5号住居跡
	2	第43号住居跡出土土器 (3)			第6号住居跡
図版158	1	第44・45号住居跡出土土器 (1)	図版175	1	土製品 第8号住居跡
	2	第44・45号住居跡出土土器 (2)			第11号住居跡

			第12号住居跡				第3号住居跡
	2	土製品	第13号住居跡		2	石器	第6号住居跡
			第14号住居跡				第11号住居跡
図版176	1	土製品	第15号住居跡				第12号住居跡
			第18号住居跡				第16号住居跡
			第20号住居跡	図版182	1	石器	第7号住居跡
	2	土製品	第23号住居跡				第8号住居跡
			第24号住居跡				第13号住居跡
			第25・27号住居跡		2	石器	第14号住居跡
図版177	1	土製品	第26号住居跡				第28号住居跡
	2	土製品	第28号住居跡	図版183	1	石器	第23号住居跡
			第29号住居跡				第24号住居跡
			第31号住居跡				第26号住居跡
			第34号住居跡				第31号住居跡
図版178	1	土製品	第35号住居跡		2	石器	第29号住居跡
			第37号住居跡				第42号住居跡
			第40号住居跡				第43号住居跡
	2	土製品	第42号住居跡				第44・45号住居跡
			第43号住居跡				第51号住居跡
			第44・45号住居跡	図版184	1	石器	第34号住居跡
図版179	1	土製品	第51号住居跡				第35号住居跡
			第80号住居跡		2	石器	第37号住居跡
	2	土製品	第5号住居跡				第38号住居跡
			第8号住居跡				第40号住居跡
			第23号住居跡	図版185	1	石器	第78号住居跡
			第26号住居跡				第80号住居跡
			第25・27号住居跡		2	石器	第1号住居跡
			第28号住居跡	図版186	1	石器	第2号住居跡
			第31号住居跡				第3号住居跡
			第40号住居跡				第4号住居跡
			第51号住居跡		2	石器	第5号住居跡
図版180	1	土製品	第195号土壇	図版187	1	石器	第6号住居跡
			第247号土壇				第16号住居跡
			第249号土壇		2	石器	第7号住居跡
			第360号土壇				第8号住居跡
	2	石器	第1号住居跡				第13号住居跡
図版181	1	石器	第2号住居跡	図版188	1	石器	第11号住居跡

			第18号住居跡
	2	石器	第12号住居跡
図版189	1	石器	第14号住居跡
			第15号住居跡
	2	石器	第19号住居跡
			第37号住居跡
			第38号住居跡
図版190	1	石器	第20号住居跡
			第28号住居跡
			第29号住居跡
	2	石器	第23号住居跡
			第25・27号住居跡
			第26号住居跡
図版191	1	石器	第24号住居跡
	2	石器	第31号住居跡
			第34号住居跡
図版192	1	石器	第35号住居跡
	2	石器	第39号住居跡
			第40号住居跡
図版193	1	石器	第42号住居跡

	2	石器	第43号住居跡
			第44・45号住居跡
図版194	1	石器	第78号住居跡
			第80号住居跡
	2	石器	第57号土壇
			第188号土壇
			第249号土壇
			第260号土壇
			第261号土壇
			第237号土壇
図版195	1	第2号(新)住居跡 出土土器展開図	
	2	第8号住居跡出土土器展開図	
図版196	1	第12号住居跡出土土器展開図	
	2	第27号住居跡出土土器展開図	
図版197	1	第27号住居跡出土土器展開図	
	2	第31号住居跡出土土器展開図	
図版198	1	第34号住居跡出土土器展開図	
	2	第40号住居跡出土土器展開図	

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

平成24年度から平成28年度の新5か年計画「埼玉県5か年計画—安心・成長・自立自尊の埼玉へ—」において「埼玉の活力を高める道路整備」という基本目標が掲げられている。こうした中で国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所が主体となって建設を進める首都圏中央連絡自動車道は県内を東西に結ぶ大動脈としてその完成が望まれている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、首都圏中央連絡自動車道建設に係る埋蔵文化財の保護について、昭和62年の入間・狭山・日高地区を皮切りに現在まで国土交通省などの関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

さて、本書で報告される箇所については工事計画に先立ち、建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所長（当時）より平成10年11月10日付け大国土調二第30号において、首都圏中央連絡自動車道（圏央道）工事に伴う埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて県教育委員会教育長（以下「県教育長」）あての照会があった。工事予定地内の周辺の埋蔵文化財包蔵地については県教育長が平成11年1月14日付け教文第124号で今後確認調査を要する範囲として回答した。実際に試掘調査を実施したのは平成18年12月11日、及び平成19年1月22日～24日であり、縄文時代中期の遺構、遺物を検出した。その結果を受けて平成19年2月22日付け教生文第2492号にて国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所長あて以下の通り回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
諏訪野遺跡 (県遺跡番号 No.15-003)	集落跡	縄文 弥生	桶川市大字川田谷 字諏訪野地内

2 法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事着工に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘調査を提出して下さい。

3 取扱いについて

「発掘調査が必要な範囲」については、計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施して下さい。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（現在は公益財団法人）と国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、生涯学習文化財課の三者により調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果、平成19年5月1日から平成20年3月24日及び平成20年5月1日から同年9月30日までの期間で発掘調査を実施することになった。

文化財保護法第94条による発掘調査は大宮国道事務所長から平成19年4月4日付け大国土工第7号で提出された。それに対する埋蔵文化財の保護上必要な勧告は県教育長から平成19年4月6日付け教生文第4-64号で行われた。

文化財保護法第92条の規定による発掘調査届については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から地元桶川市教育委員会を通じて県教育長あてに提出された。これに対する県教育委員会としての発掘調査の指示通知は以下の通りである。

平成19年5月10日付け教生文第2-24号

平成20年5月30日付け教生文第2-14号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

調査野遺跡の発掘調査は、平成19年度（第1次）・平成20年度（第2次）に実施した。調査対象面積は、22,410㎡であった。

平成19年度（第1次調査）

第1次調査は、平成19年5月1日から平成20年3月24日まで実施した。対象面積は13,285㎡であった。

5月初旬から重機による表土除去作業を開始し、併行して調査事務所等の設営を行った。表土除去後、人力による遺構精査を開始した。順次土層断面図・平面図の作成、写真撮影を行った。

遺構調査の進捗に伴い、12月中旬および3月中旬に空中写真撮影を実施し、3月中旬には調査終了部分のうち危険箇所の埋戻しを行った。同月下旬には調査事務所の一時的閉鎖・事務手続き等を行って調査を終了した。

平成20年度（第2次調査）

第2次調査は、平成20年5月1日から平成20年9月30日まで実施した。対象面積は9,125㎡であった。

5月初旬から重機による表土除去作業を開始し、併行して調査事務所等の設営を行った。表土除去後、人力による遺構精査を開始した。順次土層断面図・平面図の作成、写真撮影を行った。

遺構調査の終了に伴い、9月中旬には空中写真撮影を実施し、9月下旬には埋戻しを開始、同月末には事務所の撤去・事務手続き等を行って調査を終了した。

(2) 整理報告書作成

整理報告書作成作業は、平成23年度から平成25年度にかけて実施した。

平成23年度

平成23年10月1日から平成24年3月31日まで実施した。

10月初旬から遺物の水洗・注記作業を行い、コンテナ80箱分の遺物について接合・復元作業を行った。接合・復元が終了した遺物は、実測・拓本・トレース作業を3月末まで行った。

完成した拓本・トレース図は、順次スキャナーでデジタル化していった。その後、画像編集ソフト上でレイアウトしてキャプションを貼り込み、遺物図版を作成した。

遺構実測図については、図面修正を経て第二原図の作成を平成24年1月末まで行った。作成した第二原図はスキャナーでコンピューターに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明などのデータを取り込んで、同年3月末まで遺構図版を作成した。

3月上旬には遺物の写真撮影を実施した。

平成24年度

平成24年4月9日から平成25年3月29日まで実施した。

4月初旬からコンテナ135箱分の遺物について接合・復元作業を行った。接合・復元が終了した遺物は、実測・拓本・トレース作業を3月末まで行った。その後、画像編集ソフト上でレイアウトしてキャプションを貼り込み、遺物図版を作成した。

前年度に引き続き、遺構実測図の整理を行った。図面修正を経て第二原図の作成を平成25年1月末まで行った。作成した第二原図はスキャナーでコンピューターに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明などのデータを取り込んで、同年3月末まで遺構図版を作成した。

3月上旬には遺物の写真撮影を実施した。また、2月上旬には遺物の委託写真撮影を行った。

平成25年度

平成25年4月8日から平成26年3月31日まで

実施した。

4月初旬からコンテナ135箱分の遺物について接合・復元作業を行った。接合・復元が終了した遺物は、実測・拓本・トレース作業を9月末まで行った。その後、画像編集ソフト上でレイアウトしてキャプションを貼り込み、12月末までに遺物図版を完成させた。

前年度に引き続き、遺構実測図の整理を行った。図面修正を経て第二原図の作成を平成25年8月末まで行った。作成した第二原図はスキャナーでコンピューターに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明な

どのデータを取り込んで、同年12月末までに遺構図版を完成させた。

12月上旬には遺構の写真撮影を実施した。その後、遺構・遺物写真図版の編集作業を行い、1月上旬までに完成させた。また、平成26年1月上旬には遺物の委託写真撮影を行った。

10月から12月末にかけて報告書の下稿作成を行い、割り付けを作成した。1月中旬に入札により印刷会社を決定し、入稿した。3回の校正を経て、平成26年3月末に報告書（本書）を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成19年度（発掘調査）

理事 長	刈部 博	調査部			
常務理事兼総務部長	岸本 洋一	調査部 長	村田 健二		
総務部		調査部 副部長	磯崎 直一		
総務部 副部長	昼間 孝志	調査監兼調査第一課長	金子 戸直		
総務課 長	松盛 孝	主 査	木戸 春道		
		主 査	大渡 清敏		
		主 査	坂田 志行		

平成20年度（発掘調査）

理事 長	刈部 博	調査部			
常務理事兼総務部長	萩元 信隆	調査部 長	村田 健二		
総務部		調査部 副部長	磯崎 直一		
総務部 副部長	昼間 孝志	調査監兼調査第一課長	金子 戸直		
総務課 長	松盛 孝	主 査	山本 清敏		
		主 査	渡辺 志行		
		主 査	坂田 瞳		

平成23年度（報告書作成）

理事 長	藤野 龍宏	調査部			
常務理事兼総務部長	根本 勝	調査部 長	小野 美代子		
総務部		調査部 副部長	飼持 和夫		
総務部 副部長	金子 直行	主幹兼整理第一課長	細田 清志		
総務課 長	矢島 将和	主 査	渡辺 清志		

平成24年度（報告書作成）

理事 長	中村 英樹	調査部			
常務理事兼総務部長	根本 勝	調査部 長	昼間 孝志		
総務部		調査部 副部長	飼持 和夫		
総務部 副部長	富田 和夫	調査監兼整理第一課長	細田 清志		
総務課 長	矢島 将和	主 査	渡辺 清志		

平成25年度（報告書作成）

理事 長	中村 英樹	調査部			
常務理事兼総務部長	大嶋 紳一郎	調査部 長	昼間 孝志		
総務部		調査部 副部長	飼持 和夫		
総務部 副部長	富田 和夫	主幹兼整理第二課長	大谷 徹志		
総務課 長	藤倉 英明	主 査	渡辺 清志		

2. 歴史的環境

本項では諏訪野遺跡を取り巻く北本市南部から桶川市中・西部、上尾市北西部の遺跡の分布と立地についてその変遷を概観していくこととする。

旧石器時代

石川堀左岸の台地上に位置する桶川市狐塚遺跡(25)からは尖頭器やナイフ形石器が出土した。同じく石川堀の源流にあたる桶川市大沼遺跡(6)では柳葉形の尖頭器が採集され、発掘調査では旧石器時代の剥片類が出土している。

江川流域では桶川市高井東遺跡(18)や諏訪野遺跡等で旧石器時代の遺物が出土した。

赤堀川支流の北本市提灯木山遺跡では4か所の石器集中区が発掘調査され、綾瀬川源流部の桶川市本村遺跡でも石器集中区が調査されている。

縄文時代

縄文時代早期では、荒川本流に面した西台遺跡(8)や石川堀源流部の大平遺跡(7)で燃糸文土器が、江川中流左岸の愛宕遺跡(19)や高井遺跡(21)で有舌尖頭器が出土している。

早期後葉では、江川下流右岸の桶川市栗中遺跡(31)で竇穴群が調査されたほか、石川堀左岸の上尾市小在家遺跡(26)や荒川本流側の北本市宮岡Ⅱ遺跡(51)で条痕文土器が出土している。また、諏訪野遺跡のある支谷には、かつて荒川最奥部の貝塚とされた谷津貝塚(2)が存在した。

前期に入ると江川流域を中心に遺跡数が著しく増大する。中流域の滝の宮坂遺跡(24)で前期初頭の住居跡が調査され、やや下流の後山遺跡(68)では関山式土器が出土している。諏訪野遺跡でも黒浜式期の竇穴住居と諸磯式期の土壌を検出した。

上流域の北本市域でも向郷遺跡(61)・氷川神社北遺跡(57)・両大師裏遺跡(52)・東谷足Ⅱ(43)・Ⅲ(42)遺跡等、多くの遺跡が分布し、この時期に江川の谷奥部における縄文人の活動が活発化したことがわかる。

石川堀流域では桶川市大平遺跡(7)で前期の住居跡が調査され、荒川本流側でも桶川市前原遺跡(9)で前期末の甕割り墓とみられる例が報告された。注目されるのは、荒川本流沿いの低地部にも複数の遺跡が存在していることである。川島町の東野遺跡(77)や芝沼堤外遺跡(73)では現地表下5mのところから前期後葉～末葉の住居跡が発見され、当時の地形や集落立地を考えるうえで貴重な資料となった。

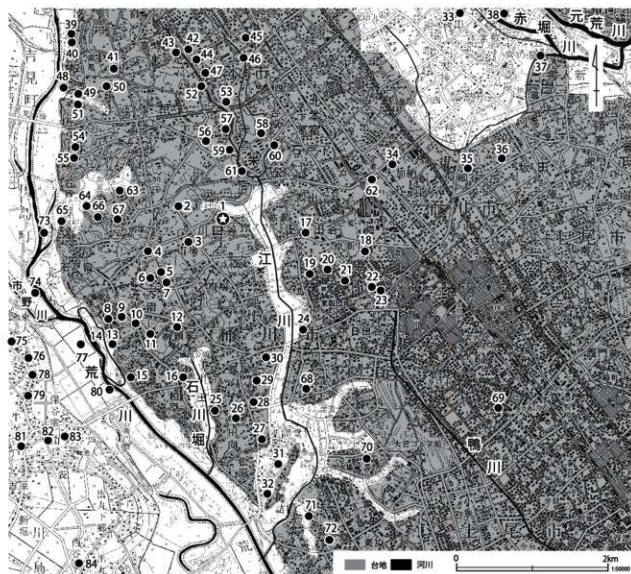
中期の集落遺跡は前期に引き続き、江川・石川堀およびその支谷の奥に遺跡が集中する。江川中流域の川田谷・上日出谷地区周辺ではいくつかの支谷が合流して広い沖積地を形成しているが、ここには桶川市諏訪野遺跡・高井遺跡・北本市デーノタメⅠ遺跡(60)というこの大宮台地西部でも有数の環状集落が集中している。いずれも中期中葉から後葉にかけて営まれたもので、江川の本流からやや奥まった支谷沿いに立地している。デーノタメⅠ遺跡の低地部分からは中期中葉に始まる水場遺構が発見されており、多量の漆製品が出土したことは特筆される。

下流の荒川との合流点付近には上尾市中井遺跡(71)が存在している。これまでに60軒以上の住居跡が検出されていることから、中流部の諸遺跡とも密接な関係にあったものと考えられる。

東の赤堀川支流には、加納地区に中規模の集落である桶川市ふじま山遺跡(35)、同じ支流の上流には中期末葉～後期初頭の集落である北本市提灯木山遺跡が存在している。

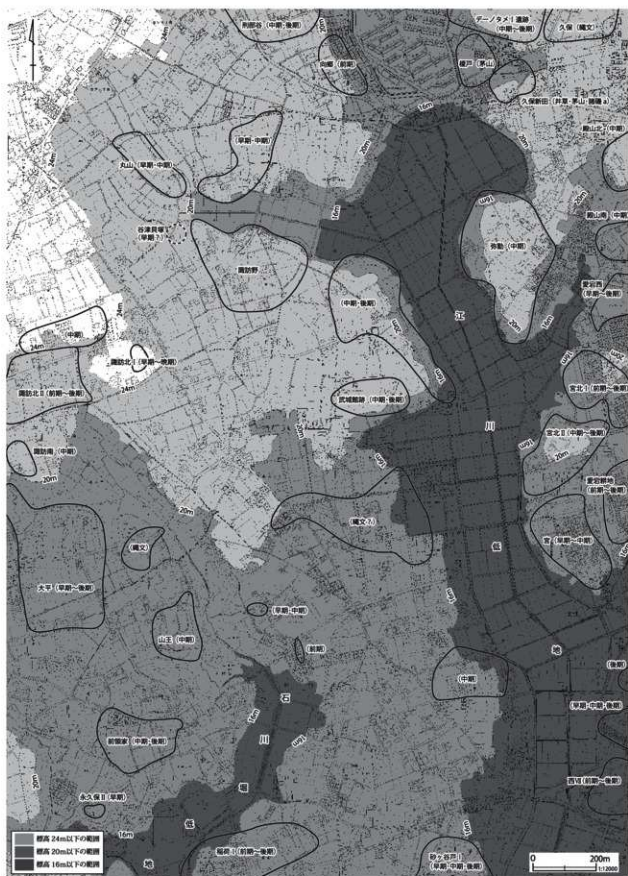
西の荒川河床及び河川敷に遺物が散布する傾向はこの時期も続いている。

後期に入ると他の地域と同様、桶川市周辺でも遺跡数の著しい減少がみられる。大規模環状集落は姿を消し、周辺地域に数軒単位のごく小規模な集落が営まれるようになる。前述の提灯木山遺跡



- | | | | | | |
|-----------|----------------|------------|------------|------------|-------------|
| 1 諏訪野遺跡 | 2 谷津貝塚 | 3 諏訪北Ⅰ遺跡 | 4 諏訪北Ⅱ遺跡 | 5 諏訪南遺跡 | 6 大沼遺跡 |
| 7 大平遺跡 | 8 西台遺跡 | 9 前原遺跡 | 10 中台Ⅱ遺跡 | 11 永久保遺跡 | 12 前領家遺跡 |
| 13 原山古墳群 | 14 荒川河床内遺跡 | 15 東台遺跡 | 16 三ツ木城跡 | 17 愛宕西遺跡 | 18 高井東遺跡 |
| 19 愛宕遺跡 | 20 高井北遺跡 | 21 高井遺跡 | 22 高井院民屋遺跡 | 23 高井南遺跡 | 24 縄の宮坂遺跡 |
| 25 狐塚遺跡 | 26 小在家遺跡 | 27 薬師堂遺跡 | 28 薬上遺跡 | 29 砂ヶ谷戸Ⅱ遺跡 | 30 砂ヶ谷戸Ⅰ遺跡 |
| 31 栗中遺跡 | 32 熊野神社古墳 | 33 後谷遺跡 | 34 徳村木山遺跡 | 35 ふじ山遺跡 | 36 堀の内遺跡 |
| 37 宮ノ脇遺跡 | 38 加納城跡 | 39 高尾白山古墳 | 40 中井一号古墳 | 41 高尾遺跡 | 42 東谷足Ⅲ遺跡 |
| 43 東谷足Ⅱ遺跡 | 44 東谷足Ⅰ遺跡 | 45 北本宿遺跡 | 46 下石戸下遺跡 | 47 藤林山中遺跡 | 48 独木舟出土地点 |
| 49 宮岡Ⅰ遺跡 | 50 宮岡水川神社遺跡 | 51 宮岡Ⅱ遺跡 | 52 岡大師裏遺跡 | 53 藤林遺跡 | 54 市場Ⅰ遺跡 |
| 55 間屋坂遺跡 | 56 本村遺跡 | 57 水川神社北遺跡 | 58 台原Ⅱ遺跡 | 59 大蔵寺裏遺跡 | 60 デーノタメⅠ遺跡 |
| 61 向郷遺跡 | 62 ニツ家下遺跡 | 63 八重塚遺跡 | 64 諏訪山北遺跡 | 65 石戸城跡 | 66 諏訪山南遺跡 |
| 67 堀ノ内館跡 | 68 後山遺跡 | 69 中妻三丁目遺跡 | 70 小谷津遺跡 | 71 中井遺跡 | 72 石神遺跡 |
| 73 芝沼外遺跡 | 74 荒川阿末市ノ川合流地点 | 75 尾崎遺跡 | 76 富士浅間塚古墳 | 77 東野遺跡 | 78 愛宕塚遺跡 |
| 79 元宿遺跡 | 80 荒川河床太郎衛門橋付近 | 81 養竹寺院内古墳 | 82 廣徳寺古墳 | 83 廣徳寺遺跡 | 84 西谷遺跡 |

第2図 周辺の遺跡



や、石川堀の谷奥の桶川市前領家遺跡(12)はその代表例といえる。諏訪野遺跡でも台地上ではごく少数ながら後期前葉の住居跡と土壌が、低地部からは遺物包含層が検出された。

後期中葉以降はふたたび拠点的な大集落が営まれるようになり、その多くは晩期中葉まで継続する。赤堀川沿いの埋没台地上では木造の水場遺構が発見され、中空ミズク土偶をはじめとする土製品・石製品、大量の漆・木製品が出土した桶川市後谷遺跡(33)が存在する。

江川の支谷奥の台地上には学史的に著名な桶川市高井東遺跡があり、近隣の低地部には高井泥炭層遺跡(22)が存在する。荒川本流沿いには北本市宮岡水川神社遺跡(50)が位置している。発掘調査では多数の土製品・石製品の出土があり、周辺地形から環状盛土の存在が推定されている。

弥生時代

弥生時代の遺跡は大半が後期から営まれる。特に江川中流右岸の台地肩部に集中しており、住居跡群と方形周溝墓が発見された砂ヶ谷戸Ⅱ遺跡(29)、弥生後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡である楽上遺跡(28)等の遺跡が点在する。江川上流では諏訪野遺跡と同じ支谷の奥に桶川市丸山遺跡が、左岸側の上日山谷地区には愛宕西遺跡(17)が存在する。

古墳時代

荒川本流沿いの桶川市西台遺跡(8)は古墳前期の代表的な集落跡である。荒川本流沿いの低地には川島町元宿遺跡(79)・富田後遺跡・尾崎遺跡(75)・西谷遺跡(84)等が出現する。

桶川市愛宕遺跡・愛宕耕地遺跡・高井遺跡・宮遺跡、石川堀左岸の桶川市狐塚遺跡等は中期の代表的な集落で、江川等の谷沿いに集中するようになる。

後期には台地部でも遺跡数が増大する一方、荒川本流沿いの低地にもふたたび集落が営まれるようになる。諏訪野遺跡でも同時期の集落が発見さ

れた。

江川河口部の熊野神社古墳(32)は4世紀後半の築造とされ、桶川市周辺における代表的な古式古墳である。

荒川沿いの谷縁には後期古墳が多数分布することが知られており、6世紀後半から7世紀にかけての群集墳である原山古墳群(13)はその代表格である。低地部では川島町廣徳寺古墳(82)・富士浅間塚古墳(76)・養竹寺院内古墳(81)等が後期古墳とされているほか、富田後遺跡でも古墳跡が検出されている。

奈良・平安時代

赤堀川流域の宮ノ脇遺跡(37)は奈良時代の小鍛冶工房を伴う集落が発見されたことで知られており、石川堀谷奥部の前領家遺跡でも鍛冶炉を伴う平安時代の集落跡が調査され、鉄滓や金属製品が出土している。

江川流域では石神遺跡(72)等から奈良平安時代の集落が発見されているほか、荒川本流沿いの谷の周辺および斜面部にも該期の集落跡が分布している。

中・近世

桶川市内に所在する中世城館跡としては、平安～鎌倉時代の居館跡とされる堀ノ内館跡(67)や、14世紀とされる三ツ木城跡(16)、戦国期に岩附太田氏の支城であった石戸城跡(65)、やはり戦国の城郭とされる加納城跡(38)が存在する。

上尾市石神遺跡では中世の火葬墓、桶川市諏訪北Ⅰ遺跡(3)・薬師堂遺跡(27)では中世の地下式墳が検出されている。北本市石戸宿の諏訪山南遺跡(66)では地下式墳に加え、中世の竪穴状遺構から金泥塗りの板碑が出土している。

石川堀最奥部の桶川市大平遺跡は近世初頭の旗本牧野氏陣屋跡の伝承を持ち、発掘調査でも同時期の遺構遺物が発見された。旧中道沿いに立地する北本市二ツ家下遺跡(62)では、旧街道に直交・平行する区画溝と畠の畝跡が検出された。

III 遺跡の概要

諏訪野遺跡は江川本流といくつかの支流との合流点に形成された低湿地をのぞむ台地縁辺に立地している。発掘調査区は圏央道の建設予定地に沿って東西に長く、幅約35m・長さ約270mに及んでいる。地形のうえでは東寄り70mほどの低地部および斜面部と、それ以外の大部分を占める台地部に分けられる。

台地部分は現地表面では西に向かって緩やかに傾斜しているが、遺構検出面であるローム層上面ではより強い傾斜となっていた。調査区西端部は広い窪地となっており、基盤のローム層では雨水が溜まると人為的に排水しない限りいつまでも滞水する状況であった。この部分では近世の溝とわずかな土壌・ピットの外は発見されず、遺構・遺物とも希薄であった。

以下、各時代の遺構・遺物について概観する。

旧石器時代の遺物としては若干の石器・剥片類が発見されているが、いずれもローム層中からではなく縄文時代以降の包含層や遺構覆土中からの出土であった。

縄文時代の遺構は竪穴住居跡78軒・土壌185基・集石土壌2基・ピット多数である。

時期は縄文時代中期中葉から後葉が主体で、特に勝坂Ⅲ式期から加曾利EⅠ式期に集中している。この時期の竪穴住居跡は調査区内約180mにわたって密に分布しているが、中間には約60mの空白部がみられる。このため、中央広場を取り巻くようにして住居跡が分布する大型の環状集落であると考えた。

台地東端部では小規模な谷が入り込んでおり、この付近では縄文時代の遺構がやや希薄となっている。したがって、集落自体も完全な環状ではなく、一部に空白を持った馬蹄形となっている可能性もある。

遺構確認面から住居跡床面までの深さは40～

50cm程度のものが中心だが、深いものでは90cm近いものも存在しており、遺構の残存状態は全体的に極めて良好であった。覆土中からは復元可能なものを含む多量の土器・石器が出土していた。発掘調査で出土した遺物の大半はこれら竪穴住居跡から出土した土器片であった。

竪穴住居跡の分布域に重複して、数か所で墓域とみられる土壌群を発見した。土壌の平面形態は円形ないし楕円形で、直径1m前後のものが多く、副葬品らしきものは検出されなかった。

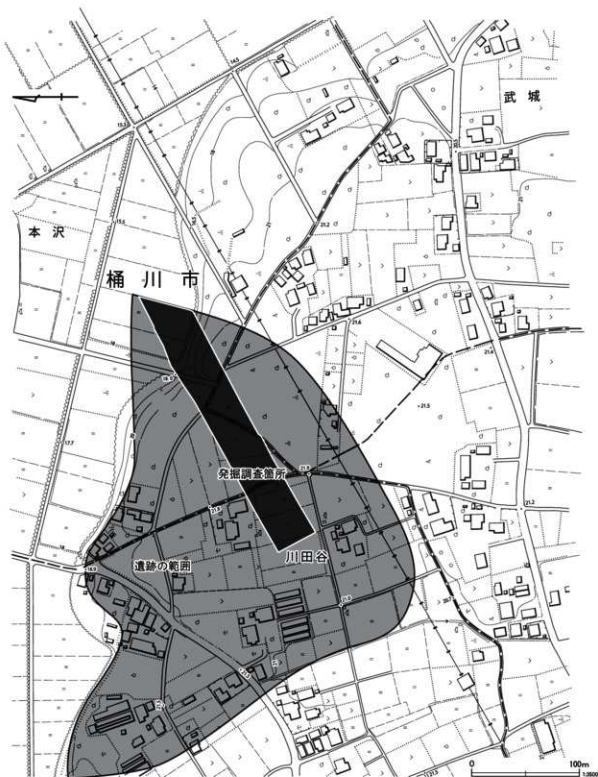
竪穴住居跡に伴わないピットは集落跡の内外で多く検出されたが、とりわけ住居跡群の内側、中央広場南西部分に集中していたため、「ピット群」として一項を設けて報告することとした。

中期を除く縄文時代の遺構は、前期の竪穴住居跡6軒と後期の竪穴住居跡3軒、前期・後期それぞれの土壌・ピット若干である。また、調査区北東端の低地部分では、縄文時代の河道中から後期前葉の遺物が大量に出土した。

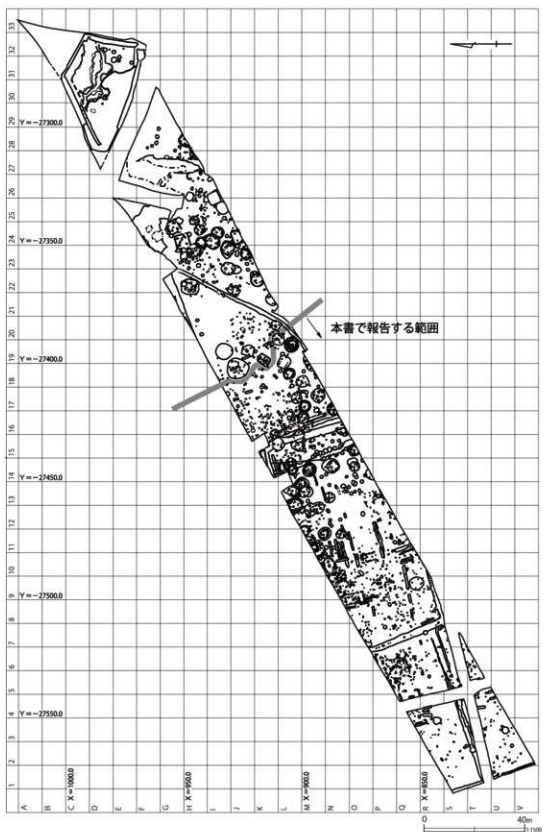
古墳時代の遺構は6～7世紀の竪穴住居跡で、調査区東端の台地縁辺に3軒発見された。周辺からは同時期の遺物がほとんど出土しないことから、ごく小規模な集落跡であると考えられる。

近世の遺構は、掘立柱建物跡9棟・井戸跡2基・溝跡13条・土壌171基である。

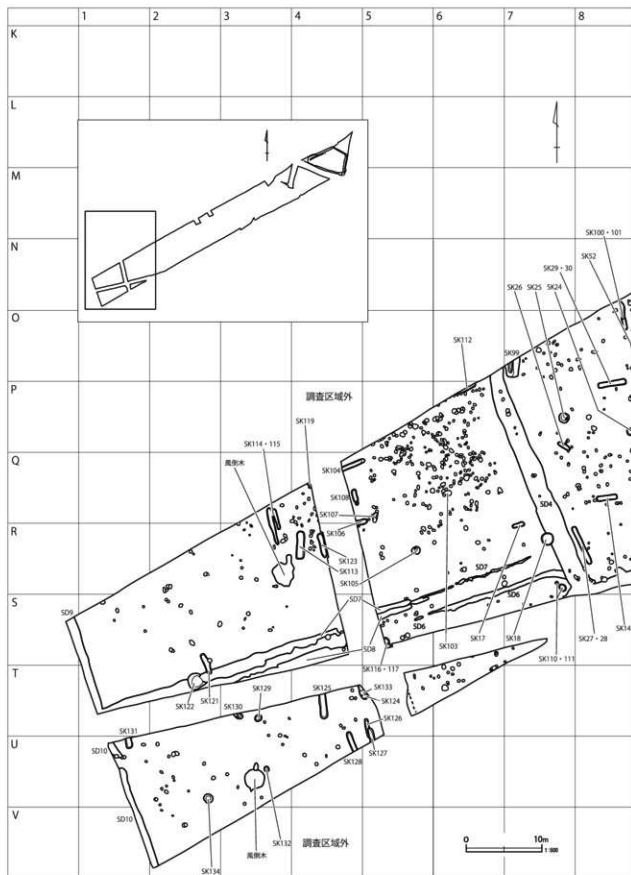
今次発掘調査の報告書は平成25年度と27年度の2回にわたって刊行する予定だが、長大な発掘調査区をI-17グリッドとL-20グリッドを結ぶ線で東西に分け、本書においては西半部で検出された遺構および遺構出土遺物について報告する。旧石器を含む遺構外出土遺物および近世の遺構出土遺物は次回報告書に掲載する。本書に掲載する遺構は、竪穴住居跡44軒（すべて縄文）、土壌269基（縄文113・近世157）、集石土壌2基、掘立柱建物跡9棟、井戸跡2基、溝跡12条である。



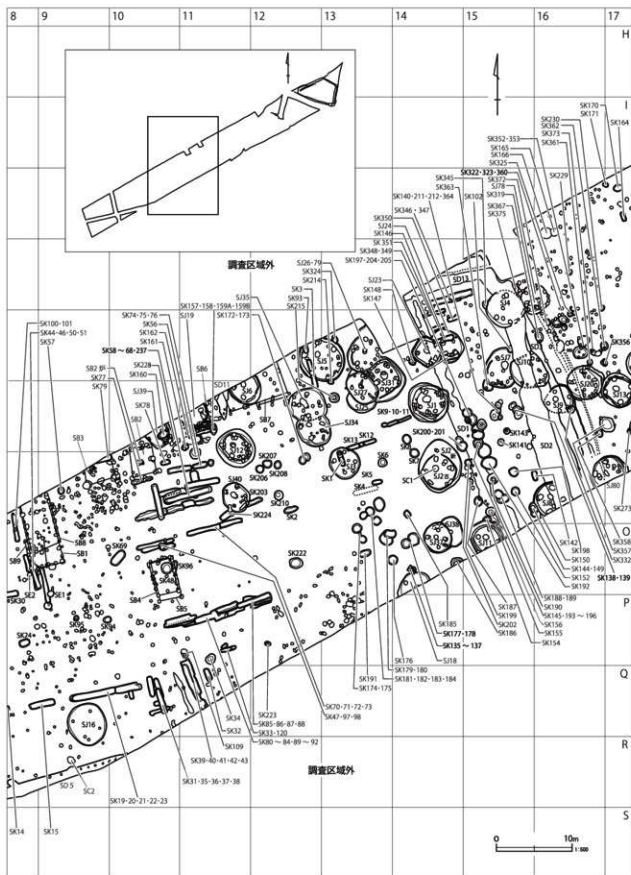
第4図 遺跡位置図



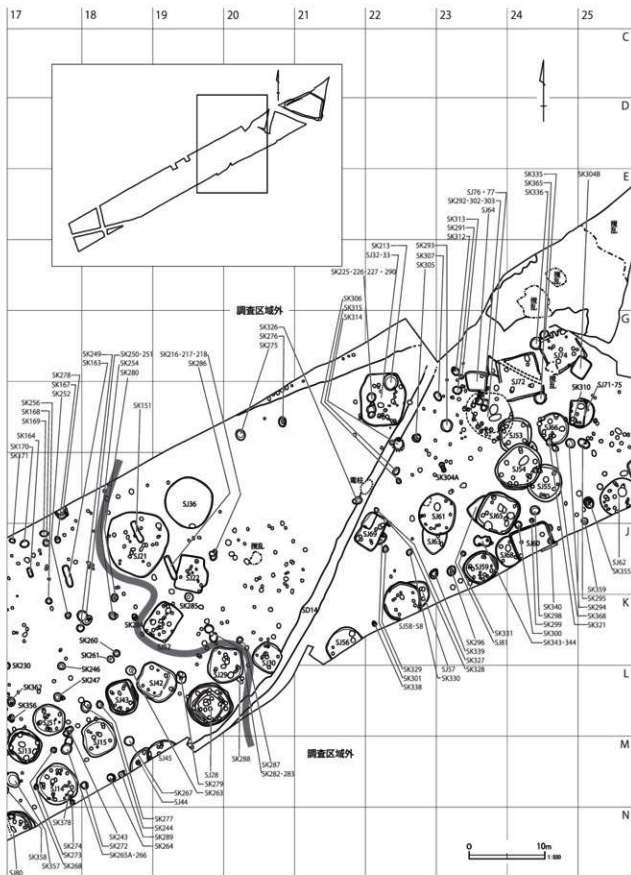
第5図 グリッド配置図

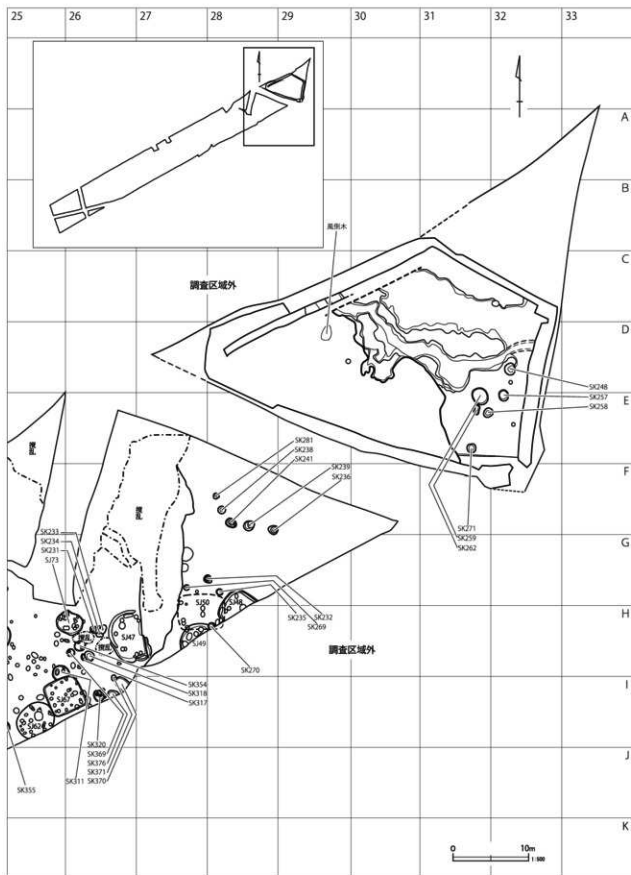


第6図 諏訪野遺跡 全体図(1)



第7図 諏訪野遺跡 全体図(2)





第9図 諏訪野遺跡 全体図(4)

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第10～18図)

M-14グリッドに位置する。第1号溝跡に壊されている。平面形は長径5.88m、短径5.52mの不整な隅丸六角形である。壁高は最も深い部分で0.33mである。主軸方向はN-58°-Wを指す。床面は平坦で、北東方向に緩やかに傾斜する。壁溝は床面をほぼ2巡する。

主軸線上のやや奥壁寄りで炉跡を検出した。長楕円形の地床炉で、前後に二か所の落ち込みが存在する。

床面上から19本のピットが検出された。これらのうちP1・3、P6・7、P8・9、P12～14が主柱穴で、4本柱の上屋を構成するものと考えられる(第10図 柱穴変遷図参照)。

柱穴の覆土は外周のものほど新しくなっており、少なくとも1度の拡幅が行われているほか、最終段階に壁溝を伴わない拡幅が行われた可能性もある。ここでは2～3時期にわたる上屋の建て替えが行われた可能性を指摘しておく。

床面上10～16cmの覆土中で柱痕を検出した(第14図)。P6・P8・P13(14)に対応しており、その規模や検出状況から、住居跡の埋没がある程度進んだ段階における主柱の抜去に伴うものと考えられる。

主軸線南側の壁近くにP15～P19が集中し、これらは出入り口施設の痕跡であると考えられる。覆土は大きく分けて上下2層からなり、遺物は主として上層から出土した。所属時期は加曾利E I

第1表 第1号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	50.0	65.0	P2	40.0	21.3	P3	48.0	71.0	P4	54.0	19.9
P6	64.0	34.5	P7	62.0	85.5	P8	54.0	77.0	P9	70.0	76.1
P11	40.0	24.0	P12	46.0	71.5	P13	42.0	76.2	P14	42.0	69.7
P16	24.0	8.8	P17	18.0	15.6	P18	(42.0)	13.1	P19	36.0	22.4
									P5	40.0	25.4
									P10	30.0	10.1
									P15	36.0	8.9

式期と考えられる。

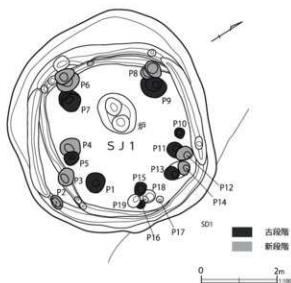
第1号住居跡出土遺物

土器 (第19～24図)

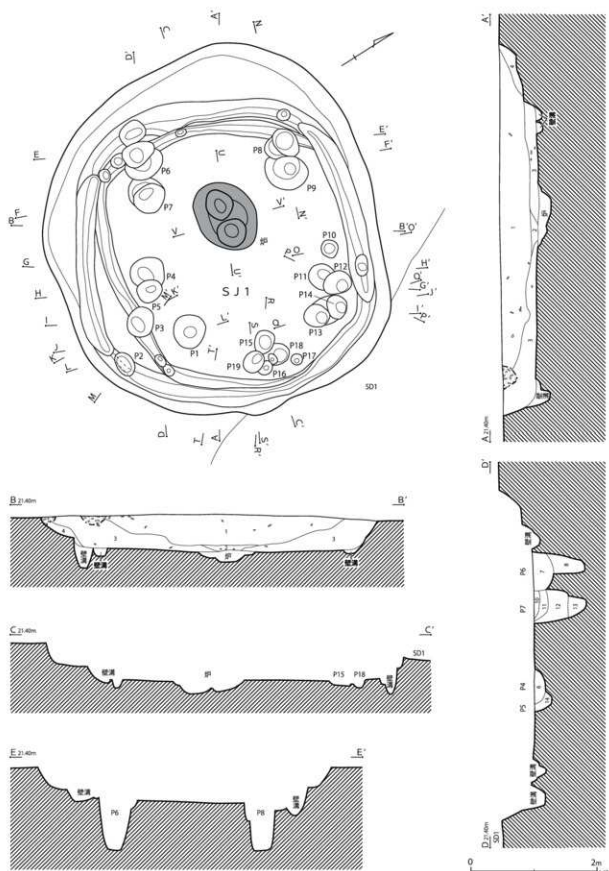
1～6はキャリバー類深鉢で、口縁部の残るものである。1は波状口縁で、比較的小型の深鉢である。山形波状口縁の波頂部に渦巻文を配し、口縁部文様帯は片流れの渦巻文が巡る。頸部無文帯を持たず、地文はRL単節の縄文である。

復元最大径は約24.5cm、現存高は約14.2cmである。胎土は多量の小礫・砂を含む。器面は暗茶褐色である。焼成は良好である。

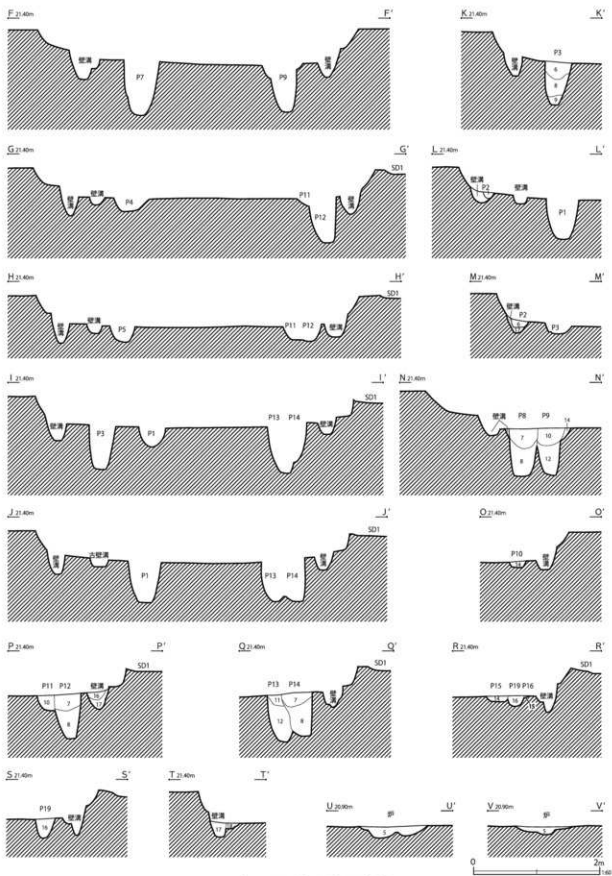
2は水平口縁の深鉢である。復元最大径は約46.4cm、現存高は約16.7cmである。横S字の渦巻文が巡り、下方の区画線との接点に3個1単位の刻みを施す。地文はRの撫糸文である。



第10図 第1号住居跡柱穴変遷図



第11图 第1号住居跡(1)



第12图 第1号住居跡 (2)

- S J 1
 1 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子少量 炭化物微量含む
 2 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・焼土粒子少量含む
 3 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子少量 炭化物微量含む
 4 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 炭化物微量含む
 S J 1 部
 5 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量 焼土ブロック・焼土粒子若干含む
 S J 1 (断) Pt
 6 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干含む
 7 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 焼土ブロック微量含む
 8 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く含む
 9 暗褐色土層 : ロームブロック多く含む 固く締まっている

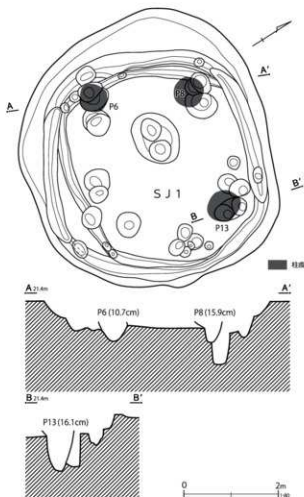
- S J 1 (古) Pt・壁面
 10 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む 焼土ブロック微量含む
 11 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干 ローム粒子少量含む
 12 暗黄褐色土層 : 粗粒ロームブロック・ローム粒子多く含む 固く締まっている
 13 暗褐色土層 : ロームブロック多く含む 固く締まっている
 14 暗黄褐色土層 : ローム粒子多く含む
 15 暗褐色土層 : ローム粒子若干 焼土ブロック微量含む
 16 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子・焼土粒子若干含む
 17 暗黄褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子多く含む
 18 暗黄褐色土層 : ローム粒子多く含む

第13図 第1号住居跡(3)

胎土は砂質である。外面灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良い。

3は水平口縁の深鉢である。渦巻文の接点が山形に切り上がり、ここから下方の区画帯に向けて3条の隆帯が垂下する。地文はRの捺糸文である。

復元最大径は約27.8cm、現存高は約7.8cmである。胎土は黒雲母混じる多量の砂・シルトを含む。器面は暗灰褐色である。焼成はやや不良である。



第14図 第1号住居跡柱痕

4は水平口縁の深鉢で、口縁部の渦巻文が小突起化する初現的な繋ぎ弧文である。頸部には無文帯を持ち、地文はRの捺糸文で、口縁部も含め縦位回転で施文する。

復元最大径は約33.2cm、現存高は約17.5cmである。胎土は少量の砂とシルトを含む。外面暗灰黄褐色、内面暗茶褐色である。焼成は良い。

5は小波状口縁で、やはり初現的な繋ぎ弧文である。文様带上位の区画線から弧状区画の中間点に向けて2条の隆帯が垂下する。ごく狭い頸部無文帯を持ち、地文は口縁部に縦位の集合沈線、胴部にはRの捺糸文を施文する。

復元最大径は約17cm、現存高は約10.7cmである。胎土は多量の砂と小礫を含む。外面暗橙色、内面暗灰褐色である。焼成は良い。

6は水平口縁の深鉢で、渦巻文の上方に大型の中空突起を持つ。口縁部文様帯の一端が矮小化する渦巻文を描き、3～4条の隆帯が垂下する。地文はL R 単節縄文と縦位の集合沈線が混在する。頸部には無文帯を持つ。

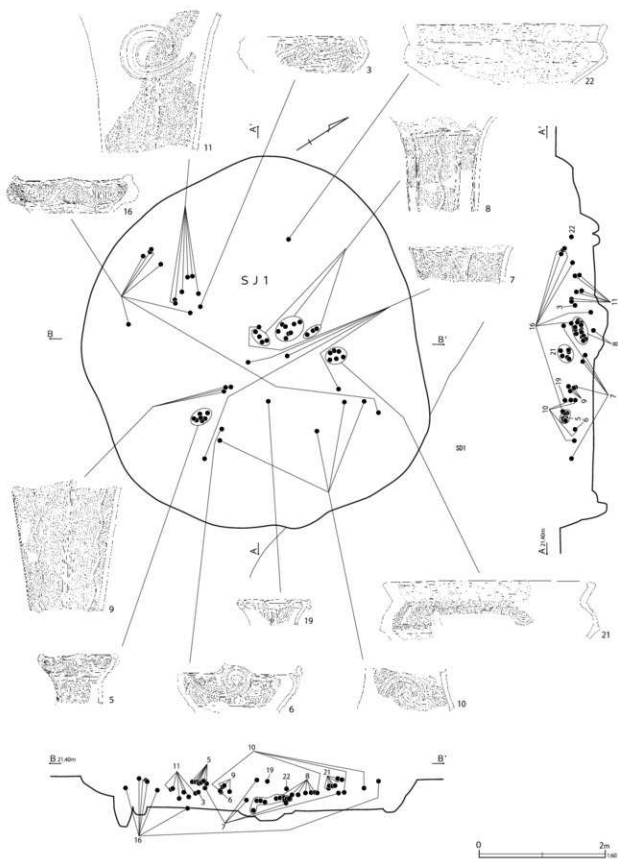
復元最大径は約26.6cm、現存高は約10.3cmである。胎土は多量の小礫・砂・シルトを含む。器面は暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

7～15は地文+懸垂文の胴部で、多くは前項のようなキャリパー類深鉢に伴うものとみられる。

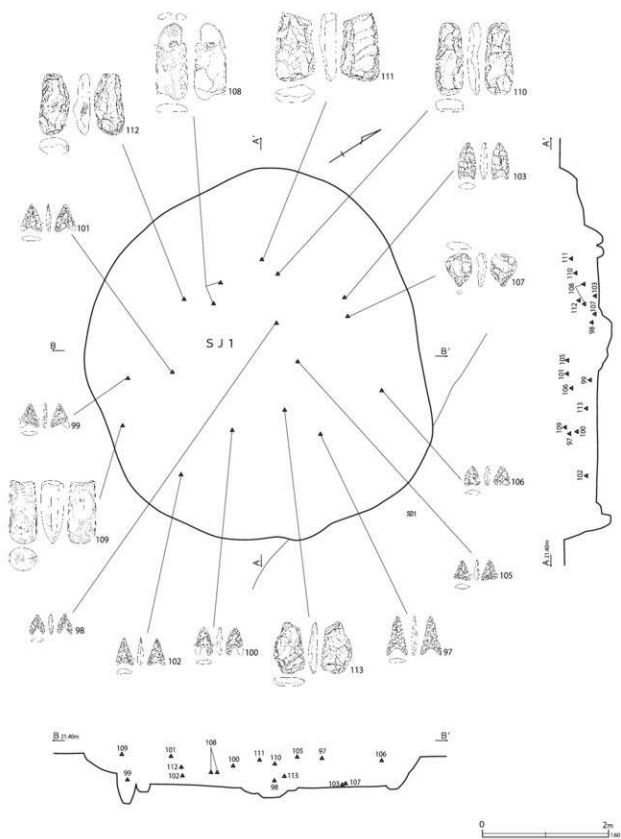
7は外反する胴上半部である。頸部との境に隆帯が巡り、上位に無文帯が存在するものとみられる。胴部には隆帯による懸垂文が垂下するが、一部は曲線的なモチーフを描くものとみられ、懸垂文との交点には小渦巻文を配する。



第15图 第1号住居跡遺物出土状況(1)



第16图 第1号住居跡遺物出土状況(2)



第 18 图 第 1 号住居跡遺物出土状況 (4)

復元最大径は約21.8cm、現存高は約8.2cmである。胎土は砂質である。器面は暗灰褐色である。焼成は比較的良好い。

8は頸部から胴下半部にかけて残存する。頸部無文帯を持ち、胴部との境は1条の隆帯で区画する。胴部には1本隆帯の懸垂文と波状懸垂文が交互に配し、地文はRの燃糸文を施文する。

復元最大径は約22.5cm、現存高は約19.8cmである。胎土は多量の砂・シルトを含む。器面は暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

9は直線的に開く胴部である。1本隆帯の懸垂文と波状懸垂文が交互に配し、地文はRの燃糸文を施文する。

復元最大径は約23cm、現存高は約28.1cmである。胎土は多量の砂・礫・シルトを含む。器面は灰黄褐色である。焼成は不良である。

10はソロバン玉状に張り出す胴上半部である。大柄の渦巻文が交錯し、モチーフの末端に小渦巻文を配する。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約18.4cm、現存高は約8.9cmである。胎土は砂質である。外面灰褐色、内面暗褐色である。焼成は良好である。

11は軽微に外反しつつ開く胴部である。2本隆帯による大柄の渦巻文から、やはり2本隆帯の懸垂文が垂下する。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約30cm、現存高は約30.1cmである。胎土は砂質である。外面暗褐色、内面灰黄褐色である。焼成は比較的良好い。

12も11に似たモチーフを描く。渦巻文と2本隆帯の懸垂文を交互に描き、横位の隆帯で連結している。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約26.8cm、現存高は約18cmである。胎土は多量の砂礫を含む。外面暗茶褐色、内面灰褐色である。焼成は良好い。

13は底部である。胴部中段の渦巻文から2本隆帯の懸垂文が垂下するほか、2本の隆帯の間を斜めの隆帯と沈線で多段に区画する階梯状のモチー

フを描く。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約13.2cm、現存高は約8cmである。胎土は砂質で2～5mmの垂角礫を多く含む。外面灰褐色、内面暗褐色である。焼成は良好い。

14は1本隆帯の波状懸垂文が密に描かれる。1か所のみ底部付近の無文部が山形に立ち上がり、懸垂文末端との接合部に小渦巻文が配する。地文はR L単節の縄文である。

復元最大径は約10.5cm、現存高は約9.7cmである。胎土はやや砂質である。外面暗褐色、内面黒褐色である。焼成は良好い。

15もキャリバー類深鉢とみられ、胴部中段から底部まで残存する。底部の直上が「く」の字に張るほかは器形の変化に乏しく、軽微に外反しつつ直線的に開いている。地文はRの燃糸文を施文する。

復元最大径は約25.2cm、現存高は約31.9cmである。胎土は砂質である。外面灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

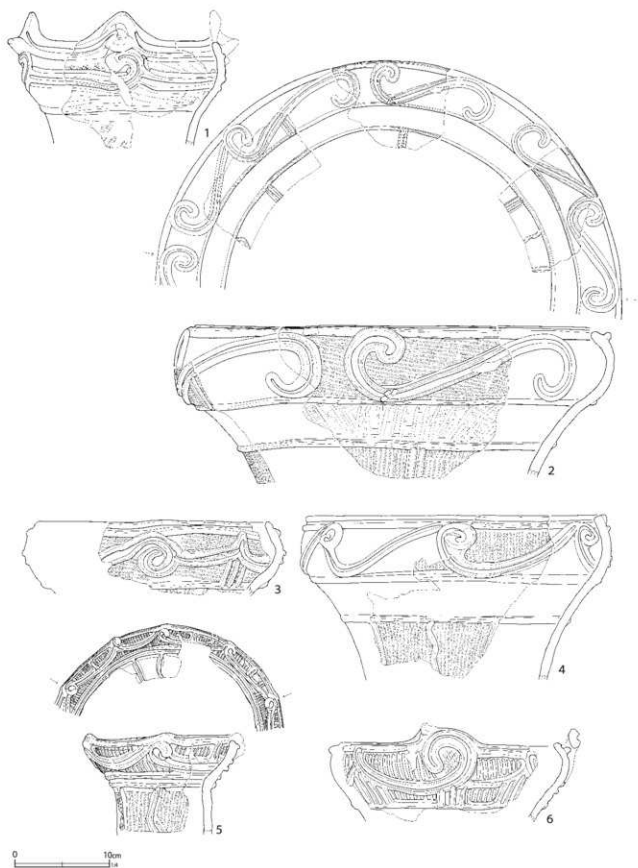
16・17は浮線+沈線による密な渦巻モチーフが特徴的な深鉢口縁部である。

16は緩やかな4単位の波状口縁で、波状部につまみ状の小突起を配する。口縁部の文様帯は波状の区画線をはさんで交互に渦巻文を配し、小突起の下では円錐状の突起となっている。地文はRの燃糸文である。

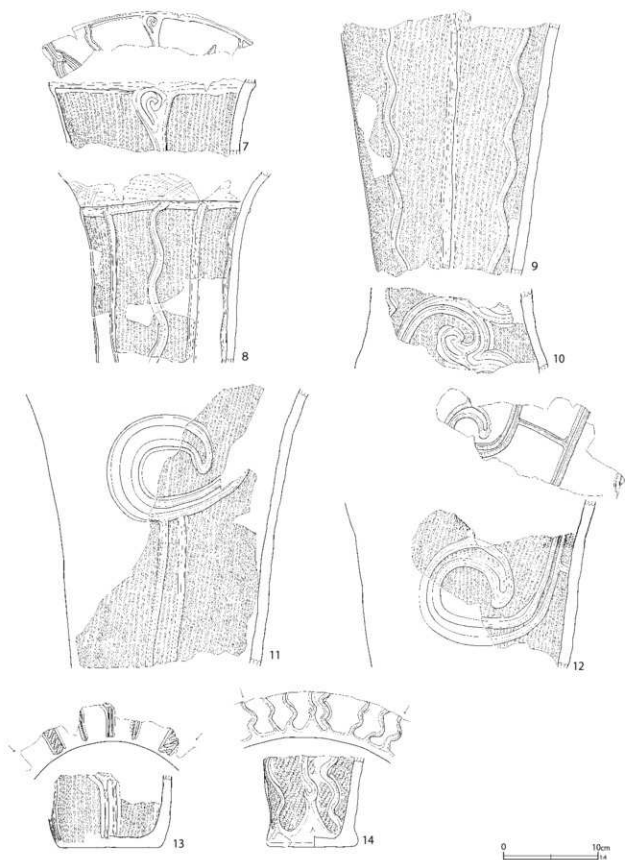
復元最大径は約27.9cm、現存高は約8cmである。胎土はややシルト質である。器面は暗灰褐色である。

17は水平口縁で、4単位の小突起を持つものとみられる。口縁部には渦巻文が並ぶが、16のような突起は用いていない。胴部にはRの燃糸文を施文する。

復元最大径は約26.2cm、現存高は約11.9cmである。胎土はシルト質で、結晶片岩の小礫が混入する。器面は暗灰黄褐色である。焼成は比較的良好い。



第19图 第1号住居跡出土遺物 (1)



第20图 第1号住居跡出土遺物(2)

18は小型の深鉢で、口縁部に隆帯＋沈線による縦位の楕曲文を持っており、曾利Ⅰ式に類似する。胴部にはRの燃糸文を施文する。

復元最大径は約17cm、現存高は約7.7cmである。胎土は若干の砂を含む。外面橙色、内面黒褐色である。焼成は良好である。

19も小型の深鉢で、口縁直下に隆帯による横楕円形のモチーフが並ぶ。胴部には2本隆帯の懸垂文が垂下し、RL単節の縄文を施文する。

復元最大径は約15.3cm、現存高は約5.5cmである。胎土は黒雲母粒子と少量の砂を含む。外面暗灰橙色、内面灰褐色である。焼成は良好である。

20は口縁部無文の深鉢である。頸部には2本隆帯の区画が巡り、胴部には2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の波状懸垂文が交互に垂下する。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約18.5cm、現存高は約16.3cmである。胎土はシルト質である。器面は灰黄褐色である。焼成はやや不良である。

21～23は浅鉢である。

21は胴部中段がソロバン玉状に張り出し、口縁無文で「く」の字に外反する。胴上半部に、16・17と類似の文様帯を持つ。文様帯の上下は交互刺突を持つ隆帯で区画し、胴下半部は無文である。

復元最大径は約46.3cm、現存高は約12.5cmである。胎土は少量の砂、黄白色粒子目立つ。外面暗褐色、内面黒褐色である。焼成は良好である。

22・23は無文の浅鉢である。22は復元最大径約42.7cm、現存高は約13cmである。胎土は黄白色粒子が混じる砂粒を含む。外面は茶褐色、内面は暗灰橙色～黒褐色である。焼成は良好である。23は復元最大径約43.4cm、現存高は約8.8cmである。胎土は砂質、黄白色粒子目立つ。外面は灰黄褐色で黒斑がみられ、内面は黒褐色である。焼成は良好である。

24～86は破片資料である。24～34は勝坂式および阿玉台式である。

35～39は中峠式系の土器である。刻みを伴う隆帯で文様を描き、38は口端に平行沈線が巡る。

40～61はキャリバー類の深鉢口縁部である。

40～43・47は中空突起を持つ。42・43は上方に開口する筒状の突起である。36の山形突起もこれらに類似するが平面的な表現となっている。

45は隆帯に交互刺突を伴い、46はクランク文に波状の沈線を作る。57～60は隆帯の末端に小渦巻文を配する。

48・51は頸部無文帯を持たない。一方、47・52・53・57は明らかに頸部無文帯を持つ。52は胴部との境界に隆帯区画を伴わない可能性がある。

62～65は、これらに伴う胴部である。62・63は2本隆帯による懸垂文を描く。62は懸垂文の途中に小渦巻文と剣先モチーフを配する。63は大柄の渦巻文を描き、それらを弧線文で横位に連携している。

64は頸部無文帯で、胴部との境に2本隆帯の区画が巡る。65は3本沈線により横位の区画と波状懸垂文を描き、胴上半部に波状沈線が巡る。

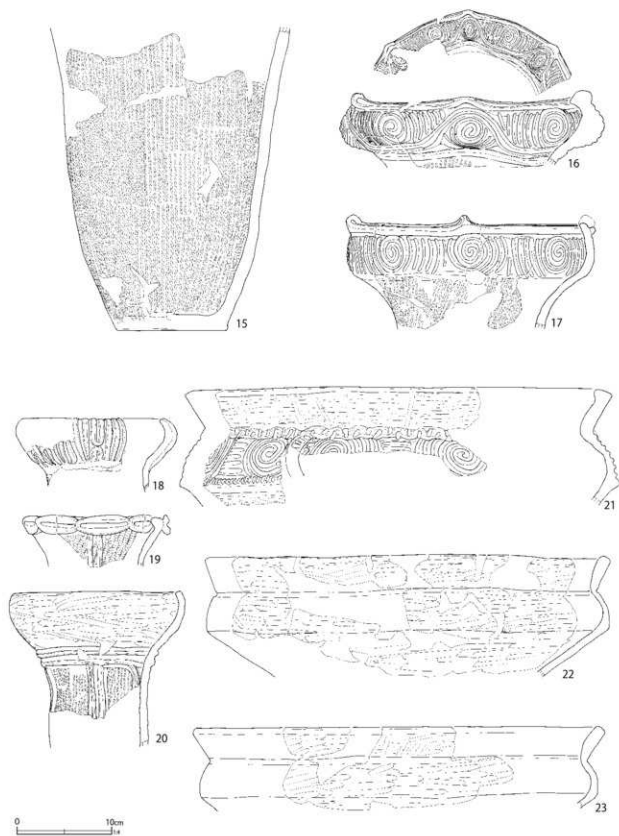
44～71は、16・17に類似の渦巻文の土器である。67・68・70は円錐状の突起を持つが、他は平坦な表現である。

66は器形が17に似るが地文はR無節の縄文である。67・70は波状の区画を挟んで交互に渦巻文が並ぶ。72～75はこれらに類似する文様を描く胴部～底部である。平行沈線による渦巻文や懸垂文で器面を埋める。

76～78は地文燃糸文のみの破片で、76・77は口縁部、78は胴部である。

79～85は浅鉢である。79・80はキャリバー類深鉢と同系統の文様を胴上半部に配置する。82～85は刻みや交互刺突を伴う隆帯で文様を描く。81は無文の浅鉢である。

86は橋梁状の把手を肩部に配する両耳壺であろう。把手の直上には一対の貫通孔を有する。87～96には土製円盤を一括した。



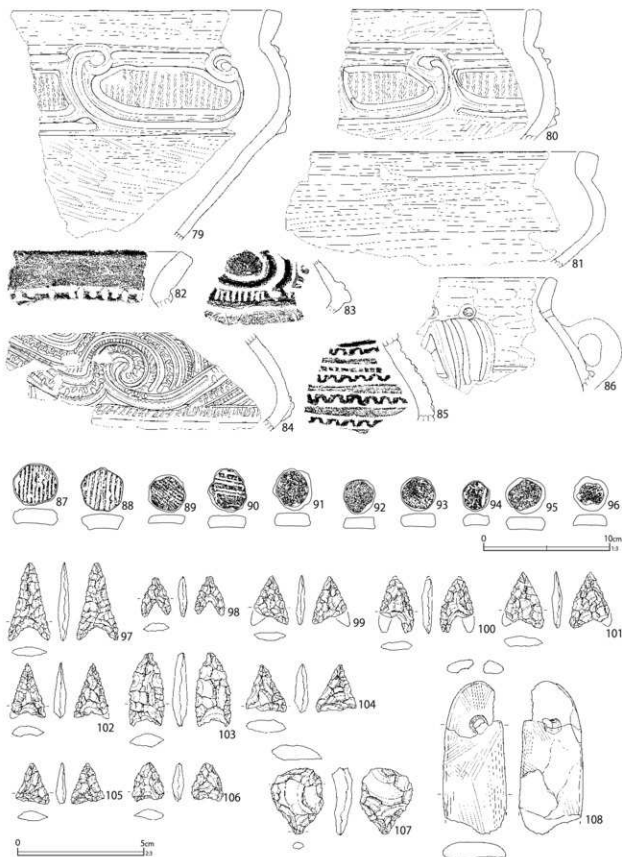
第21图 第1号住居跡出土遺物(3)



第22图 第1号住居跡出土遺物(4)



第23图 第1号住居跡出土遺物(5)



第 24 图 第 1 号住居跡出土遺物 (6)

石器 (第24～25図)

97～106は石鏃である。うち97～103は凹基である。97は長さ3.1cm、幅1.65cm、厚さ0.4cm、重さ1.18gである。石材は黒色頁岩である。98は長さ1.6cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ0.42gである。石材は黒曜石である。

99は片脚欠損する。長さ1.9cm、幅1.35cm、厚さ0.35cm、重さ0.58gである。石材は黒曜石である。100は片脚欠損する。長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.9gである。石材はチャートである。

101は片脚欠損する。長さ1.2cm、幅1.15cm、厚さ0.4cm、重さ0.87gである。石材はチャートである。102は片脚欠損する。長さ2.12cm、幅1.4cm、厚さ0.47cm、重さ0.85gである。石材はチャートである。

103は側縁が緩やかなカーブを描く紡錘形の体部にごく短い脚を持つ。長さ2.9cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm、重さ2.14gである。石材はチャートである。

104以下は平基もしくはこれに近い形態のものである。104は長さ0.95cm、幅1.65cm、厚さ0.6cm、重さ1.5gである。石材はチャートである。

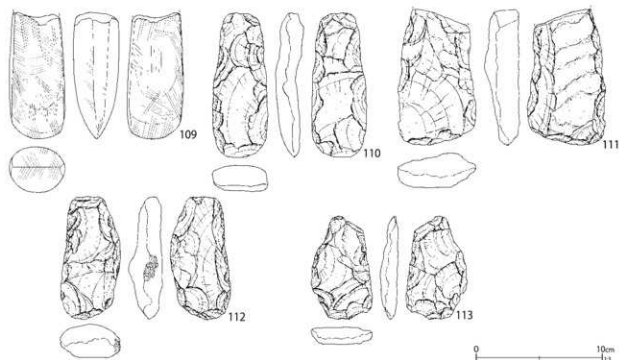
105は長さ1.67cm、幅1.35cm、厚さ0.4cm、重さ0.58gである。石材はチャートである。

106は先端が鈍角で、基部もごく緩やかな凹基をなす。長さ1.5cm、幅1.25cm、厚さ0.45cm、重さ0.59gである。石材は黒曜石である。

107は石鏃である。倒卵形のつまみにごく短い軸部が付される。長さ3.7cm、幅2.1cm、厚さ0.8cm、重さ3.5gである。石材はチャートである。

108は垂錐とみられる。長楕円形かつ扁平な自然石を研磨し、長軸側一端（または両端）に表裏両面からの貫通孔を穿っている。長さ6.1cm、幅2.5cm、厚さ0.7cm、重さ12.14gである。石材は粘板岩である。

109は磨製石斧である。断面楕円形で比較的肉厚であり、基部を折損する。長さ15cm、幅4.4cm、厚さ3.6cm、重さ175.8gである。石材は砂岩である。



第25図 第1号住居跡出土遺物(7)

110～113は打製石斧である。110は短冊形で、長さ11.6cm、幅4.4cm、厚さ2.2cm、重さ125.07gである。石材はホルンフェルスである。111も短冊形で基部折損する。刃部両端が張り、腹面に広く自然面を残す。長さ11cm、幅6.1cm、厚さ2.7cm、重さ218.76gである。石材はホルンフェルスである。

112は左へと湾曲するいびつな短冊形である。長さ9.7cm、幅4.8cm、厚さ2.7cm、重さ55.71gである。石材は安山岩である。113は寸詰まりの楕円形で、再生品の可能性がある。長さ8.2cm、幅4.8cm、厚さ1.4cm、重さ133.39gである。石材は粘板岩である。

第2号住居跡

M・N-14グリッドに位置する。

新旧2段階の住居跡が存在する。平面プランは旧段階の住居跡が新段階の住居跡に含まれる入れ子の状態であり、新段階の床面が旧段階のものより上位に存在する。

新旧の住居跡の主軸はほぼ90°変更されている。

第2号（新）住居跡（第28・29図）

長径6.44m、短径6.07mの楕円形である。壁高は最も深い部分で0.16mである。主軸方向はN-46°-Eを指す。

床面は平坦で、柱穴P1付近がやや下がっている。大部分が古段階の住居跡の覆土上に存在し、踏み締まり等は明確ではなかった。壁溝および出入り口施設らしきものは検出されなかった。

床面上から5本のピットが検出された。これらのうちP2・P3・P4・P8が主柱穴で4本柱の上屋を構成するものと考えられる。また、P1を第2号（古）住居跡と共用している可能性がある。

床面中央部、主軸線上のやや奥壁寄りで見跡を検出した。深鉢の口縁部を正位に埋設した埋甕炉である。炉底部を除き、焼土の散布は比較的に少な

かった。周囲から埋設土器よりひとまわり大きい掘りかたを検出した。

覆土はほぼ1層で、遺物は床面中央付近に集中して出土している。柱穴P8付近から第30図1～3の勝坂I式期の土器が出土しているが、その他の土器破片の出土状況から判断して、より古い時期の土壌等に伴っていた可能性が高い。

本住居跡の所属時期は加曾利E I式期と考えられる。

第2号（新）住居跡出土遺物

土器（第30～33図）

1は深鉢口縁部である。強く内屈して口唇断面が肥厚し、内面に段を形成する。口縁直下に刻みを伴う隆帯により横楕円形の区画を形成する。区画内部には三角形や円形の陰刻文が並び、これらに沿って複列の角押し文が巡る。

復元最大径は約31.8cm、現存高は約3.9cmである。胎土はやや砂質である。外面暗茶褐色、内面暗褐色である。焼成は良い。

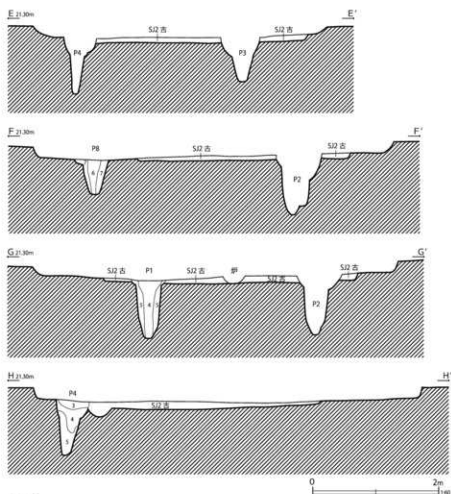
2は阿玉台式に類似の深鉢である。頸部にくびれを持ち、胴上半部が球胴状に張り出しており、以下、底部にかけて急速に収斂する。

頸部には上下二段の隆帯が巡り、ここに対弧状の隆帯を配することで横楕円形の区画を形成している。胴部にはY字状の懸垂文が垂下する。隆帯以外の装飾を持たず、地文縄文も施文しない。

復元最大径は約31.9cm、現存高は約25cmである。胎土は砂質である。器面は暗茶褐色である。焼成はやや不良である。内面全体に二次焼成が観察される。

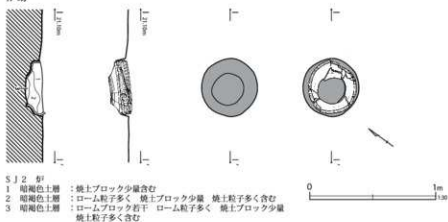
3は浅鉢である。胴部中段に隆帯が巡って「く」の字に張り出し、ここから上が文様帯となっている。文様要素は1の深鉢に類似しており、刻みを持つ隆帯と複列の角押し文によって楕円形の区画文を描き、区画内部に角押し文列を充填する。胴下半部は無文である。

復元最大径は約45.2cm、現存高は約10.3cmで



- SJ2 新
- 1 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック・炭化物少量含む
 - 2 暗褐色土層 : ローム粒子多く 炭化物少量含む
 - 3 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 焼土ブロック少量 焼土粒子多く含む
 - 4 暗褐色土層 : ローム粒子若干 焼土粒子・炭化物少量含む
 - 5 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く 焼土粒子・炭化物少量含む
 - 6 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む
 - 7 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量含む

炉跡



- SJ2 古
- 1 暗褐色土層 : 焼土ブロック少量含む
 - 2 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土ブロック少量 焼土粒子多く含む
 - 3 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 焼土ブロック少量 焼土粒子多く含む

第27図 第2号(新)住居跡(2)

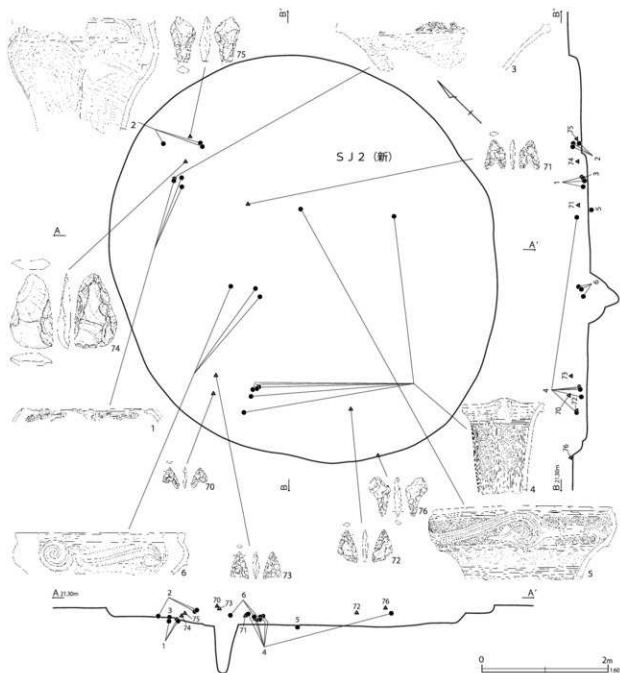
ある。胎土は少量の砂粒を含み、黒雲母粒子が混じる。外面暗茶褐色、内面黒褐色である。焼成は良好である。

既に述べたとおり、1～3については勝坂Ⅰ式期の遺物であり、本住居跡に重複して存在したより古い遺構に由来するものと考えた。

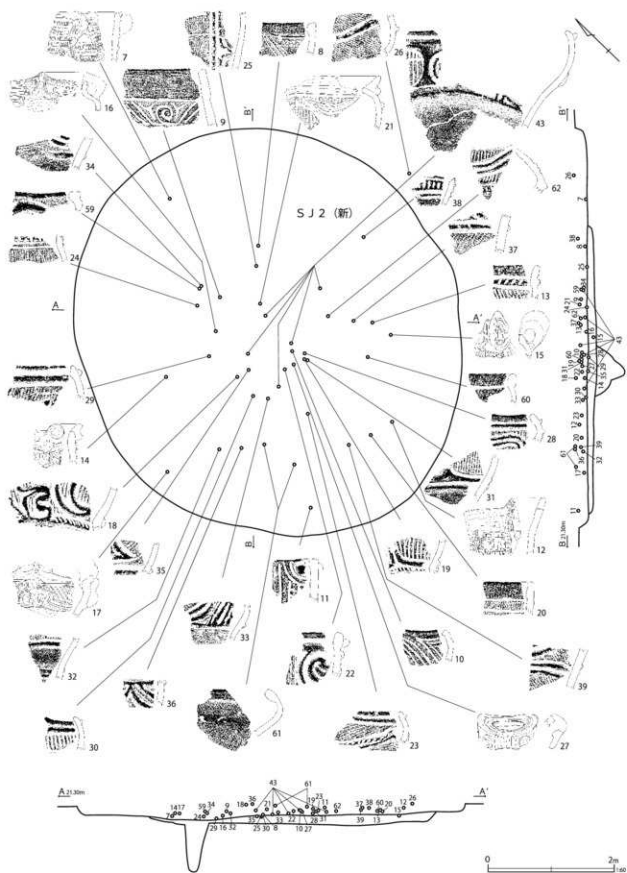
4は小型の深鉢である。底部を欠失するほか、口縁の一部も欠失するが、ごく緩やかな3単位の

波状口縁をなすものと考えられる。

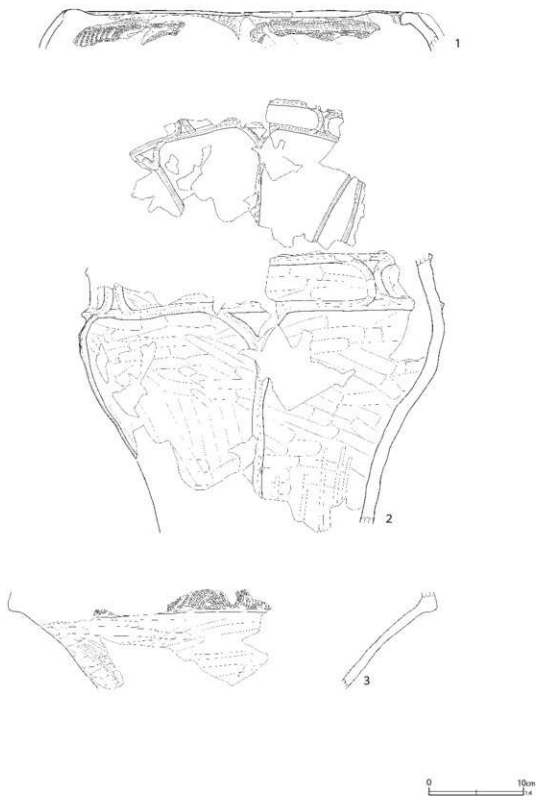
底部から胴上半部にかけて直線的に開き、頸部が「く」の字に外反して、ごく短い口縁部へと接続する。口縁直下に段を持って幅広の沈線が巡り、対抗する沈線末端がわらび手状に巻き上がって小突起を形成する。頸部は平行沈線で区画し、胴部には平行沈線による懸垂文間に上下二段の渦巻文を配して、下方はY字状の平行沈線によって収束



第28図 第2号新住居跡遺物出土状況(1)



第29图 第2号(新)住居迹遺物出土状況(2)



第30図 第2号(新)住居跡出土遺物(1)



第31图 第2号(新)住居跡出土遺物(2)



第32图 第2号(新)住居跡出土遺物(3)

する。北陸の馬高式の胴部文様に類似し、その影響下にある土器といえる。

復元最大径は約17.1cm、現存高は約20.3cmである。胎土は砂質で、白色粒子、黒雲母粒子が目立つ。外面暗灰橙色、内面黒褐色である。焼成はやや不良である。

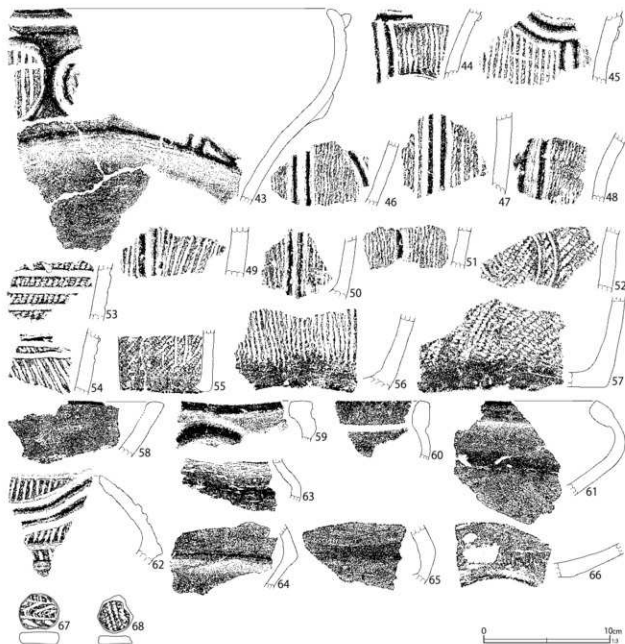
5はが体土器である。キャリバー類の深鉢土器で、口縁部から頸部にかけて残存する。

口縁部文様帯は横S字ないし片流れの渦卷文が展開し、渦卷の末端に剣先状のモチーフを配する。

頸部には無文帯を持ち、胴部との境を平行沈線で区画する。地文はR.L.単節の縄文である。

復元最大径は約39.7cm、現存高は約15.7cmである。胎土はややシルト質である。器面は暗灰褐色である。焼成は良い。

6は浅鉢で、口縁から胴上半部まで残存する。胴上半部は強く内湾して、頸部は「く」の字に屈曲して直立、口唇断面は肥厚して口端上を平坦に整形する。胴上半部に文様帯を持ち、扁平かつ幅広い隆帯による渦卷文や横S字文が展開する。



第33図 第2号(新)住居跡出土遺物(4)

復元最大径は約37cm、現存高は約8.8cmである。胎土は多量の砂・小礫・シャモットを含む。外面暗橙色で黒斑あり、内面灰橙色である。焼成は良好である。

7～43は破片資料である。7は円筒型深鉢の口縁部で、隆帯とキャタピラ文による楕円形の区画が重畳し、内部に角押し文を充填する。勝坂Ⅰ式であり、復元個体1～3に伴うものであろう。

8は勝坂Ⅱ式である。内湾する水平口縁で、刻み隆帯による三角形の区画文を描き、内部に三角押し文や小波状沈線文を描く。

8～19は勝坂Ⅲ式である。9は胴部中段に最大径を持つ樽形の深鉢で、口縁下に幅広い無文帯を持ち、胴部には三角形の区画文を描いて、内部に渦巻文と対向三叉文を描く。

10はキャリバー形の深鉢で、口縁下に刻み隆帯による波状の区画が巡り、内部に三叉文を配する。11・12は円筒形深鉢で、11は円錐形の貼り瘤を中心に沈線文が展開し、12は刻み突起による半円形の区画が胴部から口縁上にせり上がる。

13・14は口縁下に刻み隆帯が巡り、14は口縁上のボタン状突起を起点として2本隆帯の区画を描く。15・16は横位の貫通孔を持つ橋梁状の突起で、同種のデザインは加曾利Ⅰ式の中空突起へと引き継がれる。

17は口縁部の区画文の接点に小型の眼鏡状突起を配し、口縁上にも同形の突起を付するものとみられる。18・19は胴上半部の文様帯下端の区画で、斜め刻みの隆帯を使用する。18は1本隆帯による曲線的なモチーフを描き、19は長方形の区画内部に縦位の集合沈線を描く。20は円筒形の深鉢で、口縁下に無文帯を持ち、平行沈線の区画が巡って、L縦位回転の撚糸文を施文する。

21～26は中峠系の土器である。21はキャリバー形の深鉢で、口縁下に2本隆帯の弧状モチーフを描き、上方の区画との接点に3個1単位の交互刺突を配する。23は斜め刻みの隆帯による弧状モチ

ーフである。

22は円筒形の深鉢とみられ、口縁下に2本隆帯の渦巻文を描く。24は胴部中段の区画で、交互刺突の隆帯と平行沈線が巡る。25は2本の刻み隆帯による懸垂文で、中段が小さく剣先状に張り出している。

27～39は加曾利Ⅰ式で、キャリバー類深鉢である。口縁部に文様帯を持ち、2本隆帯により横S字文等の文様を描く。文様帯下端は1～2本の隆帯で水平に区画する。35は主文様の末端に付される剣先状のモチーフである。38は主文様と下位の区画との間を多条の隆帯で連結する。

33～34は頸部に無文帯を持つ。37・39・40は頸部無文帯を持たず、37は1本隆帯の区画から単沈線の蛇行懸垂文が垂下する。40の隆帯はほとんどが剥落している。

43は同じくキャリバー類の深鉢だが、より新しい特徴を示している。横S字文や十字文などの単位文は崩れ、地文部が楕円形の区画文へと変化しており、渦巻文自体も円文化して内部に地文の集合沈線を描く。

44～51は隆帯による懸垂文を描く胴部である。44は胴部に渦巻文を描き、上位の区画との間を2本隆帯で連結する。46は2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文を交互配置する。

52は半裁竹管状工具の2本沈線で渦巻文を描く。53・54は横位の平行沈線で、胴部中段の区画である。55～57は深鉢底部で、55のみ平行沈線の懸垂文を描く。

58～66は浅鉢である。58は無文の外反口縁である。59は口縁下に凹線が巡り、扁平な隆帯による曲線文を描く。60・61は無文の口縁部で、いずれも折り返し口縁で表裏に段を持つ。60の口縁は直立し、61は強く内屈する。

62は胴部中段が「く」の字に張り、胴上半部にキャリバー類深鉢に由来する文様帯を持つ。63～65は無文の胴部、66は底部である。

67・68は土製円盤である。67は前期諸磯式の土器片を利用している。

石器（第34図）

69～73は石鏃である。69～71は凹基、72以下は平基である。

69は柱穴P7から出土した。長さ1.7cm、幅1.75cm、厚さ0.5cm、重さ0.83gである。石材は黒曜石である。70は長さ1.7cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.35gである。石材は黒曜石である。

71は先端が偏るいびつなプロポジションで、再生品の可能性がある。長さ2.4cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.3gである。石材はチャートである。72は二等辺三角形の石鏃で、片脚を折損する。背面に主要剥離面、腹面に節理面を残す。長さ2.6cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、重さ1.36gである。石材はチャートである。

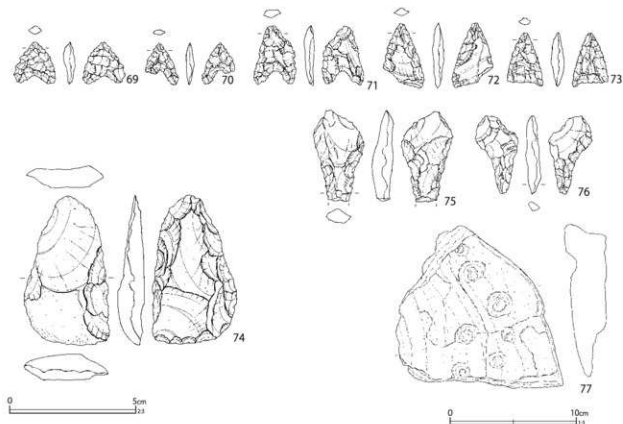
73は長さ2.2cm、幅1.45cm、厚さ0.5cm、重さ1.19gである。石材は黒色頁岩である。

74はスクレイパーと考えた。背面下方に広く自然面を残し、腹面からの剥離によって刃部を作り出す。また、両側縁も主に腹面側からの調整加工が施され、水滴形のプロポジションを形成している。長さ6cm、幅3.35cm、厚さ1.05cm、重さ19.17gである。石材は頁岩である。

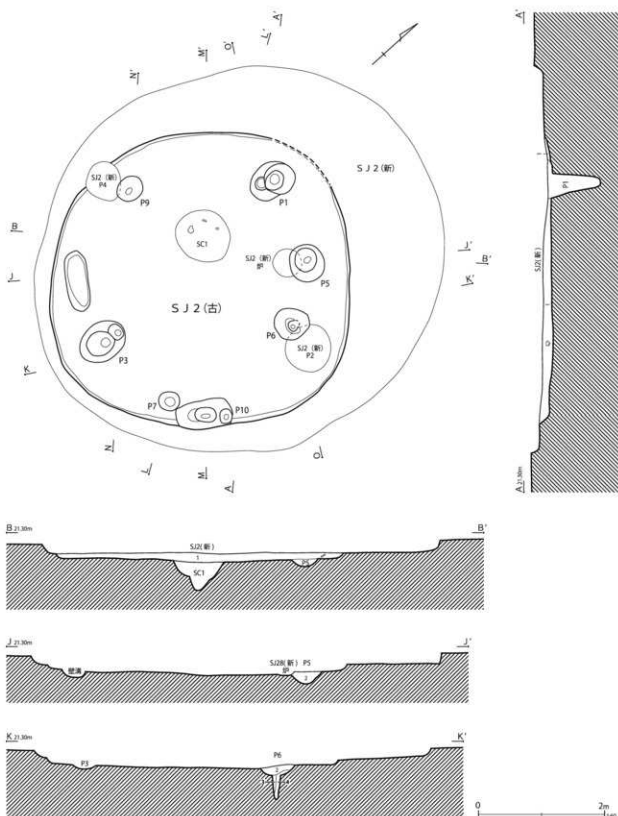
75・76は石鏃である。75は軸部を中途から折損する。つまみ部はいびつな平行四辺形で、側縁に自然面を残している。長さ3.6cm、幅2cm、厚さ0.85cm、重さ5.08gである。石材はチャートである。

76は完形品と思われ、やはり平行四辺形のつまみ部を持つ。長さ3.3cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、重さ2.36gである。石材はチャートである。

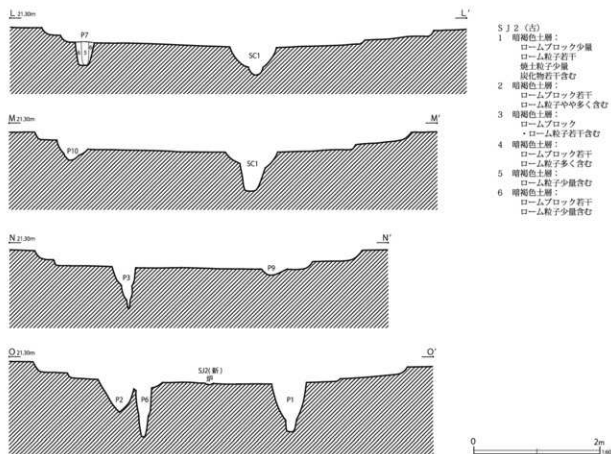
77は石皿である。柱穴P2から出土した。板状節理の自然石をごく荒く整形したもので、片面のみ使用する。また、凹石に転用しており表面に数か所の凹部がみられる。長さ12cm、幅13.2cm、



第34図 第2号（新）住居跡出土遺物（5）



第35图 第2号(古)住居跡(1)



第36図 第2号(古)住居跡(2)

厚さ3.2cm、重さ665.16gである。石材は絹雲母片岩である。

第2号(古)住居跡(第35～37図)

第2号集石土壌に壊されている。長径4.24m、短径4.18mの隅丸方形で、後述する炉跡や出入り口施設との関係から、建物としての主軸方向は短径側に存在するものと考えられる。壁高は最も深い部分で0.32mである。主軸方向はN-48°-Wを指す。床面は平坦で、中央部がやや低くなっている。壁溝は検出されなかった。

床面上から7本のピットが検出された。これらのうちP1・3・6・9が主柱穴と考えられる。

このほか、P1とP6のほぼ中間地点にごく浅いP5を検出した。

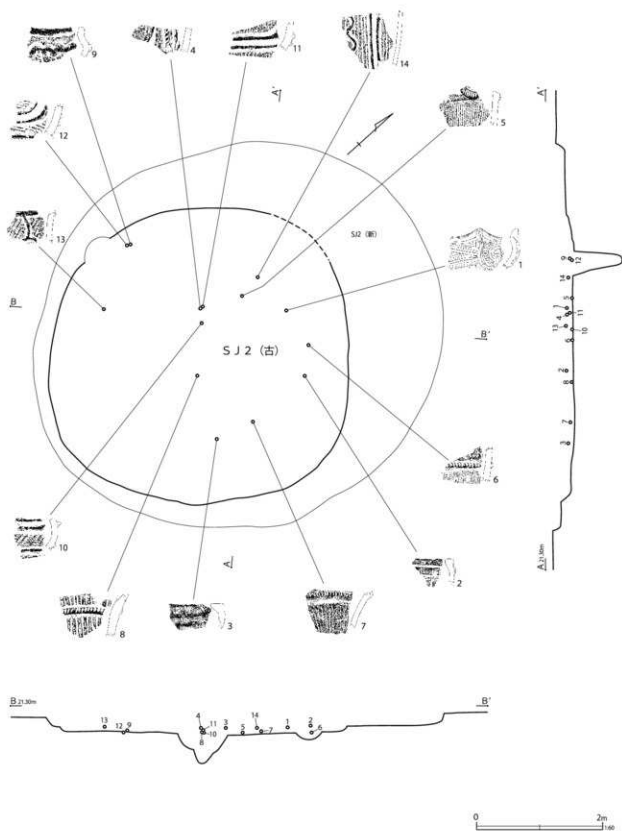
主軸線上北東側の壁近くにP7・10、およびこれらをつなぐ溝状の落ち込みが存在し、これが出入り口施設の痕跡と考えられる。

床面上から炉跡は検出できなかったが、主軸線上やや奥壁寄りに第1号集石遺構が位置しており、集石の礫の一部が本住居跡床面上に散布していたことから、本住居跡の炉跡をさらに掘り下げて集石土壌として再利用したものと考えられる。覆土は単層で、遺物量は多くない。

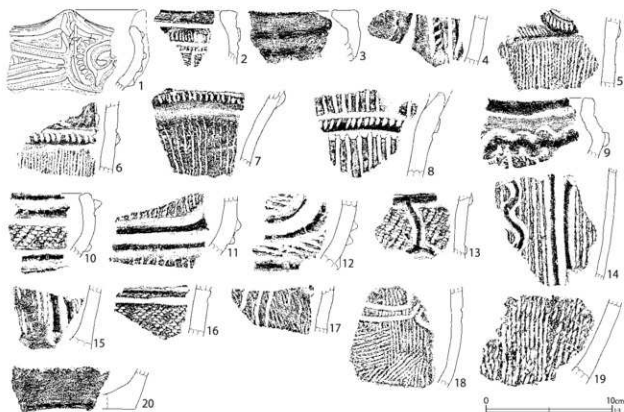
本住居跡は、上述のように廃絶後も集石炉とし

第2表 第2号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	72.0	89.8	P2	74.0	94.3	P3	74.0	76.7	P4	64.0	88.4
P6	56.0	89.8	P7	34.0	37.4	P8	58.0	54.9	P9	42.0	19.3
									P10	88.0	30.6



第 37 图 第 2 号 (古) 住居跡遺物出土状況



第38図 第2号(古)住居跡出土遺物

て一定期間使用されていたものとみられ、出土遺物の少なさもあって時期判定は困難である。加曽利EⅠ式期と考えたが、若干時期が古くなる可能性もある。

第2号(古)住居跡出土遺物

土器(第38図)

すべて破片資料である。

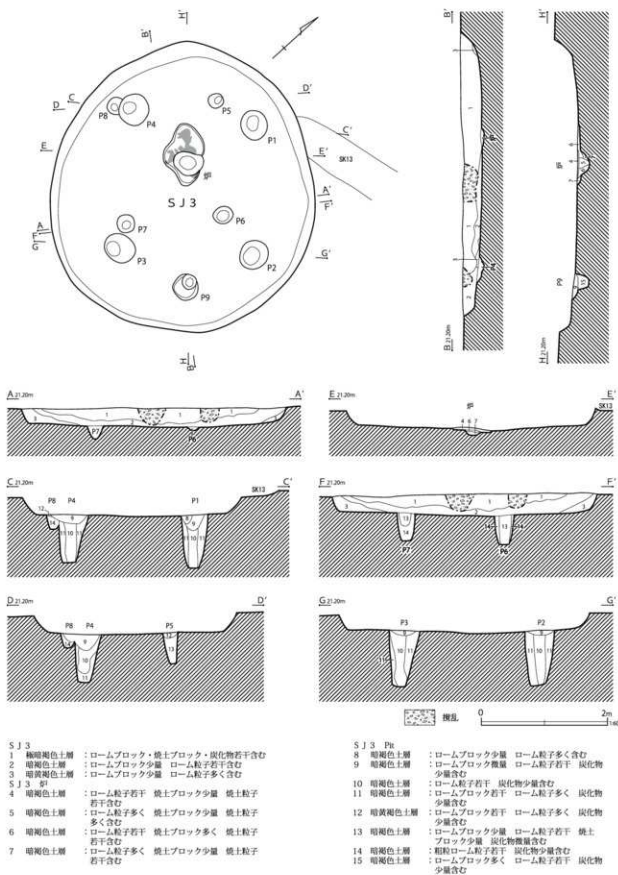
1～8は勝坂式である。1は小波状口縁の深鉢口縁部で、波頂部から矢羽根状の刻みを伴う隆帯が垂下し、口縁部文様へと連続している。2・3は円筒型深鉢の口縁部で、2は刻みを伴う隆帯が巡り、3は幅広の無文帯となって口端内屈してい

る。4は胴上半部で、刻みを伴う隆帯で器面を分割し、沈線による三叉文等を描く。5～8は文様帯下端を区画する横位の隆帯である。

9以下は加曽利EⅠ式である。9は小型の深鉢で、口縁直下に小波状の隆帯が巡る。

10～12はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。13～19はこれに伴う胴部である。13～15は隆帯による懸垂文で、13は大柄の渦巻文の一部とみられる。14は2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文を描く。

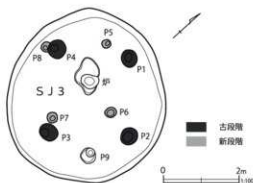
15～18は平行沈線文の胴部である。19は燃糸文のみ施文される。20は無文の底部である。



第 39 図 第 3 号住居跡

第3表 第3号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	短径(cm)	ピットNo.	長径(cm)	短径(cm)	ピットNo.	長径(cm)	短径(cm)	ピットNo.	長径(cm)	短径(cm)	ピットNo.	長径(cm)	短径(cm)
P1	46.0	84.9	P2	48.0	87.6	P3	50.0	90.0	P4	48.0	75.6	P5	24.0	49.7
P6	32.0	46.2	P7	30.0	41.0	P8	28.0	21.5	P9	42.0	26.3			



第40図 第3号住居跡柱穴変遷図

第3号住居跡 (第39～42図)

M・N-13グリッドに位置する。第1・13号土壌に壊されている。長径4.6m、短径4.2mで、平面形はやや下膨れの楕円形である。壁高は最も深い部分で0.26mである。主軸方向はN-48°-Wを指す。

床面は平坦で、中央部がやや下がっている。壁溝は検出されなかった。

床面上から9本のピットが検出された。これらのうちP1～4 (A) とP5～8 (B) が銘々4本柱の上屋を構成するものと考えられる。二組の上屋の新旧関係は、P4がP8を切っていることからB (古) → A (新) という関係が想定され、対角線方向への拡幅が行われたものと考えられる。

主軸線上北東側の壁近くにP9が存在し、これが新段階の住居跡の出入り口施設と考えられる。

また、主軸線上奥壁寄りに地床が位置している。不整楕円形で、上下二段の掘り込みを持っている。住居の拡幅にあたって位置を若干変更していることが考えられるが、断面観察のうえではその新旧関係は明確にできなかった。

覆土は壁際の三角堆積層を除けばほぼ上下2層からなり、遺物は主に上層から出土している。所属時期は加曽利E I式期と考えられる。

第3号住居跡出土遺物

土器 (第43～45図)

1は勝坂末の流れを引く深鉢口縁部である。キャリバー形の器形で、頸部に隆帯が巡って文様帯下端を区画し、隆帯+沈線による曲線的な文様を描く。

復元最大径は約20.7cm、現存高は約7.6cmである。胎土は砂質である。外面灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良好である。

2はキャリバー系深鉢で、口縁部から胴部中段にかけて残存する。口縁部文様帯は上下を1本隆帯で区画し、内部に横S字十字文を描く。

頸部無文帯を持たない。地文はRの捺糸文で、口縁部では横位、頸部以下では縦位回転で施文している。

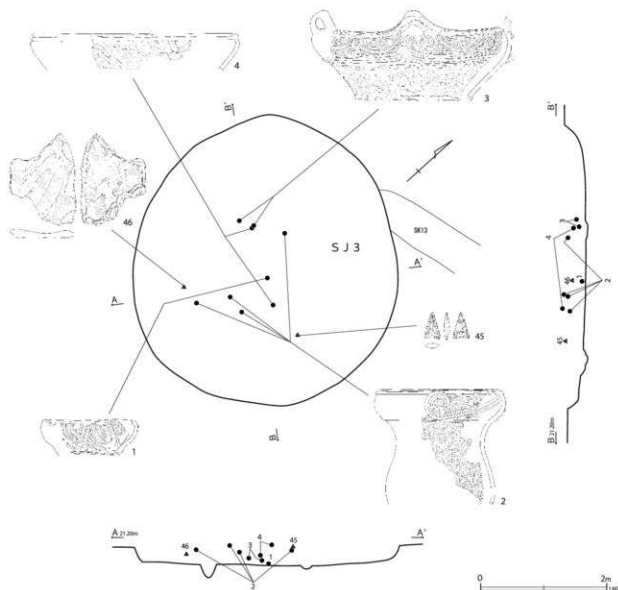
復元最大径は約27.6cm、現存高は約24.3cmである。胎土はシルト質である。外面灰褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良い。

3もキャリバー系深鉢で、口縁部から頸部にかけて残存する。緩やかな波状口縁で、波頂部には大型の中空突起を配する。

口縁部の渦巻文は弧状のモチーフとなり、中空突起の直下以外では小渦巻文へと変化しており、初現的な繋ぎ弧文の構成をとっている。頸部には無文帯を持つ。胴部との境は1本の隆帯で区画されている。地文はRの捺糸文で、口縁部においても縦位で施文している。

復元最大径は約42cm、現存高は約18.2cmである。胎土はシルト質である。器面は暗灰黄褐色である。焼成は比較的良好い。

4は浅鉢の口縁部であろう。直線的に開いて口縁内湾し、口唇は内屈して口端上に広い平坦部を持つ。胴上半部に短い隆帯による単位文を配するものとみられる。



第41図 第3号住居跡遺物出土状況(1)

復元最大径は約43.8cm、現存高は約7.6cmである。胎土は砂礫やや多く含み、海绵骨針を混入する。外面灰橙色、内面灰褐色である。焼成は良好である。

5～44は破片資料である。5～10は勝坂式である。5・6は円筒系深鉢口縁部で、5は無文地に沈線文のみ描かれる。6は折り返し口縁で、胴上半部には平行沈線に刻みを伴う階梯状の文様が並ぶ。

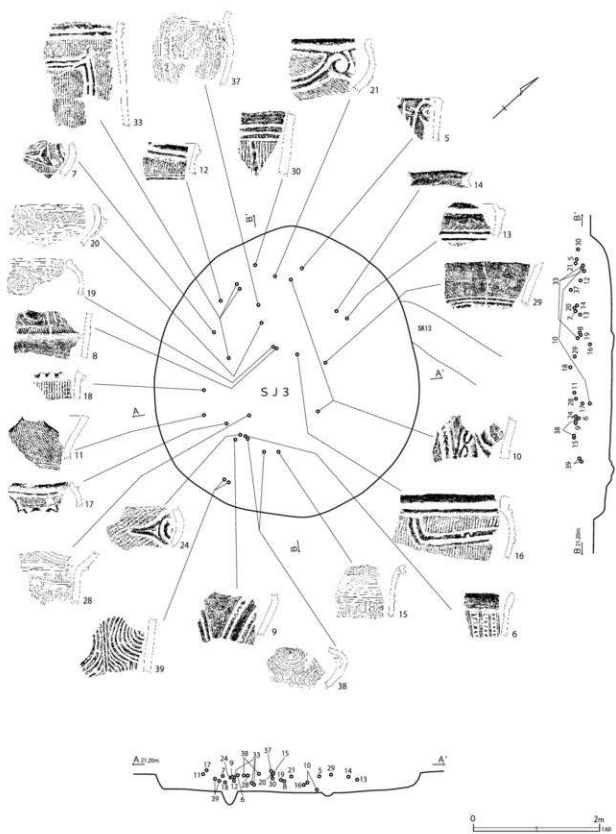
7は球胴状に張り出す胴上半部である。円形の区画の左右に三角形のモチーフを描き、これに沿

って細密な集合沈線を充填し、区画内部には三叉文を描く。

8は円筒系深鉢で、文様帯下端を刻みを伴う扁平な隆帯により区画する。胴下半部に地文縄文は施文しない。

9は無文地に平行沈線文による曲線的なモチーフを描く。沈線間には部分的に交互の刻みを施す。10は矢羽根状の刻みを伴う隆帯や、短沈線列を伴う隆帯に左右からなぞりを加えた連鎖状のモチーフを描く。

11～15は加曾利EⅠ式に並行する土器群であ



第 42 图 第 3 号住居跡遺物出土状況 (2)



第43図 第3号住居跡出土遺物（1）

る。11は山形波状口縁の深鉢で、口縁部文様帯を省略している。頸部に平行沈線の区画が巡り、全面にL R単節の縄文を施文する。

12・13・15は折り返し口縁の外面に太い沈線が巡るもので、省略された口縁部文様帯である。15では波頂部に付された小渦巻文を見ることができる。頸部には横位の区画線が巡るが、12では11と同様の平行沈線、13・15では2本隆帯の区画とな

っている。

また、15は頸部無文帯を持ち、胴部には隆帯による曲線的なモチーフを描いて、小渦巻文を配する。地文は13がL R単節の縄文、12・15はRの燃糸文である。

14は「く」の字に屈曲し外反する無文の口縁部で、胴上半部が大きく張り出す三原田式に類似の深鉢であろう。

16以下は加曾利E I 式で、16～23は口縁部である。

16はクランク文で、隆帯状に3個1単位の交互刻みを施す。17・18は棒状工具側面による押圧を伴う隆帯で文様を描く。19は横S字文が文様带上部の区画と接する場所に交互刻みを施す。

20・21は初現的な繋ぎ弧文で、口縁部文様が隆帯による弧線文となり、接点に小渦巻文を配する。20は頸部無文帯を持つが、21は文様帯下端の区画自体が存在しない。

24は口縁部文様帯で、横S字文の末端に剣先状のモチーフを配する。

25～31は頸部から胴上半部にかけての部分である。25～28は頸部無文帯を持たない一群で、口縁部から胴上半部にかけて幅広く文様が展開する。28は文様帯下端を1条の隆帯で区画し、さらにその下に平行沈線が巡る。

29～31は頸部無文帯を持つ一群である。胴部との境は29・30が平行沈線、31では2本隆帯で区画している。また、30・31は隆帯による懸垂文を描く。

32～37は胴部の破片である。32・33は隆帯による文様を描く。32は渦巻文の一部で、33はクランク状の文様の一部に剣先状モチーフを取り込んでいる。

34は1本隆帯の懸垂文が垂下する胴下半部である。35・36は半裁竹管文の土器で、35は渦巻文の一部、36は頸部の文様帯で、上下を多段の平行沈線で区画した中に波状文が巡っている。

37は棒状工具による平行沈線文である。頸部との境を平行沈線で区画し、平行沈線による懸垂文

が垂下する。中央に波状懸垂文がみられるが、沈線間の地文を磨り消している。

38は口縁部文様帯の一部で、円錐形の突起を配し、浮線+沈線による密な渦巻文を描く。39は沈線により類似の文様を描く胴下半部で、縦位の平行沈線に左右を区画した空間に密な渦巻文を描く。渦の下端は下へと開放して懸垂文化している。

40は深鉢口縁部で、直線的に開く頸部から「く」の字に外屈する口縁部に接続している。地文の燃糸文以外に文様を持たない。

41～43は地文のみの胴部および底部である。41・43は燃糸文、42は縄文を施文する。

44は無文の口縁部で、浅鉢と考えられる。口縁は内湾し、口唇断面肥厚して、内面に稜をなす。

石器 (第45図)

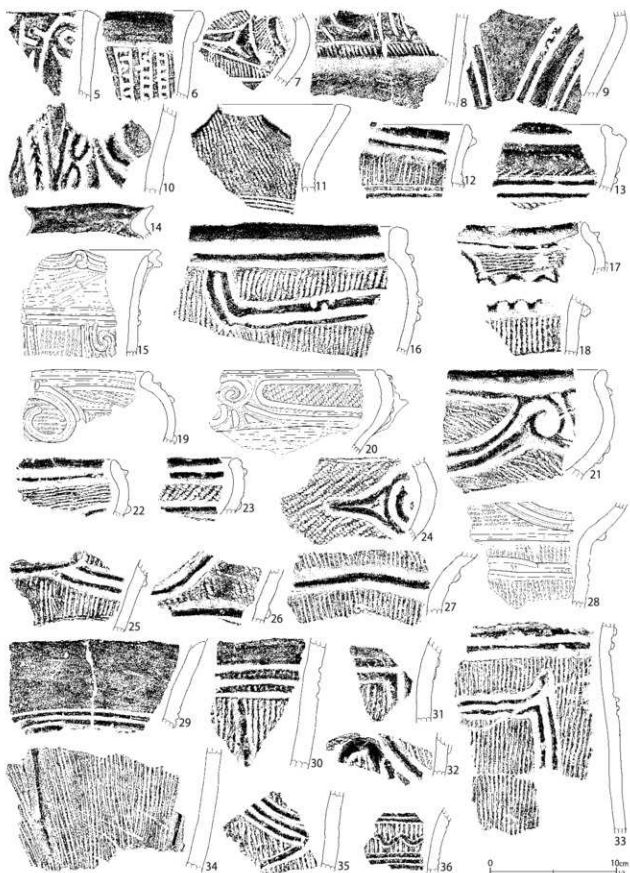
45は石鎌である。端正な二等辺三角形のプロローションで、基部はごく浅い凹基である。長さ2.12cm、幅1.25cm、厚さ0.45cm、重さ0.66gである。石材は安山岩である。

46は石皿である。板状節理の自然石を粗く加工して用いたものとみられ、右側縁部のみ原型をとどめている。

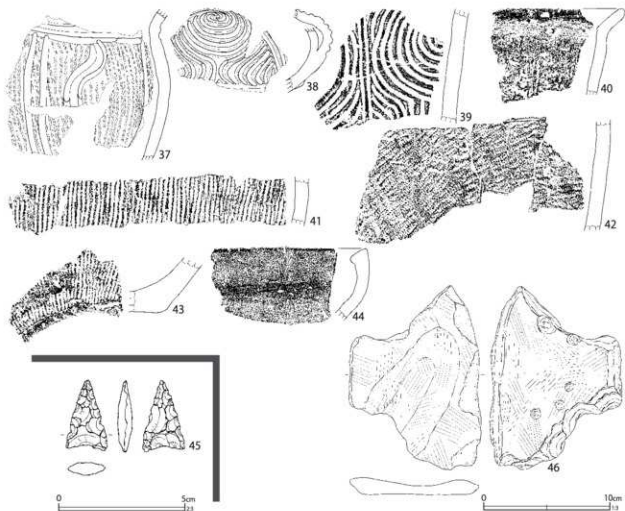
両面に擦痕が観察されるが、表面に凹部が形成され、さらに長軸に対し斜め方向に槌状の使用面が形成されている。裏面は凹石に転用されている。

また、実測図下方の破断面には表面側から数度の打撃が加えられており、石皿・凹石として使用した後もさらなる再利用が行われようとしたことが考えられる。

長さ14.4cm、幅15.4cm、厚さ1.4cm、重さ240.63gである。石材は緑泥片岩である。



第44图 第3号住居跡出土遺物(2)



第45図 第3号住居跡出土遺物(3)

第4号住居跡 (第46～50図)

K・L-15グリッドに位置する。第2号溝跡に壊されており、第78号住居跡を壊している。また、第345・375号土壌とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

長径5.22m、短径5.19mの円形である。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.66mである。主軸方向はN-78°-Eを指す。

床面は平坦である。壁溝は検出できなかった。床面上から10本のピットが検出された。これらのうちP1・2、P6・7、P8・10、P5・10が新旧の関係にあり、銘々に4本主柱を構成する

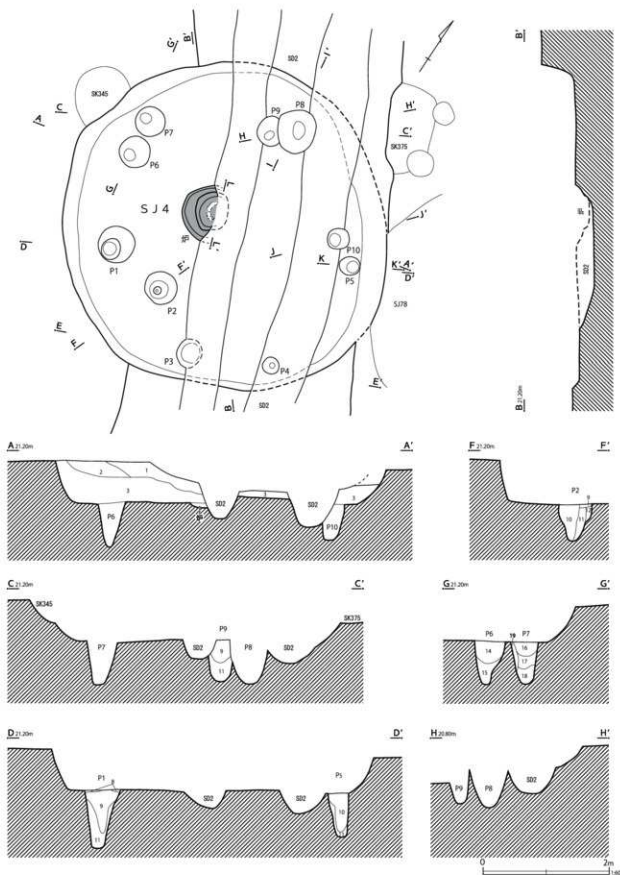
ものと考えられるが、覆土の状態などから新旧の柱穴配置を確定することはできなかった。

南東側の壁近くに主軸線を挟むようにしてP3・4が存在する。前述の柱穴群とこれらを含めて6本主柱を構成する可能性もあるが、あるいはこの2本のみが出入り口施設の痕跡とも考えられる。

床面中央で炉跡を検出した。東半分を第2号溝跡により破壊されているが、円形の埋燄炉であったと考えられる。深鉢の口縁から胴上半部にかけての部分が正位に埋設されていた。周囲には直径92cm・深さ23cmの埋設土器よりもふた回り以上

第4表 第4号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	60.0	89.5	P2	52.0	71.4	P3	(46.0)	35.5	P4	26.0	26.0
P6	50.0	70.5	P7	48.0	67.4	P8	70.0	67.0	P9	48.0	67.0
									P10	36.0	55.0



第 46 图 第 4 号住居跡 (1)

大きな掘りかたが存在した。

覆土は壁際の三角堆積土を除くとほぼ上下2層からなり、遺物は主にプラン中央部分の覆土上層から出土している。

が体土器から、所属時期は勝飯Ⅱ式期と考えられる。

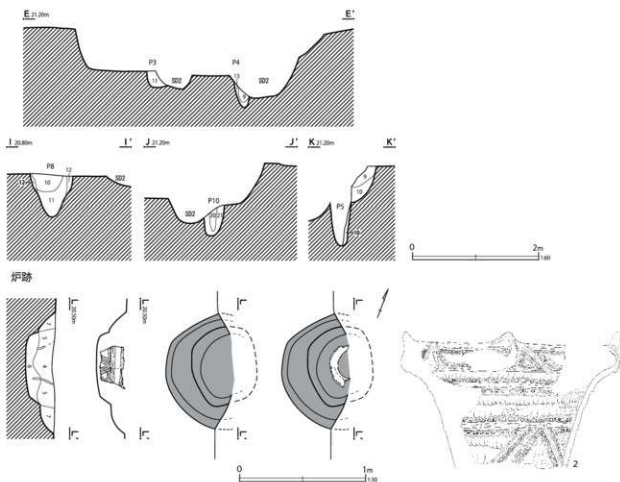
第4号住居跡出土遺物

土器 (第51～53図)

1は小型の深鉢で、口縁から胴上半部にかけて

残存する。口縁は無文で、頸部にくびれを持って強く張り出しつつ内湾し、大型の中空突起を配する。頸部には刻みを伴う隆帯が巡り、胴部には同様の隆帯により鋸歯状の区画を形成して、内部に沈線文を描く。

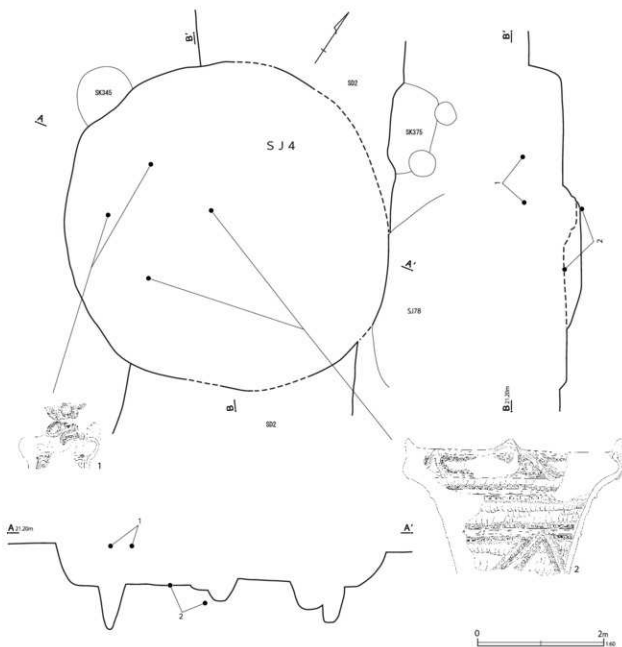
復元最大径は約17.2 cm (突起部分含む)、現存高は約10.2cmである。胎土はややシルト質である。外面にはぶい黄橙色、内面は黒褐色である。焼成は良好である。



炉跡

- | | | |
|----------|--|---|
| S J 4 | 1 暗褐色土層 : ローム粒子若干 焼土ブロック少量 炭化物若干含む | 11 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く含む 締まっている |
| 1 | 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く 炭化物少量含む | 12 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子少量含む 締まっている |
| 2 | 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物少量含む | 13 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量含む 締まっている |
| S J 4 91 | 3 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子若干含む | 14 暗褐色土層 : 焼土ブロックわずかに 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む 粘性に富む 締まり弱い |
| 4 | 暗褐色土層 : 焼土・焼土粒子若干含む | 15 暗褐色土層 : 焼土ブロック・焼土粒子多く含む 粘性に富む 締まり弱い |
| 5 | 暗褐色土層 : ロームブロックやや多く ローム粒子多く 焼土ブロック若干含む | 16 暗褐色土層 : 焼土ブロック少量 焼土粒子・炭化物多く含む 粘性弱い 締まり弱い |
| 6 | 暗褐色土層 : ロームブロックや多く ローム粒子多く 焼土ブロック若干含む | 17 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む 粘性・締まり弱い |
| 7 暗褐色土層 | 8 ロームブロック若干 焼土ブロック少量含む | 18 暗褐色土層 : 焼土粒子少量含む 粘性弱い 締まり弱い |
| 9 暗褐色土層 | 10 ロームブロック・ローム粒子少量含む 堅く割れやすい | 19 暗褐色土層 : 焼土粒子少量含む ローム粒子・焼土粒子多く 炭化物わずかに含む 粘性・締まり弱い |
| 10 暗褐色土層 | 11 ロームブロック若干 ローム粒子多く含む 堅く割れやすい | 20 暗褐色土層 : ローム粒子わずかに 焼土粒子少量含む |
| | | 21 暗褐色土層 : ローム粒子を主体とする 焼土粒子多く 暗褐色土粒子少量含む |

第47図 第4号住居跡(2)



第 48 図 第 4 号住居跡遺物出土状況 (1)

2 は炉体土器である。キャリバー形の器形で、水平口縁上に小突起を配する。

口縁部文様帯は隆帯で上下を区画し、内部を斜行する隆帯+沈線で区切って楕円や三角形の区画を構成する。区画の内部に沿ってキャタピラ文と小波状の沈線が巡る。胴部には隆帯+沈線による三角形区画文を描いて、これに沿ってキャタピラ文と小波状沈線文を描いている。

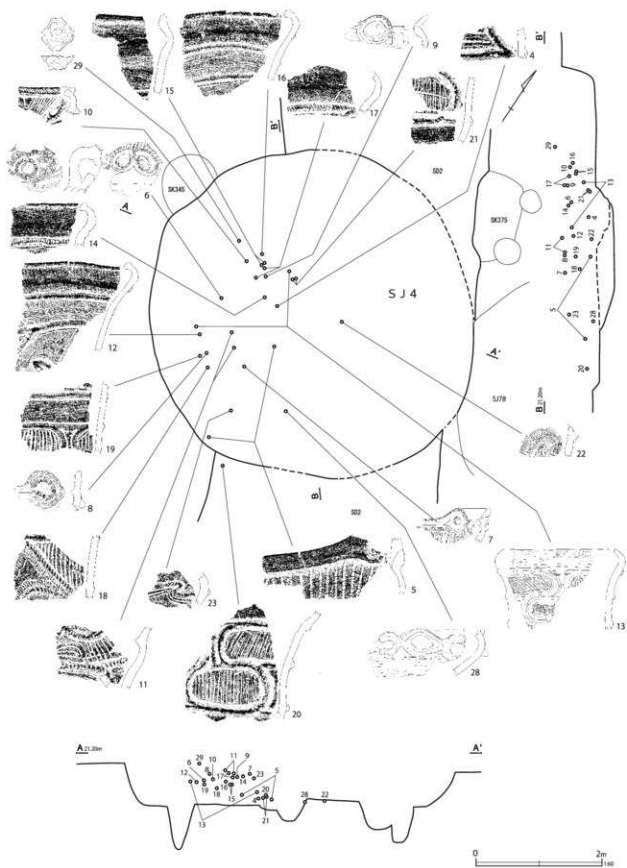
地文縄文を持たず、器面には篋状工具によるひ

だ状の圧痕を残している。

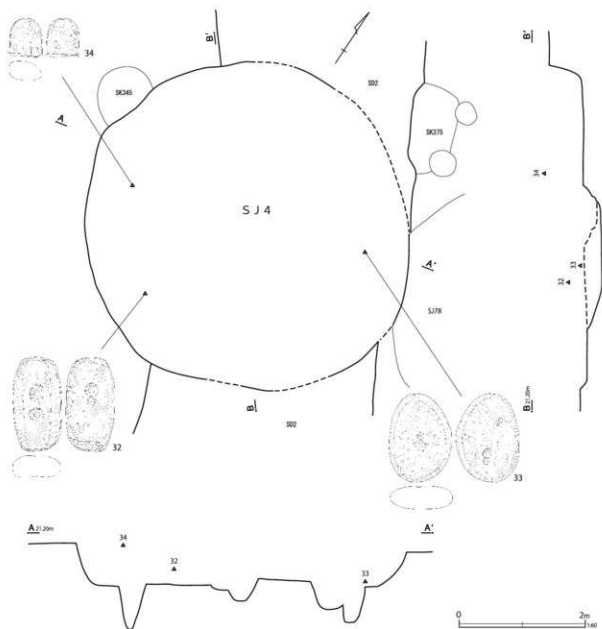
復元最大径は約46.6cm、現存高は約28.7cmである。胎土はやや砂質である。外面暗灰褐色、内面灰黄褐色である。焼成は比較的良い。

3～29は破片資料である。

3は阿玉台式の口縁部である。折り返し口縁で、口端外屈し、上面は平坦に整形される。断面三角形の隆帯が左右に斜行し、末端が接続してY字文を構成するものとみられる。櫛歯状工具による横



第 49 图 第 4 号住居跡遺物出土状況 (2)



第50図 第4号住居跡遺物出土状況(3)

位の波状文を施文する。胎土に金雲母の粒子を含む。

4・5は三角押し文を施文する土器である。4は隆帯の区画に沿って三角押し文を施文し、区画内部にも三角押し文と小波状沈線を交互に施文する。5は口縁部で、折り返し口縁の下に縦位の角押し文列が並ぶ。

6は表裏に貫通孔を持つ中空突起で、1のものに類似する。

7～9はひねりを加えた円盤状の突起で、いずれも周縁に刻みを伴う。7は突起中央に盲孔を持ち、口縁部に隆帯による区画を持って、内部に縦位の集合沈線を充填している。8は突起の外周に沿って沈線が巡り、内部にも刻みが巡る。9の突起は内湾する無文の口縁上に付されている。

10は緩やかな波状口縁で、口唇断面肥厚して内面に段を持つ。刻みを持つ隆帯によって三角形の区画が構成され、内部には鉈状の工具によるV字

状の集合沈線を充填している。

11は口縁直下の破片で、6に類似の突起へと接続するものとみられる。

12～17は内湾する無文の口縁を持つ深鉢である。12は頸部に刻みを伴う隆帯が巡って区画を構成し、これに沿ってキャタピラ文と小波状沈線が巡る。胴部には同様の手法を用いた平行四辺形の区画帯が巡る。16もこれにきわめて類似した土器で、同一個体の可能性がある。

13は胴部に多段の楕円形区画が巡る。区画の内側には縦位の集合沈線を充填し、あるいはキャタピラ文と小波状沈線を充填している。14・15・17は頸部の隆帯区画までが残存するが、17は13に類似の楕円形区画の一部が観察される。

18～21は、これらに伴う胴部破片である。18は鋸歯状の隆帯によって三角形の区画を構成する。区画内部には集合沈線ないしキャタピラ文+小波状沈線を充填している。

19～21は13に類似の多段の楕円形区画文である。区画内部には集合沈線を充填している。

22・23は勝坂Ⅲ式期の土器である。22は矢羽根状の刻みを伴う隆帯でわらび手状モチーフを描く。23は刻みを伴う隆帯による波頭文に沿って半裁竹

管による平行沈線が巡り、RL単節横位回転の縄文を施文する。

24は無文の口縁部である。緩やかな山形波状口縁で、口唇断面肥厚して内面に段を持つ。

25～27は縄文のみ施文する胴部および底部である。地文はいずれもRL単節の縄文で、27は縦位回転、25・26は右下がりの施文により条の流れを縦方向に揃えている。

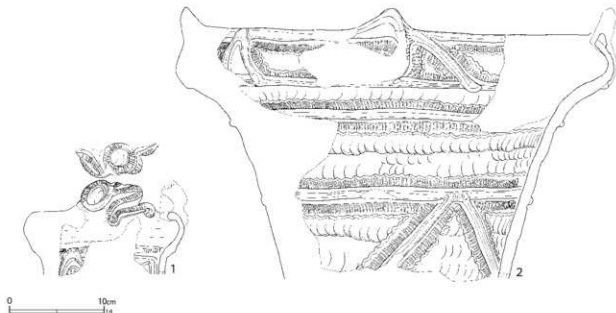
29は高台付きのミニチュア土器である。遺構検出面付近から出土したもので、後晩期の製品が混入した可能性もある。口縁は四方から押圧されて内側にめくれ上がり、上面視が十字形に変形する。高台部にも押圧が加えられて4～5か所の「足」が形成され、先端に繊細な刻みを施す。

30・31は土製円盤である。

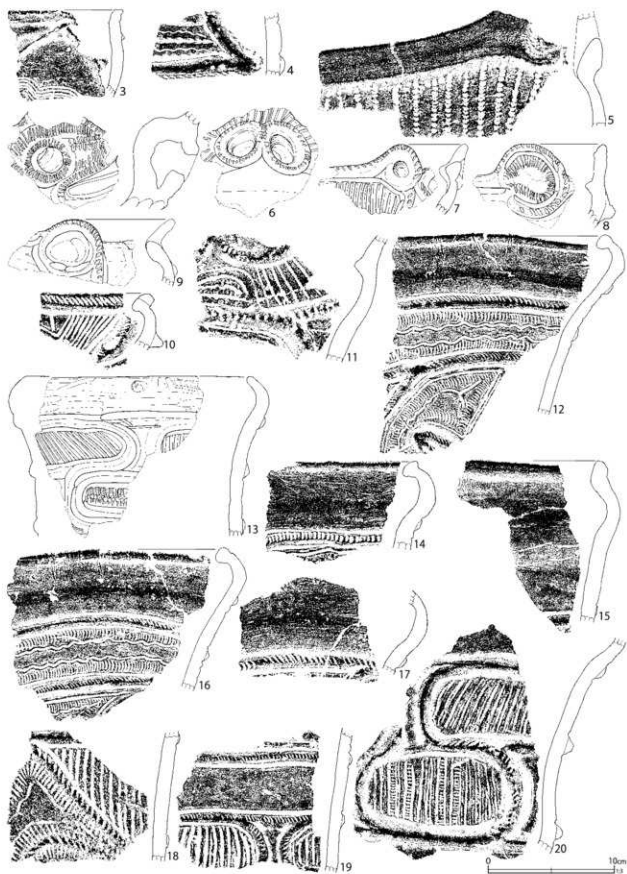
石器（第53図）

32～35は磨石である。

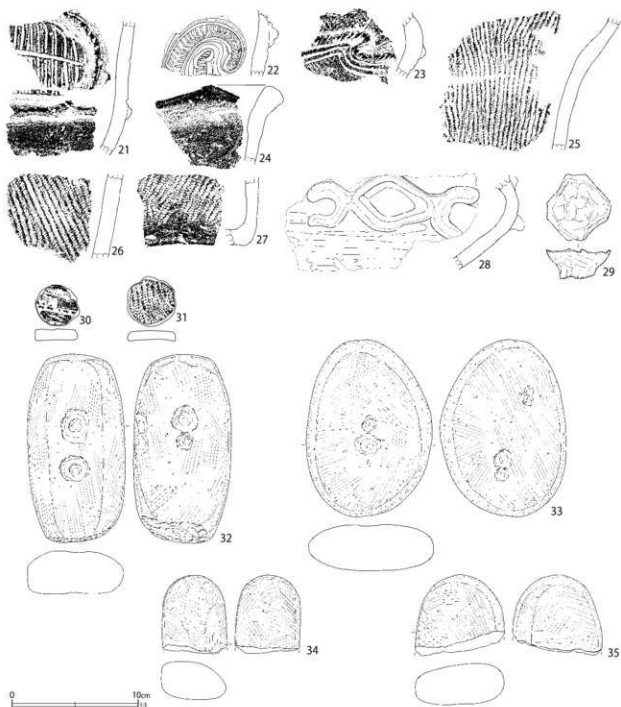
32は平面楕円形で、徹底した使用により断面八角形に面取りされている。凹石に転用されており、表裏に各2か所の凹孔がみられるほか、長軸側一端と側縁に叩打痕が観察される等、徹底した再利用がうかがわれる。長さ14.9cm、幅7.7cm、厚さ3.4cm、重さ674.62gである。石材は閃緑岩で



第51図 第4号住居跡出土遺物（1）



第 52 图 第 4 号住居跡出土遺物 (2)



第53図 第4号住居跡出土遺物(3)

ある。

33は不整楕円形の自然石の表裏が使用面となっている。凹石へと転用されており、表裏に複数の凹孔がみられる。長さ14cm、幅10cm、厚さ3.6cm、重さ825.98gである。石材は閃緑岩である。

34は棒状の磨石で4面使用される。長さ6.3cm、

幅5.1cm、厚さ3cm、重さ151.24gである。石材は閃緑岩である。

35は楕円形の磨石で、やはり折損しているが、表裏使用されている。長さ6.4cm、幅7cm、厚さ3.2cm、重さ214.28gである。石材は黒雲母花崗岩である。

第5号住居跡（第54～62図）

L・12・13グリッドに位置する。第3A・3B・3C・93号土壌に壊されており、第214・324号土壌とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

北西壁の一部が調査区域外に存在する。長さ6.75m、短径6.27mで、平面形は北西・南東に主軸を持つ隅丸六角形である。壁高は最も深い部分で0.25mである。主軸方向はN・46°・Wを指す。

床面は平坦で、南東方向に向かって緩やかに傾斜している。壁溝は壁のほぼ直下を全周する。

主軸線上やや奥壁寄りでは跡を検出した。埋甕炉で、深鉢土器の口縁から胴上半部にかけての部分で正位に埋設していた。

周囲に楕円形の掘りかたが存在した。長さ80cm、短径68cm、深さ23cmで、主軸方向は住居跡のそれとほぼ共通であった。

床面上から22本のピットが検出された。これらのピットの大半は、覆土の状態から3時期に分けることができた（第56図）。

各時期の主柱穴は、

古段階＝P8・12・19・20・23

中段階＝P1・3・4・6・13・16

新段階＝P2・3・5・7・14・15

P21・22の帰属は明確にできなかった。

これらの所見から、古段階では6本ないし8本柱、中・新段階には6本柱の上屋が存在したのと考えられる。主柱穴は住居の主軸をはさんで3本ないし4本を対置しており、また、古段階と中段階の間で大幅な床面積の拡大が行われていることがわかった。

主軸線上南東側の壁近くにP17が存在し、中・新段階における出入り口施設の痕跡と考えられる。このピットは壁溝と切り合い関係にあるが、新旧は判別し得なかった。

覆土は上下2層からなり、上層を中心に大量の遺物が出土している。所属時期は加曾利EⅠ時期

と考えられる。

第5号住居跡出土土物

土器（第63～67図）

1はキャリバー形の小型深鉢である。口縁から頸部まで残存する。隆帯により口縁直下に長方形の区画文を構成し、内部に縦位の集合沈線を充填する。頸部には2条の隆帯が巡る。

復元最大径は約19.8cm、現存高は約8.3cmである。胎土はシルト質である。器面は灰黄褐色で、焼成は良好である。

2もキャリバー形の小型深鉢で、口縁部から胴上半部にかけて残存する。口縁外面につまみ状の突起を付し、突起側面に盲孔を配する。突起の左右には楕円形の区画文を配し、内部には縦位の集合沈線を充填している。

胴部にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。復元最大径は約17.8cm、現存高は約4.8cmである。胎土は多量の砂礫を含む。器面は黄褐色～灰黄褐色である。焼成は比較的良好い。

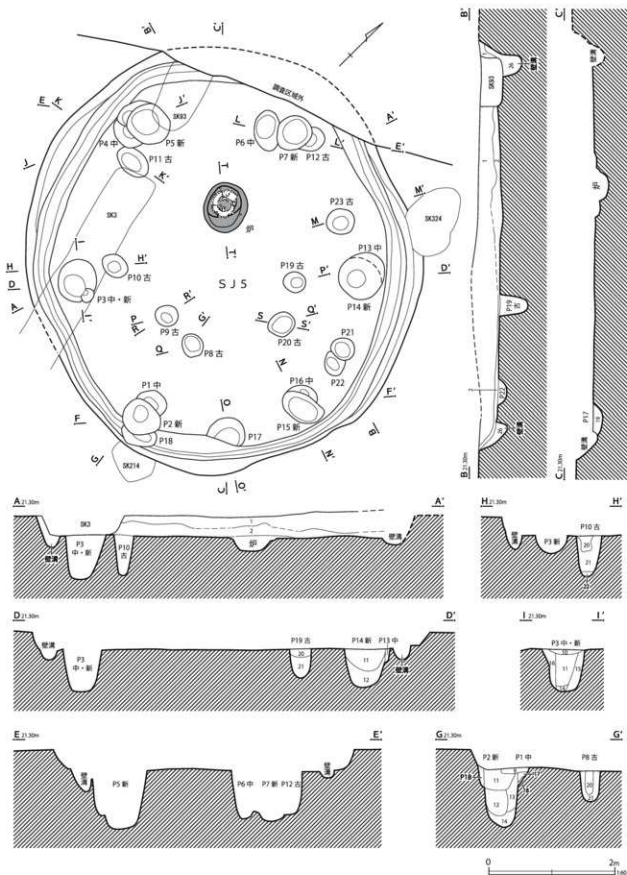
3は三原田式に類似の小型深鉢である。胴上半部がソロバン玉状に張り、頸部は「く」の字に屈曲して、口縁は外反する。

胴上半部に、上面に沈線を伴う隆帯が巡る。数か所に小突起を配するが、すべて剥落している。口縁部は無文である。地文はR L単節の縄文で、縦位回転で施文する。

復元最大径は約14.3cm、現存高は約7.6cmである。胎土は砂質である。外面黒褐色、内面暗褐色である。焼成は良好い。

4も小型の深鉢である。頸部にくびれを持ち、口縁は短く外反する。口縁外面に隆帯と輪文の沈線が巡って文様帯を構成し、一部が波頭状に巻き上がって小突起を形成する。頸部には平行沈線が巡って胴部との境を区画する。地文はRの撚糸文で、縦位回転で施文する。

復元最大径は約15.3cm、現存高は約5.8cmである。胎土はややシルト質である。器面は暗褐色



第54图 第5号住居跡(1)

F 21.30m

F'

炉跡

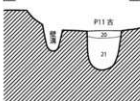
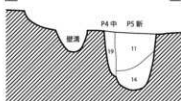


J 21.30m

J'

K 21.30m

K'



L 21.30m

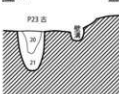
L'

M 21.30m

M'

N 21.30m

N'



O 21.30m

O'

P 21.30m

P'



Q 21.30m

Q'

R 21.30m

R'

S 21.30m

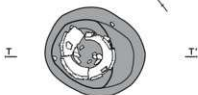
S'



0 2m 1:60



10



T 21.00m

T'



T 21.00m

T'

S J 5

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子若干 焼土粒子・炭化物少量含む
2 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く 焼土粒子・炭化物少量含む

S J 5 8'

- 3 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物若干含む
4 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く 焼土ブロック若干含む
5 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
6 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物若干含む
7 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
8 暗褐色土層 : ロームブロック多く 焼土ブロック若干含む 粘性を欠く 締まりよし

S J 5 P 10

- 9 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物少量含む 締まりよし 床土の一部
10 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む
11 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物若干含む 多量の遺物を含む

- 12 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干含む
13 暗褐色土層 : ローム粒子多く含む 締まっている
14 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 固く締まっている

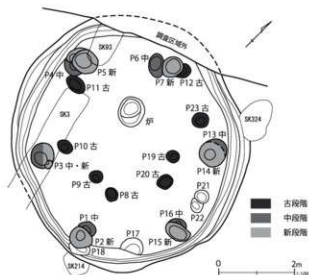
15 暗褐色土層

- 16 暗褐色土層 : ローム粒子若干含む やや締まりよい
17 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干含む
18 暗褐色土層 : ローム粒子若干含む 締まりよい
19 暗褐色土層 : ローム粒子若干含む 締まっている
20 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干含む
21 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む
22 暗褐色土層 : ロームブロック多く含む 固く締まっている
23 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 締まりなし
24 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量 炭化物微量含む 壁溝覆土
25 暗褐色土層 : ローム粒子若干 炭化物少量含む
26 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む

第55図 第5号住居跡(2)

第5表 第5号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	46.0	32.0	P2	62.0	92.5	P3	68.0	68.2	P4	56.0	73.8	P5	84.0	93.1
P6	66.0	74.7	P7	60.0	81.6	P8	38.0	48.4	P9	36.0	53.0	P10	44.0	64.7
P11	56.0	60.6	P12	42.0	33.0	P13	?	?	P14	70.0	61.2	P15	68.0	67.2
P16	46.0	56.5	P17	58.0	13.5	P18	54.0	48.0	P19	34.0	44.6	P20	44.0	34.6
P21	38.0	15.1	P22	40.0	18.0	P23	44.0	62.1						



第56図 第5号住居跡柱穴変遷図

頸部に無文帯を持ち、胴部との境を多段の平行沈線によって区画する。胴部には平行沈線による渦巻文を描く。地文はRの撚糸文で、縦位回転で施文する。

復元最大径は約16cm、現存高は約11.9cmである。胎土は多量の砂・シルトを含む。外面暗褐色、内面暗褐色である。焼成は良い。

7はキャリバー形深鉢の口縁部である。口縁が強く内屈し、浮線+沈線によって文様を描く。波状の区画を挟んで密な渦巻文が交互配置され、一部が円錐形の突起となる。空隙には弧状の短沈線を充填している。

復元最大径は約23.6cm、現存高は約4.5cmである。胎土は若干の砂を含む。器面は暗灰黄褐色である。焼成は良い。

8は6に類似する大波状口縁の深鉢である。口縁から胴上半部にかけて残存する。頸部にくびれを持ち、口縁が強く外反して、口端が「く」の字に内屈し、この部分が文様帯となる。

波頂部に渦巻文を描き、縦位の結節沈線文を密に施文する。口端には1条の沈線が巡り、渦巻文との接点ではわらび手状に巻いている。頸部以下にはRLR複縦位回転の縄文を施文する。

復元最大径は約24cm、現存高は約10.5cmである。胎土はやや砂質である。器面は灰褐色である。焼成は良い。

9～17は加曾利EⅠ式のキャリバー系深鉢である。

9は口縁部から頸部にかけて残存する。末端に剣先状のモチーフを伴う横S字文を描き、刺突列を伴う隆帯で横位に連繫される。

頸部には無文帯を持ち、胴部との境は平行沈線

である。焼成は良い。

5は円筒形の小型深鉢である。口縁から胴下半部まで残存する。

胴部は内湾しつつ緩やかに開き、頸部付近でわずかに外屈する。口縁は折り返し口縁で、外面に棒状工具側縁による圧痕が巡る。地文はRの撚糸文で、縦位回転で施文する。

復元最大径は約10.7cm、現存高は約13.5cmである。胎土はシルト質である。外面暗灰褐色、内面黒褐色である。焼成は良い。

6は波状口縁の深鉢である。口縁から胴中段まで残存する。

頸部にくびれを持って口縁外反し、口唇が肥厚して口端部が平坦となり、ここに太い沈線を巡らせて文様帯を構成する。波状口縁の波頂部では沈線の末端がわらび手状に巻き、小突起を形成する。波底部では沈線が途切れ、表裏から交互一對の単沈線が刻まれる。

により区画する。地文はRの柵糸文である。

復元最大径は約19.2cm、現存高は約14.5cmである。胎土はシルト質である。器面は黄褐色である。焼成は不良である。

10は片土器である。水平口縁で、4単位の小突起を配する。口縁部には間延びした横S字文を描くが、その一部には剣先状のモチーフを取り込んでいる。

文様帯下端は1条の隆帯で区画するが、この隆帯上には随所に3個1単位の交互刺突を施しており、同様の交互刺突は主文様である横S字文にもみることができる。

頸部無文帯を持たず、半裁竹管状工具の平行沈線文による区画が二段に巡る。地文はRの柵糸文で、口縁部では横位、頸部以下では縦位回転で施文する。

復元最大径は約24.8cm、現存高は約6cmである。胎土はややシルト質である。器面は黄褐色で、黒斑がみられる。焼成はやや不良である。

11は水平口縁の深鉢で、口縁から胴部中段にかけて残存する。胴下半部に膨れを持たず、頸部のくびれまでは比較的直線的に開く。

口縁部の文様は隣り合う横S字文を十字文で連結する。文様帯下端は1条の隆帯で区画され、頸部無文帯を持たない。地文はRの柵糸文である。

復元最大径は約26.6cm、現存高は約12.1cmである。胎土は砂質である。器面は黄褐色で、黒斑がみられる。焼成は良い。

12は水平口縁の深鉢で、口縁部のみ残存する。片流れの横S字文が連続し、一部が上向きの剣先モチーフに変化して、ここから2条の隆帯が垂下する。文様帯下端の区画線はみられないが、頸部には無文帯が存在する。地文はRの柵糸文で、横位回転で施文する。

復元最大径は約20.3cm、現存高は約25.8cmである。胎土はシルト質である。器面は暗褐色である。焼成は良い。

13は水平口縁の深鉢で、口縁から頸部まで残存する。横S字文の末端が斜めに長く伸び、文様帯上下を区画する隆帯との間を3条の隆帯で連結している。頸部に無文帯を持つ。地文はLの柵糸文で、横位回転で施文する。

復元最大径は約38.2cm、現存高は約19.5cmである。胎土は砂質である。外面は暗褐色で黒斑がみられ、内面は黒褐色～茶褐色である。焼成は比較的良い。

14は3単位の山形波状口縁の深鉢で、口縁から底部まで残存する。途中に数か所のループをもつ2本隆帯によって横S字文を描いており、文様帯の下端は1条の隆帯で区画されている。頸部無文帯を持たない。

地文はRの柵糸文で、口縁部では横位、頸部では右下がりに、胴部では縦位回転で施文する。

復元最大径は約18.3cm、現存高は約7.8cmである。胎土はシルト質である。外面灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良い。

15は水平口縁の深鉢で、口縁から頸部まで残存する。2本隆帯の弧状モチーフの接点に小渦巻文を配するもので、初現的な繋ぎ弧文である。文様帯下端は1条の隆帯で区画され、頸部無文帯を持つ。地文はR横位回転の柵糸文である。

復元最大径は約29.2cm、現存高は約9.6cmである。胎土はやや砂質で雲母粒子と片岩の小礫を含む。外面暗茶褐色、内面暗褐色である。焼成は良好である。

16は水平口縁の深鉢で、口縁のみ残存する。15に類似の繋ぎ弧文を描く。地文はRL単節の縄文で、右下がりに施文することで条の方向を縦に揃えている。

復元最大径は約28.6cm、現存高は約6.1cmである。胎土はやや砂質である。外面は暗褐色で内面は黒褐色。焼成は良好である。

17は頸部から胴部中段までが残存する。器形は11に類似するものとみられ、胴部は外傾しつつ直

線的に開いている。口縁部文様帯を構成する弧状の隆帯がみられるが、この隆帯の側縁には10等々にみられた3個1単位の刺突を施す。

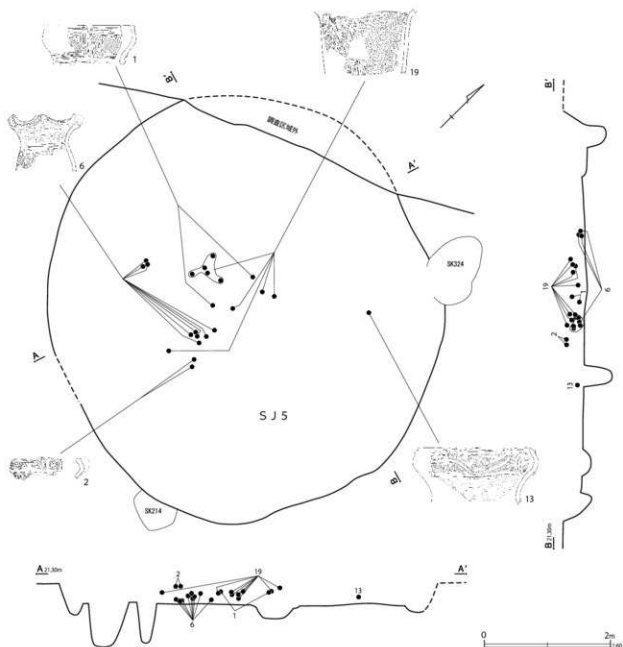
文様帯下端は1条の隆帯で区画され、頸部無文帯は持たない。地文はL縦位回転の燃糸文である。

復元最大径は約37.8cm、現存高は約27.3cmである。胎土はやや砂質で、石英等の小礫が混入する。外面暗橙色、内面黄橙色である。焼成は良い。

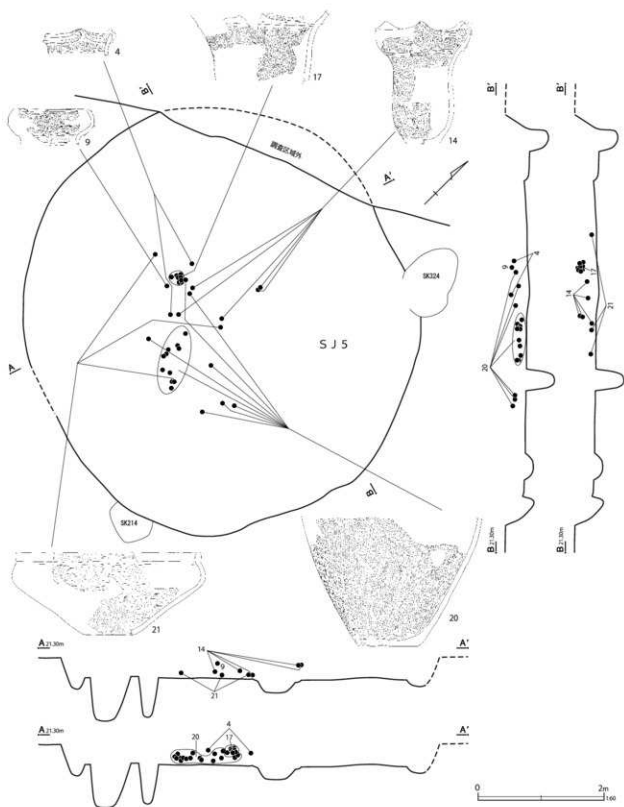
18~20はこれらに伴う深鉢胴部である。

18は胴部中段から底部まで残存する。地文はRの燃糸文である。復元最大径は約15.9cm、現存高は約15.1cmである。胎土に多量の砂礫を含む。外面暗灰黄褐色、内面黒褐色である。焼成はやや不良である。

19は頸部から胴部中段まで残存する。直線的に開く胴部から「く」の字に外屈する頸部に接続しており、頸部無文帯は持たない。地文はRの燃糸文である。復元最大径は約21.6cm、現存高は約



第57図 第5号住居跡遺物出土状況(1)



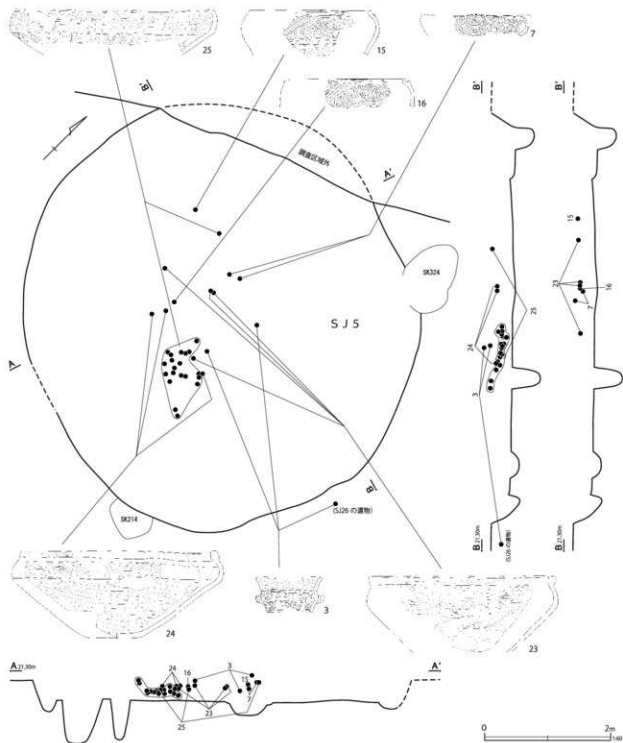
第58图 第5号住居跡遺物出土状況(2)

13.8cmである。胎土に多量の砂礫・シルトを含む。器面は黒褐色で、焼成はやや不良である。

20は胴部中段から底部まで残存する。地文はRの燃系文である。復元最大径は約40.7cm、現存高は約17.4cmである。胎土は多量の砂礫・シャ

モットを含む。外面は暗橙色で黒斑がみられ、内面は灰褐色である。焼成は良い。

21～27は浅鉢である。いずれも無文で、26以外は内湾する胴上半部と「く」の字に屈曲して直立する口縁部という器形も共通している。



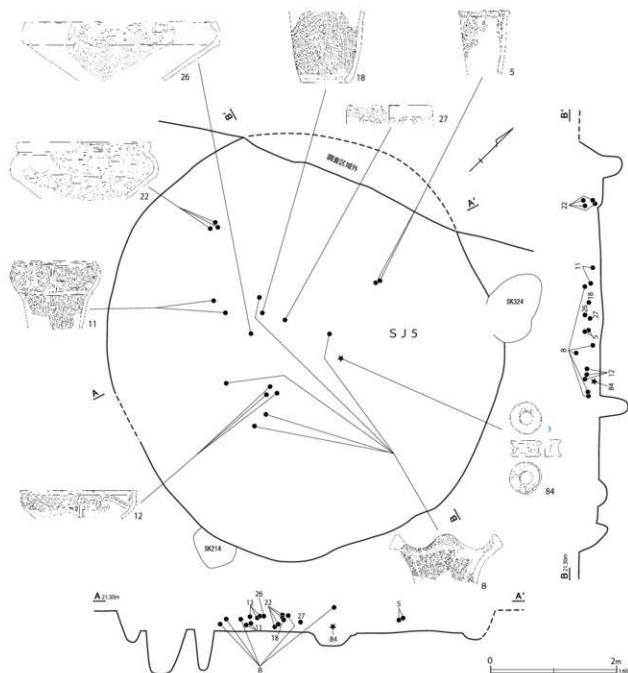
第59図 第5号住居跡遺物出土状況（3）

21は口縁から底部まで残存する。復元最大径は約31.1cm、現存高は約12.2cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。外面黄褐色で黒斑がみられ、内面灰黄褐色である。焼成は比較的良好。

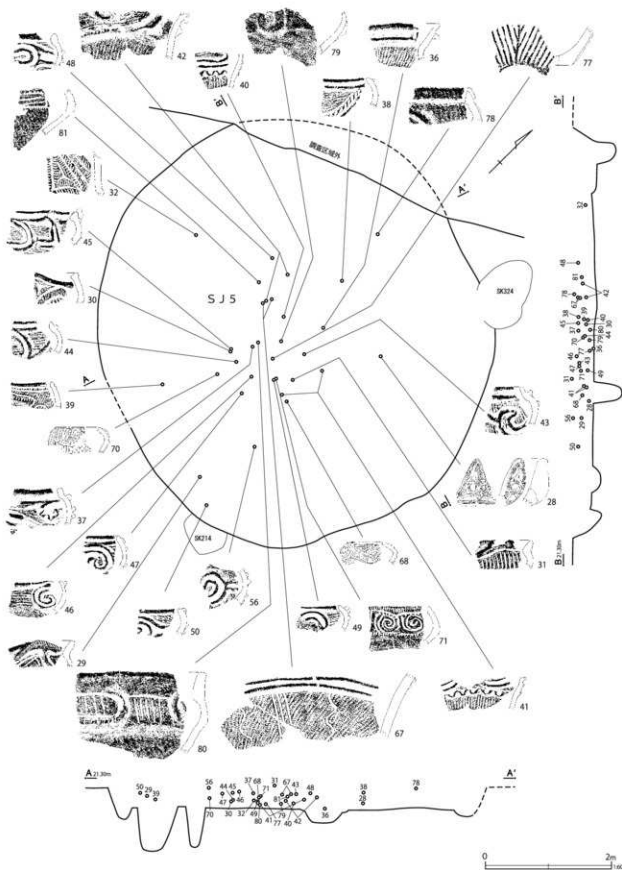
22は口縁から胴下半部まで残存する。復元最大径は約40.2cm、現存高は約15.9cmである。胎土は砂とシルトを含み、黒雲母粒子が混じる。器面は灰黄褐色で、黒斑がみられる。焼成は良好。

23は口縁から胴下半部まで残存する。復元最大径は約44.5cm、現存高は約18.4cmである。胎土は多量の砂を含む。外面は灰橙色、内面は暗橙色である。焼成は良好。

24は口縁から底部まで残存する。復元最大径は約43.7cm、現存高は約9.8cmである。胎土は少量の砂、小礫を含む。器面は暗橙色である。焼成は良好。



第60図 第5号住居跡遺物出土状況(4)



第 61 图 第 5 号住居跡遺物出土状況 (5)

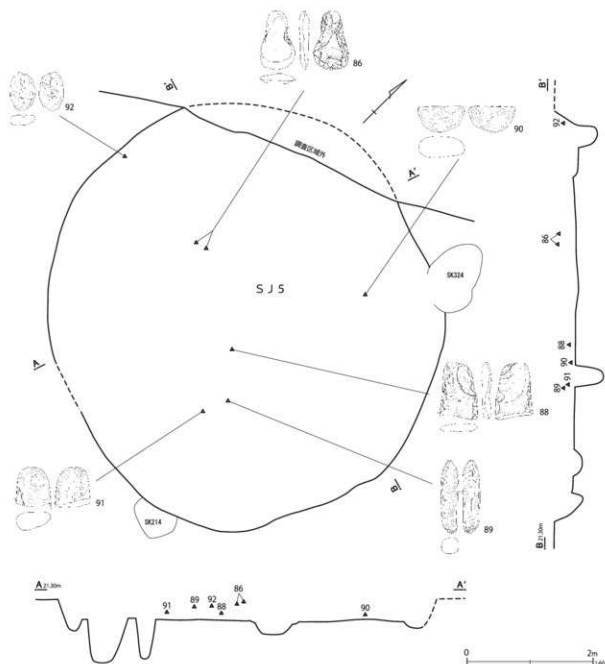
25は頸部から胴下半部まで残存する。復元最大径は約41.6cm、現存高は約12.5cmである。胎土はシルト質である。外面暗灰褐色、内面黒灰褐色である。焼成は比較的良い。

26は口縁から胴下半部まで残存する。胴部中段に稜を持ち、ここから口縁にかけて内湾しつつ立ち上がる。口唇断面肥厚して内面に段を持つ。復元最大径は約18.2cm、現存高は約3.8cmである。

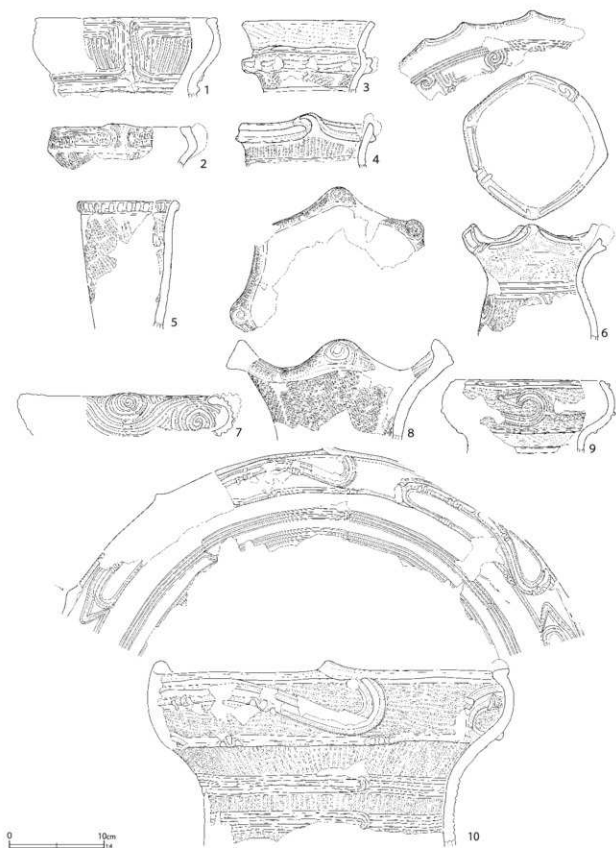
胎土はシルト質で、雲母粒子を含む。器面は灰黄褐色で黒斑がみられる。焼成は良い。

94は器台である。下端を欠く。上面平坦で、側面に貫通孔を持つ。復元最大径は約29.3cm、現存高は約15.8cmである。胎土は砂質で、チャート等の垂角礫が混じる。器面は暗褐色である。焼成はやや不良である。

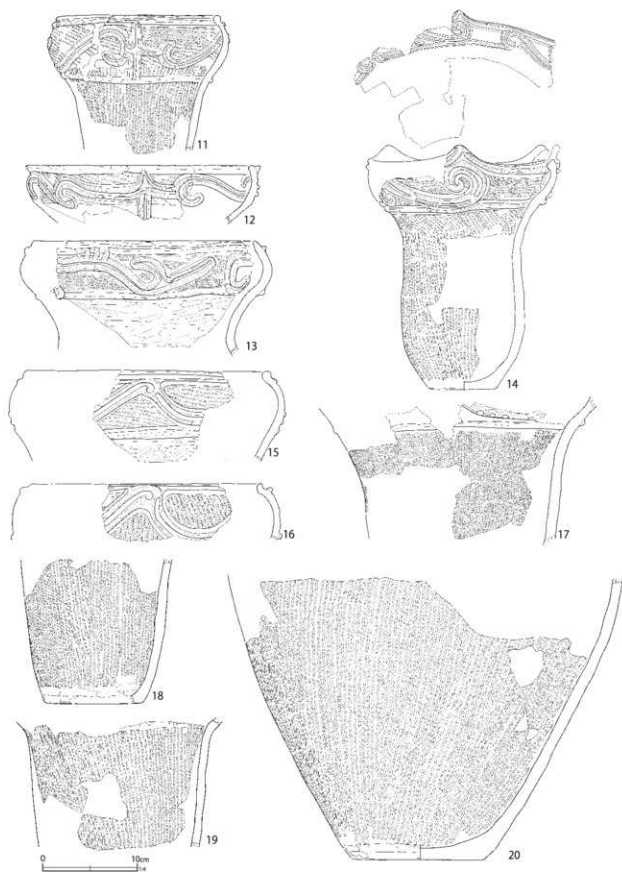
28～81は破片資料である。28～32は勝坂式であ



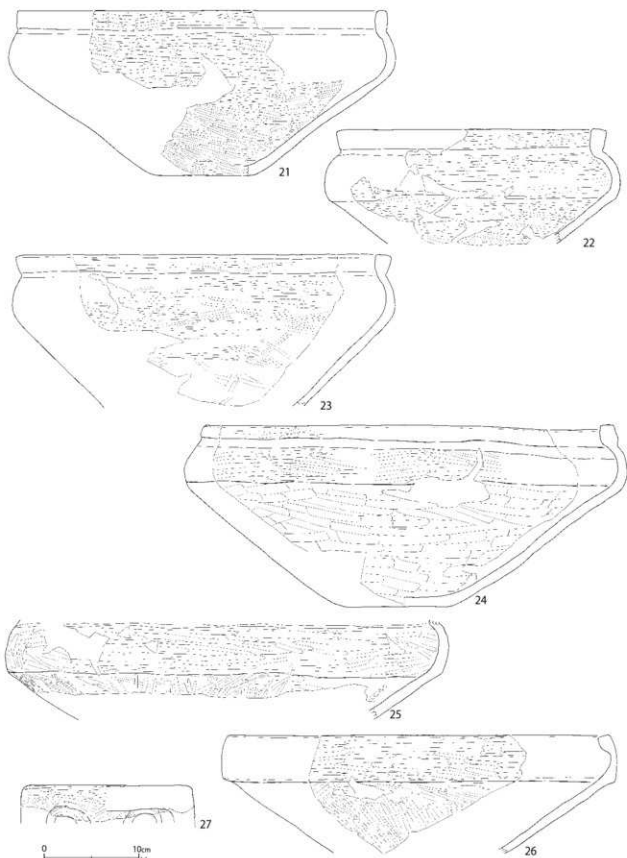
第62図 第5号住居跡遺物出土状況(6)



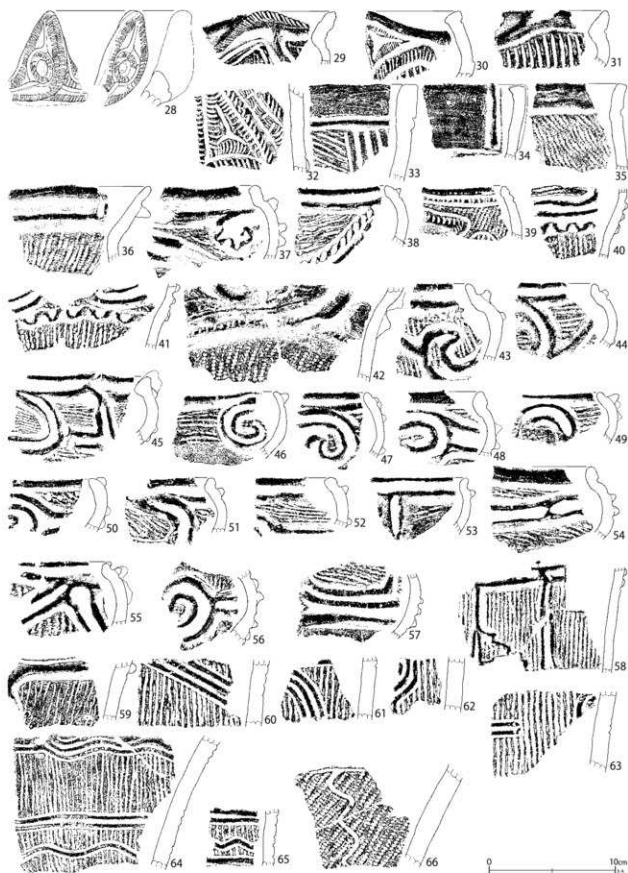
第63图 第5号住居跡出土遺物(1)



第 64 图 第 5 号住居跡出土遺物 (2)



第 65 图 第 5 号住居跡出土遺物 (3)



第66图 第5号住居跡出土遺物(4)

る。

37～67は加曾利E I式である。37～57は口縁部文様帯で、横S字文や十字文を描く。37・40・41等は隆帯に沿って交互の刺突が施される。55は初現的な繋ぎ弧文である。

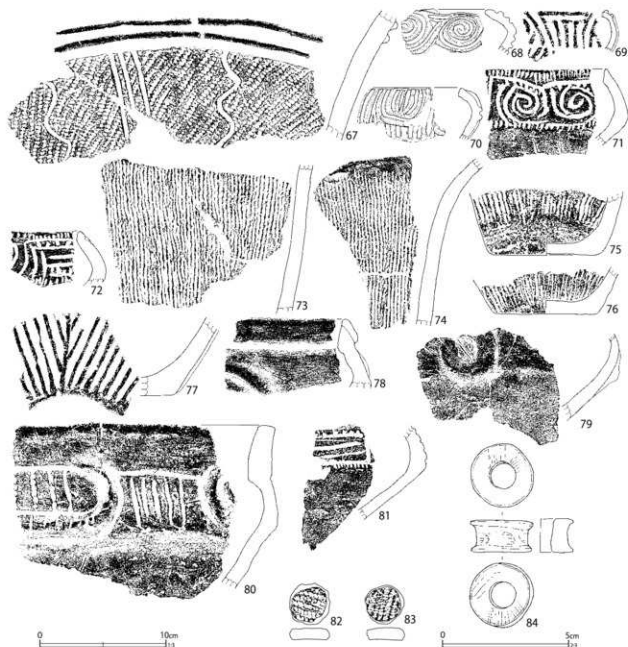
58～67は胴部で、58・59は隆帯、60～65は半裁竹管状工具の平行沈線、66・67は棒状工具の単沈線で文様を描く。68～72は浮線+沈線または沈線のみで密な渦巻文を描く口縁部である。

77は縦位の隆帯で器面を蛇腹状に装飾する土器で、本例は隆帯が矢羽根状の構成をなす。78～81は浅鉢で、胴上半部に文様帯を持つ。

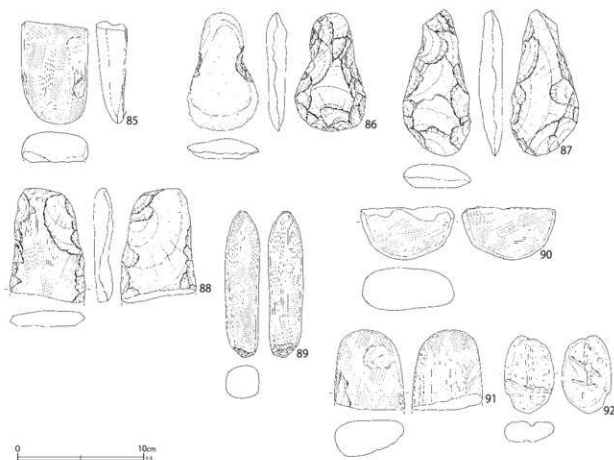
82・83は土製円盤である。84は滑車型の耳飾りで、貫通孔から周縁にかけて放射状の擦痕が観察される。

石器（第68図）

85は磨製石斧である。基部を欠失し、腹面が剥離する。長さ8.1cm、幅5.2cm、厚さ2.4cm、重



第67図 第5号住居跡出土遺物（5）



第 68 図 第 5 号住居跡出土遺物（6）

さ149.09 gである。石材はシルト岩である。

86～88は打製石斧である。

86は撚形で、背面に広く自然面を残す。長さ9.4cm、幅5.6cm、厚さ1.6cm、重さ90.54 gである。石材はシルト岩である。

87は平面水滴型のプロポジションで、腹面に広く打制面を残す。長さ11.6cm、幅5.3cm、厚さ1.9cm、重さ125.62 gである。石材はホルンフェルスである。

88は刃部を欠損する。背面に自然面を残すが、擦痕が観察され、磨石を再利用した可能性がある。長さ9cm、幅5.9cm、厚さ1.3cm、重さ93.29 gである。石材は砂岩である。

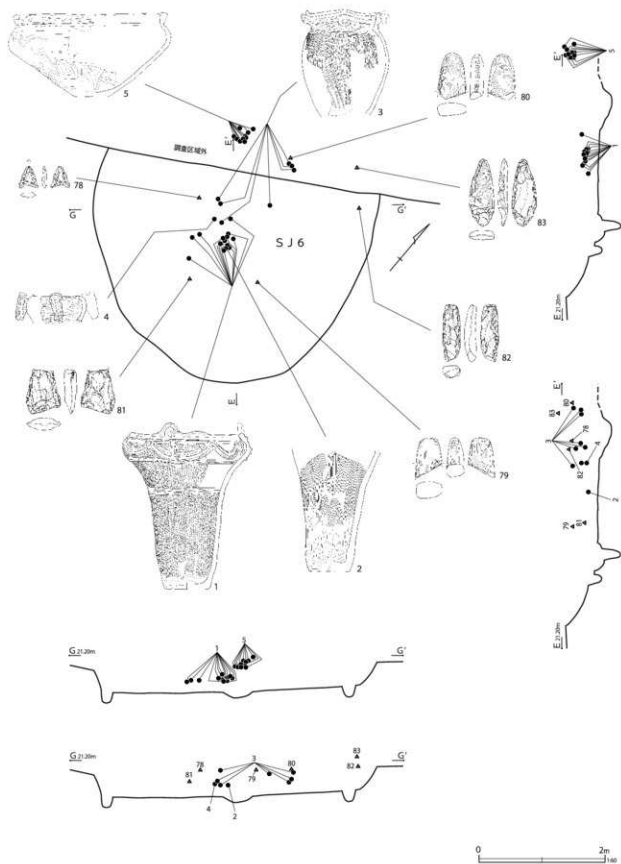
89～91は磨石である。89は棒状の磨石で、長軸一端に叩打痕が集中し、叩き石としても使用されたものと考えられる。長さ11.6cm、幅2.75cm、

厚さ2.6cm、重さ159.77 gである。石材は緑色岩である。

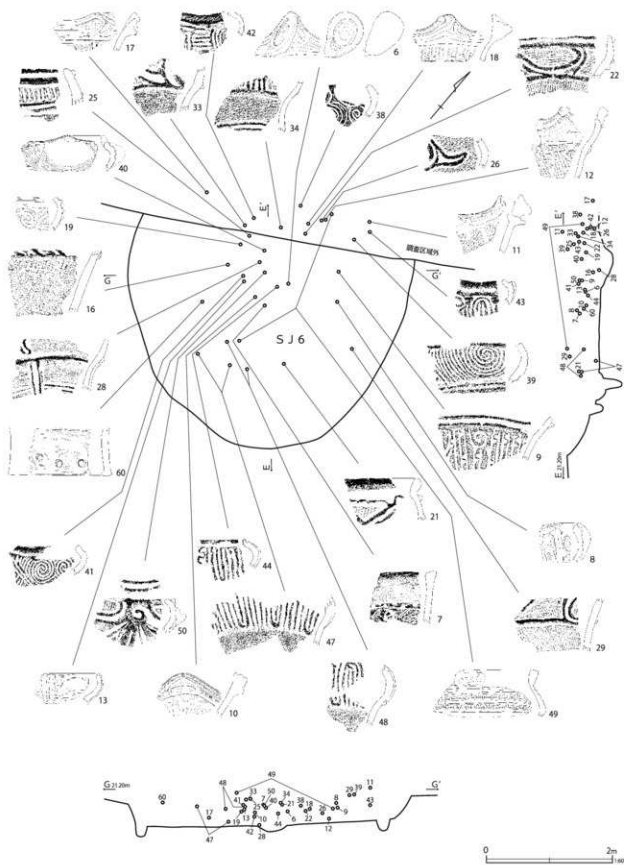
90は欠損するが円形の磨石であったとみられ、表裏に使用面を持つ。長さ4.2cm、幅7.4cm、厚さ3.4cm、重さ116.82 gである。石材は安山岩である。

91は楕円形の磨石で、短軸方向に折損する。表裏および側面が使用される。側縁に叩打痕がみられるが、剥離の上にも擦痕が及んでいる。長さ6.3cm、幅5.5cm、厚さ2.8cm、重さ147.21 gである。石材はシルト岩である。

92は軽石製品である。扁平な小判型で、表裏に十字の凹線が刻まれている。長さ6.2cm、幅4cm、厚さ1.65cm、重さ15.65 gである。石材は軽石である。



第 70 图 第 6 号住居跡遺物出土状況 (1)



第71图 第6号住居跡遺物出土状況(2)

かな傾斜を持って広く張り出している。壁高は最も深い部分で0.41mである。壁溝はほぼ一巡するが、P1およびP4付近で途切れている。

床面上から4本のビットが検出された。これらのうちP1～3が主柱穴で、調査区域外に想定される1本とともに4本柱の上屋を構成していたものと考えられる。

断面観察の結果、各柱穴とも一旦埋没した後に位置をわずかにずらして再掘削されており、上屋の建て替えが行われたものと思われる。

また、主軸線上南東側の壁近くにP4が存在し、これが出入り施設の痕跡であると考えられる。

主軸線上奥壁寄りで地床炉を検出した。北西端の一部が調査区域外に存在するが、楕円形の地床炉と考えられる。

覆土は壁際の三角堆積土を除くとほぼ上下2層からなり、土層図中の1～3層が上層、4層以下が下層に相当する。遺物は主に上層から出土している。

なお、主柱穴P1の覆土は下層を掘り抜き、さらに上層の一部を切るかたちで掘り込まれていた。このことから、住居跡の埋没がかなり進行した後主柱穴が抜去された可能性が考えられる。

所属時期は加曽利EⅠ時期と考えられる。

第6号住居跡出土遺物

土器（第72～75図）

1はキャリバー類深鉢である。口縁の一部を欠失する。水平口縁で、1か所に大小一對の突起が存在する。口縁部には繋ぎ弧文のモチーフが展開し、頸部無文帯を持たない。胴部中段には半裁竹管による平行沈線文と波状文が巡る。地文はRの捺糸文である。

復元最大径は約27.1cm、現存高は約35.5cmである。胎土は黒雲母粒子の混じる多量の砂を含む。器面は暗灰黄褐色で、黒斑がみられる。焼成は良い。

2は深鉢胴部～底部である。外反しつつ直線的

に開く器形である。櫛歯状工具による縦位の条線を胴部中段まで施文し、胴下半部は無文である。復元最大径は約18.6cm、現存高は約25.7cmである。胎土はシルト質で小礫を含む。器面は暗灰黄褐色で、黒斑がみられる。焼成はやや不良である。3は樽形の深鉢で、底部を欠失する。胴部中段に最大径を持ち、頸部が「く」の字に屈曲して口縁外反する。

口縁外面に隆帯と幅広の沈線が巡って文様帯を構成し、4単位の小渦文を配する。

頸部には無文帯を持って、胴部との境は1条の沈線で区画し、胴部には縦位の集合沈線を施文する。沈線間には細い半裁竹管状工具の先端による刺突列を充填する。

復元最大径は約18.6（口径16.2）cm、現存高は約22.3cmである。胎土はシルト質である。外面灰橙色、内面橙色である。焼成はやや不良である。

4は小型の深鉢で、口縁部から頸部まで残存する。口縁は無文で内湾し、沈線文を伴う棒状の突起（把手）を配する。頸部には縦位の刻みが巡る。

復元最大径は約17.8（把手含む）（口径10）cm、現存高は約6.8cmである。胎土はやや砂質で、チャート等の小礫と、黒雲母粒子を含む。器面は灰黄褐色で、黒斑がみられる。焼成は良い。

5は無文の浅鉢である。口縁から底部まで残存する。復元最大径は約34.4cm、現存高は約17.8cmである。胎土は赤褐色の小礫、雲母粒子を含む。外面暗橙色で黒斑がみられ、内面は黒褐色である。焼成は良好である。

6～61は破片資料である。

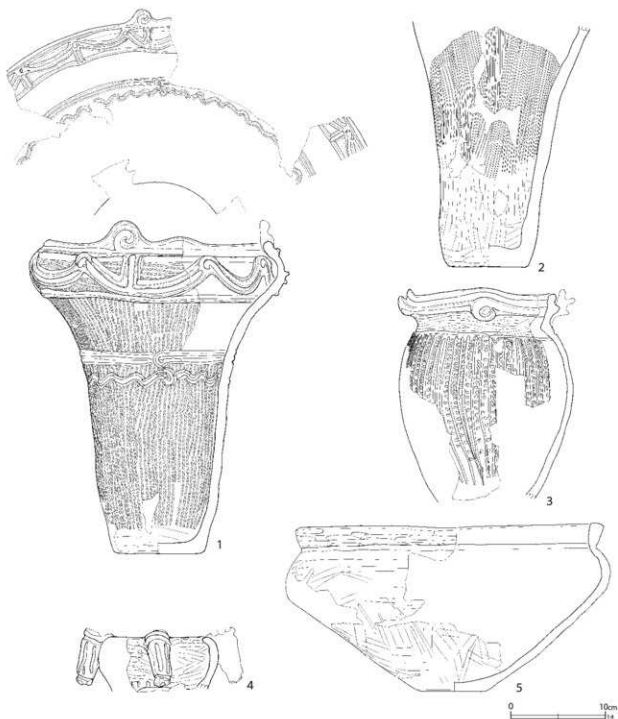
6～9は勝坂系の土器である。6は口縁部の山形突起で、左側面に円形の窪みを持ち、三叉文を配する。7は円筒形の深鉢口縁部である。無文の水平口縁で、頸部に平行沈線が巡り、交互刺突を施す。胴部には隆帯が垂下し、集合沈線文を施文する。

8は緩やかな波状口縁である。口縁直下に隆帯と沈線が巡る。波頂部から縦位の隆帯が垂下し、これを挟んで渦文と弧線文が対置される。

9は朝顔形に開く深鉢口縁部である。水平口縁で、口縁直下に隆帯と沈線が巡る。胴上半部には縦位の集合沈線文を描き、これに沿って交互刺突

を施し、一部に小渦文を配置する。

10は波状口縁の深鉢口縁部である。折り返し口縁で口端部は平坦に整形され、平行沈線が巡って「ハ」の字状の短沈線を配する。口縁直下には1条の沈線と刻みが巡り、波状口縁の波頂部には楕円形の突起を配する。頸部には無文帯を持つ。



第72図 第6号住居跡出土遺物(1)

11は波状口縁の深鉢である。口唇部が内外に張り出して、口端上に広い平坦面をつくりだし、ここに交互刺突文を伴う平行沈線が巡っている。波状口縁の波頂部には円盤状の突起を配するものとみられ、この突起に沿って弧状の沈線を描く。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

12は山形波状口縁の深鉢である。頸部に緩やかにくびれを持ち、口縁は外傾したのち内湾する。

波状口縁の波頂部に小突起を配し、左右に隆帯と平行沈線が巡って幅狭の区画をつくりだす。頸部には無文帯を持ち、胴部との境は斜めの刻みを伴う隆帯及び平行沈線で区画する。胴部にはRの燃糸文を施文する。

13は水平口縁の深鉢口縁部である。強く内湾して頸部にくびれを持つものとみられ、無文地に2条の隆帯が垂下する。

14は樽形の深鉢と考えられる。水平口縁で、口縁直下で軽微に外屈し、無文の折り返し口縁に接続する。口唇は断面角頭棒状であり、口端上を平坦に整形する。地文はL R単節の縄文で、横位回転で施文する。

15は深鉢胴部である。緩やかに外反する胴部で、隆帯+沈線によって曲線的なモチーフを描き、1条の隆帯+沈線により文様帯下端を区画している。隆帯の接点には3本1組の単沈線を配する。地文はRの燃糸文である。

16は文様帯下端の区画とみられ、斜めの刻みを伴う隆帯が巡っている。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

17・18は波状口縁の深鉢で、いずれも口縁直下に隆帯+沈線による幅狭の文様帯を持つ。

17は波頂部に弧状の隆帯を配し、これに接して三叉文を描く。

文様帯の直下には半裁竹管状工具による平行沈線が巡り、波頂部下方では縦位の平行沈線となって垂下して、胴部の文様帯へと接続するものとみられる。地文はRの燃糸文である。

18は波頂部で沈線末端が大小の渦文となつて対向し、小突起と化している。頸部には平行沈線が巡る。地文はRの燃糸文である。

19～25は加曾利E I式で、キャリパー系深鉢の口縁部である。19・20は2本隆帯による渦巻文である。

21は口縁直下にくびれを持って、口端が外屈する。くびれの部分には矢羽根状の刻みを伴う隆帯が巡って文様帯上端を区画し、2本隆帯による鋸歯状のモチーフを描く。鋸歯文と上位区画帯の接点には交互の刻みを配する。

22は片流れの弧状モチーフを描く。23は2条の隆帯間が対弧状にループしている。

24・25は比較的新しい様相を示す。口縁部文様帯は長方形の区画帯へと変化し、小渦巻文を配する。頸部に無文帯を持ち、境に2本の隆帯が巡る。地文は24がR L単節縦位回転の縄文、25は縦位の集合沈線文である。

26・27は口縁部文様帯の一部である。26は渦巻文の末端に剣先状モチーフを配する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。27は口縁部直下にくびれを持つ21に類似の器形と考えられ、渦巻文を連繋する弧状の隆帯がみられる。地文はRの燃糸文である。

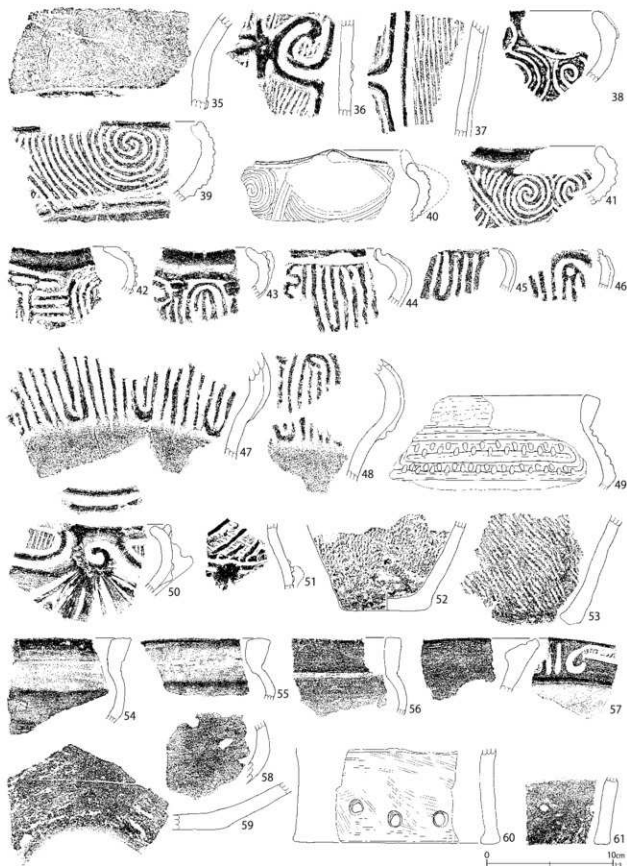
28～30は口縁部文様帯下端を区画する隆帯である。28は渦巻文下方の頸部に2本の隆帯が垂下し、左右に棒状工具による平行沈線が対向している。地文はRの燃糸文で、口縁部では横位、頸部以下には縦位回転で施文する。

29は渦巻文が文様帯下端を区画する隆帯と癒着しており、頸部と胴部の境に沈線が巡る。地文はRの燃糸文である。30は頸部が強く外反する。地文はRの燃糸文である。

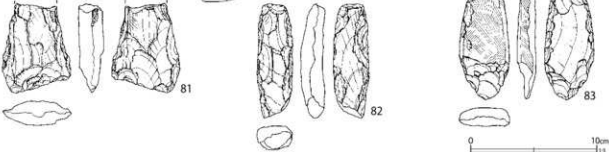
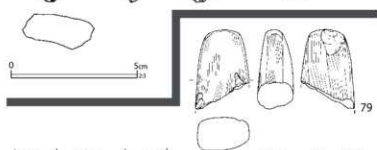
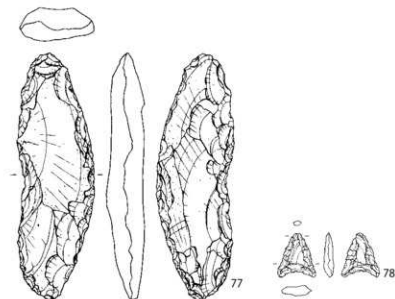
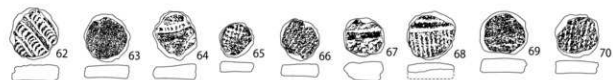
31は頸部無文帯と胴部文様帯との境界部分で、2本の隆帯が巡る。胴部には2本隆帯による大柄の渦巻文を描くものとみられる。また、区画に接して小渦文を配する。地文はRの燃糸文である。



第73圖 第6号住居跡出土遺物(2)



第74图 第6号住居跡出土遺物(3)



第75图 第6号住居跡出土遺物（4）

32は繋ぎ弧文の一部で、頸部に無文帯を持って
いる。地文はRの燃糸文である。

33～35は頸部無文帯とその周辺である。33は渦
巻文の一部がみられ、鋭利な工具による集合沈線
文を地文とする。34は渦巻文と下方の区画帯が4
本の隆帯によって接続されている。胴部との境は
2条の隆帯によって区画する。地文はRの燃糸文
である。

35は無文帯と胴部との境を半裁竹管状工具に
よる平行沈線で区画する。36・37は胴部の文様帯
で、2本隆帯の懸垂文からJ字文等が派生してい
る。地文は共にRの燃糸文である。

38～41は、沈線ないし浮線+沈線により密な渦
巻文を描く土器である。38・43は円錐形の突起を
持つものとみられるが、いずれも剥落している。

39～41は斜行する平行沈線を挟んで渦巻文を
交互配置している。41では複合化した渦巻文であ
る。

42～48は浮線+沈線による褶曲文が口縁部に
配される土器で、曾利Ⅰ式である。42～45は口縁
部で、42・43は口縁直下に無文帯を持つ。44は口
縁直下に1条の沈線が巡る。

46～48は口縁部文様帯の一部で、47・48は頸部
に無文帯が存在する。

50は典型的な繋ぎ弧文である。突起化した渦巻
文から2本隆帯の懸垂文が垂下し、頸部に無文帯
を持つ。地文は集合沈線文である。51は曾利Ⅱ式
で、沈線と浮線文による籠目文を描く頸部である。
胴部との境には2条の隆帯が巡り、円形の突起を
配する。

52・53は深鉢底部である。地文は52がRの燃糸
文、53がL R単線の縄文で、いずれも縦位回転で
施文する。

49・54～59は浅鉢である。49は胴部中段がソロ
バン玉状に張り出し、胴上半部には楕円形の区画
文を配して、内部に交互刺突文を伴う平行沈線文
を描く。57は口縁内面に沈線文を描く。

54～56は無文の浅鉢で、胴上半部が張り出して
頸部にくびれを持ち、口縁外屈する。58は同種の
浅鉢の胴部である。59は浅鉢の底部である。

60・61は器台である。いずれも無文で、裾部に
円孔が並ぶ。

62～76は土製円盤で、62・64は前期の土器片を
使用している。

石器 (第75図)

77は尖頭器である。右側縁は緩やかなカーブを
描くが、左側縁がくびれており、全体に「く」の
字のプローションとなっている。長軸両端は比
較的鈍角で、つまみを欠く大型の石匙とみるこ
ともできる。

横長の剥片を素材とし、全体に両面からの細か
な調整剥離を施している。長さ9.8cm、幅3.1cm、
厚さ1.5cm、重さ49.47gである。石材は黒色頁
岩である。

78は石鏃である。二等辺三角形で、基部はごく
緩やかな凹基である。

長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.99
gである。石材は青灰色チャートである。

79・80は磨製石斧である。

79は器部のみ残存する。断面はややいびつな定
角形で、棒状の磨石の可能性もある。

長さ6.3cm、幅4.2cm、厚さ2.8cm、重さ99.83
gである。石材は安山岩である。

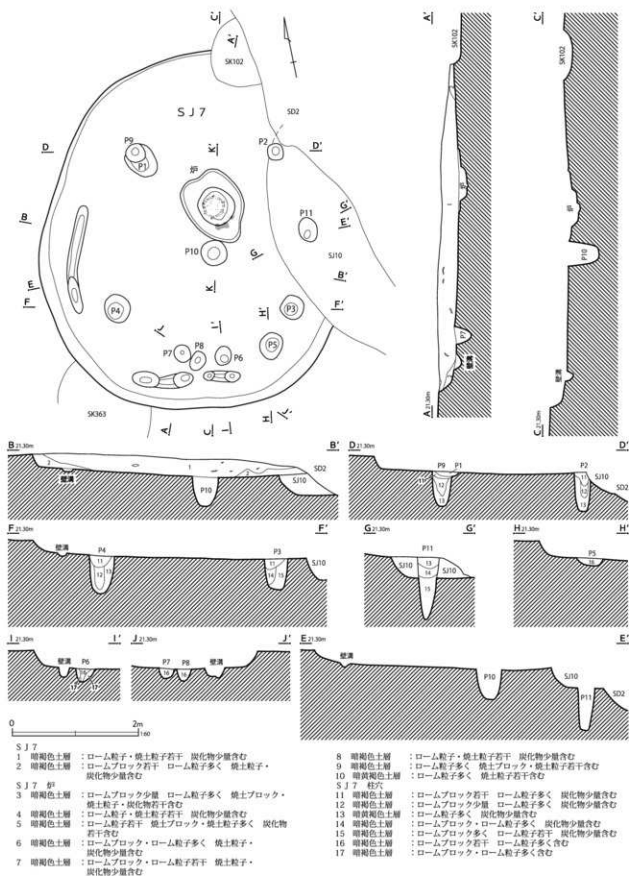
80も基部のみ残存する。断面はやや薄身の定角
型である。左側縁に叩打が集中する部分があり、
破損後の転用がうかがわれる。

長さ7.3cm、幅4.5cm、厚さ2.2cm、重さ118.3
gである。石材は安山岩である。

81～83は打製石斧である。

81は基部折損する。擦痕を持つ平滑な自然面を
表裏に残しており、磨石を再加工したものとみら
れる。

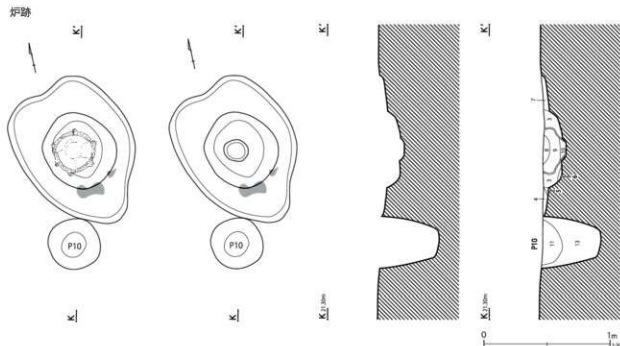
長さ7.2cm、幅5.4cm、厚さ2cm、重さ86.34
gである。石材は泥岩である。



第76図 第7号住居跡(1)

第7表 第7号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	42.0	16.2	P2	26.0	60.4	P3	36.0	48.8	P4	44.0	61.9	P5	42.0	13.3
P6	30.0	19.1	P7	26.0	33.3	P8	30.0	18.5	P9	30.0	54.4	P10	40.0	47.4
P11	40.0	65.7												



第77図 第7号住居跡(2)

82は刃部をわずかに折損する。胴部中段に最大幅を持つ短冊形で、側面視は腹面側に緩やかな弧を描いている。背面に自然面、腹面に打割面を残している。

長さ9.2cm、幅2.8cm、厚さ1.9cm、重さ72.44gである。石材は砂岩である。

83は撚形の石斧だが、刃部が三角形に張り出す水滴形のプロポーシオンである。背面および右側縁に広く磨面を残しており、磨石からの再加工品と考えられる。

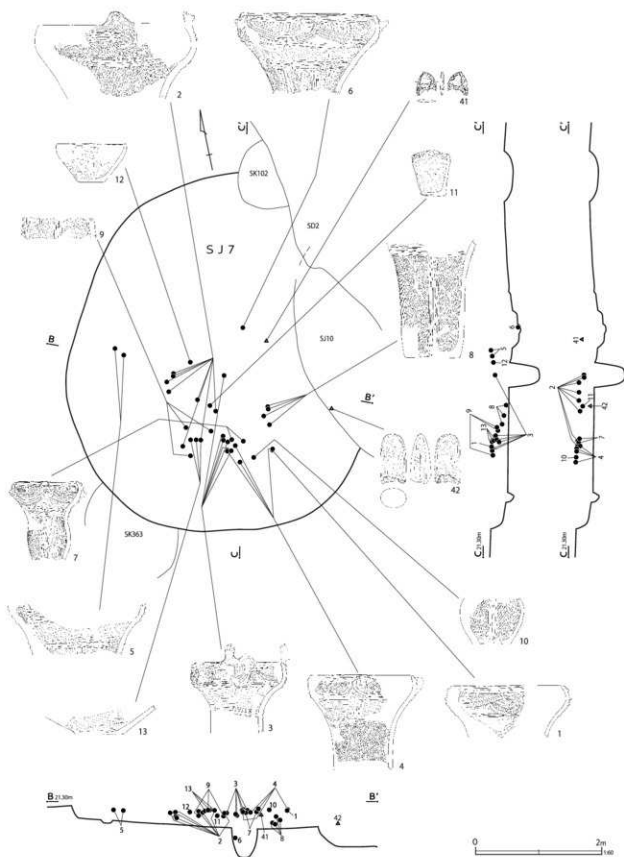
長さ10.8cm、幅4cm、厚さ1.5cm、重さ84gである。石材は安山岩である。

第7号住居跡(第76～79図)

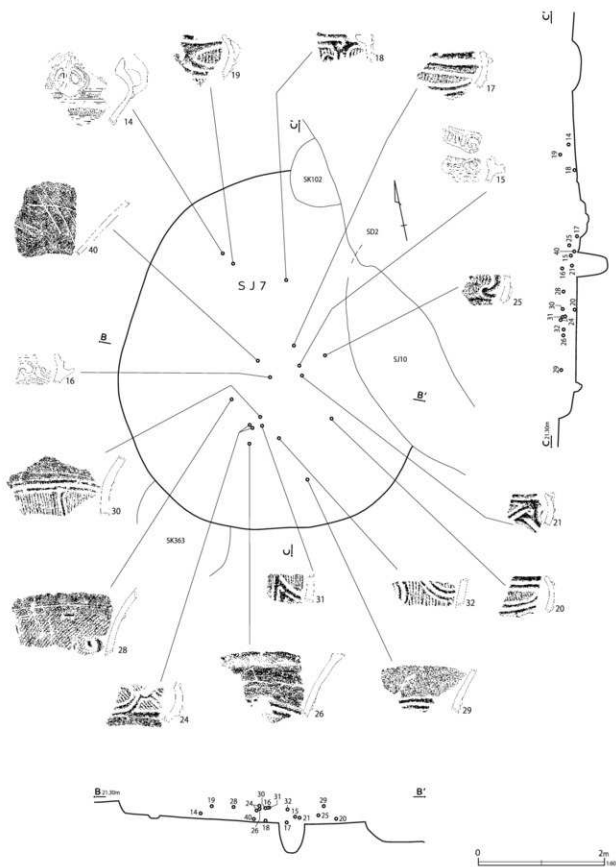
L・M-15グリッドに位置する。第2号溝跡に壊されており、第10号住居跡・第363号土壊を壊している。また、第102号土壊とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

南北に主軸を持つ楕円ないし隅丸長方形の住居跡であったと考えられるが、北東部分を第2号溝跡その他により大きく破壊されている。計測可能部分の長径5.64m、短径4.7mである。主軸方向はN-13°-Wを指す。

壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.22mである。壁溝は南壁および南西壁



第 78 图 第 7 号住居跡遺物出土状況 (1)



第 79 图 第 7 号住居跡遺物出土状況 (2)

の一部で断片的に検出された。床面は平坦で、中央部分がやや下がっている。

床面上から11本のビットが検出された。これらのうちP2～4・9が主柱穴で、4本柱の上屋を構成していたものと考えられる。主軸線上南側の壁近くにP6～8が存在し、これが出入り口施設の痕跡と考えられる。

主軸線上やや奥壁寄りで炉跡を検出した。埋甕がで、小型深鉢土器の口縁から胴上半部にかけての部分で正位に埋設している。

周囲に掘りかたを検出した。炉体土器と比較して大きく、住居跡本体よりも北西・南東寄りに主軸を持つ不整楕円形で、長径120cm、短径81cm、深さ19cmである。

なお、炉跡の南に接して、床面ほぼ中央にP10が位置しているが、覆土に焼土は含まれず、炉に付随するものではなく上屋構造の一部と考えられる。

覆土は壁際の堆積を別にすればほぼ単層で、遺物はプラン中央部の、遺構検出面付近を中心に出土している。

所属時期は加曾利EⅠ式期と考えられる。

第7号住居跡出土遺物

土器（第80～82図）

1～7は加曾利EⅠ式で、キャリバー類の深鉢である。

1は水平口縁の深鉢で、口縁から胴上半部までが残存する。1条の隆帯により文様帯上下を区画し、横S字文を描く。頸部無文帯を持たず、懸垂文もみられない。地文はLの燃糸文で、口縁部では横位、頸部以下は縦位回転で施文する。

復元最大径は約26.6cm、現存高は約11cmである。胎土はシルト質である。外面暗灰褐色、内面灰黄褐色である。焼成はやや不良である。

2は波状口縁の深鉢である。山形波状口縁の波頂部に小渦巻文を配する。口縁部文様帯はやや萎縮した横S字文で、2本の隆帯により下方の区画

帯と連結する。頸部無文帯および懸垂文を持たない。地文はRⅠ単節の縄文で、口縁部は横位、頸部以下は縦位回転で施文する。

復元最大径は約34cm、現存高は約18.3cmである。胎土に多量の砂・シルトを含む。器面は暗灰黄褐色である。焼成は比較的良好い。

3は水平口縁の深鉢で、口縁部の渦巻文から連続する大型の中空突起を配する。頸部には無文帯を持ち、胴部との境を2条の隆帯で区画する。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約20.7cm、現存高は約19cmである。胎土は砂質、黒雲母を含む。器面は外面橙色、内面橙色～暗灰褐色である。焼成は比較的良好い。

4は水平口縁の深鉢である。口縁部文様帯は簡略化され、楕円形の区画文と小渦巻文から構成される。

頸部には無文帯を持ち、胴部との境は平行沈線で区画されて、胴部には平行沈線の懸垂文と単沈線の蛇行沈線文が交互に垂下する。地文はRⅠ単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約20.1cm、現存高は約24.4cmである。胎土は大量の砂と小礫を含む。器面は外面暗褐色、内面暗灰褐色である。焼成は比較的良好い。

5は頸部から胴上半部にかけて残存する。繫ぎ弧文化した口縁部文様帯の一部を見ることができ、小渦巻文から垂下した隆帯が文様帯下端の区画帯に接続している。頸部無文帯を持ち、胴部との境は2条の隆帯によって区画している。胴部には2本隆帯の懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約29.1cm、現存高は約10.7cmである。胎土は少量の砂を含む。器面は暗褐色である。焼成は良好い。

6・7も繫ぎ弧文の土器である。

6は胴上半部まで残存する。口縁の弧状モチーフの下に1条の隆帯が巡り、主文様との間に三角形の無文帯を形成している。頸部には無文帯を持

ち、胴部との境は2条の隆帯で区画している。胴部には2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はRの燃糸文を縦位回転で施文する。

復元最大径は約32.4cm、現存高は約17.1cmである。胎土は多量の砂、シルトを含む。器面は外面灰黄褐色～暗灰褐色、内面暗灰褐色～黒褐色である。焼成は比較的良好い。

7は底部のみ欠失する。口縁に繋ぎ弧文が回り、文様帯下端は区画されない。頸部に無文帯を持ち、胴部との境は2条の隆帯で区画する。胴部には2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文は口縁部が縦位の集合沈線、胴部はRの燃糸文である。

復元最大径は約16.3cm、現存高は約16.6cmである。胎土はややシルト質である。器面は灰黄褐色である。焼成は良好い。

8～10はキャリバー類深鉢に伴う胴部～底部である。8は頸部無文帯を持ち、胴部との境を2条の隆帯で区画する。胴部には2本隆帯の懸垂文が垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約18.7cm、現存高は約25cmである。胎土は多量の砂と黒雲母粒子を含む。器面は外面灰褐色、内面灰褐色である。焼成は比較的良好い。

9は胴部中段のみ残存する。2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下し、地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約15.8cm、現存高は約4.4cmである。胎土はやや砂質である。器面は灰黄褐色である。焼成は良好い。

10は球状に張り出す胴部～底部である。3本沈線の懸垂文が垂下し、沈線間の地文を磨り消している。頸部との境は横位の沈線で区画する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約13.6cm、現存高は約9.7cmである。胎土は砂質である。器面は外面灰褐色、内

面暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

11はコップ型の深鉢である。胴部無文で、口縁直下に1条の沈線が巡る。また、口縁上の1か所に小突起を配し、中央に円孔を穿つ。

復元最大径は約8.1cm、現存高は約9.2cmである。胎土は黒雲母粒子の混じる砂、シルトを含む。器面は灰橙色～暗灰褐色である。焼成は比較的良好い。

12は無文の小型浅鉢である。水平口縁上に小突起を持つ。復元最大径は約14.9cm、現存高は約8.2cmである。胎土はややシルト質である。器面は灰褐色である。焼成はやや不良である。

13は浅鉢の底部とみられる。底面の周縁が高台状に隆起している。復元最大径は約23.4cm、現存高は約6.1cmである。胎土は白色の砂粒、小礫を含む。器面は外面暗茶褐色、内面暗橙色である。焼成は良好である。

14～40は破片資料である。

14は勝坂式で、波状口縁の波頂部に眼鏡状の貫通孔を持つ突起を持ち、胴部に平行沈線文とキャタピラ文を描く。

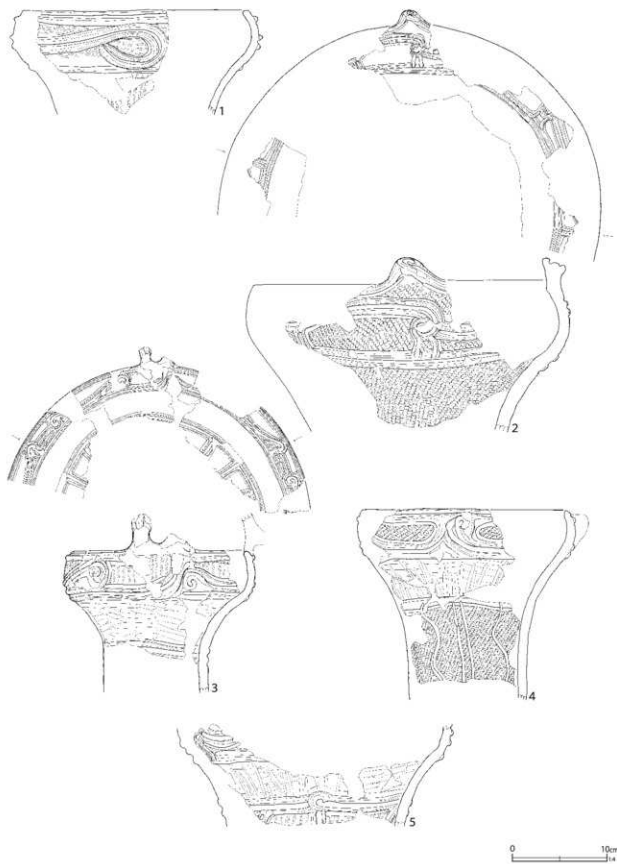
15は上面に沈線を持つ隆帯が口縁外面に回り、口端上に小渦巻文を主体とする文様帯を持つ。

16～39は加曾利E I式のキャリバー類深鉢である。16～25は口縁部文様帯である。多くは繋ぎ弧文を描く。25は横S字文である。18は逆L字に内屈する口縁で、口端上に広い平坦面を持つ。

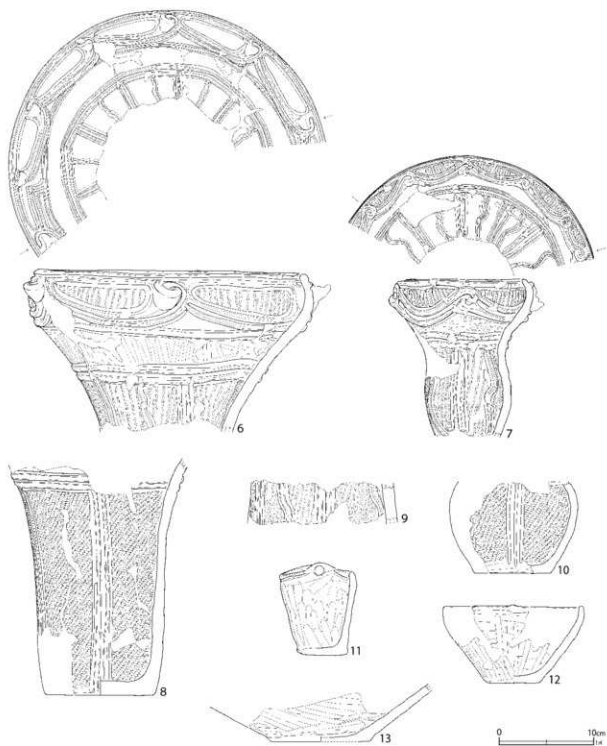
26は口縁部文様帯が省略され無文化する。口唇断面肥厚して内面に稜を持つ。胴部との境は2条の隆帯で区画する。

27～30は頸部無文帯と胴部の文様帯との境界部分で、いずれも2条の隆帯による区画が存在する。28はほとんどの隆帯が剥落し、両側をなぞる沈線のみが残存している。胴部は隆帯による懸垂文が垂下し、28ではここから渦巻文が派生している。地文は燃糸文と縄文の両者が存在する。

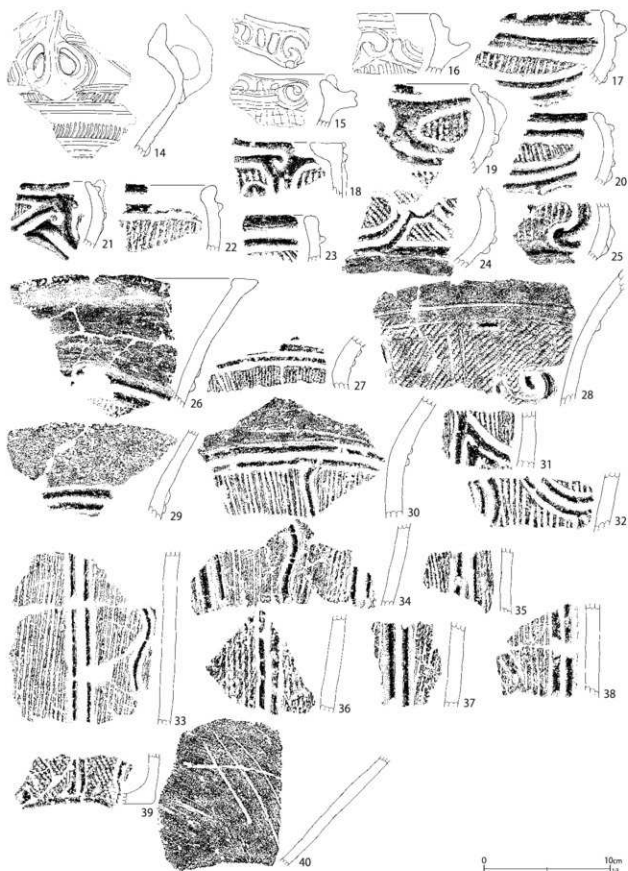
31～38は胴部破片である。隆帯による懸垂文や



第80图 第7号住居跡出土遺物(1)



第81图 第7号住居跡出土遺物(2)



第82图 第7号住居跡出土遺物(3)



第83図 第7号住居跡出土遺物(4)

蛇行懸垂文が垂下し、31・32では弧状のモチーフが派生している。31は隆帯間を走る沈線の末端がわらび手状に巻いている。地文は全てR縦位回転の燃糸文である。

39は底部で、2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文はL R単節縦位回転の縄文である。40は浅鉢胴下半部である。

石器 (第83図)

41は石礫である。右脚部を欠損する。脚部に対し体部が短く、また先端部が鈍角かつ左に極端に偏るが、これは折損後に再生されたためと考えられる。

長さ1.9cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.78gである。石材はチャートである。

42は磨製石斧で、刃部を折損する。身幅が変化に乏しく寸胴で、断面丸棒状である。

長さ8cm、幅3.1cm、厚さ3.3cm、重さ163.35gである。石材は砂岩である。

第8号住居跡 (第84～89図)

N-16グリッドに位置する。第2号溝跡に壊されており、第149・150号土壌を壊している。

覆土東半を第2号溝跡に破壊され、また南東壁が調査区域外に存在するため、調査可能部分は全体の二分の一程度であった。柱穴配置から、主軸方向はN・40°・W付近に存在するものと考えられる。

床面は平坦で、南東方向に向かって緩やかに傾

斜している。壁溝は壁の直下を一巡する。壁高は最も深い部分で0.5mである。

主軸線上やや奥壁よりとみられる部分で炉跡を検出した。埋甕炉で、深鉢土器の口縁部を正位に埋設している。炉体土器の周囲に、土器よりも一回り大きな掘りかたが存在した。掘りかた中央で土器の直下にあたる部分はビット状に52cmあまり掘り下げられていたが、この部分の覆土には焼土は僅かしか含まれていなかった。

床面上から6本のビットが検出された。これらのうちP1～5が主柱穴で、4本柱の上屋を構成するものと考えられる。また、P4・5は切り合い関係にあり、上屋の建て替えが行われた可能性がある。出入り口施設は確認できなかったが、調査区域外に存在するものと考えられる。

P6は深さ30cm強の浅いビットであったが、隣接する床面上に完形の深鉢が逆位で出土しており、住居に伴う何らかの施設が存在したか、あるいは廃屋葬が行われた可能性もある。

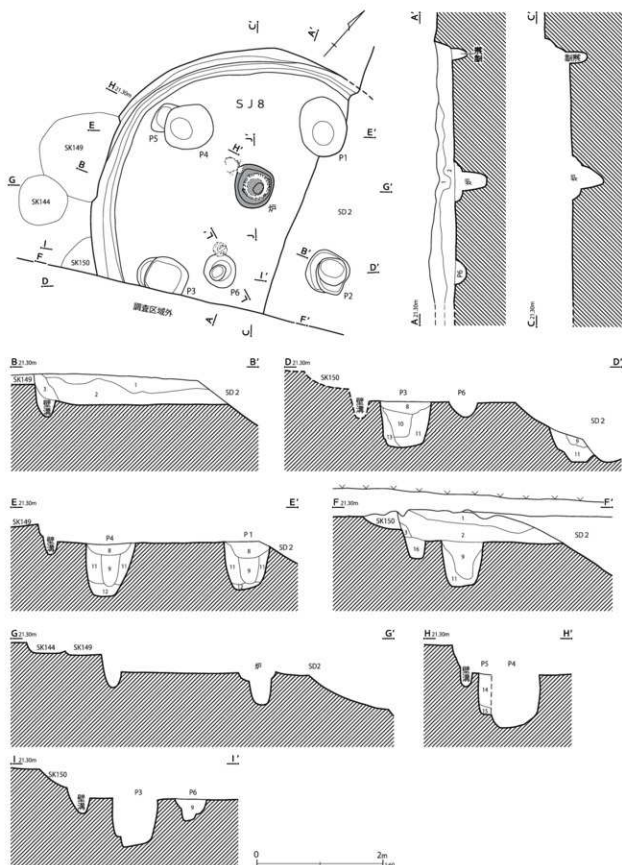
覆土は、壁際の三角堆積土を別にすれば上下2層からなり、上下層の境界面付近を中心に大量の遺物が出土している。

所属時期は加曾利EⅠ式期と考えられる。

第8号住居跡出土遺物

土器 (第90～96図)

1～10は加曾利EⅠ式のキャリバー類深鉢で、いずれも水平口縁である。



第 84 图 第 8 号住居跡 (1)

第8表 第8号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	94.0	79.1	P2	70.0	56.5	P3	78.0	79.0	P4	76.0	86.9	P5	48.0	65.6
P6	56.0	34.4												

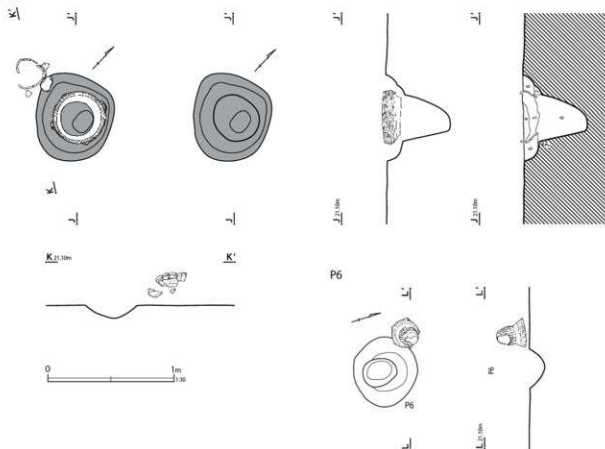
1 は炉体土器である。頸部から下を欠失する。口縁部文様帯を大きく4つに分割し、横位の橋梁状把手と小渦巻状の突起をそれぞれ一対配する。把手・突起を挟んで変則的な横S字文を描き、モチーフの末端には剣先状のモチーフを付す。頸部には無文帯を持つ。地文はRの捺糸文を横位回転で施文する。

復元最大径は約45.8cm、現存高は約14.1cmで

ある(突起部分含む)。胎土は多量の砂とシルトを含む。器壁は外面灰黄褐色、内面橙色である。焼成はやや不良である。

2 は口縁から底部まで残存する。口縁部には横S字文を描き、頸部無文帯を持たない。頸部から胴部中段にかけて、3本沈線による区画が3段に巡っている。地文はRの捺糸文で、底部付近では原体が器面を引きずられて一部条線化している。

炉跡



SJ8

- 1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック少量 炭化物若干含む 締まり良好
- 2 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック少量 ローム粒子多く 焼土粒子少量 炭化物若干含む 締まり良好
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物若干含む
- 4 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む
- 5 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック・焼土粒子少量含む
- 6 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子微量含む
- 7 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む
- 8 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子若干 焼土ブロック少量 炭化物若干含む

- 9 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物少量含む
- 10 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 焼土ブロック・炭化物少量含む
- 11 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く含む
- 12 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子少量含む 固く締まっている
- 13 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む
- 14 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干含む
- 15 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子少量含む 固く締まっている
- 16 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物少量含む

第85図 第8号住居跡(2)

復元最大径は約19.1cm、現存高は約22.5cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

3は胴部中段までが残存する。横S字文を描き、頸部無文帯は存在せず、懸垂文もみられない。地文はRの襷糸文である。

復元最大径は約22.2cm、現存高は約13.2cmである。胎土は砂質で、チャートの角礫が混じる。器面は暗灰橙色である。焼成は良い。内外面に比熱の痕跡がみられる。

4は口縁部のみ残存する。剣先モチーフを伴う横S字文を描き、頸部には無文帯が存在する。地文はRの襷糸文である。

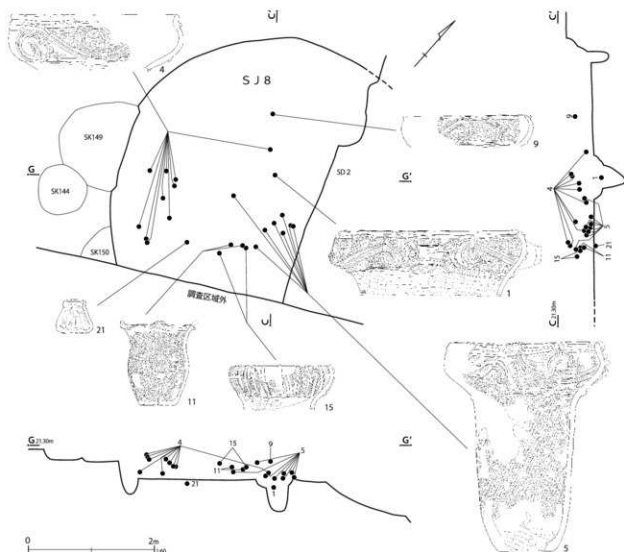
復元最大径は約36.8cm、現存高は約11.9cmで

ある。胎土はシルト質である。器壁は外面灰黄褐色、内面灰黄褐色～暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

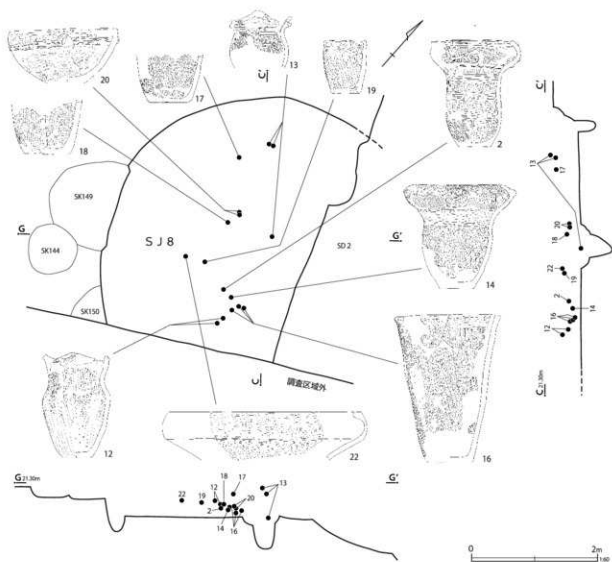
5は口縁上に小突起が存在する。変則的な横S字文を描き、文様帯下端は刻みを伴う1条の隆帯で閉塞している。地文はRL単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約34.8cm、現存高は約44.4cmである。胎土はシルト質で、赤褐色のシャモットを含む。器壁は外面黄褐色～灰黄褐色、内面黄褐色～黄橙色である。焼成はやや不良である。

6は口縁部に片流れの横S字文を描き、頸部無文帯を持たない。地文はRの襷糸文で、胴部のみに縦位回転で施文する。



第86図 第8号住居跡遺物出土状況(1)



第 87 図 第 8 号住居跡遺物出土状況 (2)

復元最大径は約17.3cm、現存高は約8.1cmである。胎土は砂質で、白色粒子が目立つ。外面橙色、内面暗褐色で、焼成はやや不良である。

7は渦巻文の末端に剣先状のモチーフが付される。地文はR L 単節横位回転の縄文である。復元最大径は約22.9cm、現存高は約5.9cmである。胎土は砂質で、海綿骨針を含む。器壁は内外面灰橙色である。焼成はやや不良である。

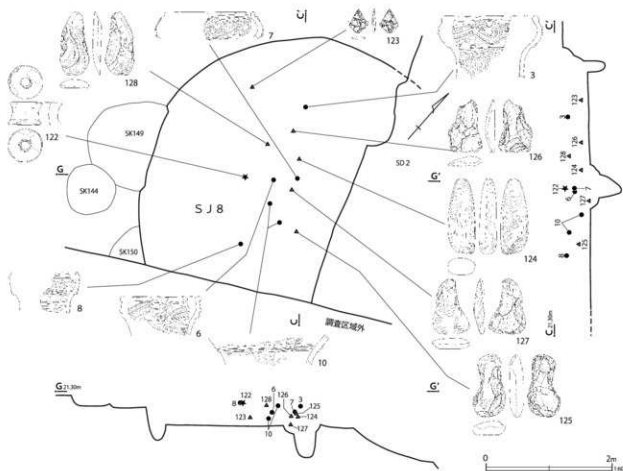
8は主文様を描く2本隆帯が文様帯下端の区画帯を兼ねており、長方形の区画文を形成している。頸部に無文帯を持ち、胴部との境は1条の隆帯で区画する。遺構検出面付近から出土した土器であり、より新しい時期の遺物が混入した可能性もあ

る。

復元最大径は約15.2cm、現存高は約8.8cmである。胎土は砂質である。器壁は灰褐色である。焼成はやや不良である。

9は隆帯の一部が剥落しているが、横S字文と十字文を描いたものとみられる。地文はRの燃糸文である。復元最大径は約27.8cm、現存高は約6.9cmである。胎土は多量の砂、小礫を含む。器壁は暗褐色で黒斑がみられる。焼成は良い。

10は文様帯下端を2条の隆帯で区画し、頸部無文帯が存在する。復元最大径は約25.4cm、現存高は約6.5cmである。胎土は砂質である。器壁は外面灰褐色、内面灰黄褐色である。焼成は良い。



第88図 第8号住居跡遺物出土状況(3)

11・12は口縁直下に1条の隆帯と沈線による簡素な文様帯を持つ深鉢である。11は水平口縁で4単位の山形の小突起を配する。地文はRL単節縦位回転の縄文である。復元最大径は約16.2cm、現存高は約17.9cmである。胎土はシルト質で、黒雲母粒子を含む。器壁は外面灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成は比較的良好。12は緩やかな波状口縁である。地文はLの燃糸文だが、胴部中段以下では研磨され磨り消されている。

復元最大径は約14.2cm、現存高は約21.6cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面灰橙色、内面黒灰褐色である。焼成は不良である。また、器外面は被熱の痕跡による風化が顕著である。

13は大小一対の突起を配する波状口縁の深鉢である。口縁下に水平の隆帯が巡り、この間が簡素な文様帯となっている。頸部には無文帯が存在し、

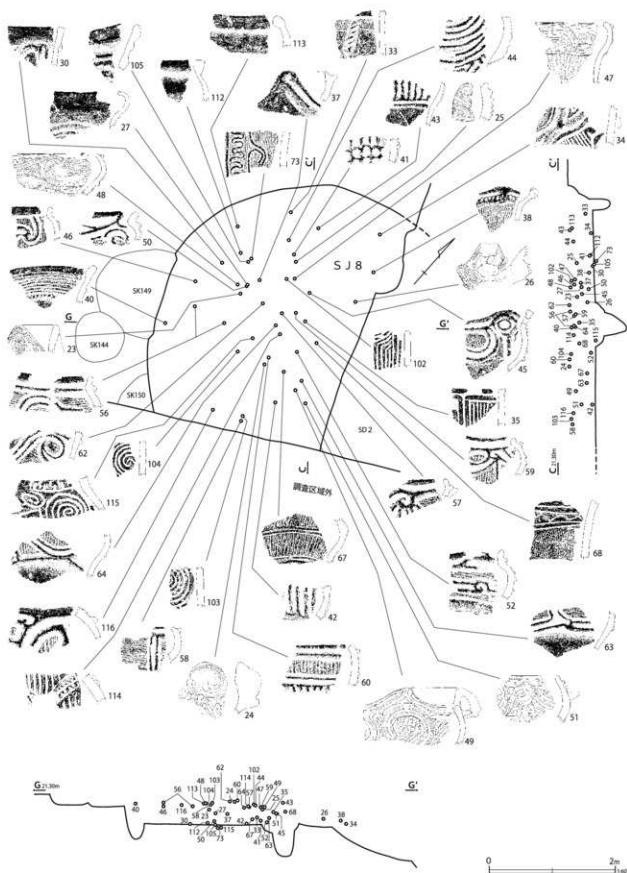
胴部との境は平行沈線により区画する。胴部の文様帯には平行沈線による十字文や小波状文を描く。地文はLの燃糸文である。

復元最大径は約13.2cm、現存高は約11.7cmである。胎土は石英・黒雲母粒子を含む。器壁は外面暗褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良好。

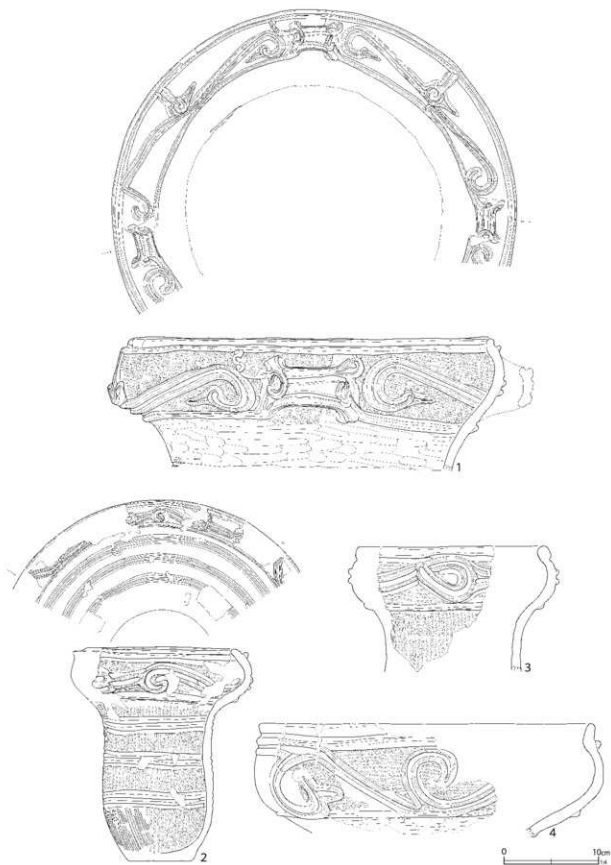
14は床面直上から逆位で出土した深鉢である。底部の一部が欠失する。口縁部には密な集合沈線による文様が展開する。

口縁直下に4単位の円錐状突起を配し、渦巻文を描く。突起間には上下対向する櫛状の区画を描き、縦位の集合沈線を充填する。上下のモチーフの接点には交互刺突文を配する。

文様帯下端は1条の沈線で区画され、頸部には無文帯が存在する。胴部との境は平行沈線で区画され、胴部にはLの燃糸文を縦位回転で施文する。



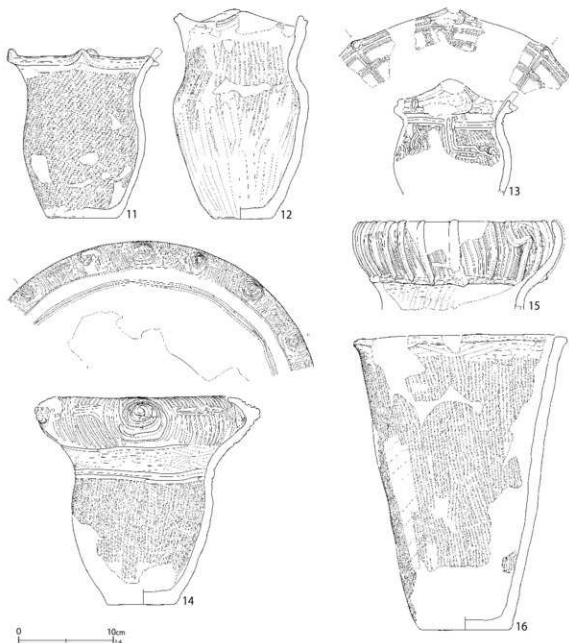
第 89 图 第 8 号住居跡遺物出土状況 (4)



第90图 第8号住居跡出土遺物(1)



第91图 第8号住居跡出土遺物(2)



第92図 第8号住居跡出土遺物(3)

復元最大径は約23.7cm、現存高は約21.8cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良い。

15は曾利Ⅰ式で、口縁に縦位の浮線文を描き、頸部無文帯が存在する。復元最大径は約22.6cm、現存高は約9.5cmである。胎土は多量の砂・シルトを含む。器面は暗褐色で、焼成は良い。

16は円筒形の深鉢である。口縁から底部まで残存する。水平口縁で、口唇断面肥厚して外面に稜

を持つ。口縁直下に若干の無文帯が存在し、以下胴部にはLの燃糸文だけを施文する。

復元最大径は約22.5cm、現存高は約31.2cmである。胎土は多量の砂と小礫を含む。器壁は外面暗茶褐色、内面黒褐色である。焼成はやや不良である。外面胴下半部に被熱の痕跡が顕著である。

17・18は深鉢底部である。17はR縦位回転の燃糸文のみ施文する。復元最大径は約14.2cm、現存高は約10.2cmである。胎土は多量の砂と小礫

を含む。器壁は外面が暗褐色、内面は黒色である。焼成はやや不良で、外面に被熱の痕跡が顕著である。

18は1本隆帯の懸垂文が垂下し、地文はRの燃糸文を縦位回転で施文する。復元最大径は約14.8cm、現存高は約11.4cmである。胎土はやや砂質である。器壁は外面黄褐色、内面黒褐色である。焼成は良い。

19はコップ形の深鉢で、底部を欠失する。水平口縁で、口縁下に1条の沈線が走り、幅狭の文様帯が構成される。一對の小渦巻文を中心として簡素な沈線文を描き、胴部にはRの燃糸文を縦位回転で施文する。

復元最大径は約9cm、現存高は約11.1cmである。胎土はやや砂質で、チャート等の垂角礫が目立つ。器壁は外面暗褐色、内面黒褐色である。焼成は良いが、外面に被熱の痕跡が顕著である。

20はガサの上面で出土した浅鉢である。口縁下に2条の隆帯が走り、小渦巻文を配する。胴部は無文である。復元最大径は約23.6cm、現存高は約11.6cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器壁は外面茶褐色、内面茶褐色～黒褐色であ

る。焼成はやや不良である。

21は小型の壺である。底部直上に最大径を持ち、頸部がくびれて口縁がわずかに外に張るひさご形のプロポーションである。文様を持たない。

復元最大径は約7.9cm、現存高は約7.1cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面灰褐色～黒褐色、内面黄褐色である。焼成は比較的良好。内面に輪積み痕を残す。

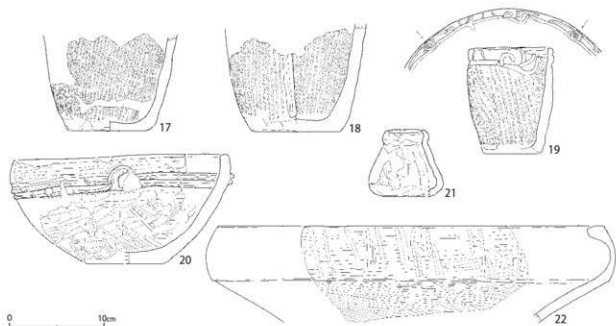
22は無文の浅鉢である。胴部中段に屈曲を持つ。口縁内湾して内面に稜を持ち、口端上に広い平坦面を持つ。

復元最大径は約43.1cm、現存高は約10.2cmである。胎土は白色の砂粒を多く含む。器壁は外面暗灰褐色、内面黒褐色である。焼成は良い。

23～118は破片資料である。

23～35は勝坂式である。23は山形波状口縁で、矢羽根状の刻みを伴う隆帯が垂下する。24は円錐状の突起に渦巻文を描く。25は口縁上に付される鱗状の突起とみられ、外面に浮線による渦文と褶曲文を描く。

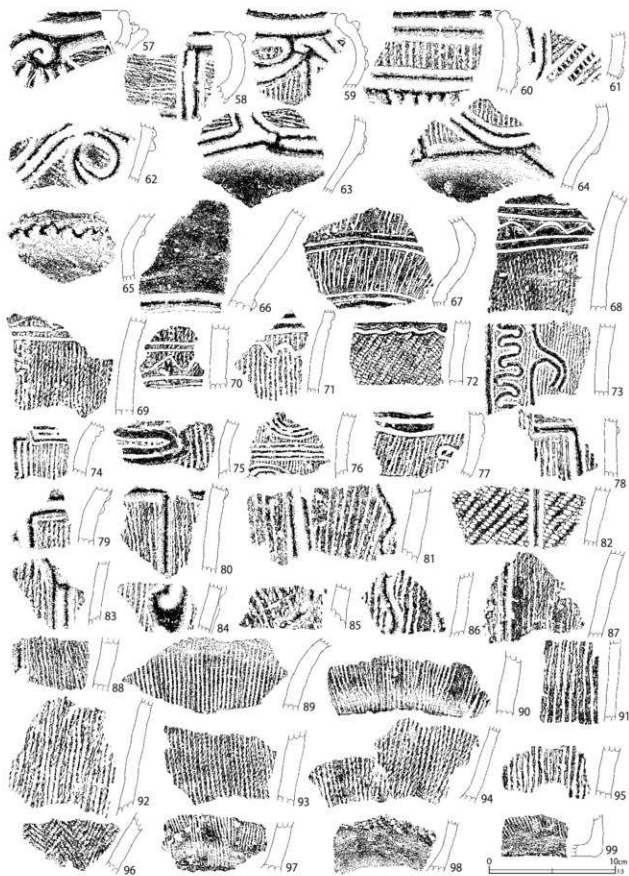
26は横位の橋梁状把手の正面に横位の貫通孔を伴う眼鏡状突起を配する。



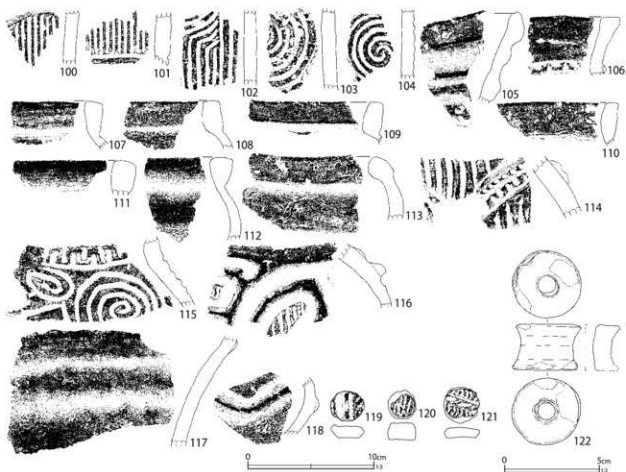
第93図 第8号住居跡出土遺物(4)



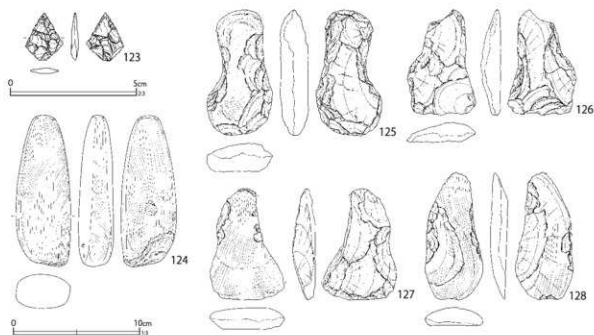
第94图 第8号住居跡出土遺物(5)



第95图 第8号住居跡出土遺物(6)



第 96 图 第 8 号住居跡出土遺物 (7)



第 97 图 第 8 号住居跡出土遺物 (8)

27～29は内屈する無文の口縁部である。27は胴部との境に刻みを伴う隆帯が巡る。29は矢羽根状の刻みを伴う隆帯の区画である。

30～32は円筒状深鉢の口縁部である。30・31は無文、32はR Lの縄文を右下がりに施文して条の方向を縦に揃えている。

33はキャタピラ文と小波状沈線によって文様帯が区画され、斜めの刻みを持つ棒状の貼付文の周囲にもキャタピラ文が巡っている。34は刻みを持つ隆帯による曲線文が器面を分割し、内部にキャタピラ文と集合沈線文を充填する。35は半裁竹管状工具による集合沈線文である。

36～44は加曾利E I式古段階に伴う各種の土器である。36は無文の口縁部で、口端上に1条の沈線が巡り、外面に2本の隆帯が垂下する。

37は山形波状口縁で、口端上に1条の沈線が巡って、波頂部では沈線末端が小渦文となって突起化している。38は小波状口縁で、口縁直下に沈線と刻みを伴う隆帯による簡素な文様帯を持つ。地文はRの燃糸文である。

39は水平口縁で、隆帯と沈線による文様帯を持ち、弧状の突起を配する。頸部には平行沈線が巡り、胴部にはLの燃糸文を施文して、平行沈線の懸垂文が垂下する。

40は水平口縁で、口縁下に半裁竹管状工具による横位多段の平行沈線文を描き、頸部には刻みを伴う隆帯が巡って、これに沿って棒状工具先端による押し引き文を描いている。

41～43は縦位の隆帯と沈線による蛇腹状の文様を施文する土器である。41は横位の隆帯により二段の「たが」を形成する。43は頸部に無文帯を持つ。44は隆帯と沈線により多重の渦巻文を描く胴部で、曾利系の土器と考えられる。

45～64は加曾利E I式のキャリパー類深鉢で、口縁部文様帯である。45は波状口縁の波頂部に貫通孔を伴う突起を配し、左右に2本隆帯の弧線文が展開する。46は主文様の末端が口縁から垂下す

る小J字文と接続している。

47は隣り合う文様同士を、棒状工具の押圧を伴う隆帯で連繫している。49は口縁部の渦巻文から立ち上がる大型の中空突起である。

51・53・57・59は弧状の隆帯の接点に小渦巻文を配する繋ぎ弧文風の文様である。52は横走する隆帯の途中に小渦巻文を配する。

60は文様帯下端の区画と主文様との間を6本の隆帯で縦位に連結する。61は隣接するモチーフ間を、刻み隆帯で斜めに連繫している。

52・53・63～66は頸部無文帯を持つ。65は口縁部文様帯下端を区画する隆帯に交互刻突を施している。

67は胴上半部に最大径を持ち、頸部に向けて集束する特徴的な器形で、北関東の三原田式に類似する深鉢であろう。半裁竹管状工具の平行沈線文によって器面を多段に分帯している。地文はRの燃糸文である。

68～70は頸部の文様帯である。棒状工具の平行沈線文で上下を区画した間に1条の波状沈線文が巡る。68は文様帯内部に地文燃糸文を施文しない。71・72は平行沈線の下部に沿って波状沈線文が巡る。

73～76は半裁竹管文により文様を描く。73は2条の平行沈線が垂下する間に幅広の蛇行懸垂文を描き、右側の描線からJ字文が派生している。74は頸部付近の破片とみられ、多段の平行沈線による区画から縦位の平行沈線文が垂下する。

75・76は多重の平行沈線による曲線文が展開し、76では横位の区画を挟んで上下に文様が対置される。77はこれらに類似するが、棒状工具による曲線文である。沈線間の地文が磨り消されており、新しい時期の磨り消し連弧文の可能性もある。

78～88は隆帯による懸垂文を描く胴部である。1本ないし2本の隆帯による懸垂文と、1本隆帯の蛇行懸垂文を基本とするが、85では大きく弧状のカーブを描き、83・84では縦位の隆帯の途中に

小渦巻文を配する。78～80は頸部との境の区画帯がみられる。

89～97は地文のみの破片で、地文はほとんどがRの燃糸文である。96は羽状縄文を施文するが、RLの原体の回転方向を変えることで構成されている。97はLの燃糸文である。

98・99は底部付近の破片である。地文は98はL、R単節縦位回転、99はRL単節横位回転の縄文である。

100～104は密な集合沈線による文様を描く。100・101は半裁竹管状工具による集合沈線で、100は半円形の区画内部を埋める櫛歯文の一部であろう。102～104は懸垂文間に渦巻文を描くもので、馬高式に類似の胴部文様である。

105～118は浅鉢である。105は隆帯＋沈線により文様を描き、部分的に赤色顔料が残っている。106の頸部には交互刺突文の隆帯が巡る。

107～113は無文の口縁部で、多くは胴張りで頸部がくびれ、口縁直立ないし外屈している。113のみ内湾する口縁部である。

114～116・118は胴上半部の文様帯である。114は斜行する隆帯区画を扶んで縦位の集合沈線文を描く。上面に沈線が走る背割れの隆帯で、上下に刻みと交互刺突が共存している。

115は103・104に類似の渦巻文で、頸部に交互刺突の隆帯が巡る。116は幅広の隆沈線文による曲線的なモチーフで、時期が下る可能性がある。117は無文の胴下半部である。

119～121は土製円盤である。121は前期諸磯式の土器片を再利用している。122は滑車型の垂飾である。

石器 (第97図)

123は石鏃である。基部が直角に張り出す凸基の石鏃で、両側縁は直線的に成形されている。長さ1.9cm、幅1.5cm、厚さ0.25cm、重さ0.56gである。石材は黒曜石である。

124は磨製石斧である。断面定角型で、刃部を

破損後磨石として再利用されており、裏面には凹石として利用されたことを示す凹孔がみられる。

長さ12cm、幅4.3cm、厚さ2.8cm、重さ251.55gである。石材は砂岩である。

125～128は打製石斧である。125はやや胴長の分銅形で、背面に広く自然面を残し、一部に擦痕が観察される。腹面には打割面を残す。刃部は鈍角である。長さ10cm、幅5.2cm、厚さ2.3cm、重さ146.56gである。石材は黒色頁岩である。

126は撓形で、幅広で直線的な刃部を残している。長さ8.4cm、幅5.4cm、厚さ1.5cm、重さ69.26gである。石材はホルンフェルスである。

127は撓形で、背面に広く自然面を残し、一面に擦痕が観察され、磨石を再加工した可能性がある。長さ8.8cm、幅5.8cm、厚さ1.7cm、重さ89.73gである。石材は安山岩である。

128は短冊形で、やや左に湾曲している。背面に自然面を残し、腹面に打割面を残す。表裏ともに擦痕が観察されることから、磨石に転用されたものと考えられる。長さ9.1cm、幅4.5cm、厚さ1.4cm、重さ79.64gである。石材は頁岩である。

第9号住居跡 (第98・99図)

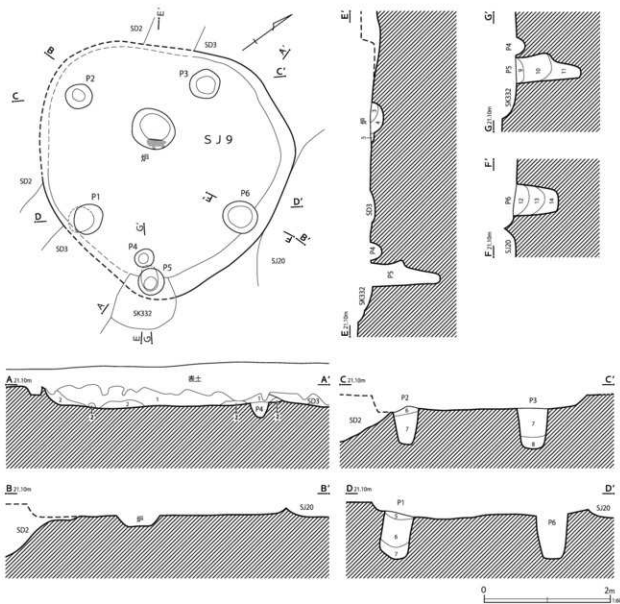
M-16グリッドに位置する。第2・3号溝跡に壊されており、第20号住居跡を壊している。また、第332号土壌とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

壁の約3分の1を切り合いにより失っているが、残存部分および柱穴配置等から、直径約4mの不整な隅丸五角形の住居跡と考えられる。

炉跡と、後述する出入り口施設との位置関係等から、主軸方向はN-35°-W付近に存在するものとみられる。

床面は平坦で、壁溝は検出されなかった。壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.29mである。

主軸線上奥壁寄りで炉跡を検出した。長径約70cm、深さ20cmの楕円形の地床炉で、床面中央



- S J 9
- 1 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量含む
- 2 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物少量含む 締まり良好
- S J 9 6'
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 焼土ブロック少量含む 締まり良好
- 4 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く 焼土ブロック若干含む 締まり良好
- 5 暗黄褐色土層 : ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子多く含む 締まり良好
- S J 9 Pit 1~3
- 6 暗褐色土層 : 細粒ロームブロック若干 焼土ブロック・炭化物少量含む 締まり良好
- 7 暗褐色土層 : 細粒ロームブロック微量 ローム粒子若干含む 締まり良好
- 8 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む 固く締まっている
- S J 9 Pit 5
- 9 暗褐色土層 : ローム粒子わずかに 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
- 10 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
- 11 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む (柱穴掘削時の再流入土か)
- 12 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 炭化物少量含む 締まり良好
- S J 9 Pit 6
- 13 暗褐色土層 : 焼土粒子少量含む
- 14 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子わずかに含む

第 98 図 第 9 号住居跡

第9表 第9号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	短径(cm)	ピットNo.	長径(cm)	短径(cm)	ピットNo.	長径(cm)	短径(cm)	ピットNo.	長径(cm)	短径(cm)
P1	50.0	91.0	P2	40.0	60.6	P3	48.0	67.0	P4	30.0	27.7
P6	56.0	72.1							P5	42.0	105.0

寄りの部分に良好な焼土の堆積がみられた。

床面上から6本のピットが検出された。これらのうちP1～3・6が主柱穴で、4本柱の上屋を構成するものと考えられる。主軸線南東側の壁近くにP4・5が存在し、これらが出入り口施設の痕跡であると考えられる。

覆土はほぼ単層で、遺物はプラン中央の中～下層を中心に少量出土している。

所属時期は加曽利EⅠ期と考えられる。

第9号住居跡出土遺物

土器 (第100・101図)

1・2は加曽利EⅠ式のキャリバー類深鉢である。

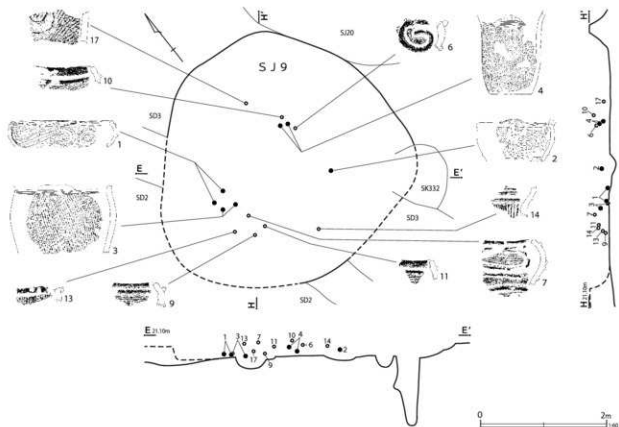
1は水平口縁の深鉢で、口縁部のみ残存する。

2本隆帯による横S字文が展開する。頸部には無文帯が存在するものとみられるが、隆帯等による区画は存在しない。地文はRの燃糸文で、横位回転で施文する。

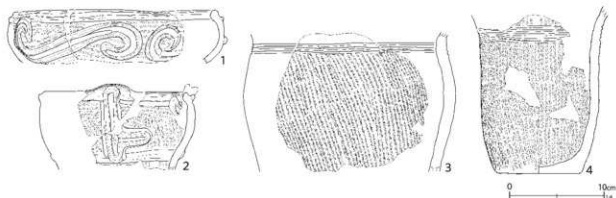
復元最大径は約23.3cm、現存高は約5.7cmである。胎土は少量の砂を含み、石英・黒雲母粒子が観察される。器壁は暗褐色である。焼成は良い。

2は小波状口縁で、波頂部から垂下した2本隆帯が、中段で「ト」の字形に分岐する。十字文の一種と考えられる。文様帯下端は1条の隆帯で区画され、頸部無文帯はみられない。地文はRの燃糸文で、口縁直下のみ横位、他は縦位回転で施文している。

復元最大径は約17cm、現存高は約9.1cmであ



第99図 第9号住居跡遺物出土状況



第100図 第9号住居跡出土遺物(1)

る。胎土はやや砂質で、金雲母を含む。器壁は外面茶褐色、内面暗褐色である。焼成は良い。

3・4はキャリバー類に伴う胴部と考えられる。3は頸部から胴下半部まで残存する。頸部に無文帯を持ち、胴部との境は3条の平行沈線により区画している。胴部の地文は複節の特異な撚糸文で、Lの撚糸をR巻きにした原体を用いて縦位回転で施文している。

復元最大径は約22.3cm、現存高は約14.7cmである。胎土はやや砂質である。器壁は外面暗茶褐色～暗橙色、内面黒色～暗褐色である。焼成は良い。胴下半部に被熱の痕跡が顕著である。

4は頸部から底部まで残存する。頸部に4条の平行沈線が巡り、無文帯は存在しない。地文はR縦位回転の撚糸文である。

復元最大径は約14.4cm、現存高は約17.6cmである。胎土は多量の砂、シルト、小礫を含む。器壁は外面黄橙色、暗灰褐色、内面灰褐色である。焼成はやや不良で、内面が著しく風化している。

5以下は破片資料である。

5は水平ないし緩やかな波状口縁の深鉢である。口縁から頸部付近まで残存する。胴上半部が「く」の字に張り出し、頸部にくびれを持つキャリバー形の器形と考えられる。口縁直下に無文帯を持ち、1条の沈線が巡る。平行沈線による横S字文を描く。地文はR縦位回転の撚糸文である。

6は扁平な隆帯によりJ字文を描く。

7～12は加曾利EⅠ式で、キャリバー類の深鉢口縁部である。いずれも水平口縁とみられる。

7は2本隆帯により横J字文を描くものと思われる。頸部に1条の隆帯が巡り、主文様との間が無文化する。8は小渦巻文を弧状の隆帯で連繋する繋ぎ弧文風のモチーフである。

9～12は口縁直下までの破片で、外面に1条の隆帯+沈線が巡る。地文はいずれも横位の撚糸文である。

13・14は口縁部文様帯下端を区画する隆帯である。13は3個1単位の交互刺突を施す。14は2本隆帯による区画である。

15・16は半裁竹管状工具による平行沈線で、頸部と胴部との間の区画とみられる。16は同種の平行沈線で胴部に幾何文を描く。

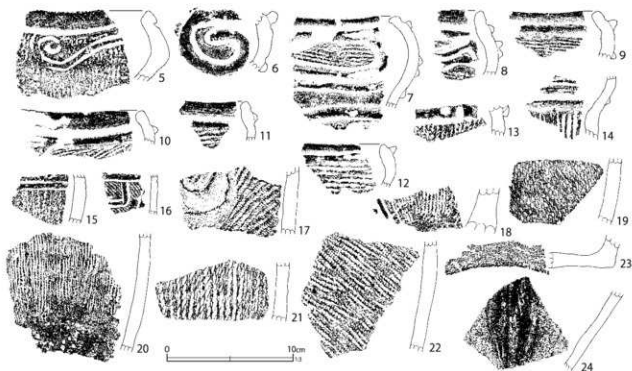
17は両側になぞりを加えた断面三角形の微隆起線によりJ字文を描くもので、後代のものである可能性がある。18は底部付近の破片で、隆帯により懸垂文が垂下する。

19～22は地文のみの胴部破片である。19・21はR、20はLの撚糸文を縦位回転で施文する。22はRL単節の縄文で、横位ないし右下がりに施文する。

23は深鉢の底部である。24は無文の胴下半部で、浅鉢と考えられる。

第10表 第10号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	44.0	66.2	P2	34.0	44.3	P3	26.0	19.3	P4	32.0	53.6	P5	34.0	71.6
P6	16.0	39.8	P7	22.0	51.8	P8	36.0	86.5	P9	42.0	48.6	P10	36.0	45.3
P11	30.0	45.5	P12	46.0	68.0	P13	36.0	71.8	P14	24.0	61.2	P15	30.0	47.3
P16	34.0	70.0	P17	26.0	50.0	P18	32.0	71.5	P19	46.0	64.0	P20	28.0	53.9



第101図 第9号住居跡出土遺物(2)

第10号住居跡 (第102～104図)

L-15・16、M-15・16グリッドに位置する。第7号住居跡・第2・3号溝に壊されている。

北西壁のすべてと南東壁の大半を失っているが、長径約5.4m、短径4.73mの隅丸長方形の住居跡と考えられる。主軸方向はN-26°-Wを指す。

壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.35mである。床面は平坦で、壁溝・ガ跡・出入り口施設は検出されなかった。

床面上から20本のピットが検出されたが、主柱穴は特定できなかった。同時期の他の住居跡にくらべ配置が密で、配置に規則性がみられないことから、別時期のピットが混在していることも考えられる。

覆土はほぼ単層で、遺物は遺構検出面付近から

多く出土した。所属時期は勝坂式Ⅲ式期と考えられる。

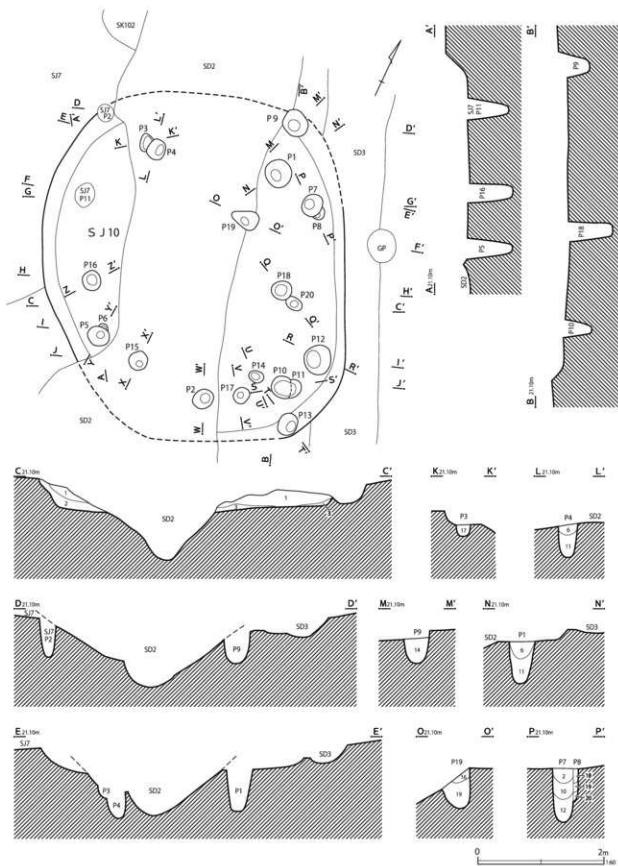
第10号住居跡出土遺物

土器 (第105・106図)

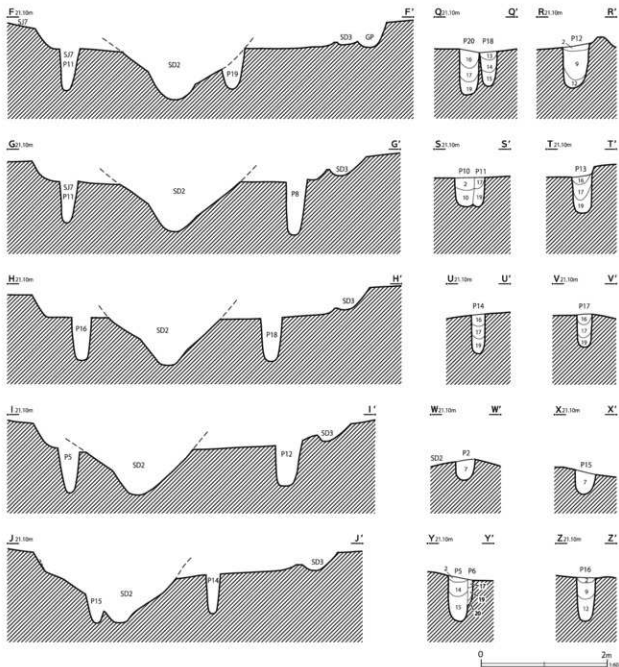
1は胴部に多段のくびれを持つ深鉢である。水平口縁上に半円形の突起を持ち、逆J字状の隆帯を貼り付けた上から斜位ないし矢羽根状の刻みを施す。

復元最大径は約16.9cm、現存高は約13cmである。胎土はシルト質である。外面黄橙色、内面暗灰黄褐色で、焼成はやや不良である。

2は円筒状の深鉢である。胴部中段に最大径を持つ樽形のプローションである。無文の折り返し口縁で、上下を平行沈線に区画された胴部文様帯を持つ。



第 102 图 第 10 号住居跡 (1)



S J 10

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子微量に含む 固く締まっている
- 2 暗黄褐色土層 : 壁面でロームブロック多く 内側で焼土粒子少量含む 固く締まっている
- 3 明茶褐色土層 : 暗褐色土粒少量 焼土粒子・炭化物粒子極わずかに含む 粘性・締まりやや強い
- 4 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
- 5 明茶褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子少量 黒色土粒子(押いたブラックバンド)わずかに含む
- 6 暗褐色土層 : 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
- 7 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む

- 8 黒褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
- 9 黒褐色土層 : 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
- 10 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
- 11 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子多く含む
- 12 極暗褐色土層 : ローム粒子わずかに 焼土粒子少量含む
- 13 黒褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
- 14 暗褐色土層 : 焼土粒子若干 炭化物わずかに含む
- 15 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
- 16 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
- 17 黒褐色土層 : 焼土粒子わずかに含む
- 18 黒褐色土層 : ローム粒子多く(掘削時の再流入土か) 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む

第103図 第10号住居跡(2)

交互刺突を伴う縦位の平行沈線により器面が長方形のパネル状に分割される。内部には対弧状の区画を設けて、上位の区画には渦巻文および三叉文を描き、下位の区画には集合沈線を充填して櫛歯文を構成する。

復元最大径は約12.7cm、現存高約21.3cmである。胎土は砂質である。外面暗灰褐色～暗橙色、内面暗灰褐色～橙色で、焼成はやや不良である。

3・4も円筒形の深鉢で、直線的に開いて口端が逆L字に内屈する類似の器形を持つ。

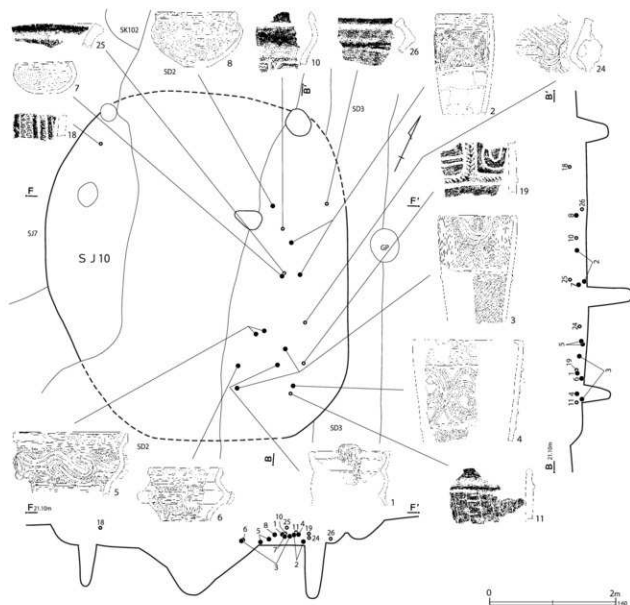
3は口縁部から胴部中段までがひとつの文様帯

となり、下端を矢羽根状の刻みを持つ隆帯で区画する。縦位の平行沈線で器面を長方形に分割し、内部に対弧状の区画が設けられ、それぞれ三叉文を配する。

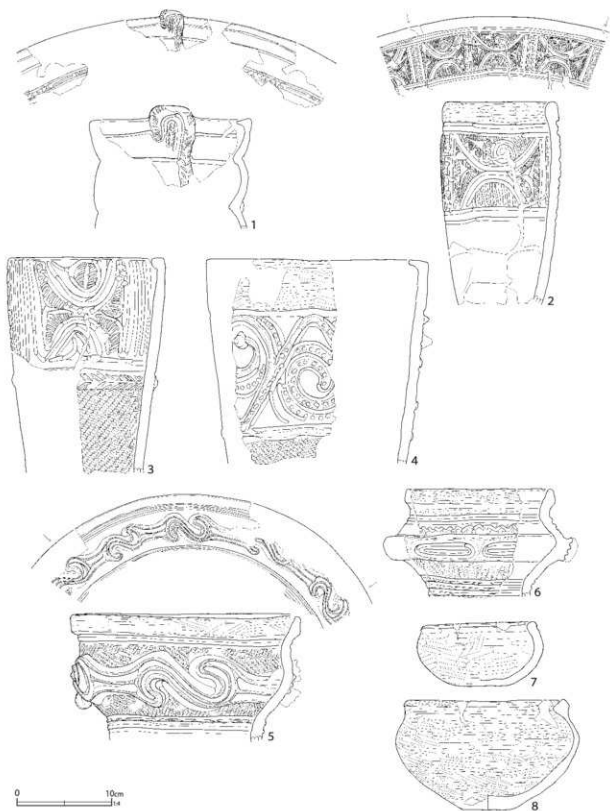
余白部分は細密な集合沈線や交互刺突文で埋められる。胴下半部にはRL単節縦位回転の縄文を施文する。

復元最大径は約16.7cm、現存高約22.3cmである。胎土は砂質で、黒雲母粒子を含む。器面は黄橙色～暗灰褐色である。焼成は比較的良好い。

4は口縁部に無文帯を持ち、胴上半部に文様帯



第104図 第10号住居跡遺物出土状況



第105图 第10号住居跡出土遺物(1)

を持って、下端を1条の隆帯で閉塞する。

上面に棒状工具の刺突を伴う隆帯によって文様を描く。鋸歯文をはさんで三角形の区画を対置し、内部に渦巻文を描いて、末端に突起が付される。胴下半部にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。

復元最大径は約23.4cm、現存高約21.7cmである。胎土は雲母粒子の混じる少量の砂と、赤褐色のシャモットを含む。外面灰黄褐色～暗灰褐色、内面黒灰褐色である。焼成は良い。

5・6は三原田式に類似的深鉢で、胴上半部が強く張り出し、頸部がくびれて口縁は直立ないし軽微に外反する。

5は両側になぞりを加えた背の高い隆帯によって文様を描く。胴上半部に横S字文を描き、隣接するモチーフは対弧状の隆帯で連繫される。文様帯の上下は平行沈線で区画され、頸部は無文である。地文はR L単節の縄文だが、0段多条の可能性がある。

復元最大径は約24.3cm、現存高約13.5cmである。胎土はややシルト質である。器面は暗橙色～灰黄褐色である。焼成は良い。

6は胴上半部が「く」の字に張り出し、ここに扁平な隆帯が巡る。隆帯上面には沈線により横楕円形の区画文を描き、隣り合う区画の接点が鱗状に張り出して6～8単位の小突起を形成する。

無文の口縁部との境は平行沈線で区画され、隆帯との境に小波状沈線が巡る。胴部中段のくびれ部分には多段の隆帯+沈線が巡る。地文はR L単節の縄文である。

復元最大径は約20.4cm、現存高約11.5cmである。胎土は黒雲母粒子混じる若干の砂を含む。器面は暗茶褐色である。焼成は良好である。

7は無文の浅鉢で、胴部中段に最大径をもち口縁内湾する碗(まり)形の器形である。口縁直下に幅広の凹線が巡る。胴部以下は無文である。

復元最大径は約13.3cm、現存高約6.8cmである。胎土は多量の砂とシルト・小礫を含む。器面は黄

橙色である。焼成はやや不良である。

8もややこれに類似するが、口唇断面が著しく肥厚して外面に稜を持ち、底部の直上に軽微なくびれを持つ。無文で、全面に入念な横位の研磨を施している。

復元最大径は約19.3cm、現存高約11.7cmである。胎土はややシルト質である。器壁は外面灰黄褐色～暗茶褐色で黒色付着物がみられ、内面は灰黄褐色～黒褐色である。焼成は良い。

9以下は破片資料である。

9は深鉢口縁部である。口唇断面肥厚して断面三角形となり、口端上に交互刺突文と斜位の集合沈線文を描く。頸部は無文である。

10は水平口縁の深鉢である。無文の折り返し口縁で、直下に最大径を持つ。頸部には刻みを伴う隆帯が巡り、胴部に同種の隆帯による区画文を描く。

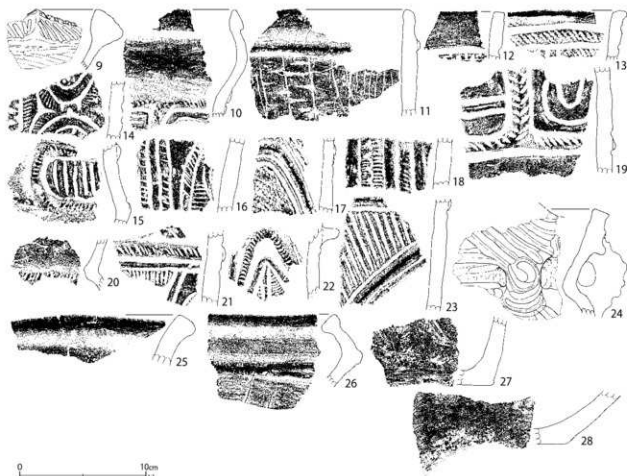
11～13も円筒型深鉢の口縁部である。11は口縁直下に無文帯を持ち、1条の隆帯が巡って、胴上半部に文様帯を持つ。繊細な沈線により文様を描き、交互の刻みを伴う平行沈線で器面を縦位に分割、内部に鋸歯文を描く。

12は折り返し口縁で、頸部に交互刻みの平行沈線が巡る。13は頸部に帯縄文が巡る。地文はR L単節横位回転の縄文である。

14～23は胴部の文様帯である。14は交互刻みの平行沈線で器面を縦位に分割し、対弧状の区画を描いて、左右に三叉文が配置され、余白を刻みや刺突文で充填する。15は横楕円形の区画文で、内部に縦位の集合沈線文を描く。

16は刻みを伴う平行沈線により14に類似の文様を描くものと思われる。17は鋸歯状の隆帯と半裁竹管状工具による平行沈線で器面を分割し、R L単節の縄文を充填する。

22は刻みを持つ隆帯による鋸歯状の区画文で、区画の頂点が突起化する。18は刻みを伴う隆帯が垂下し、これに沿って平行沈線と小波状沈線を描



第106図 第10号住居跡出土遺物(2)

く。

19は矢羽根状の刻みを持つ隆帯で器面を長方形に分割し、内部に沈線文を描く。20はくびれを持つ頸部に刻みを伴う隆帯が巡り、無文の口縁部に接続するものとみられる。23は隆帯による三角形の区画文の内部に集合沈線を充填する。

24は多条の隆帯で曲線文を描く土器で、第12号住居跡出土の第121図5に類似する。無文の頸部をはさんで上下に文様帯が配置しているものとみられ、両者の間に橋梁状の把手を配するが、この把手上にも同様の隆帯文様を描く。

25・26は浅鉢の口縁部で、25は外反、26は「く」の字に内屈する。27は深鉢底部、28は浅鉢の底部であろう。

第11号住居跡(第107～110図)

N・O-15グリッドに位置する。第155号土壌に壊されており、第154号土壌を壊している。

南東壁が調査区域外に存在するが、長径約4.8m、短径4.52mの隅丸長方形の住居跡と考えられる。主軸方向はN・32°・Wを指す。

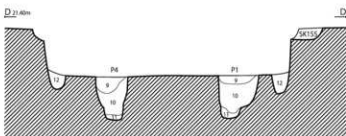
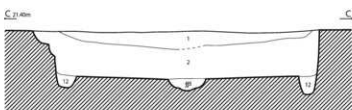
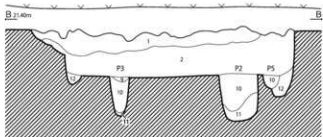
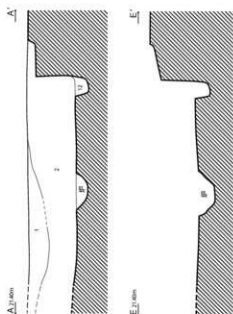
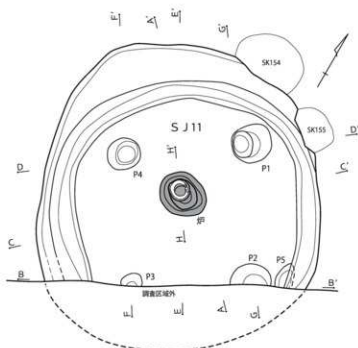
壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北西壁部分ではテラス状に二段に立ち上がり、南西壁部分では中段から傾斜が緩やかになっている。壁高は最も深い部分で1.01mである。

床面は平坦で、中央がやや下がっている。壁溝は調査した範囲では壁の直下をほぼ一巡する。

主軸線上やや奥壁寄りに灰跡を検出した。埋甕炉で、深鉢土器の口縁から胴上半部までの部分を

第11表 第11号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	64.0	67.5	P2	64.0	72.5	P3	32.0	62.5	P4	54.0	70.6	P5	?	23.2



S J 11

- | | |
|-----------|--|
| 1 暗褐色土層 | : ローム粒子 炭化物若干含む |
| 2 暗褐色土層 | : 粗粒ロームブロック若干 ローム粒子多く炭化物若干含む 固く締まっている |
| 3 暗褐色土層 | : 炭土粒子・炭化物若干含む |
| 4 暗褐色土層 | : 炭土ブロック・炭土粒子若干 炭化物多く含む |
| 5 暗褐色土層 | : ロームブロック・ローム粒子多く 焼土ブロック少量含む |
| 6 暗褐色土層 | : 粗粒ロームブロック・ローム粒子多く含む |
| 7 極暗褐色土層 | : ロームブロック・ローム粒子若干 炭土ブロック・炭化物多く含む 締まりなし |
| 8 極暗褐色土層 | : ロームブロック少量 ローム粒子若干 炭土粒子微量含む |
| 9 暗黄褐色土層 | : 粗粒ロームブロック若干 ローム粒子多く炭化物若干含む |
| 10 暗黄褐色土層 | : ローム粒子多く 炭化物若干含む |
| 11 暗黄褐色土層 | : 粗粒ロームブロック多く ローム粒子・炭化物若干含む 固く締まっている |
| 12 暗黄褐色土層 | : 粗粒ロームブロック若干 ローム粒子多く炭化物若干含む |

第 107 図 第 11 号住居跡 (1)

正位に埋設している。土器の周囲に一回り大きい掘りかたを検出した。東西方向に主軸を持つ不整楕円形で、長径80cm、短径66cm、深さは24cmで、土器の埋設位置よりさらに10cm深くなっていた。

床面上から5本のピットが検出された。これらのうちP1～4が主柱穴で、主軸を挟んで対象に配置されており、4本柱の上屋を構成するものと考えられる。出入り口施設は検出できなかったが、炉跡や柱穴との位置関係から、調査区域外に存在するものと考えられる。

覆土は上下2層からなる。遺物は上層と下層の境界面付近を中心に、多量に出土している。所属時期は加曾利EⅠ式期と考えられる。

第11号住居跡出土遺物

土器 (第111～113図)

1はが体土器である。加曾利EⅠ式のキャリバー類深鉢で、口縁から胴上半部まで残存する。口縁直下に比較的広い無文帯を持つ。

口縁部文様帯は上を小波状沈線、下を1条の隆

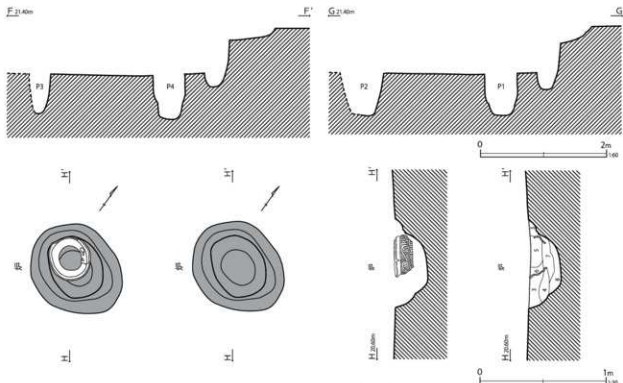
帯で区画し、内部に片流れの渦巻文が巡る。頸部無文帯を持たず、胴部との境に1条の沈線が巡る。地文はR縦位回転の擦糸文である。

復元最大径は約32.7cm、現存高は約12.7cmである。胎土はチャートや片岩の亜角礫を多く含む。器壁は外面暗茶褐色、内面暗橙色である。焼成は良い。

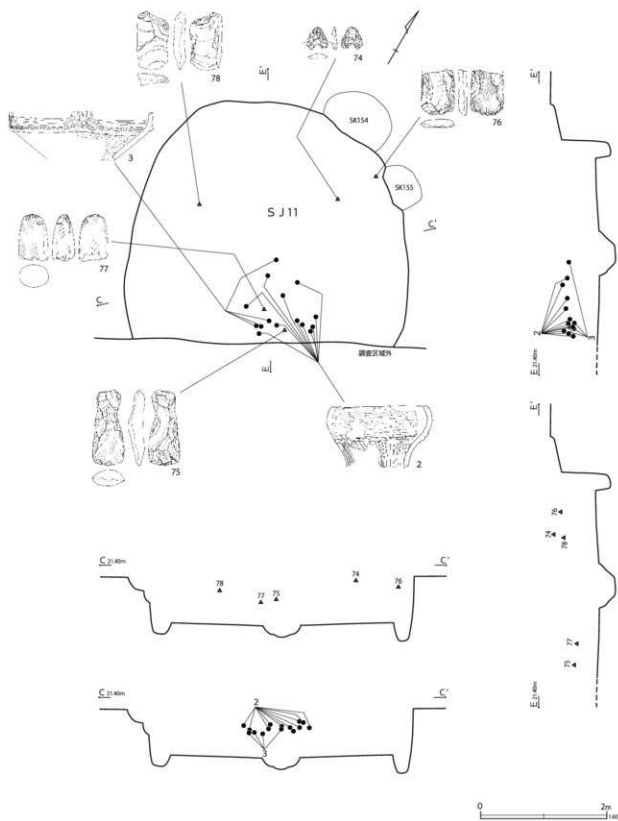
2は水平口縁の深鉢である。頸部が強く外反し、口縁が内湾するキャリバー形で、胴部中段までが残存する。口縁は無文で、頸部に2条の隆帯が巡り、胴部には縦位の集合沈線文を描き、2本隆帯の懸垂文が垂下する。

復元最大径は約22.5cm、現存高は約13cmである。胎土はシルト質である。器面は灰黄褐色で、焼成はやや不良である。

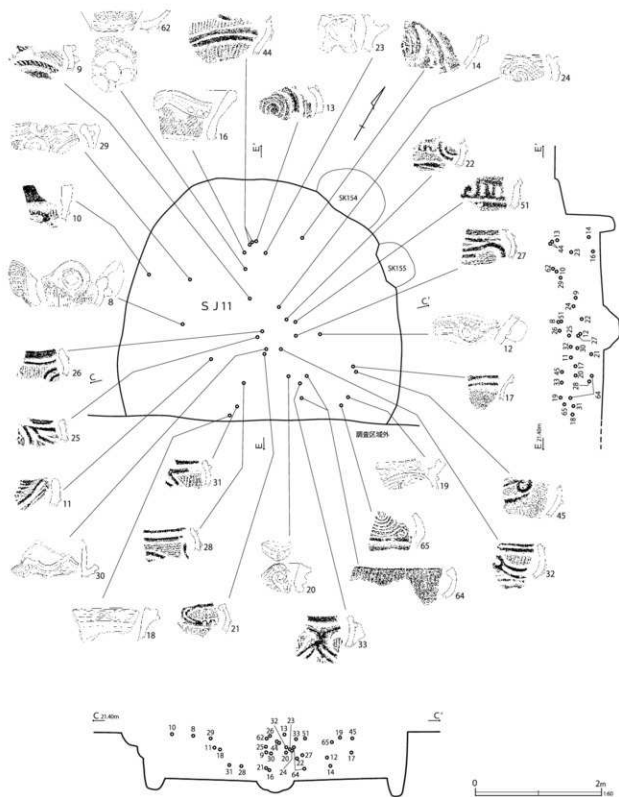
3は浅鉢で、胴部のみ残存する。胴上半部に文様帯を持ち、刻みを伴う隆帯で長方形の区画文を形成、これに沿って平行沈線文が巡る。胴下半部は無文である。



第108図 第11号住居跡(2)



第109図 第11号住居跡遺物出土状況(1)



第110図 第11号住居跡遺物出土状況(2)

復元最大径は約30.6cm、現存高は約10.7cmである。胎土は砂質である。器面は灰橙色で、黒斑がみられる。焼成は良好である。

4～69は破片資料である。

4は阿玉台式である。水平口縁で、隆帯の区画に沿って複列の角押し文が巡る。胎土には金雲母粒子が混入する。

5は勝坂Ⅰ式で、水平口縁に小突起を配し、頸部には2条の隆帯が巡って、対弧状の区切りによって横楕円形の区画文を形成している。器面には角押し文による文様を描く。

6・7は勝坂Ⅱ式であろう。6は波状口縁の直下に隆帯による区画を設けて小渦巻文を配し、区画内部には幅広の角押し文と半裁竹管状工具の押し引き文を施文する。

7は胴部で、鋸歯状の隆帯の下端を水平に区画

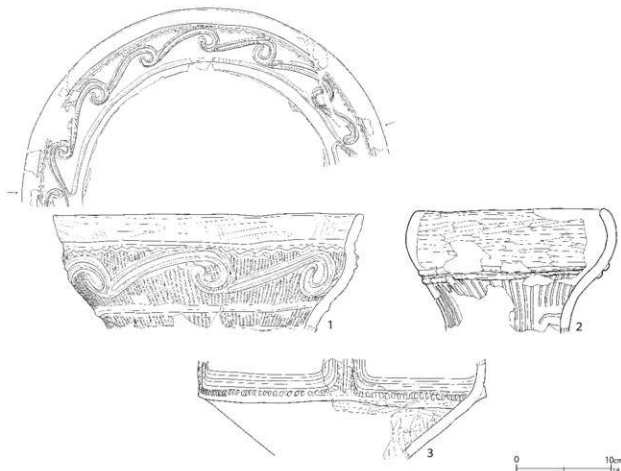
することで三角形の区画を形成し、隆帯に沿ってキャタピラ文と沈線文が巡る。

8～14は勝坂Ⅲ式である。刻みを伴う隆帯で文様を描き、これに沿ってキャタピラ文や爪型文が巡る。

8は口縁部で、正面中央に凹孔を持つボタン状の突起を付す。突起背面には鋸状工具先端による押し引き文列が並ぶ。口縁部外面には集合沈線文を施文する。

9も口縁部で、2条の隆帯の間に集合沈線文を描く。10は表裏に段を持つ無文の折り返し口縁で、胴部には刻みを持つ隆帯により区画文を描くものと思われる。

11は波状口縁で、鋸歯状の隆帯で器面を三角形に分割し、それぞれに沈線文を描く。12は口縁部文様帯下端の区画帯とみられ、隆帯による曲線文



第111図 第11号住居跡出土遺物(1)

の交点にボタン状の突起を配し、集合沈線文を施文する。頸部には無文帯が存在する。

13は内湾する口縁部直下の文様帯とみられ、隆帯による区画内部に沈線の渦巻文を描き、沈線間に篋状工具先端の刻みを充填する。14は隆帯による波頭文に沿ってキャタピラ文と、半裁竹管状工具先端による弧状の刺突列が巡る。

15～18は加曾利E I 式古段階に並行する中峠系の土器群と考えられる。15は内湾する深鉢口縁部で、口縁下に無文帯を持って胴部との境を1条の沈線で区画し、L縦位回転の柵糸文を施文する。16は波状口縁で、口縁直下に隆帯と幅広の沈線が巡り、波底部に3個1単位の指頭王痕を配する。頸部には平行沈線が巡り、RL単節縦位回転の縄文を施文する。

17はこれに似るが水平口縁の深鉢で、地文はRの柵糸文である。18は口縁直下の隆帯に背割れの紡錘形の突起が巡る。頸部は無文である。

19～39は加曾利E I 式で、キャリバー類深鉢の口縁部である。19は中空突起に接続する口縁部である。20は波状口縁の波頂部に付される小突起で、全面および上面に小渦巻文を描く。

21は横J字文に沿って交互刺突文を配する。22は横S字文の末端を交互刺突の隆帯で連繫するものと考えられる。

23は中空突起の一部で、中央に円孔が穿たれ、上面に渦巻文を描く。29は同種の中空突起の剥落した部分であろう。30は前面および両側面に円孔を持つ箱形の突起と考えられる。

主文様は、22・24～28等は横S字文か、これに類似する渦巻文とみられるが、31～33等では弧状の隆帯の接点に小渦巻文を配する繋ぎ弧モチーフとなっている。35は上部の隆帯区画と主文様を縦位の3本隆帯で連結する。

40～45は胴上半部の破片で、口縁部文様帯の一部である。いずれも主文様の一部と、文様帯下端の区画帯をみることができる。45は主文様から下

が無文化し、区画帯が主文様と融合して失われている。

46は半裁竹管文による文様を描く。47～50は同種の深鉢の頸部で、49・50には頸部無文帯が存在する。51は文様帯下端の区画と主文様を数本の隆帯で縦位に連結し、小渦巻文を配する。やや時期が下る可能性があり、また浅鉢の可能性もある。

52～59は胴部である。うち52～56は隆帯による懸垂文を描き、一部で曲線的なモチーフが派生する。53は大柄の渦巻文の末端部分、54は剣先文の一種であろう。

57～59は半裁竹管による平行沈線文で懸垂文や蛇行懸垂文を描く。

60・61は底部である。2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文を交互に配する。62は台付きの深鉢で、脚台部の四方に円孔が穿たれる。

63～70は浅鉢である。63は「く」の字に内屈する口縁の外面に文様帯を配し、半裁竹管状工具の押し引き文が巡る。65は胴上半部に文様帯を持つもので、沈線による密な渦巻文を描く。66は隆帯による区画文である。

70～73は土製円盤である。71は前期の土器片を再利用している。

石器 (第114図)

74は凹基の石鎌である。体部が短く先端部は鈍角で、再生品の可能性もある。腹面に主要剥離面を残している。長さ1.8cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ0.87gである。石材は黒曜石である。

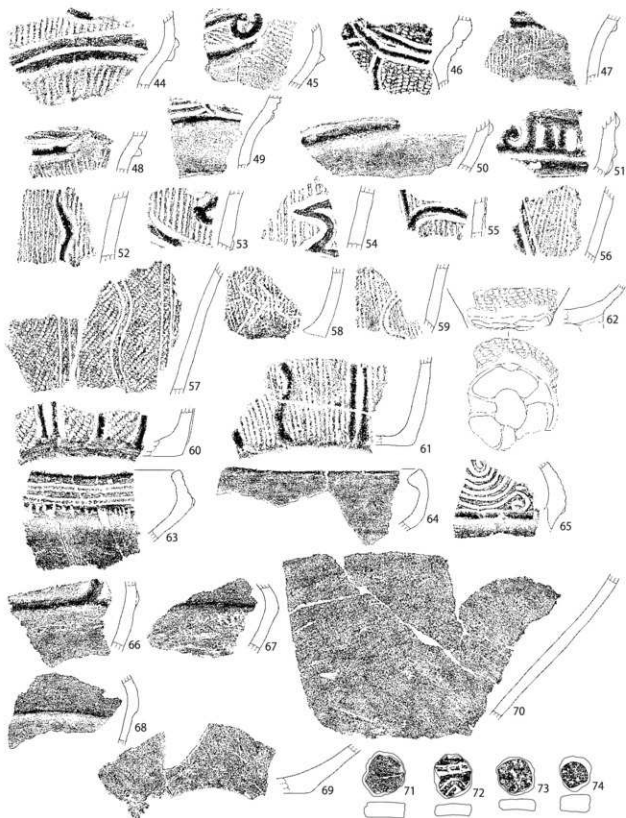
75・76は打製石斧である。

75は短冊形で、中央からやや基部寄りにくびれを持っている。刃部背面側に広く残る自然面には擦痕が観察され、磨石を再加工した可能性がある。腹面側に打割面が存在する。長さ12.2cm、幅5cm、厚さ2.5cm、重さ147.72gである。石材は砂岩である。

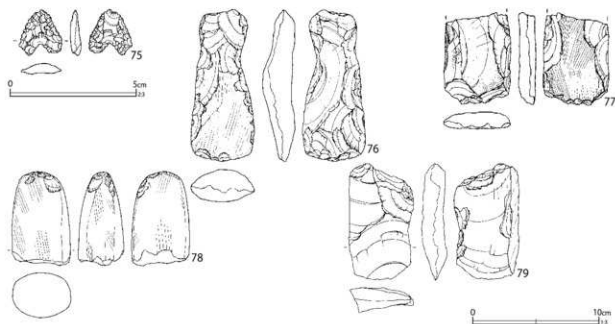
76は刃部のみ残存するが、短冊形であろう。背面に打割面が残り、腹面側に自然面が残るが、や



第112图 第11号住居跡出土遺物(2)



第113图 第11号住居跡出土遺物(3)



第114図 第11号住居跡出土遺物(4)

はり一面に擦痕が残されている。また、背面側の剥離面にも一部擦痕が及んでおり、その再使用のありかたは様ではない。長さ7.4cm、幅5.2cm、厚さ1.4cm、重さ80.01gである。石材は粘板岩である。

77は磨製石斧と考えたが、磨石の可能性もある。刃部を欠損し、断面は丸みを帯びた定角型、基部には細かな剥離が集中している。長さ7.5cm、幅4.6cm、厚さ3.6cm、重さ194.1gである。石材は砂岩である。

78は礫器である。縦長の剥片の両側縁および上部に簡単な調整加工を施している。左側縁には節理面を残している。長さ6.9cm、幅3.8cm、厚1.5cm、重さ45.56gである。石材はホルンフェルスである。

第12号住居跡 (第115～120図)

M・N・11・12グリッドに位置する。

長径5.44m、短径4.95mの楕円形の住居跡で、主軸方向はN・50° - Wを指す。壁はすり鉢状に立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.52mである。床面は平坦で東に向かってごく緩やかに傾斜して

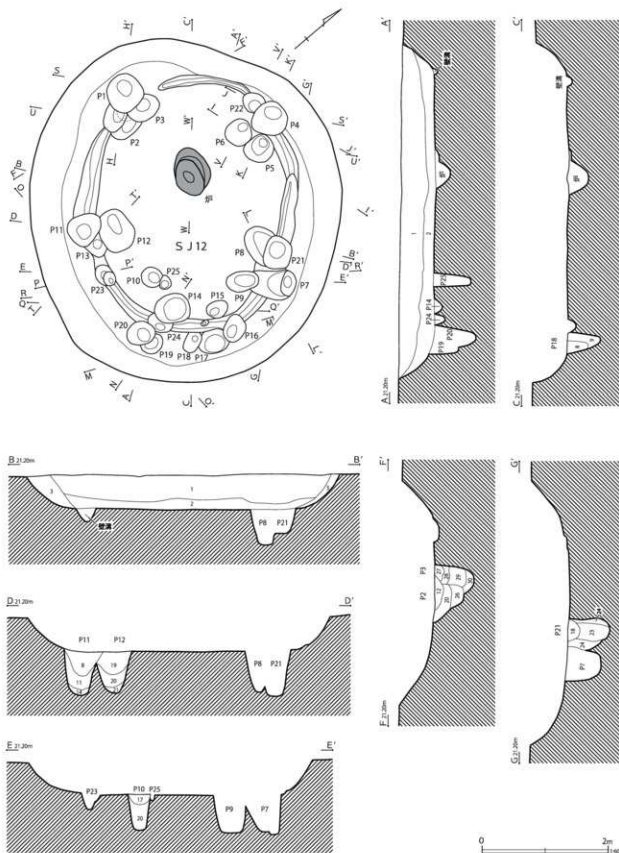
いる。壁溝は壁から若干離れて一巡している。

主軸線上やや奥壁寄りで炉跡を検出した。楕円形の地床炉だが、覆土中から浅鉢土器の大破片がまとまって出土しており、埋甕がない土器片囲いがであった可能性が高い。炉の掘りかた部分の規模は長径77cm、短径55cm、深さ34cmである。主軸方向はN・70° - Wを指す。

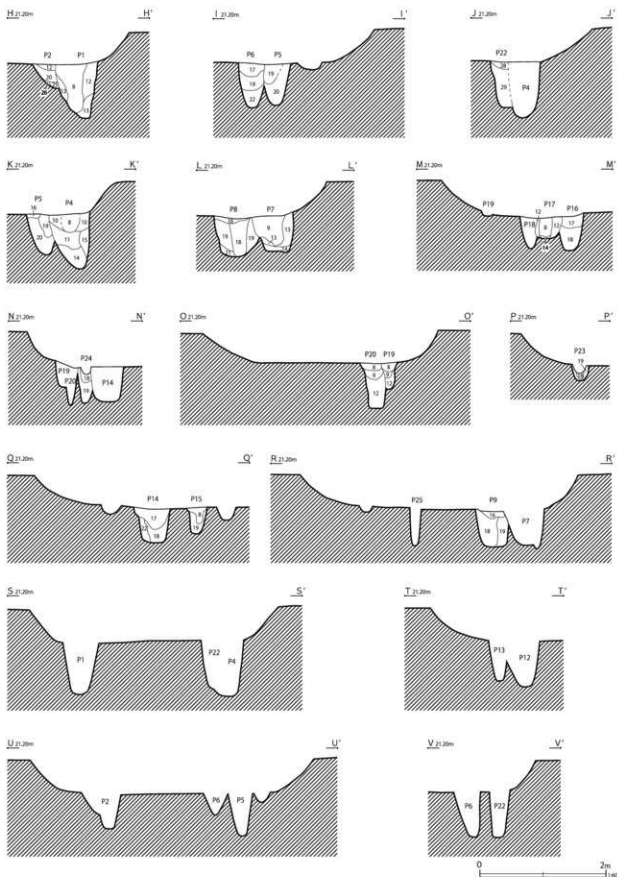
床面上から25本のビットが検出された。これらのうちP1～3、P4～6・22、P7～9・21、P11～13が主柱穴となって4本柱の上屋を構成し、さらに上屋の建て替えに伴う3～4時期の変遷が存在するものと考えられる。

各地点における柱穴のすべての変遷を土層観察の結果によって確定することはできなかったが、P1・4・7・11が最も新しい段階の主柱穴であったと考えられる。また、検出された柱穴のほとんどが壁溝と重複することから、古い覆土を持つものなかで壁溝よりも内側に位置するP3・5・8・(9)・12等が最古段階に属する可能性がある。

同様の理由から、壁溝は比較的古い段階の上屋



第115图 第12号住居跡(1)



第 116 图 第 12 号住居迹 (2)

第12表 第12号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長さ(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長さ(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長さ(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長さ(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長さ(cm)	深さ(cm)
P1	96.0	93.8	P2	?	51.4	P3	52.0	62.1	P4	58.0	89.6	P5	46.0	59.8
P6	42.0	75.8	P7	(60.0)	73.1	P8	50.0	65.8	P9	52.0	60.5	P10	32.0	57.0
P11	56.0	75.8	P12	66.0	70.7	P13	(40.0)	59.9	P14	58.0	55.3	P15	34.0	39.4
P16	48.0	60.2	P17	50.0	42.8	P18	38.0	51.1	P19	36.0	44.2	P20	46.0	77.6
P21	52.0	72.7	P22	32.0	75.3	P23	38.0	43.2	P24	40.0	63.1	P25	22.0	59.5

に伴ったものと考えられ、建て替え(拡張)に伴って壁溝を持たない形態へと変遷していったものと考えられる。

主軸線上南東側の壁近くにP14~20・24が集中している。これらのピットは重複が著しいが、主軸線を挟んで左右に配置されているように思われ、これが入り口施設の痕跡と考えられる。ピットの共時関係や変遷は検証困難だが、P15・17~20の覆土は最新段階とした主柱穴のものと共通している。

覆土は上下2層からなり、遺物は主に上層から

出土している。所属時期は加曾利E I 式期と考えられる。

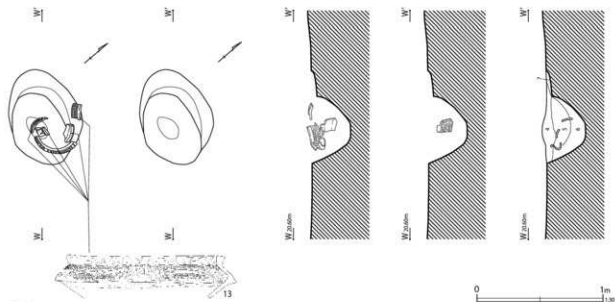
第12号住居跡出土遺物

土器 (第121~124図)

1・2は勝坂系の土器で、円筒形の小型深鉢である。

1は水平口縁で、4単位の小突起を配する。口縁から胴部中段までが一続きの文様帯となっている。

胴下半部に斜めの刻みを伴う隆帯による区画が設けられ、同種の隆帯で器面を縦位に分割して長



S J 12

- | | | | |
|----------|---|-----------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色土層 | : 細粒ロームブロック多く 炭化物若干含む | 15 暗黄褐色土層 | : ローム粒子多量含む |
| 2 暗褐色土層 | : 細粒ロームブロック・炭化物若干含む | 16 暗褐色土層 | : ロームブロック多量含む 固く締まっている |
| 3 暗黄褐色土層 | : 細粒ロームブロック・ローム粒子若干 炭化物少量含む | 17 暗褐色土層 | : 粗粒ロームブロック少量 細粒ロームブロック若干 炭化物少量含む |
| 4 暗褐色土層 | : ロームブロック 焼土ブロック若干含む | 18 暗褐色土層 | : 粗粒ロームブロック・ローム粒子若干含む |
| 5 暗褐色土層 | : ロームブロック多く 粗粒焼土ブロック若干 焼土粒子多く含む | 19 暗褐色土層 | : 粗粒ロームブロック少量 ローム粒子若干含む |
| 6 暗褐色土層 | : ロームブロック多く 焼土ブロック若干含む 固く締まっている | 20 暗褐色土層 | : 細粒ロームブロック・ローム粒子若干含む |
| 7 暗褐色土層 | : ロームブロック少量 焼土粒子少量含む | 21 暗褐色土層 | : ロームブロック多量含む 固く締まっている |
| 8 暗褐色土層 | : 細粒ロームブロックやや多く 炭化物少量含む | 22 暗黄褐色土層 | : ローム粒子多量含む |
| 9 暗褐色土層 | : 粗粒ロームブロック少量 細粒ロームブロック若干 炭化物少量含む | 23 暗褐色土層 | : 粗粒ロームブロック多量 ローム粒子若干含む |
| 10 暗褐色土層 | : 細粒ロームブロック・炭化物少量含む | 24 暗褐色土層 | : 粗粒ロームブロック少量 ローム粒子若干含む |
| 11 暗褐色土層 | : 細粒ロームブロック微量 炭化物少量含む | 25 暗褐色土層 | : 細粒ロームブロック少量含む |
| 12 暗褐色土層 | : 細粒ロームブロック微量 ローム粒子若干 炭化物少量含む | 26 暗褐色土層 | : 粗粒ロームブロック・ローム粒子若干含む |
| 13 暗褐色土層 | : 粗粒ロームブロック・細粒ロームブロック少量 ローム粒子若干 炭化物少量含む | 27 暗褐色土層 | : 細粒ロームブロック多く 炭化物少量含む |
| 14 暗褐色土層 | : ロームブロック多量含む 固く締まっている | 28 暗褐色土層 | : 粗粒ロームブロック・ローム粒子若干含む |
| | | 29 暗褐色土層 | : 細粒ロームブロック・ローム粒子若干含む |
| | | 30 暗褐色土層 | : ロームブロック多量含む 固く締まっている |

第117図 第12号住居跡(3)

方形のパネルを形成、さらに内部をY字やX字のモチーフで分割している。口縁直下の区画には渦巻文をはさんで三叉文が対置され、それ以外の区画には角押し文列や三叉文を描いている。

復元最大径は約12.4cm、現存高は約14.3cmである。胎土は極めて砂質である。器壁は外面暗褐色、内面暗褐色である。焼成は良い。

2はこれに類似するが沈線のみで文様を描き、文様帯の幅も狭い。明瞭な区画文は形成されず、縦位の平行沈線や曲線文等であいまいに分割された器面に、渦巻文や三叉文を配置している。文様帯下端は横位の平行沈線で区画され、胴下半部にはRの燃糸文を縦位回転で施文する。

復元最大径は約17.7cm、現存高は約11.3cmである。胎土は少量の砂を含む。器面は黒褐色である。焼成は良好である。

3は浮線と沈線による密な渦巻文を特徴とする土器である。水平口縁で、渦巻文を伴う大小の突起がそれぞれ一対ずつ対置している。

口縁部は波状の区画を挟んで渦巻文が対置され、頸部に無文帯を持つ。胴部にはY字の平行沈線文を描き、頸部との境は半裁竹管の平行沈線により区画している。地文はLの燃糸文である。

復元最大径は約17.8cm、現存高は約19.7cm(突起部分含む)である。胎土は多量の砂を含み、黒雲母粒子が混じる。器壁は外面暗茶褐色、内面黒灰褐色である。焼成は良い。

4は頸部にくびれを持つ水平口縁の深鉢である。口縁直下に隆帯が巡り、棒状工具側縁による押圧を施す。隆帯の直下には平行沈線による小波状文が巡る。胴部には平行沈線によるJ字＋十字文を描き、小波状文によって左右連繋している。地文はRの燃糸文で、縦位回転で施文する。

復元最大径は約14.8cm、現存高は約14.9cmである。胎土は砂粒と黒雲母粒子を含む。器壁は外面暗灰黄褐色で黒斑がみられ、内面は暗褐色である。焼成は良い。

5は水平口縁の深鉢で、断面三角形の隆帯により立体的な文様を描く。文様帯は上下二段に分帯し、中間に無文帯を持つ。胴上半部の文様帯は、3本隆帯による山形モチーフが上下対向し、中央を貫いて1条の隆帯が垂下する。隣り合うモチーフの間隙には小環状の貼付文を配する。

胴下半部の文様は4本隆帯による逆位の山形モチーフで、下端が背割れの隆帯によって横位連繋し、3個1単位の交互刻みを配する。

復元最大径は約38.5cm、現存高は約26.2cmである。胎土は黒雲母粒子・シャモット・少量の砂を含む。器面は暗茶褐色である。焼成は良い。

6～10・12は加曾利EⅠ式のキャリバー類深鉢である。

6は小型の深鉢である。水平口縁上に小突起を配する。頸部に1条の隆帯が巡り、無文帯は存在しない。口縁部の文様は横S字・十字文を基調としつつ変則的で、随所に3個1単位の交互刻みを配する。地文はR横位回転の燃糸文である。

復元最大径は約14.8cm、現存高は約6.6cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面暗黄褐色、内面暗灰黄褐色である。焼成は良い。

7も小突起を持つ水平口縁の深鉢である。6に類似の文様を持ち、頸部には無文帯が存在する。地文はR横位回転の燃糸文である。

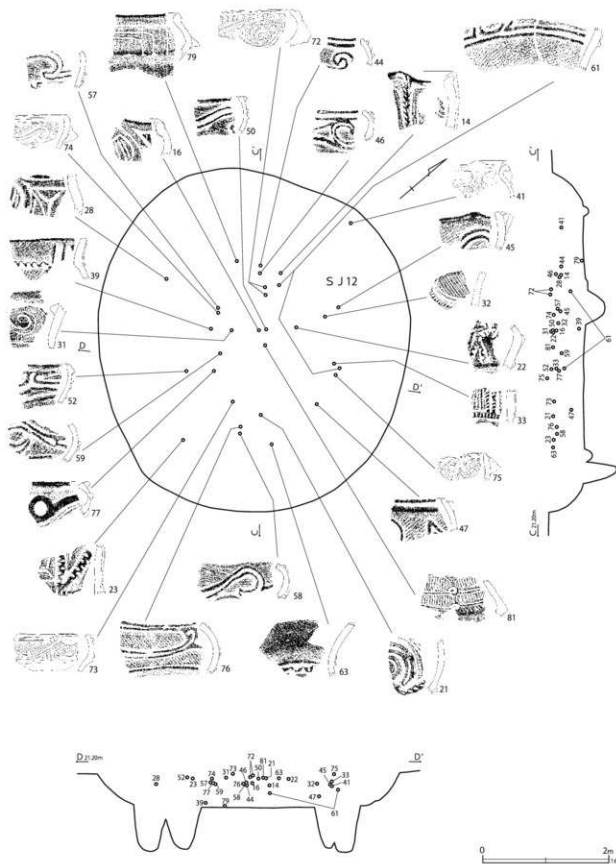
復元最大径は約24.6cm、現存高は約9.1cmである。胎土は黒雲母粒子と若干の砂を含む。器面は黒褐色である。焼成は良好である。

8は小型の深鉢で、水平口縁上に台形の突起を配する。口縁部の文様は横S字文で、3個1単位の刻みを配する。頸部には1条の隆帯が巡り、文様帯下端を区画している。地文はRの燃糸文で、口縁部は横位、頸部付近では縦位回転で施文する。頸部無文帯は存在しないが、施文方向を変えている点に文様帯の意識がうかがわれる。

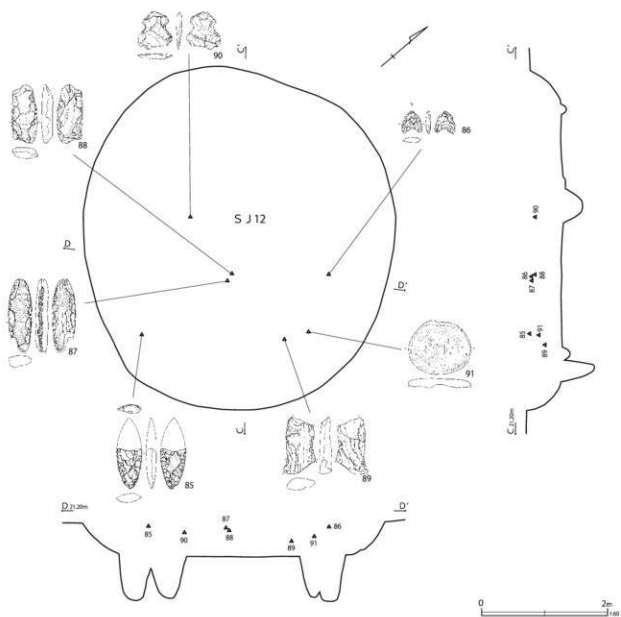
復元最大径は約14.8cm、現存高は約9.7cmである。胎土は若干の砂を含む。器面は暗褐色である。



第118图 第12号住居跡遺物出土状況(1)



第119图 第12号住居跡遺物出土状況(2)



第120図 第12号住居跡遺物出土状況(3)

焼成は良い。器壁は外面に被熱の痕跡がみられ風化している。

9は水平口縁の深鉢である。口縁部文様はほとんどが片流れの渦巻文で、1か所に十字文が介在する。文様帯下端は1条の隆帯で区画しており、頸部無文帯は存在しない。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約23.8cm、現存高は約13.8cmである。胎土は砂質である。器面は黒褐色である。焼成は良い。

10は9に類似の深鉢である。口縁部文様帯は横S字の末端を交互刻みの隆帯で横に連繫している。

文様帯下端は1条の隆帯で区画し、頸部無文帯は存在しない。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約29.1cm、現存高は約11.4cmである。胎土は極めて砂質である。器壁は外面暗橙色、内面暗褐色である。焼成は良い。

12は緩やかな波状口縁の深鉢である。口縁部は巻きの方の異なる渦巻文が対向して配置され、一方が口縁上にせり上がって小突起を形成する。

モチーフの接点から2本の隆帯が垂下して、文様帯下端をなす1条の隆帯へと接続する。頸部には無文帯を持つ。地文はR横位回転の燃糸文である。復元最大径は約48.4cm、現存高は約15.3cmである。胎土に亜角礫と砂粒を含む。器壁は外面黄橙色で黒斑がみられ、内面暗橙色である。焼成は良好である。

11は深鉢の胴部で、R縦位回転の燃糸文だけを施文する。復元最大径は約31.9cm、現存高は約17cmである。胎土は小礫と粗砂をやや多く含む。器面は暗黄橙色である。焼成は比較的良好。

13は9内から出土した浅鉢である。胴部中段に隆帯が巡って「く」の字に張り出し、頸部も屈曲して口縁は直立する。胴上半部に文様帯を持ち、沈線+隆帯による横長の長方形区画を描く。内部には横位の沈線文を描き、両端が渦を巻く。余白には斜行ないし矢羽根状の集合沈線を充填する。

復元最大径は約38.4cm、現存高は約9.2cmである。胎土は少量の砂を含み、黒雲母粒子が混じる。器面は暗茶褐色で、黒斑がみられる。焼成は良好である。

14～81は破片資料である。

14～37は勝坂Ⅲ式である。刻みを伴う隆帯によって区画された器面にカタピラ文や集合沈線文、三叉文等を描く。

14・15は口縁、21～33は胴部の文様帯である。34・35は頸部の無文帯である。上下の文様帯との境を、刻みを持つ隆帯で区画している。

38は口縁直下に隆帯+沈線を巡らせ、幅狭の文様帯を構成する。波状口縁の波頂部には縦位の突起が付され、2本隆帯の懸垂文が垂下する。

39は無文の水平口縁に棒状の浮文が付され、棒状工具の押圧を伴う隆帯で下端を区画する。40は口唇部外面に隆帯が巡って口端上に平坦面を作り出し、ここに平行沈線が巡っている。41・42は隆帯による曲線文の間に角押し文列を配する。

43～55は加曾利EⅠ式キャリパー類深鉢の口

縁部である。2本隆帯による横S字文や渦巻文を描く。47は剣先モチーフの一部であろう。43は主文様を構成する隆帯の一部に交互刺突文を付している。

56は口縁下に隆帯+沈線を巡らせた簡素な文様帯を持つ土器で、頸部に無文帯が存在する。

57～62は口縁部文様帯の一部である。57は文様帯下端の隆帯区画に交互刺突文を伴っている。61は区画と主文様が癒着している。

63・64は頸部無文帯と胴部の文様帯を隔てる隆帯で、いずれも交互刺突文がみられる。66は隆帯+平行沈線、67は半裁竹管状工具の集合沈線による横位の区画である。

68～71は半裁竹管状工具の平行沈線で器面を多段に分割し、さらに上下の区画を弧状に連結することで楕円形の区画を形成する。

72は浮線+沈線で密な渦巻文を描く口縁部で、波状の区画の下に円錐形の突起を配する。73～76は繋ぎ弧文の土器で、やや時代の下る可能性がある。

77～81は浅鉢である。77・79・81は胴上半部に文様帯を持つ。

82～84は土製円盤で、83は前期の土器片を再利用している。

石器 (第125図)

85は柳葉形の尖頭器である。胴部中段から先を欠失する。表裏からの細かな調整刻離により、左右対称の紡錘形をつくりだしている。長さ3.3cm、幅2.1cm、厚さ0.8cm、重さ5.06gである。石材は黒曜石である。

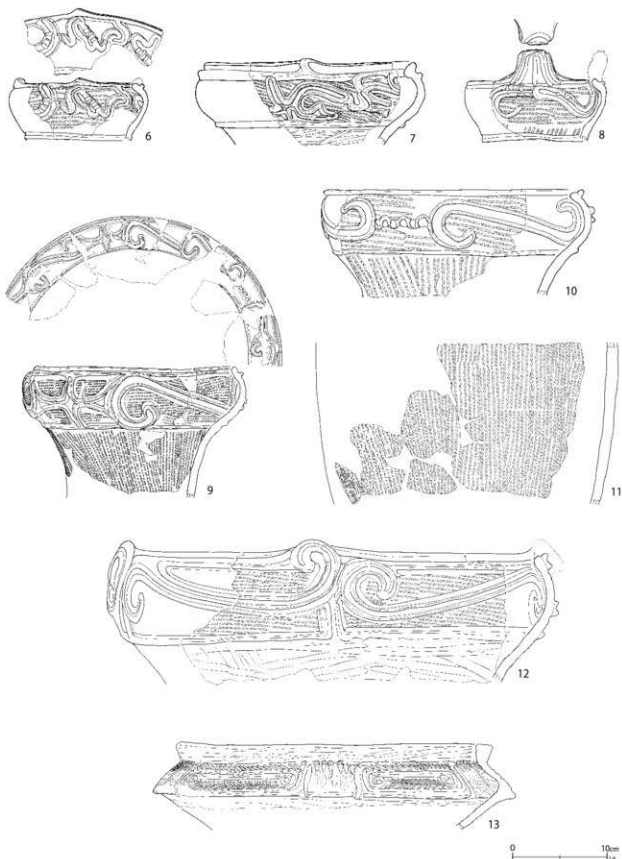
86は凹基の石鏃である。脚部に対し体部が短く、先端部も鈍角である。長さ1.8cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ0.9gである。石材は黒曜石である。

87～90は打製石斧である。

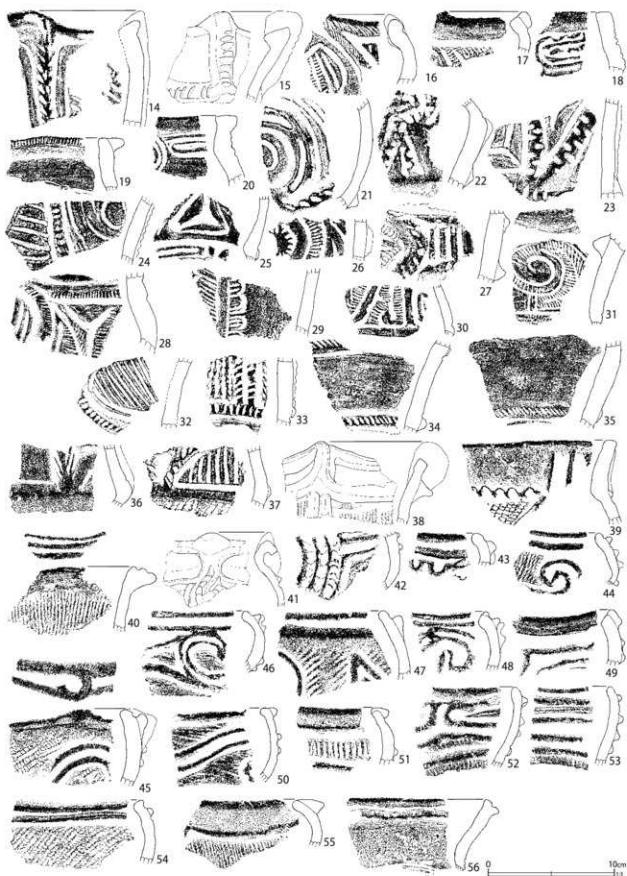
87は扁平棒状の磨石を再加工したものとみられる。両側縁に調整刻離がみられ、刃部は欠失す



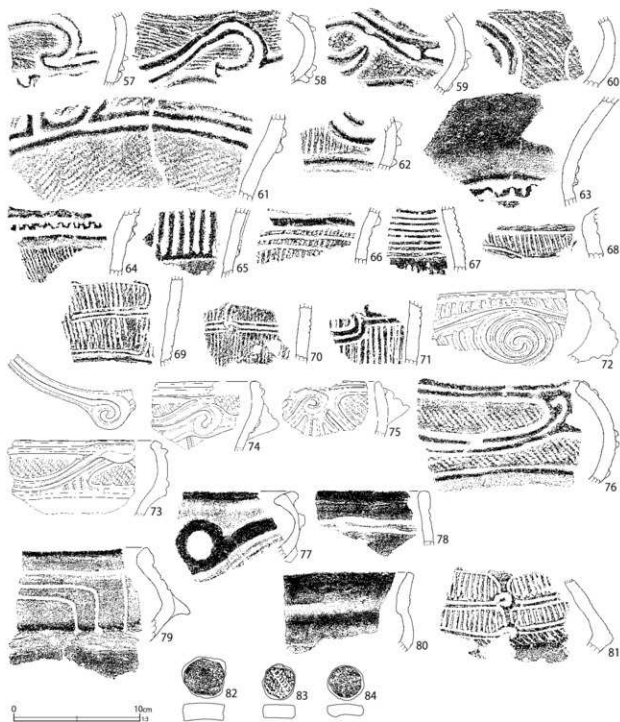
第121图 第12号住居跡出土遺物(1)



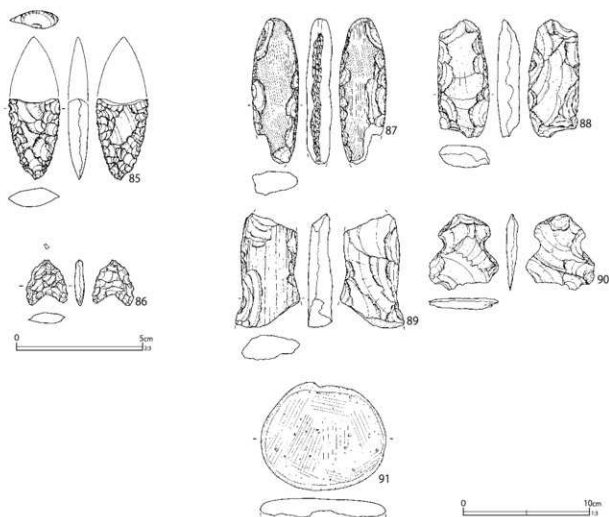
第 122 图 第 12 号住居跡出土遺物 (2)



第123图 第12号住居跡出土遺物(3)



第124图 第12号住居跡出土遺物(4)



第125図 第12号住居跡出土遺物(5)

る。長さ11.7cm、幅3.7cm、厚さ2cm、重さ119.82gである。石材は結晶片岩である。

88は短冊形で、刃部を折損している可能性がある。長さ9.5cm、幅4cm、厚さ1.8cm、重さ96.84gである。石材はホルンフェルスである。

89は刃部と基部を折損するが、撚形の石斧とみられる。背面に広く節理面を残している。長さ9.2cm、幅5cm、厚さ1.9cm、重さ96.46gである。石材は絹雲母片岩である。

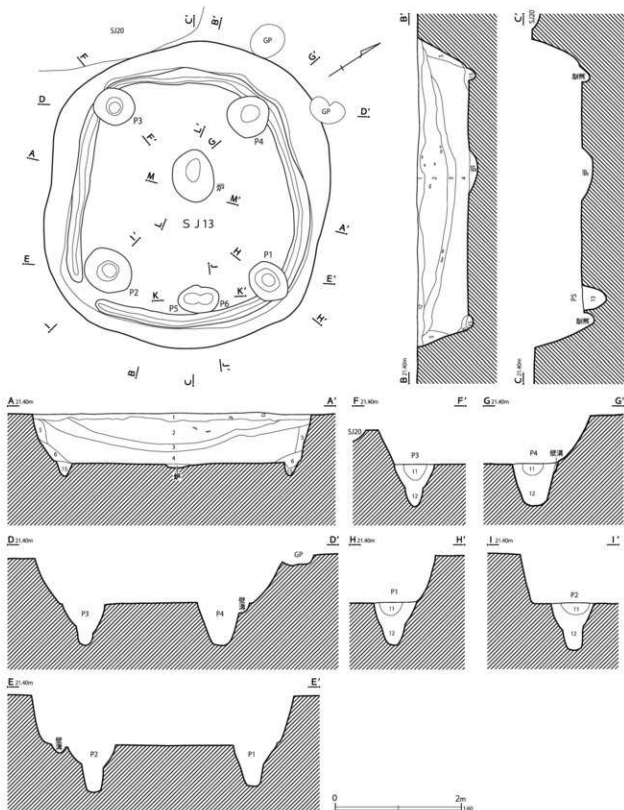
90は小型かつ極めて薄身の石斧である。細かな調整剥離はみられず、表裏からの大まかな剥離で分銅型のプロポジションをつくりだしている。長さ6.1cm、幅5.4cm、厚さ0.9cm、重さ25.64gである。石材は黒色頁岩である。

91は磨石である。扁平な自然石を整形せず使用しているが、裏面が剥落している。長さ9.9cm、幅8.7cm、厚さ1.5cm、重さ182.83gである。石材は安山岩である。

第13号住居跡（第126～131図）

L・M-16・17グリッドに位置する。第20号住居跡を壊している。

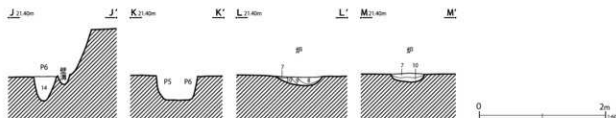
長径4.84m、短径4.53mの隅丸長方形の住居跡で、主軸方向はN-58°-Wを指す。壁は急角度で立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.75mであ



第126図 第13号住居跡（1）

第13表 第13号住居跡柱穴計測表

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	70.0	69.2	P2	78.0	72.8	P3	64.0	62.8	P4	66.0	66.0	P5	44.0	36.7
P6	40.0	37.4												



- S J 13
- 1 黒茶色土層 : 2層の上面が断片によって覆乱
 - 2 黒茶色土層 : ロームブロック(風化)・ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量含む 旧表土を主体とし土層片多く含む(旧表土流入) 周辺部分はややローム質 旧表土流入 締まりている
 - 3 茶褐色土層 : 4層から2層へ漸移層
 - 4 茶褐色土層 : ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量含む 締まり弱い 住居跡土層の再流入層 土層片あまり 含まない 周辺土はややローム質
 - 5 黄褐色土層 : 黄色のロームを主体とした風化層(ロームの風化層) 壁が崩壊した層
 - 6 茶褐色土層 : 粗粒ロームブロック少量 ロームブロック多く含む 風化したロームより成る
 - S J 13 9
 - 7 茶褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック少量含む 締まりなし
 - 8 茶褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子少量含む 締まりなし
 - 9 茶褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック少量 灰黒色硬化土多く含む 締まりなし
 - 10 茶褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック多く含む 締まりなし
 - S J 13 Pit 1 ~ 4
 - 11 黄褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量含む 旧表土主体
 - 12 黄褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量含む ※プラン確認時には床よりもローム風化質 床面上粒穴は 層土か? 黒色土を帯びたものとローム風化質に二分される ここはローム風化質
 - S J 13 Pit 5
 - 13 暗褐色土層 : ローム粒子・炭化物微量含む
 - S J 13 Pit 6
 - 14 暗黄褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量含む 締まっている
 - 15 茶褐色土層 : ロームブロック多く含む 風化したロームより成る

第127図 第13号住居跡(2)

る。壁の直下を壁溝がほぼ一巡している。

床面は平坦で、南東方向へと緩やかに傾斜している。主軸線上やや奥壁寄りで炉跡を検出した。地床がで、長径85cm、短径70cm、深さ19cm。やや下彫れの楕円形で、主軸方向は住居跡本体とほぼ共通している。

床面上から6本のビットが検出された。これらのうちP1～4が主柱穴と考えられる。主軸線上南東側の壁近くにはP5・6が存在し、これが入り口施設の痕跡と考えられる。

覆土は壁際の三角堆積土層を除けばほぼ上下2層からなり、遺物は主に上層から出土している。所属時期は加曽利EⅠ式期と考えられる。

第13号住居跡出土遺物

土器 (第132～136図)

1～6は加曽利EⅠ式のキャリパー類深鉢である。

1は山形波状口縁の深鉢である。口縁部文様帯は下端を1条の隆帯で区画し、頸部無文帯はみられない。

主文様は弧状やJ字状の単位文となっており、横の連繋は顕著ではない。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約23.2cm、現存高は約12.9cmである。胎土はややシルト質である。器壁は外面暗褐色、内面暗灰黄褐色である。焼成はやや不良である。

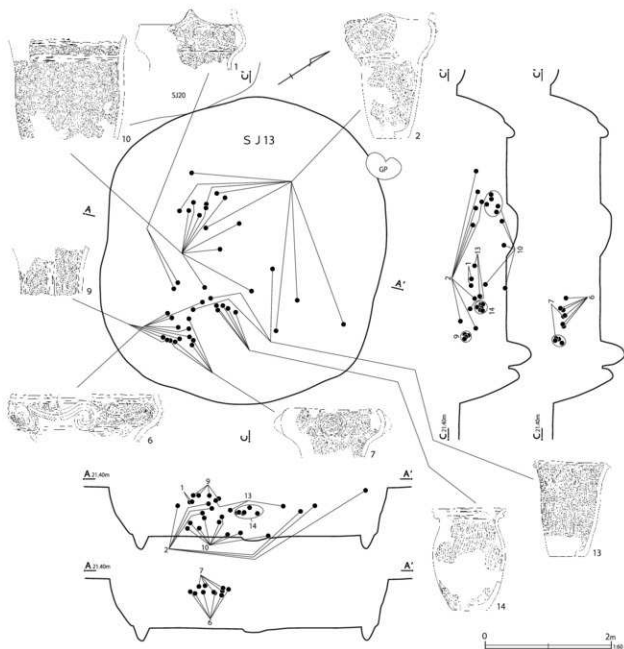
2は小波状口縁の深鉢である。横S字文が描かれ、文様帯下端を1条の隆帯で区画する。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約19.5cm、現存高は約26.2cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器壁は外面暗褐色、内面黒褐色である。焼成は比較的良好。

3は水平口縁の深鉢で、両側面および上面に円孔のある箱型の突起を持つ。口縁部文様帯には末端J字状の隆帯により直線的な文様が描かれる。

胴部中段には平行沈線による入り組み文が巡り、縦位の平行沈線が派生して一種の懸垂文となっている。

復元最大径は約27.8cm、現存高は約23.2cmで



第 128 図 第 13 号住居跡遺物出土状況 (1)

ある。胎土は多量の砂と小礫を含む。器面は暗橙色～暗茶褐色である。焼成は良い。

4は水平口縁の深鉢である。横S字文が横位の隆帯で連繫されるが、上方の隆帯区画との接点には小渦巻文が配されており、繋ぎ弧文に近い特徴があらわれている。

復元最大径は約32.3cm、現存高は約18.2cmである。胎土は多量の砂と黒雲母粒子を含む。器壁は外面暗灰黄褐色、内面灰黄褐色である。焼成は

やや不良である。

5は水平口縁の深鉢だが、直線的に開く胴部と内湾する口縁の間に強い段を持つ点特徴的である。口縁部文様帯は1か所のみ横S字文であり、他は全て片流れの渦巻文になっている。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約25.2cm、現存高は約19.7cmである。胎土はやや砂質である。器面は暗茶褐色～黒褐色である。焼成は良い。

6は水平口縁深鉢である。頸部無文帯を持つ。地文は縦位の集合沈線となり、主文様を構成する隆帯の間にも密に施文されている。

復元最大径は約33cm、現存高は約10.4cmである。胎土は白色粒子、雲母、シャモットを含む。器面は暗橙色～暗褐色である。焼成は良い。

8もキャリパー類深鉢とみられるが、口縁部および胴部中段以下を欠失する。交互刺突を伴う隆帯で文様が描かれ、文様帯下端は1条の隆帯で区画される。頸部無文帯はみられない。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約24.4cm、現存高は約10cmである。胎土は砂とチャート・結晶片岩等の亜角礫を含み、多量の黒雲母粒子を含む。器壁は外面黄橙色～暗褐色、内面暗褐色である。焼成は良い。外

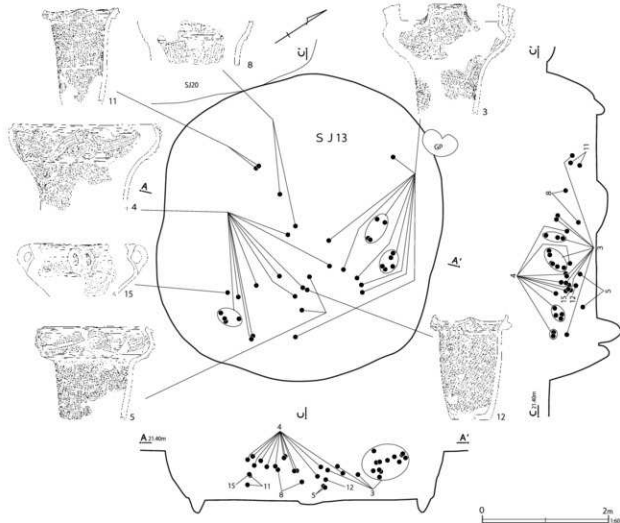
面は被熱の痕跡による風化が著しい。

7は浮線+沈線の密な渦巻文を描く土器である。水平口縁で、口縁下に円錐状の突起をおそらく4単位配し、渦巻文を描く。突起間には突起を伴わない渦巻文が配され、間隙には形骸化した櫛歯文が上下対向して描かれる。文様帯下端には稜が存在するが、区画帯は設けられない。地文はR縦位回転の燃糸文である。

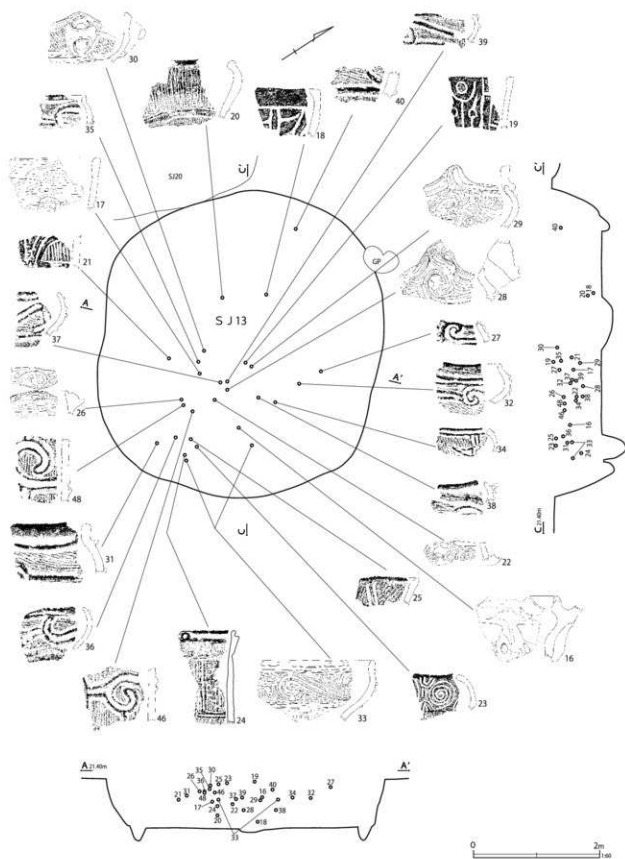
復元最大径は約24.8cm、現存高は約10.5cmである。胎土はやや砂質である。器壁は外面黒褐色、内面暗茶褐色である。焼成は良い。

9・10は深鉢胴部で、いずれもキャリパー類に伴うものであろう。

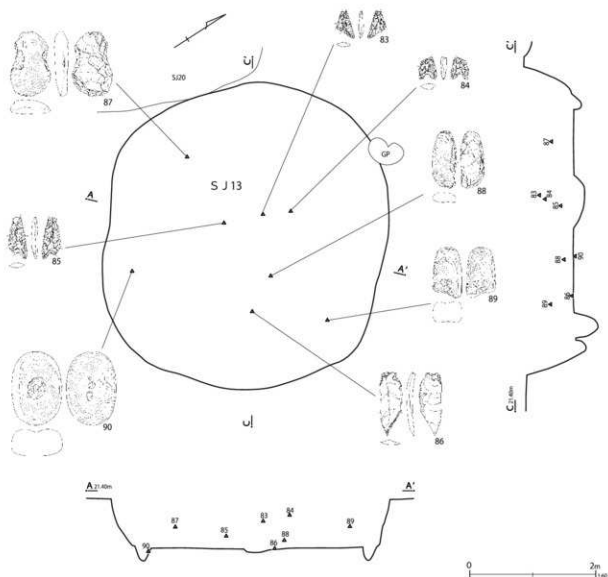
9は2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が交互に配される。地文はRL単節縦位回転の縄



第129図 第13号住居跡遺物出土状況(2)



第 130 图 第 13 号住居跡遺物出土状況 (3)



第 131 図 第 13 号住居跡遺物出土状況 (4)

文である。

復元最大径は約16.2cm、現存高は約10.5cmである。胎土は多量の砂・シルトを含む。器壁は外面灰橙色～暗灰褐色、内面灰黄褐色～黒褐色である。焼成はやや不良である。外面下方に被熱の痕跡がみられる。

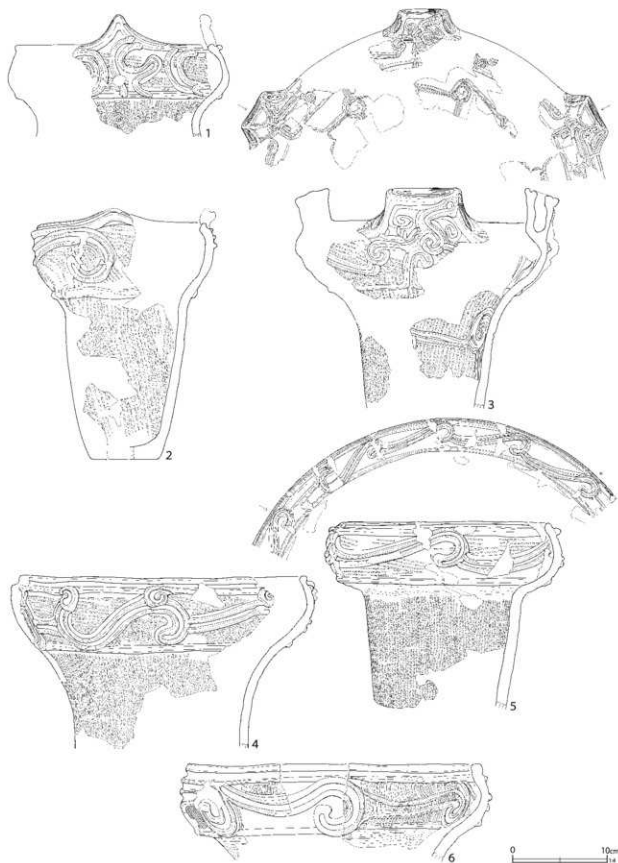
10は胴上半部に文様帯を持つ。上下を半裁竹管文の平行沈線に区画し、内部に波状文が巡る。懸垂文はみられない。地文はRの燃糸文である。

復元最大径は約14.8cm、現存高は約21.9cmで

ある。胎土は砂質、赤褐色シャモットを含む。器壁は外面暗灰褐色～灰橙色、内面灰橙色である。焼成は比較的良好。

11～14は、口縁直下に隆帯+沈線による幅狭の文様帯を持つ小型の深鉢である。11～13は胴部から口縁まで直線的に開くが、14は頸部にくびれを持つ胴張りの器形である。

11は緩やかな4単位の波状口縁で、これに対応して口縁外面の隆帯が4単位の波頭文を描く。波底部には弧状の小突起が付される。胴部にはRの



第 132 图 第 13 号住居跡出土遺物 (1)

燃糸文が縦位回転で施文される。

復元最大径は約16.1cm、現存高は約20.4cmである。胎土は多量の砂と小礫を含む。器壁は外面橙色～暗褐色、内面灰黄褐色～暗褐色である。焼成はやや不良である。外面下方に被熱による風化がみられる。

12は水平口縁上に4単位の小突起が配され、小渦巻文が描かれる。口縁下の隆帯には交互押圧が施され、小波状となる。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約17.1cm、現存高は約22cmである。胎土は砂質である。器壁は外面橙色～黒褐色、内面黒褐色である。焼成はやや良い。

13は水平口縁の深鉢である。口縁直下の隆帯には棒状工具側縁の押圧が施される。復元最大径は約16.2cm、現存高は約20.2cmである。胎土は砂質で、黒雲母粒子と海綿骨針が混じる。器面は灰黄褐色～黒灰褐色である。焼成はやや不良である。

14は突起や刺突等の装飾を持たない。地文はRの燃糸文が縦位回転で施文される。復元最大径は約15.6cm、現存高は約21.5cmである。胎土は砂質である。器壁は外面黄褐色～暗灰褐色、内面暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

15は浅鉢である。胴部中段が「く」の字に張り出し、頸部にくびれを持って口縁外反する。文様を持たず、頸部に横位の貫通孔を持つ眼鏡状突起を配する。

復元最大径は約27.4cm、現存高は約11.1cmである。胎土はやや砂質で、チャート等の重礫が混じる。器壁は外面灰黄褐色～暗褐色、内面暗褐色～暗褐色である。焼成は良い。

16～76は破片資料である。

16～21は勝坂式である。16は二又の山形波状口縁で、無文の口縁部に円孔を伴う突起が付される。17・18は無文の口縁部を持つ円筒形の深鉢である。17の胴部には2本隆帯による縦位の区画がみられ、18の胴部には沈線による対向三又文が

みられる。

19は口縁部から胴部まで一帯の文様帯を持ち、沈線文が描かれる。20は内湾する口縁部で、キャタピラ文により長方形の区画を構成し、縦位の集合沈線文が充填される。頸部には刻みを伴う隆帯が巡る。21は半円形の隆帯区画内部に集合沈線文を充填する櫛歯文である。22は半裁竹管の平行沈線による縦横の区画と交互刺突文がみられる。

22・23は沈線による密な渦巻文を描く土器で、中峠～加曾利E I式に伴うものであろう。22は口縁上に貫通孔を持つ眼鏡状の突起が付され、左右に渦巻文が描かれる。23は隣り合う渦巻文の隙間に形骸化した櫛歯文が描かれる土器で、若干器形は異なるが復元個体7に類似する。

24は口縁直下に1条の沈線が巡り、円孔を伴うボタン状の貼付文が付される。以下、口縁部に無文帯を持ち、胴部には半裁竹管の区画が描かれて交互刺突が施される。地文はRの燃糸文である。

25は水平口縁で、縦位の平行沈線が描かれる。地文はR L単節縦位回転の縄文である。26は口端上に横S字文が描かれる。27は「く」の字に内屈する口縁上に隆帯による渦巻文が描かれる。いずれも加曾利E I式に伴うものであろう。

28～39は加曾利E I式でキャリバー類深鉢の口縁部である。28は中空突起で、随所に3個1単位の交互刻みが配される。29は扁平な山形突起である。30は横位の橋梁状突起である。

32・33は口縁直下に比較的に広い無文帯を持ち、32は「く」の字に屈曲して外屈する。33の口縁部文様帯は、隣り合う横S字モチーフの末端を対弧状の隆帯で連繫する。

35は小渦巻文に剣先状モチーフが付される。36・37は頸部無文帯を持つが、36は横S字文と文様帯下端の隆帯との間も無文化している。39は渦巻文直上の隆帯が突起化している。

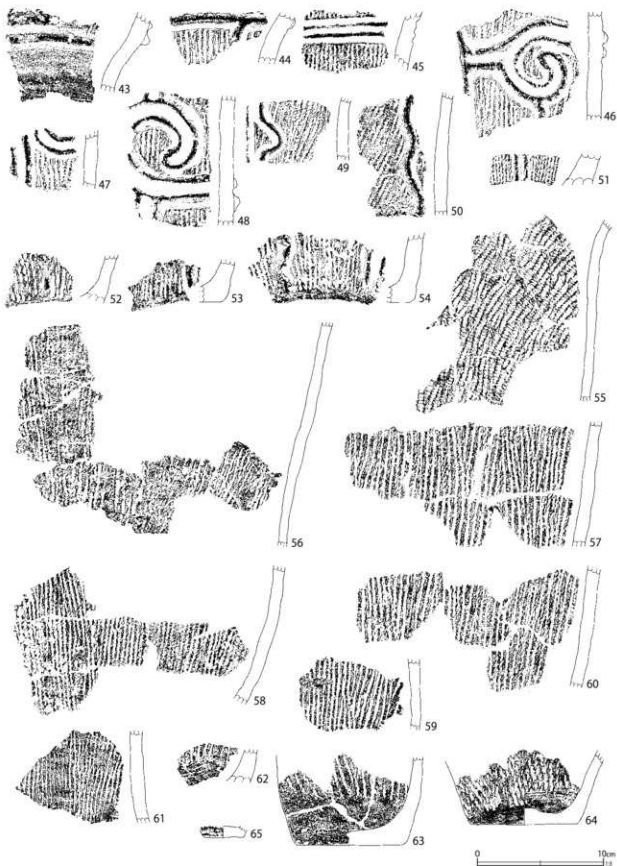
40～42は同種の口縁部文様帯の一部である。41・43には頸部無文帯がみられる。43は口縁部文



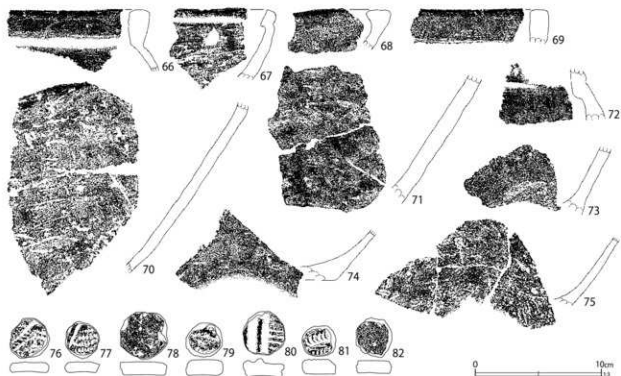
第133图 第13号住居跡出土遺物(2)



第134图 第13号住居跡出土遺物(3)



第 135 图 第 13 号住居跡出土遺物 (4)



第136図 第13号住居跡出土遺物(5)

様帯下端の区画と頸部無文帯である。

44～51はキャリバー類の胴部である。44・45は頸部との境の区画線で、44は隆帯、45は半裁竹管状工具の平行沈線文を多段に用いている。

46・48は懸垂文から派生する渦巻文である。49は2本隆帯の懸垂文の一部が山形に突出するもので、剣先状モチーフが意識されたものか。50は蛇行懸垂文、51は2本隆帯の懸垂文である。

52～54は底部である。いずれも隆帯による懸垂文が垂下する。

55～64は地文のみの破片で、62までが胴部、以下は底部である。地文燃糸文は56・59・61・62はLで他は全てRである。55はRL単節縦位回転の縄文である。

66～75は浅鉢である。66～69は口縁部で、66は胴張で頸部が「く」の字に屈曲し、口縁直立する。67は内湾する折り返し口縁で、表裏に段を持つ。72は胴上半部で、66に類似の屈曲する頸部を持つ。70～75は無文の胴下半部～底部である。

76～82は土製円盤である。前期諸磯式の破片を

再利用している。

石器 (第137図)

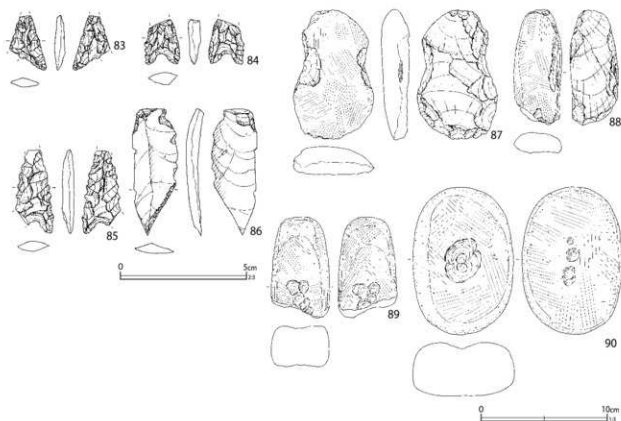
83～85は石鑑である。

83は凹基で、先端部および左脚を折損する。基部はV字に切れ込み、体部は二等辺三角形である。長さ2.15cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.97gである。石材はチャートである。

84は先端部を斜めに折損する。凹基で、両側縁は緩やかなカーブを描いて先端部に至る。長さ1.75cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重さ1.29gである。石材はチャートである。

85は脚部に対し体部の長い凹基鑑で、先端部と左脚を折損する。長さ3.35cm、幅1.5cm、厚さ0.45cm、重さ2.28gである。石材はチャートである。

86はスクレイパーである。縦長の剥片の上端に細かな調整剥離を施してつまみを形成し、下端は右側縁を中心に調整剥離を施して三角形の刃部を作り出している。長さ5.05cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重さ3.45gである。石材は黒曜石を使用



第137図 第13号住居跡出土遺物(6)

する。

87・88は打製石斧である。87は両側縁に緩い欠りを持つ分銅型で、刃部は比較的鈍角である。背面に広く自然面を残すが、全面に擦痕を持ち、磨石からの再加工品と考えられる。

長さ10.9cm、幅6.4cm、厚さ2.2cm、重さ168.63gである。石材は砂岩である。

88も磨石を再加工した打製石斧と考えられる。短冊形で、刃部を折損する。背面に面取りされた使用面を広く残している。長さ9.2cm、幅3.8cm、厚さ1.6cm、重さ91.11gである。石材はシルト岩

である。

89・90は磨石である。

89は中央から短軸方向に折損するが、棒状の磨石であったと考えられる。断面長方形で4面使用され、凹石に転用されて表裏に複数の凹孔を持つ。長さ8.1cm、幅4.6cm、厚さ3.2cm、重さ135.81gである。石材は安山岩である。

90は楕円形の磨石で、表裏に使用面を持つ。凹石に転用されており、表裏に複数の凹孔を持つ。長さ11.7cm、幅8cm、厚さ4.3cm、重さ681.09gである。石材は安山岩である。

第14号住居跡 (第138～144図)

M・17グリッドに位置する。第273・378号土城と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

長径5.62m、短径5.4mの楕円形の住居跡である。主軸方向はN・40°・Wを指す。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.34mである。床面は平坦で、中央がやや低くなっている。壁溝は検出されなかった。

床面ほぼ中央で2か所の炉跡を検出した。いずれも埋燬炉で、便宜上炉A・炉Bと命名した。覆土の断面は残し得なかったが、土器の残存状態から東に位置する炉Aがより新しいものと考えられる。

炉Aは深鉢土器の口縁部から胴上半部にかけての部分に正位に埋設していた。周囲に土器より一回り大きい掘りかたが存在した。長径53cm、短径50cm、深さ16cmで、主軸方向はN・7°・Wを指す。

炉Bは浅鉢土器の底部から胴下半部にかけての部分に正位に埋設していた。周囲に土器より一回り大きい掘りかたが存在した。長径60cm、短径53cm、深さ17cmで、主軸方向はN・41°・Wを指す。

床面上から25本のビットが検出された。これらのうち主柱穴とみられるのはP1～8・11・12・14・18・21・23・25で、これらはさらに覆土の状態や位置関係から3つのグループに分離し得る。すなわち、

A群：P(1)・6・12・18・25

B群：P2・4・5・14・21

C群：P3・7・(8)・11・23

これらは異なる時期における上屋構造を表すも

のとみられ、いずれも4本柱を構成する。覆土の土層番号の上では、A群→B群→C群という遷移(第140図)だが、切り合い関係にないビットがほとんどであり確証はない。

但し、A・B群の主軸が竪穴の平面プランとほぼ一致するのに対し、C群の主軸のみN・70°・W付近を指している。

このことは、A・B群の上屋が連続した空間配置に基づく文字通りの建て替えであるのに対し、C群の上屋のみ異なった縄張りが行われていることを示している。

2か所に残された炉跡が、それぞれある時期の上屋の主軸線上奥壁寄りに設置されたものと考えた場合、C群の柱穴配置により適合するのは、古い段階のものと考えられる炉Bである。したがって、柱穴C群+炉Bから柱穴A・B群+炉Aという変遷を想定し得る。柱穴A・B群の新旧関係は不明である。

主軸線上南東側の壁近くにはP15～17・22が集まっている。これらを出入り口施設の痕跡と考えた場合、柱穴A・B群+炉Aとの組み合わせにより整合性がある。

覆土は壁際の三角堆積土を別にすれば上下2層からなり、遺物は主に上層から出土している。所属時期は勝坂Ⅲ式期と考えられる。

第14号住居跡出土遺物

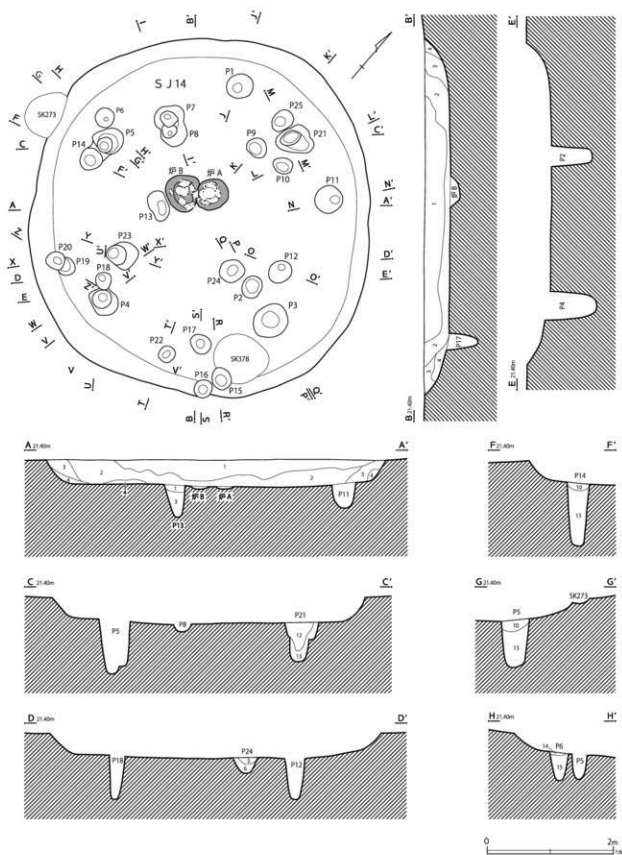
土器 (第145～148図)

1は円筒形深鉢である。底部のみ欠損する。口縁から胴中段までが一続きの文様帯となり、下端を1条の隆帯によって区画している。

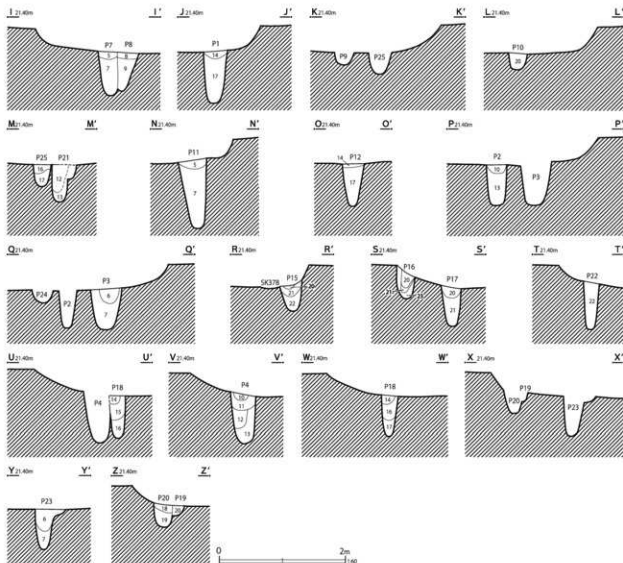
鋸歯状の沈線によって器面を規則的に分割して

第14表 第14号住居跡柱穴計測表

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	44.0	83.2	P2	36.0	62.8	P3	60.0	64.1	P4	46.0	81.6	P5	42.0	83.4
P6	28.0	51.0	P7	48.0	70.8	P8	42.0	65.1	P9	34.0	18.5	P10	32.0	25.5
P11	44.0	109.0	P12	38.0	64.4	P13	48.0	48.7	P14	36.0	99.6	P15	36.0	39.7
P16	30.0	53.4	P17	34.0	65.7	P18	26.0	69.6	P19	28.0	20.2	P20	30.0	38.2
P21	76.0	61.2	P22	26.0	74.6	P23	52.0	63.0	P24	40.0	23.9	P25	36.0	34.0



第138图 第14号住居跡(1)



S J 14

- 1 黒褐色土層 : 炭化物・暗褐色粒子・白色微粒子 (シルト質) 多く含む
粘性強い。締まりやや強い
- 2 暗褐色土層 : ロームブロックまばら。炭化物少量。暗褐色粒子多く
白色微粒子 (シルト質) 少量含む。粘性強い。固く締まっ
ている
- 3 暗褐色土層 : 炭化物・暗褐色粒子・暗褐色粒子少量。明褐色粒子斑点
状 (風化したブロックか) に含む。粘性強い。締まりやや
強い
- 4 明褐色土層 : ローム粒子多く。暗褐色粒子・白色微粒子 (シルト質)
わずかに含む。粘性を欠く。締まり弱い。層の崩壊か
- 5 黄茶褐色土層 : ロームブロック少量。焼土ブロック微量。炭化物微量含む
- 6 暗黄褐色土層 : ロームブロックやや多く。ローム粒子少量
炭化物微量含む
- 7 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量含む
- 8 黄茶褐色土層 : ロームブロック少量。焼土ブロック微量。炭化物微量含む
- 9 黄茶褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック少量。炭化物微量含む
- 10 黄茶褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック少量。炭化物微量含む
- 11 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量含む
- 12 暗黄褐色土層 : ローム粒子やや多く含む

- 14 黄茶褐色土層 : ロームブロック少量。焼土ブロック微量。炭化物微量含む
- 15 黄茶褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量含む
- 16 暗黄褐色土層 : ローム粒子少量含む
- 17 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む
- 18 黄茶褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック少量。炭化物微量含む
- 19 黄茶褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量含む
- 20 黄褐色土層 : 最堆積ローム
- 21 暗褐色土層 : ロームブロック少量。ローム粒子微量含む。締まり強い
- 22 暗黄褐色土層 : ローム粒子微量含む。締まり強い
- 23 黒褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量含む

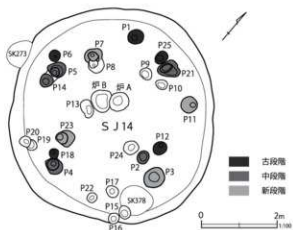
S J 14 8F (A)

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子多く。炭化物微量含む。粘性を欠く。締まり強い
- 2 暗褐色土層 : 焼土ブロックわずか。焼土粒子少量含む。固く締まっ
ている。2層上面が9F味 (使用面か) 1層より焼土粒子が少
ないものもその相残か
- 3 黒褐色土層 : 焼土粒子多く含む (特に土層に埋した面) 粘性強い。締
まり強い

S J 14 8F (B)

- 1 暗褐色土層 : 焼土ブロック少量。焼土粒子多く含む。粘性を欠く。締ま
り強い
- 2 黒褐色土層 : 焼土粒子・明褐色粒子多く含む。粘性強い。締まり強い

第 139 図 第 14 号住居跡 (2)

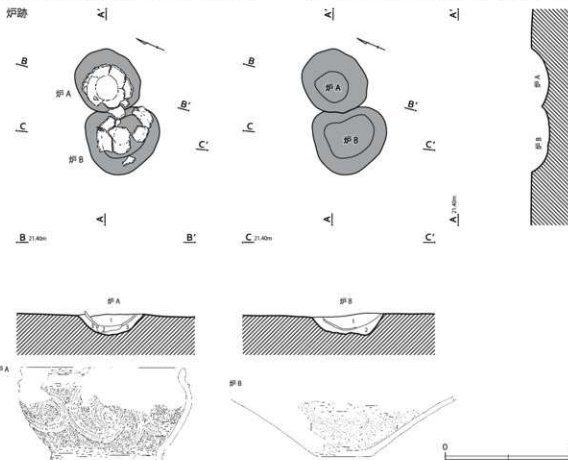


第140図 第14号住居跡

二等辺三角形の区画を構成し、それぞれに大柄の三叉文を配置している。

空間は篋状工具による爪型文列で埋められ、1か所のみ鋭利な棒状工具先端による刺突列で代替している。胴下半部は無文である。

復元最大径は約17.8cm、現存高は約21.1cmで



第141図 第14号住居跡(3)

ある。胎土は極めて砂質で黒雲母粒子を含む。器壁は外面灰黄褐色～灰褐色、内面暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

2は円筒形深鉢の口縁部である。水平口縁で、矢羽根状沈線を保う縦位の隆帯が垂下する。口縁下に幅広の無文帯を持ち、胴部の文様帯との境は段をなしている。胴部には三叉文ほかの沈線文を描く。

復元最大径は約20.9cm、現存高は約33.2cmである。胎土はシルト質である。器面は黄褐色～暗灰黄褐色である。焼成は不良である。

3は大型の円筒形深鉢である。口縁直下に平行沈線が巡り、以下胴下半部までRL単節の縄文を横位～右下がりに施文している。

胴上半部には平行沈線による波頭文を描き、上下を波状の沈線により区画している。胴下半部は縄文が疎になり無文化する。復元最大径は約

14cm、現存高は約8cmである。

胎土は砂質で黒雲母を含む。器壁は外面暗灰黄褐色、内面暗灰茶褐色である。焼成はやや不良である。

4は球胴状に膨れる胴上半部で、三原田式に類似の深鉢であると考えられる。中段に2本隆帯の波頭文ないし横S字文を描き、隆帯間には三角押し文を描く。頸部には若干の無文部を挟んで三角押し文が回り、口縁へと接続する。地文はRL単節の縄文を左下がり施文する。

復元最大径は約28.4cm、現存高は約15.7cmである。胎土は砂粒を含み、黒雲母粒子が混じる。

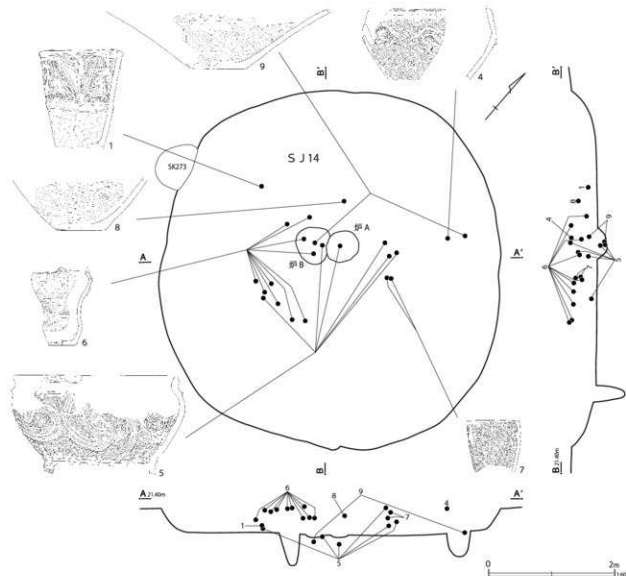
器面は灰黄褐色～暗灰褐色である。焼成は良い。

5は炉Aの炉体土器である。口縁から胴部中段までが残存する。口縁直下に幅広の凹線と1条の隆帯が巡って文様帯上端を区画する。

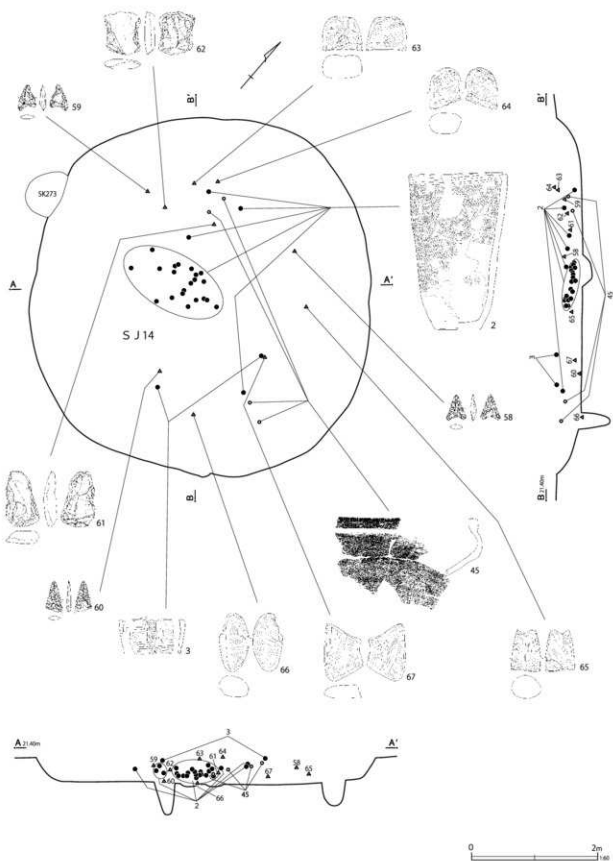
胴上半部には2本隆帯の波頭文が上下に交錯して描かれ、文様帯下端を1条の隆帯で閉塞する。

ここからわずかな無文部を経て1条の隆帯が回り、以下が胴下半部の文様帯となって、隆帯の懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文で、縦位を基本としてモチーフ内部に沿って充填施文している。

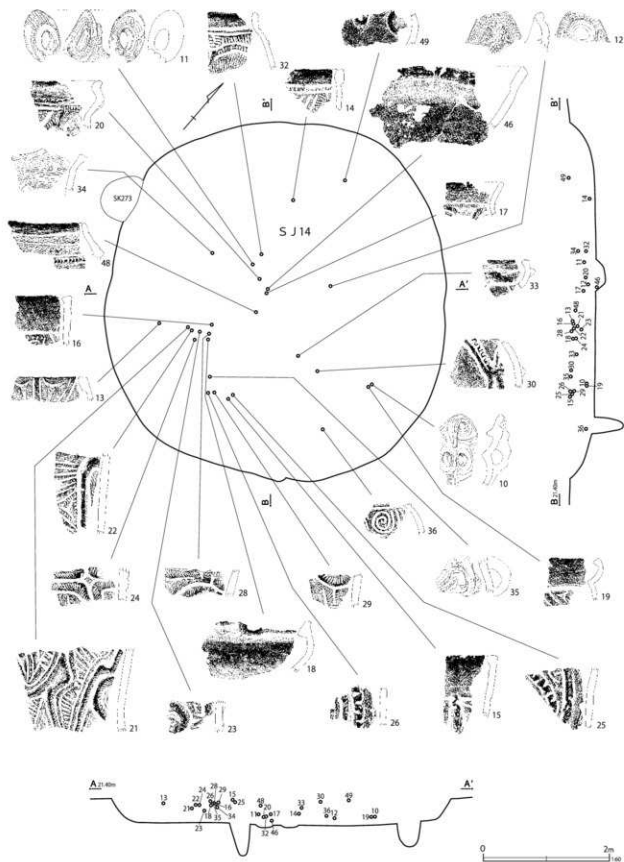
復元最大径は約36.5cm、現存高は約20.5cmで



第142図 第14号住居跡遺物出土状況(1)



第 143 图 第 14 号住居跡遺物出土状況 (2)



第144图 第14号住居跡遺物出土状況(3)

ある。胎土はシルト質である。器壁は外面暗褐色、内面暗灰褐色である。焼成は比較的良い。外面全体に黒色付着物が観察される。

6は小型の深鉢で、口縁から底部まで残存する。胴下半部が「く」の字に張り、胴部中段に緩やかにくびれを持って、胴上半部から口縁にかけて内湾する。水平口縁で、口縁部の小突起から縦位の隆帯が垂下する。胴部中段に器面調整に伴うとみられる縦位の条線が残るが、それ以外は入念な研磨により無文となっている。

復元最大径は約12.9cm、現存高は約16.4cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面が灰黄褐色～灰橙色、内面は暗灰黄褐色である。焼成は良い。

7は円筒形の深鉢である。緩やかに内湾して口端が肥厚し内屈する。前面にR L単節縦位回転の縄文を施文する。復元最大径は約11.2cm、現存高は約11.1cmである。胎土は砂質である。器壁は外面暗茶褐色、内面黒褐色である。焼成は良い。

8は浅鉢とみられ、胴下半部から底部まで残存する。全体に無文で、ごく緩やかに内湾しつつ立ち上がる。

復元最大径は約28.3cm、現存高は約11.2cmである。胎土はシルト質で、赤褐色のシャモットを含む。器面は暗褐色～灰黄褐色である。焼成は良い。

9は炉Bの炉体土器で、浅鉢胴下半部～底部である。全体に無文で、軽微に外反しつつ直線的に開く。復元最大径は約47.2cm、現存高は約12.7cmである。胎土は若干の砂粒を含む。器面は暗橙色で、焼成は良い。外面には黒色の付着物が観察される。

10～52は破片資料である。

10～31は勝坂Ⅲ式である。10は口縁部で、中央に円孔を持つ山形の突起から、上面に単沈線に伴う連鎖状の隆帯が垂下し、頸部の眼鏡状突起へと接続する。11はややひねりを持つ円盤状の突起で、

側面には貫通孔を穿つ。

12は内面にくぼみを持つ半球形の突起で、背面には三叉文と交互刺突文を施文する。

13～16は円筒形の深鉢である。13は口縁から胴部まで一続きの文様帯で、平行沈線による三角形の区画内部に三叉文を配する。14は折り返し口縁下に交互刺突文が巡り、13と同様の区画文を描く。15・16は口縁下に無文帯を持つ。

17は口縁外反する。18～20は内湾する無文の口縁部を持つ土器で、18は口縁上に貫通孔を持つ突起を配する。20は胴部文様帯との境に小波状の沈線が巡る。

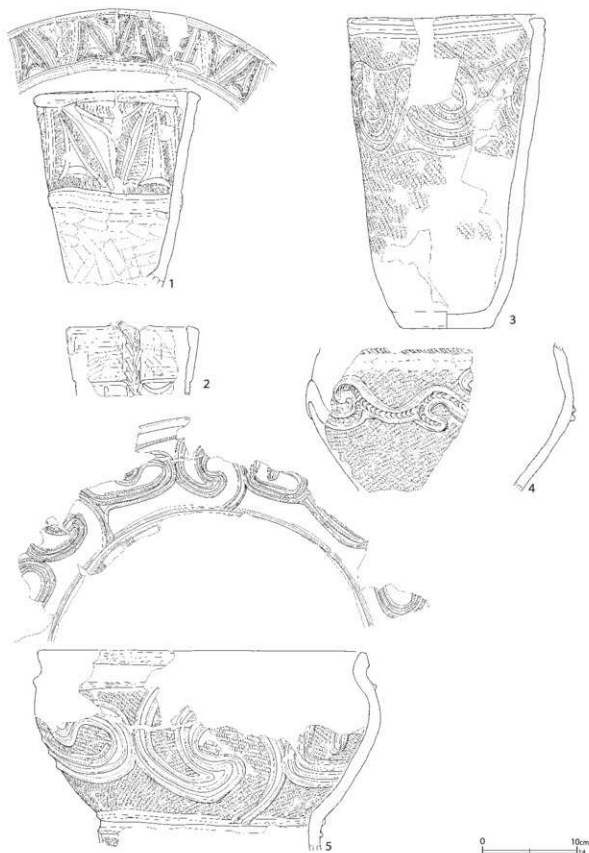
21～31は胴部である。隆帯による曲線文が器面を分割し、集合沈線文や三叉文、交互刺突文を施文する。30は球胴状に張る胴上半部で、無文地にY字状の隆帯を配する。31は胴下半部で、R L単節縦位回転の縄文を施文する。

32～39は中峠系の土器群である。32は4に類似の器形で、球胴状に張る胴上半部から無文の口縁部が立ち上がる。刻みを伴う弧状の隆帯が器面を上下に分帯し、上位には形骸化した櫛歯文を描き、縦位の角押し文列を充填する。区画から下はR Lの縄文を右下がりに施文している。

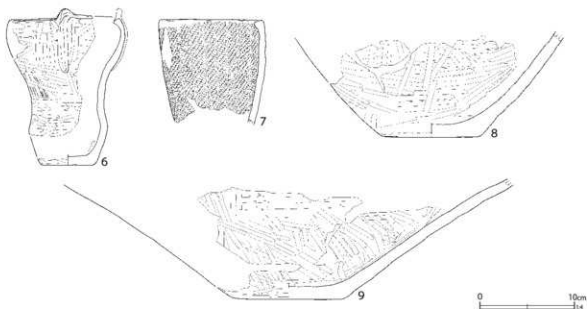
33は内湾する深鉢口縁部で、上面に刻みを伴う背割れ隆帯が巡り、一部が突起化する。34は山形波状口縁の深鉢で、口縁下に無文帯を持ち、頸部に交互刺突文が巡って、胴部には沈線文を描く。地文はR L単節縦位回転の縄文である。

36は沈線による密な渦巻文を描く土器で、球胴状に張る深鉢胴上半部か、浅鉢の可能性もある。37は深鉢頸部で、くびれの直下に押圧を伴う隆帯が巡り、頸部は無文、胴部にはR L単節の縄文を、回転方向を変えて矢羽根状に施文している。

38・39は深鉢胴上半部で、同一個体とみられる。地文としてR縦位回転の柵条文を施文し、棒状工具による沈線文を描く。上方に頸部との境を区画する横位の沈線がみられる。



第145图 第14号住居跡出土遺物(1)



第146図 第14号住居跡出土遺物(2)

40～43は縄文のみの胴部である。地文はすべてR L単節の縄文で、41は縦位、43は横位回転、40・42は右下がりの施文で条を縦方向に揃えている。また、43以外の原体は0段多条の可能性がある。

45～49は浅鉢である。45～47は無文の浅鉢で、45は胴張りで、頸部屈曲し口縁が垂直に立ち上がる。46・47は外反する口縁で、口唇断面角頭棒状で内面に段を持つ。

48は胴上半部に文様帯を持つ。胴部中段が「く」の字に張り出して刻みを伴う隆帯が巡り、3本の平行沈線による2段の区画内に小波状の沈線が巡る。49は45に似る胴張りの浅鉢で、扁平な隆帯による曲線文を描く。

石器 (第149図)

57～60は石鐮である。

57は右脚を折損する。わずかに左へと反る二等辺三角形で、基部はV字に切れ込む凹基である。長さ2.1cm、幅1.35cm、厚さ0.45cm、重さ0.82gである。石材はチャートである。

58は完形品である。浅い凹基で、体部は端正な二等辺三角形である。長さ2.05cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、重さ0.84gである。石材は黒曜石であ

る。

59はややアンバランスな脚を持ち、体部も全体に右へと反っている。長さ2.05cm、幅1.45cm、厚さ0.5cm、重さ1.12gである。石材は黒曜石である。

60は基部を欠損する。細身の二等辺三角形で、両側縁とも表裏に細かな調整剥離を施している。長さ2.45cm、幅1.35cm、厚さ0.3cm、重さ0.91gである。石材はチャートである。

61・62は打製石斧である。

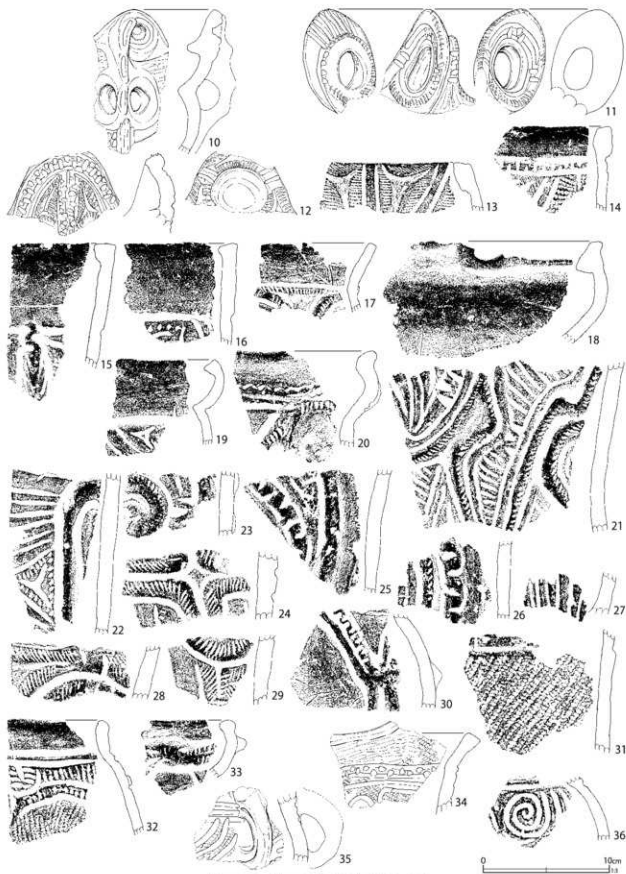
61はいびつな楕形である。背面に広く自然面を残し、右側縁裏側にも節理面を残している。長さ8.9cm、幅5.3cm、厚さ2.1cm、重さ101.51gである。石材は粘板岩である。

62は寸詰まりの分銅型で、再生品の可能性がある。背面に広く自然面を残し、側縁は左右とも細かな調整剥離を施すが、刃部と基部の加工は簡素である。長さ6.9cm、幅5.7cm、厚さ1.6cm、重さ37.11gである。石材は礫岩である。

63～67は磨石である。

63は楕円形の磨石で、中段から短軸方向に折損している。断面長方形で表裏に使用面を持つ。

凹石に転用されており、表裏に1つつ凹孔が



第 147 图 第 14 号住居跡出土遺物 (3)

残される。また、残存する長軸末端に叩打痕が集
中しており、叩き石としても使用されたことがう
かがわれる。長さ5.4cm、幅6.3cm、厚さ3.7cm、
重さ204.97gである。石材は閃緑岩である。

64は楕円形の磨石で、中段から短軸方向に斜め
に折損している。表裏に使用面を持つ。

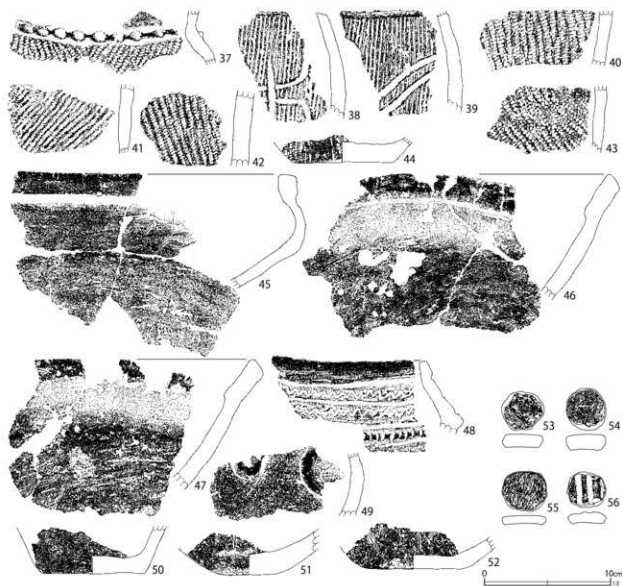
凹石に転用されており、残存する長軸末端の表
側に複数の凹孔を持つ。また、叩き石への転用を
示す叩打痕もみられる。

長さ6.6cm、幅5cm、厚さ3.3cm、重さ161.9g
である。石材は黒雲母花崗岩である。

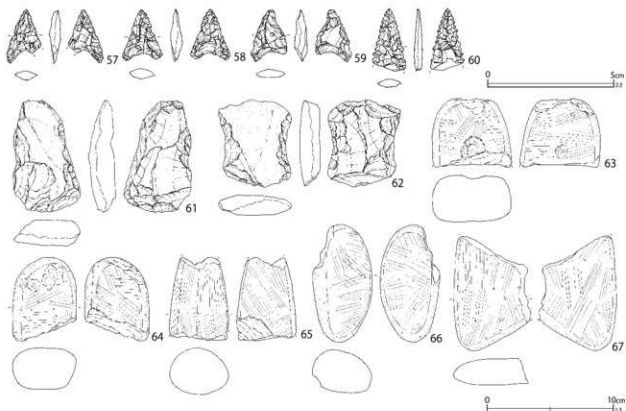
65は棒状の磨石であったと思われるが、長軸両
端が折損している。断面楕円形で、全面が使用さ
れている。長さ5.6cm、幅4.7cm、厚さ3.7cm、重
さ165.69gである。石材は砂岩である。

66は楕円形の磨石で、両面使用されている。長
さ9.3cm、幅4.7cm、厚さ3.4cm、重さ201.23gで
ある。石材は安山岩である。

67は扁平な磨石片である。いびつな三角形だが
破損部分が大きく、全形を知ることができない。
両面使用される。長さ9.1cm、幅6.1cm、厚さ
2.1cm、重さ154.45gである。石材は閃緑岩である。



第148図 第14号住居跡出土遺物(4)



第149図 第14号住居跡出土遺物(5)

第15号住居跡 (第150～155図)

L・M-18グリッドに位置する。長径4.84m、短径4.56mの南南東方向に開く隅丸台形の住居跡である。主軸方向はN-41°-Wを指す。壁はやや鈍角に立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.69mである。

床面は平坦で、南に向けて緩やかに傾斜している。壁溝は検出されず、出入り口施設の痕跡と考えられるものも検出されなかった。

主軸線上やや奥壁寄りに新田二つの炉跡を検出した。いずれも不整楕円形の地床がで、主軸は住居跡本体のものよりやや西に振れている。古段階のものは長径57cm、短径49cm、深さ31cm。新段階のものは長径54cm、短径48cm、深さ8cmである。

床面上から8本のピットが検出された。これらのうちP8を除く7本が主柱穴と考えられる。

覆土の状態や配置から、A群：P1・3・4とB群：P5～7が異なる時期の上屋を構成するも

のとみられ、位置を共有するP2の覆土がA群のものと共通であることから、A群をより新しい時期のものと考えた。また、炉跡がしばしば上屋の主軸中央ないしやや奥壁寄りに置かれていることから、A群が新炉、B群が古炉に対応するものと考えられる。この意味でもA群がより新しい段階のものである可能性が高い。

したがって本住居跡は、新田に共通の主柱穴であるP2を起点として、対角線方向に拡幅されたものと考えられる。

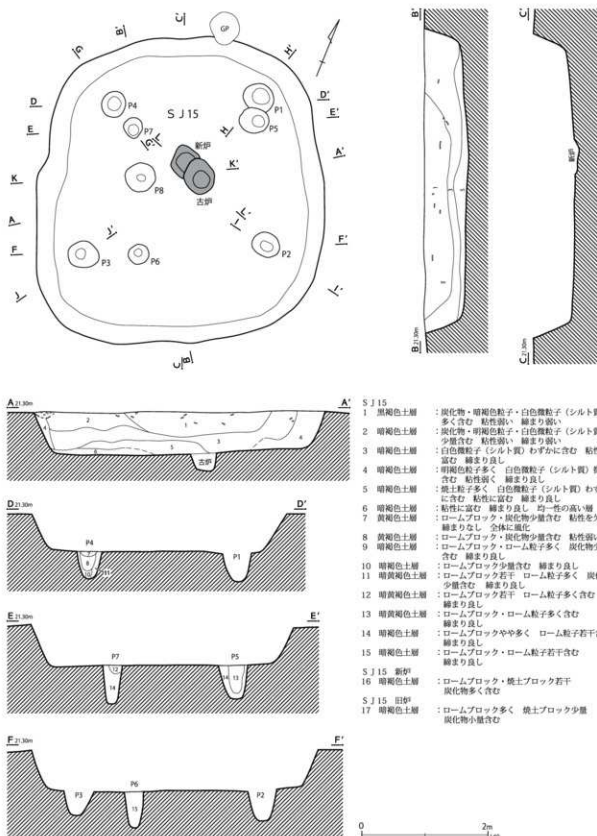
覆土は上下2層からなり土層図中の1・2層が上層、それ以下が下層に相当する。遺物は主に上層から出土している。所属時期は加曾利E1式期と考えられる。

第15号住居跡出土遺物

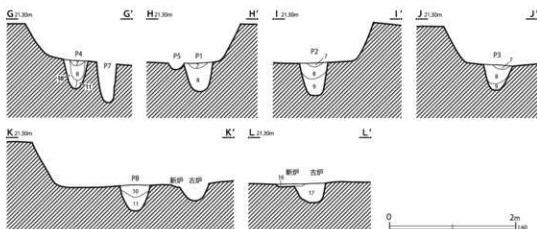
土器 (第156～160図)

1～4は加曾利E1式のキャリパー類深鉢である。

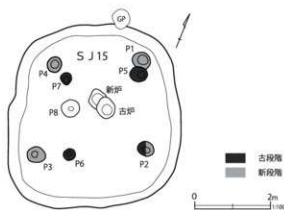
1は4単位の波状口縁で、口縁から頸部まで



第150図 第15号住居跡(1)



第151図 第15号住居跡(2)



第152図 第15号住居跡柱穴変遷図

残存する。波頂部に中空の大型突起を配するほか、波底部でも口端上に小突起を伴うものと思われる。

口縁部の文様はやや形骸化が進んで楕円形の区画文へと変化しており、文様帯下端を区画する2本の隆帯の間に末端が小渦巻状となるわらび手状沈線文を描く。

頸部には無文帯を持ち、胴部との境は平行沈線により区画する。胴部には沈線による懸垂文を描くものと思われる。地文はLの撚糸文で、縦位回転で施文している。

復元最大径は約23.5cm、現存高は約11.8cmである。胎土は砂とシルトを含み、黒雲母粒子が混じる。器壁は外面灰黄褐色、内面暗灰褐色である。

第15表 第15号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	50.0	44.0	P2	44.0	49.0	P3	50.0	39.1	P4	42.0	47.8
P6	32.0	57.2	P7	34.0	67.8	P8	48.0	39.6	P9		
									P10		

焼成はやや不良である。

2は水平口縁の深鉢で、完形品である。2本隆帯の弧状モチーフの接点に小渦巻の突起を配する繋ぎ弧文の土器である。

弧状の区画内部には縦位の集合沈線文を充填し、区画から下は無文化する。胴部にはRL単節縦位回転の縄文を施文する。頸部の無文帯との間には特に区画を設けない。

復元最大径は約17.3cm、現存高は約19.8cmである。胎土はシルト質で、器面は灰黄褐色～暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

3も水平口縁で、繋ぎ弧文の土器である。口縁から頸部まで残存する。

弧状の区画内部にはLの撚糸文が縦位回転で施文される。区画から下が頸部無文帯となっており、胴部との境には平行沈線文が巡る。

復元最大径は約25.3cm、現存高は約10.2cmである。胎土は多量の砂と小礫を含む。器壁は外面黄橙色、内面灰黄褐色で、内外面に黒斑がみられる。焼成はやや不良である。

4も水平口縁で、繋ぎ弧文の土器である。口縁のみ残存する。上下を隆帯で区画した中に繋ぎ弧文が展開し、LR単節横位回転の縄文を施文する。

頸部には無文帯を持つ。

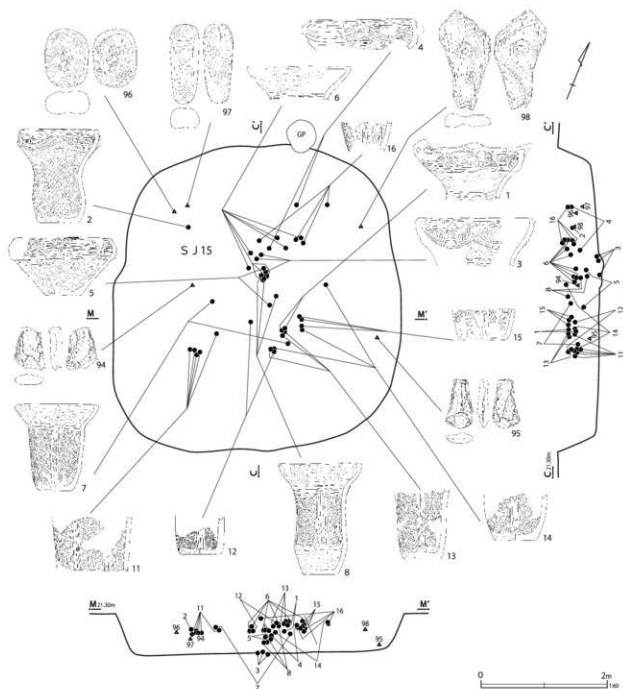
復元最大径は約25.7cm、現存高は約6.5cmである。胎土は多量のシルト・砂・小礫を含む。器面は暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

5は水平口縁の浅鉢である。口縁から胴上半部にキャリバー類深鉢に共通の文様を描く。

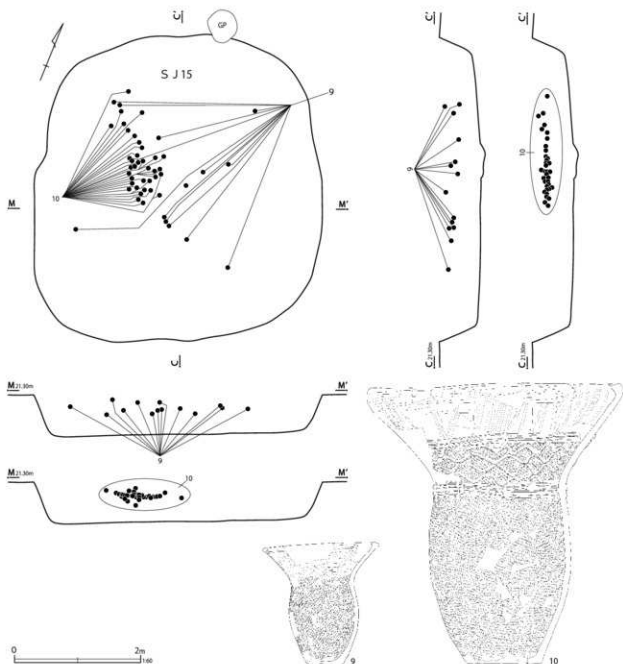
上下を隆帯で区画した文様帯内部を縦位の隆帯

で区画し、さらに中段を横位の隆帯で区切ることで上下二段の楕円形区画文を構成している。縦位の区画と口縁との接点には小渦巻文を配する。胴下半部は無文である。

復元最大径は約22.8cm、現存高は約12.1cmである。胎土は少量の砂と小礫を含む。器壁は外面黄褐色で黒斑がみられ、内面灰黄褐色である。焼



第153図 第15号住居跡遺物出土状況 (1)



第 154 図 第 15 号住居跡遺物出土状況（2）

成は良い。

6～10は無文の水平口縁を持つ曽利系の深鉢である。

6は口縁から頸部まで残存する。口縁は直線的に開いて口端で内屈し、内面に稜を持つ。頸部に平行沈線が巡る。

復元最大径は約22cm、現存高は約7.3cmである。胎土はやや砂質で、多量の黒雲母粒子を含む。器壁は外面暗灰黄褐色、内面暗灰褐色である。焼成

は比較的良い。

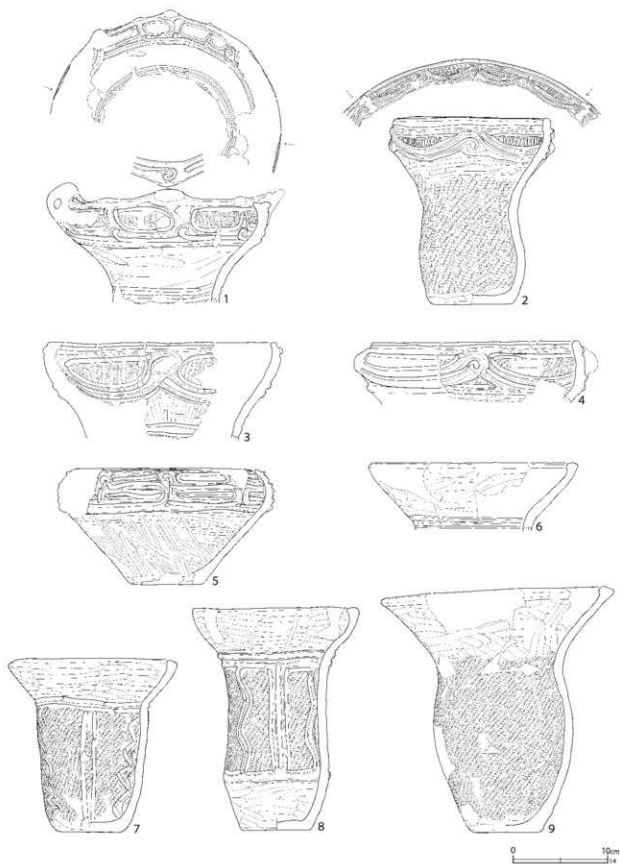
7も直線的に開く口縁で、完形品である。

胴部は軽微に内湾しつつ開く円筒形である。頸部に平行沈線が巡り、胴部には平行沈線による懸垂文と蛇行懸垂文を交互に描く。地文はRL単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約17.8cm、現存高は約18.2cmである。胎土は極めて砂質である。器壁は外面灰黄褐色、内面灰黄褐色～暗灰褐色である。焼成はや



第155图 第15号住居跡遺物出土状況(3)



第156図 第15号住居跡出土遺物(1)

や不良である。

8は内湾しつつ立ち上がる口縁で、ほぼ完形である。胴下半部が張り出す下膨れの器形である。

上下を隆帯で区画した胴部文様帯を持ち、2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文を交互に施文する。区画内にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。胴下半部は無文である。

復元最大径は約17.5cm、現存高は約23.5cmである。胎土は砂粒と、チャート・石英の小礫を含む。器壁は外面黄橙色～灰褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良い。

9は口縁から底部まで残存する。口縁は直線的

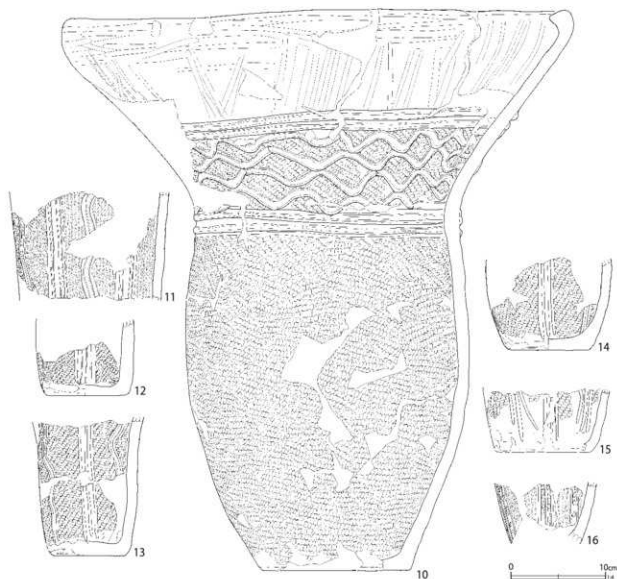
に開き、口端内面が突出して、上面を平坦に整形している。

胴部にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。頸部との境に区画は設けない。

復元最大径は約24.6cm、現存高は約25.9cmである。胎土は多量の砂とシルトを含み、黒雲母粒子が混じる。器壁は外面暗灰褐色～暗橙色、内面暗灰褐色～暗茶褐色である。焼成は良い。

10は大型の深鉢である。口縁は直線的に開いて、口端内屈し、内面に稜を持つ。

頸部には上下を2本隆帯で区画した文様帯を持ち、扁平な波状の浮線文が多段に巡る。頸部およ



第157図 第15号住居跡出土遺物(2)

び胴部にはL R単節の縄文を施文する。

復元最大径は約54cm、現存高は約59.2cmである。胎土は極めて砂質で、白色粒子を多く含む。器面は暗黄褐色である。焼成はやや不良である。

11～15は懸垂文の描かれる胴部～底部である。11は胴部で、隆帯による懸垂文と蛇行懸垂文を交互に施文する。地文はR縦位の燃糸文である。復元最大径は約16.6cm、現存高は約11.4cmである。胎土は多量の砂とシルトを含む。器壁は外面橙色～灰褐色で黒斑がみられ、内面暗灰褐色である。焼成はやや不良である。

12は底部で、2本隆帯の懸垂文である。地文はR L単節の縄文である。復元最大径は約10.3cm、現存高は約8cmである。胎土は多量の砂、シルトを含む。器壁は外面暗褐色、内面黒色である。焼成は比較的良好い。

13は胴部から底部まで残存する。平行沈線の懸垂文と蛇行懸垂文を描く。地文はR L単節の縄文で、沈線間を磨り消している。

復元最大径は約11.8cm、現存高は約14.6cmである。胎土は若干の砂とシルトを含む。器壁は外面灰褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良い。

14は底部で、平行沈線による懸垂文である。地文はR L単節の縄文である。復元最大径は約13.3cm、現存高は約9.7cmである。胎土は多量の砂・シルト・黒雲母を含む。器壁は外面灰褐色、内面灰黄褐色である。焼成は比較的良好い。

15は底部で、ややラフな平行沈線による懸垂文である。地文はL R単節の縄文である。復元最大径は約13.4cm、現存高は約6.7cmである。胎土は多量の砂、小礫、シルトを含む。器壁は外面暗褐色、内面黒褐色である。焼成は比較的良好い。

16は胴下半部である。平行沈線による懸垂文だが、沈線間に棒状工具先端を用いた斜めの刺突を伴っている。地文はLの燃糸文である。復元最大径は約10.8cm、現存高は約6.5cmである。胎土は砂質で、多量の黒雲母粒子を含む。器壁は外面黄

褐色、内面暗灰褐色である。焼成は良い。

17～86は破片資料である。

17～41はキャリバー類深鉢の口縁部である。

17は中空突起の一部である。地文は縦位の集合沈線である。18は縦位の橋梁状把手で、上面が突起へと接続する。口縁部には楕円形の区画文を描き、縦位の集合沈線を施文する。

19～24は2本隆帯の渦巻文を描く口縁部で、19は波状口縁、他は水平口縁とみられる。22は波状に展開する変則的な文様である。24は小型の深鉢で、1本隆帯による渦巻文を描く。

25・26は波状口縁の波頂部に小渦巻文を伴う突起を配する。26の突起は前面と上面にそれぞれ渦巻文を持つ。

27～41は2本隆帯によるモチーフの末端に小渦巻文を配するもので、29・32はクラック状に展開する直線的なモチーフだが、他は弧状モチーフを小渦巻文で連結する繋ぎ弧文である。

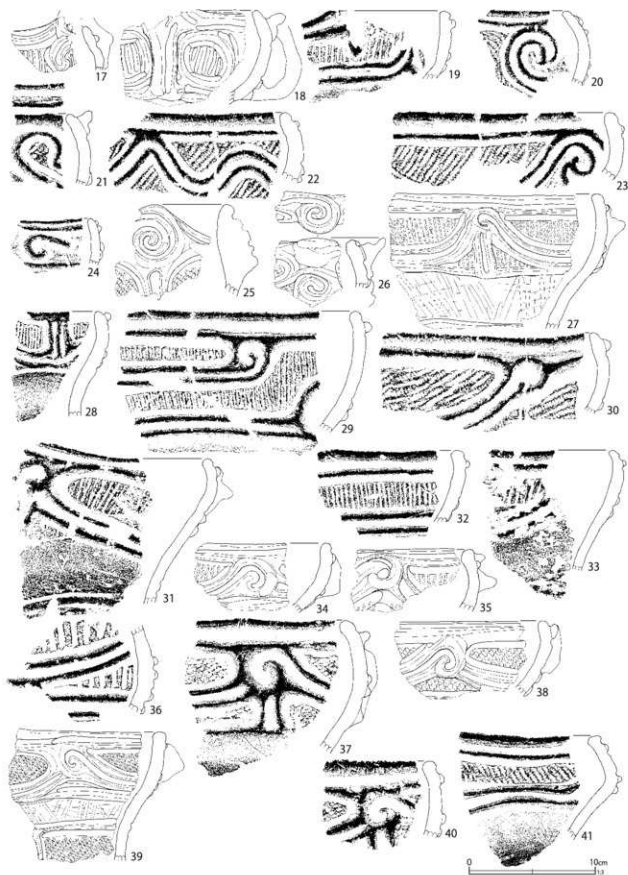
繋ぎ弧文の土器はほとんどが頸部無文帯を持つものとみられるが、27・28・34・36～39等のように頸部との境に水平の区画を設けるものと、31・33・41のように弧状文の下が無文化して頸部に連続するものの二者が存在する。39は水平区画を持ちつつも、弧状文の下が無文化する。

27・37・40は小渦巻文の下に2本隆帯が垂下して水平区画に接続する。28では同様の2本隆帯が波底部と上方の隆帯を接続する。36は波底部と下方の区画を接続する。

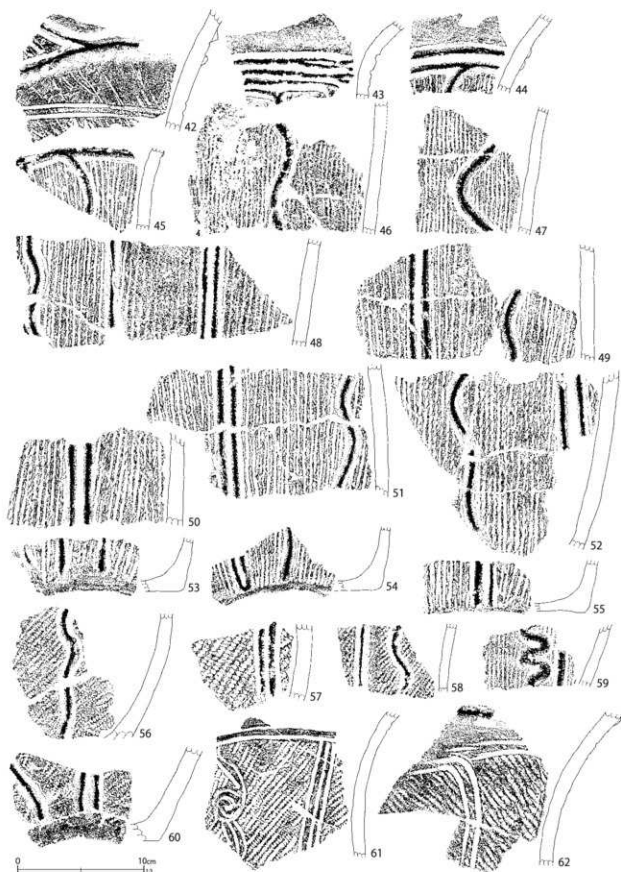
42～44は頸部無文帯である。42は胴部との境を平行沈線により区画する。43・44は隆帯の区画である。

45～60は隆帯による懸垂文を描く胴部～底部である。2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文を基本とし、各種のバリエーションが生じている。地文は燃糸文が卓越する。

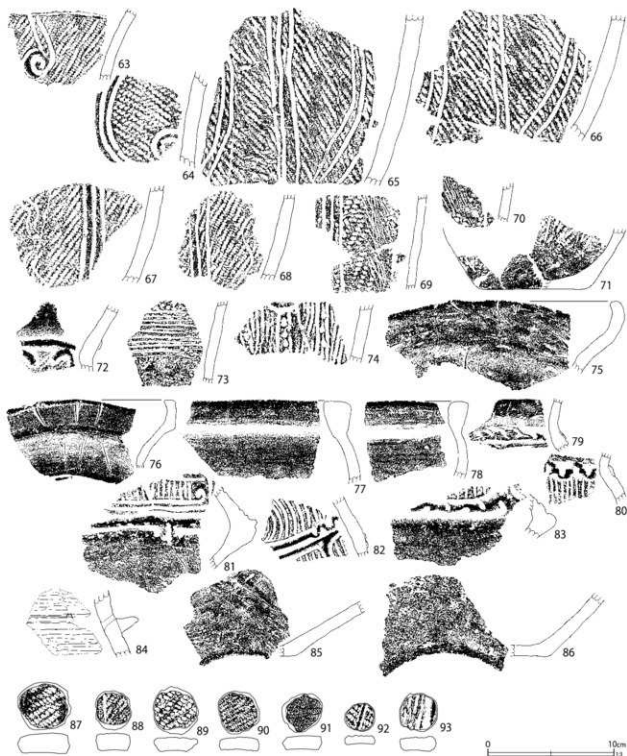
45は頸部との境を1条の隆帯で区画する。54の底部は、2本隆帯の末端がループして一体化し



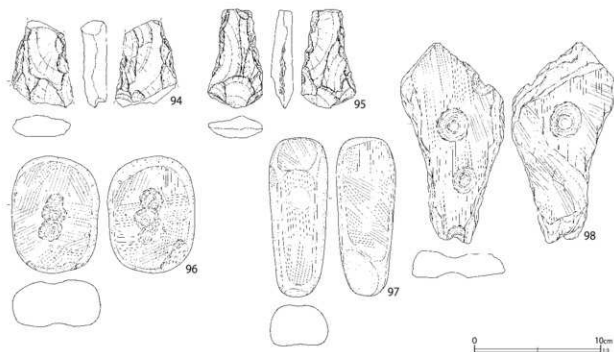
第 158 图 第 15 号住居跡出土遺物 (3)



第159图 第15号住居跡出土遺物(4)



第160图 第15号住居跡出土遺物(5)



第161図 第15号住居跡出土遺物(6)

ている。57・58は側面に強いなぞりを加えた断面台形～三角形の隆帯である。59はコンパス文に類似の強い蛇行を示す懸垂文である。

61～71は平行沈線による懸垂文である。直線的な懸垂文と蛇行懸垂文が存在する。地文は縄文が卓越する。

61～63は頸部無文帯との境を平行沈線により区画している。61・63は蛇行懸垂文の一部に小渦巻文が取り込まれている。64はJ字状のモチーフの末端に小渦巻文を配している。

64・67は平行沈線間の地文が磨り消されており、61もその可能性がある。69・60は同一個体とみられ、地文縄文中に極めて細密な燃糸文を挿入している。

72・73は曽利系の土器である。72は頸部の文様帯で、水平な隆帯による区画の下に波状の浮線文がみられる。73は半裁竹管状工具の平行沈線が重畳する。74は復元個体16に類似の文様で、平行沈線間に刺突を加えた懸垂文である。

75～78は無文の口縁部で、75・76は曽利系の深鉢、77・78は浅鉢であろう。浅鉢はいずれも胴張

りで、頸部がくびれて口縁直立する。

79～83は胴上半部に文様帯をもつ浅鉢である。地文はいずれも縦位の集合沈線である。

79・80は頸部で、79は斜めの刻み、80は交互刺突を伴う隆帯が巡る。81は胴部中段がソロバン玉状に張り出し、2条の隆帯が巡って文様帯下端を区画している。83も類似の器形で、交互刺突の隆帯が巡る。いずれも胴下半部は無文である。

82は斜行する隆帯をはさんで密な集合沈線による渦巻文が配置される。85・86はこれらの浅鉢に伴う底部で、いずれも無文である。

84は有孔銅付土器である。無文地に断面三角形の隆帯が巡り、隆帯上面に沿って貫通孔を穿っている。胎土に大量の金雲母を含む。

87～93は土製円盤である。

石器 (第161図)

94・95は打製石斧である。

94は基部と刃部の先端を折損するが、撚形の石斧とみられる。長さ6.9cm、幅4.8cm、厚さ2cm、重さ78.47gである。石材は安山岩である。

95は撚形の石斧で、完形品である。両側縁が緩

やかなカーブを描いて開く。背面の稜線の一部に擦痕がみられる。長さ7.9cm、幅4.3cm、厚さ1.7cm、重さ63.73gである。石材はシルト岩である。

96・97は磨石である。96は楕円形で、両面使用される。凹石に転用され、両面に複数の凹孔を持つほか、長軸側的一端に叩痕がみられ、叩き石としても使用されたものとみられる。長さ9.4cm、幅6.9cm、厚さ3.8cm、重さ374.26gである。石材は黒雲母花崗岩である。

97は棒状の自然石を使用したものとみられる。断面台形で、4面とも使用され、長軸側一端にも擦痕が残る。長さ12.5cm、幅4.7cm、厚さ3.2cm、重さ322.01gである。石材は砂岩である。

98は凹石である。薄手の板石両面に凹孔がみられるほか、全面に擦痕がみられ、石皿片からの転用も考えられる。長さ15.9cm、幅8.1cm、厚さ2.2cm、重さ354.83gである。石材は緑泥片岩である。

第16号住居跡（第162～164図）

Q・9、R・9グリッドに位置する。長径5.85m、短径5.25mの楕円形の住居跡で、壁高は最も深い部分で0.26mである。

主軸方向は、後述の柱穴配置等からN・27°・W付近を指すものと考えられる。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁溝は検出されなかった。

床面は平坦で、中央がやや下がっている。炉跡は検出されなかった。

床面上から5本のピットが検出された。これらのうちP1・2・5が主柱穴と考えられる。P3・4はごく浅い掘り込みしか検出できなかったが、置き柱的に上屋を支えていた可能性がある。

柱穴間を連繫するようにして、断片的にはあるが床面が固く踏みしめられた部分が確認された。出入り口施設らしきものは確認されなかった。

覆土は大きく上下2層に分けられ、遺物は遺構検出面と、上下層の境界面付近に集中する様子が

確認できた。

遺物は勝坂式末～加曾利E1式期の土器が出土しているが、破片資料の中には若干新しいものが見立つ。

第16号住居跡出土遺物

土器（第165～167図）

1は三原田式類似の深鉢である。口縁から胴上半部まで残存する。水平口縁で、胴上半部が「く」の字に張り出して隆帯が巡り、ここから頸部の屈曲までが文様帯となる。口縁は無文で直線的に外反する。

形態の異なる4単位の突起を配し、突起間には上下に対向する篩歯文を描く。文様帯から下にはL・R単節縦位回転の縄文を施文し、胴部中段にくびれを持って、1条の隆帯が巡る。

復元最大径は約16cm、現存高は約9.4cmである。胎土は砂質で、多量の金雲母粒子を含む。器壁は外面暗褐色、内面暗褐色である。焼成は良い。二次焼成による風化が著しい。

2はR・L単節の縄文のみ施文される胴部である。復元最大径は約18.8cm、現存高は約21.1cmである。胎土は砂質である。器壁は外面黄褐色、内面灰褐色である。焼成は良い。

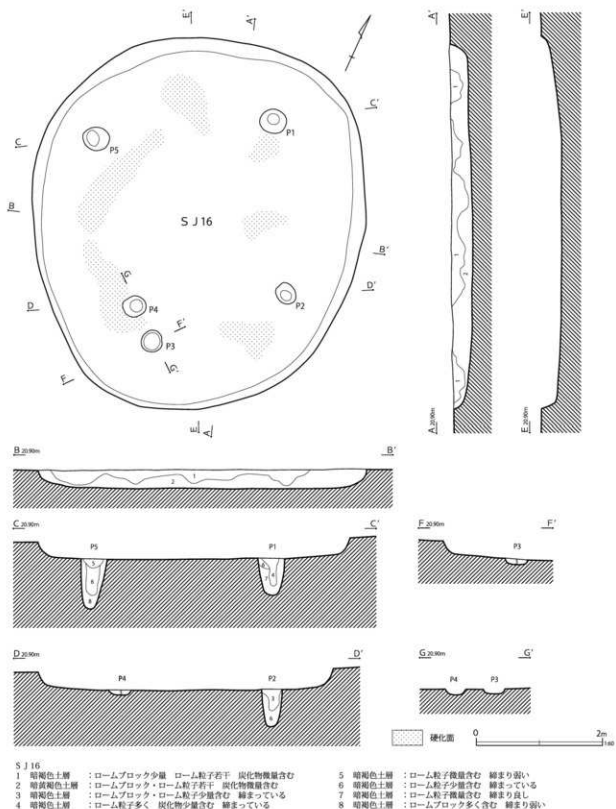
3～46は破片資料である。3～16・32は勝坂Ⅲ式である。刻みを伴う隆帯で器面を分割し、集合沈線文や三叉文、交互刺突文を施文する。

3は正面に円孔を持つ突起を付した口縁部である。4は円筒形の深鉢で、口縁から胴部中段までが一続きの文様帯となる。X字状の隆帯によって形成された区画内に、横位の集合沈線や刺突文を充填する。

5も円筒形深鉢で、無文の口縁部に縦位の隆帯が垂下する。6は山形波状口縁の深鉢で、口縁下に横位の貫通孔を持つ眼鏡状突起を配する。

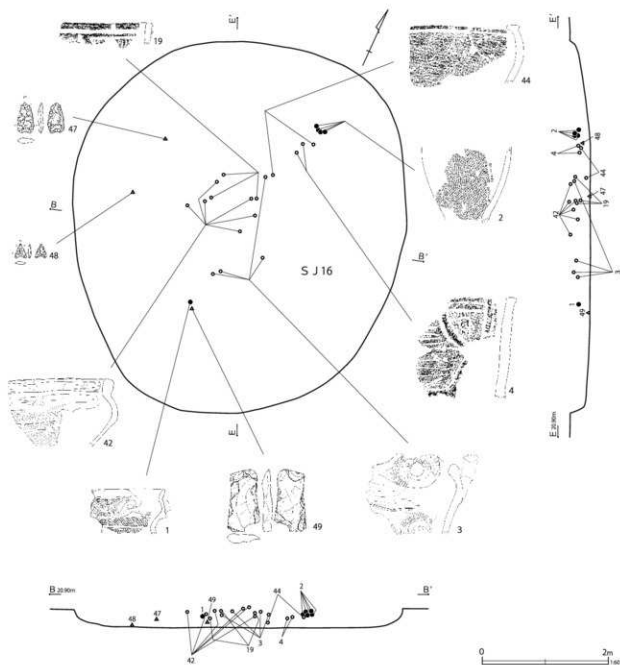
9は内湾する胴上半部で、円孔を持つボタン状の貼付文を持つ。

14は文様帯下端を区画する隆帯で、胴下半部に



第 16 表 第 16 号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	42.0	58.0	P2	34.0	55.7	P3	34.0	7.1	P4	36.0	7.5	P5	42.0	79.2



第 163 図 第 16 号住居跡遺物出土状況 (1)

は L R 単節縦位回転の縄文を施文する。16 は無文の胴下半部と文様帯との境界に段を持つ。

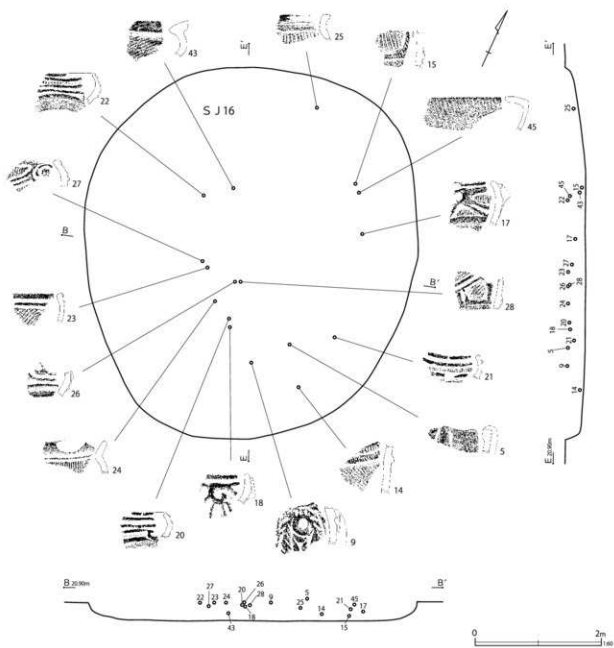
17～23 は加曾利 E 式のキャリバー類深鉢口縁部である。17～19 は 2 本隆帯による弧線の末端を小渦巻文で連結する繋ぎ弧文である。17 は文様帯下端を隆帯で水平に区画している。

20～22 は比較的小型の深鉢である。文様帯が縦

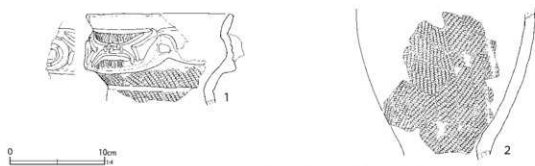
方向に圧縮されて狭くなり、20 では横 S 字文がクランク状に変化する。22 は頸部無文帯を持つ。

23～25 は口縁直下の破片である。24 は「く」の字に外反する口縁で、幅の広い無文帯を持つ。25 は平行沈線が巡り、内湾する口縁が一旦直立した後、外屈している。

26 は文様帯下端の隆帯区画で、クランク文化し



第 164 图 第 16 号住居跡遺物出土状況 (2)



第 165 图 第 16 号住居跡出土遺物 (1)

た渦卷文の一部を見ることができる。27は口縁部文様帯の一部で、大柄の渦卷文を描く。著しく内湾する器形で、浅鉢の可能性もある。

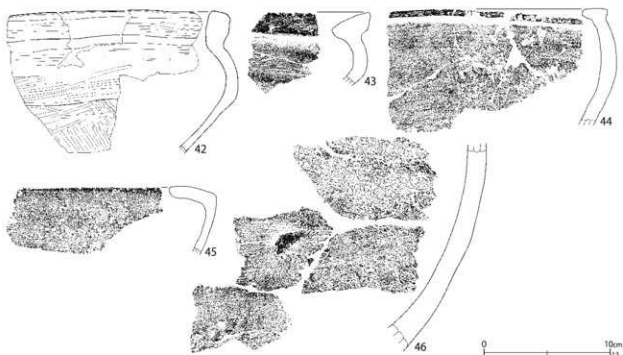
28は文様帯下端を区画する隆帯と主文様との

間を縦位の隆帯で接続している。29は繋ぎ弧文の一部とみられる。弧状の隆帯から下が無文となり、そのまま頸部の無文帯へと連続している。

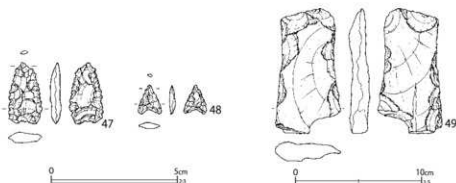
30は非常に幅の狭い頸部無文帯である。口縁部



第166図 第16号住居跡出土遺物(2)



第167図 第16号住居跡出土遺物(3)



第168図 第16号住居跡出土遺物(4)

文様帯の下端を水平の隆帯により区画している。31も頸部無文帯で、胴部との境を平行沈線文で区画する。

33～37はキャリパー類深鉢の胴部である。33・34は頸部無文帯との境が平行沈線で区画され、胴部に沈線による大柄の渦巻文が展開する。

35・36は単沈線による懸垂文と蛇行懸垂文である。37は2本隆帯による曲線文で、隆帯間を斜めに区切る階梯状の表現を用いている。

38～41は深鉢底部である。38・40はキャリパー類深鉢の底部である。38は2本隆帯の懸垂文、40は粗い平行沈線の懸垂文が垂下する。

39は縦位の集合沈線を地文とする曾利系の深鉢であろう。41は無文で直立する底部で、勝坂式の円筒形深鉢の可能性もある。

42～46はいずれも無文の浅鉢である。42は胴張りで頸部屈曲し、口縁は軽微に外反する。43の口縁は「く」の字に外屈して外面に段を形成する。

44は外屈する口唇部の内面にも隆帯を巡らせ、口端上に平坦面を形成する。45は「く」の字に内屈する口縁で、深鉢の可能性もある。46は内湾しつつ立ち上がる胴下半部で、貼り瘤を持つ。

石器(第168図)

47・48は石鏝である。47は平基で、体部紡錘形

で先端部は鈍角である。長さ2.3cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ1.52gである。石材は青灰色のチャートである。

48は凹基の石鏃である。長さ1.2cm、幅0.9cm、厚さ0.25cm、重さ0.17gである。石材は青灰色のチャートである。

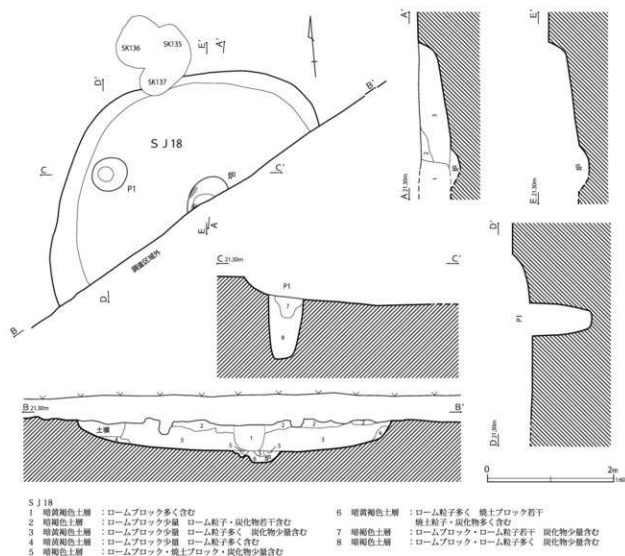
49は短冊形の打製石斧で、刃部を折損する。長さ10cm、幅5.1cm、厚さ1.7cm、重さ94.37gである。石材は砂岩である。

第18号住居跡 (第169・170図)

O・P・14グリッドに位置する。第137号土壌に壊されている。また、覆土の南東部、全体の二分の一近くが調査区域外に存在する。

調査開始の時点では2軒の住居跡の切り合いと考え、第17・18号住居跡と命名したが、最終的に1軒の住居跡であると判断し、第17号を抹消した。

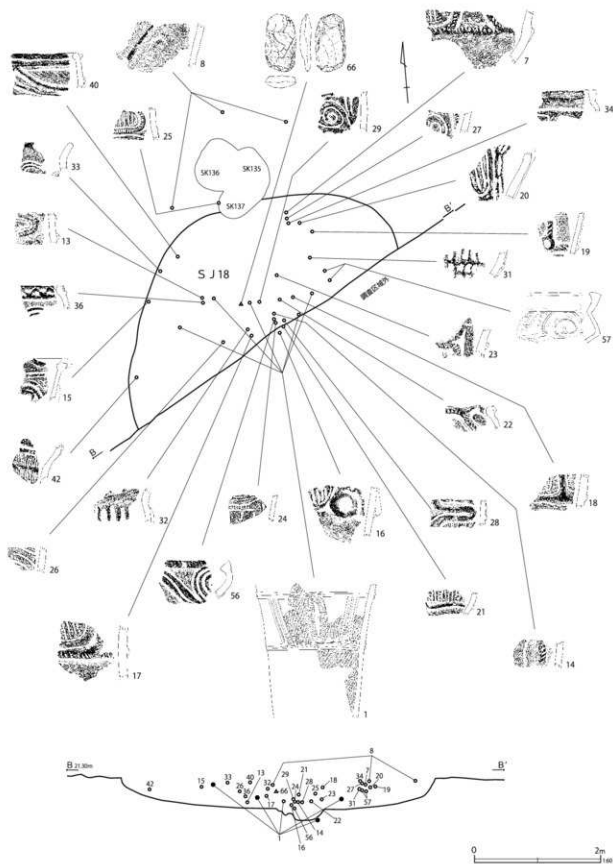
楕円形または隅丸方形の住居跡であったと考え



第169図 第18号住居跡

第17表 第18号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	58.0	107.7												



第170图 第18号住居跡遺物出土状況

られ、長径は計測不能、現存部分の短径は約4.26mで、主軸方向はN・6°・E付近を指す。

壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.31mである。壁溝は検出されなかった。床面は平坦で中央がやや下がっている。床面中央付近で炉跡を検出した。全体の二分の一程度が調査区域外に存在するが、楕円形の地床炉と考えられる。規模は不明だが、深さは約18cmである。

床面上、炉跡から西北西の壁に近い位置でP1が検出された。規模・深さから支柱穴であると考えられるが、柱穴配置は不明である。出入り口施設らしきものは検出されなかった。

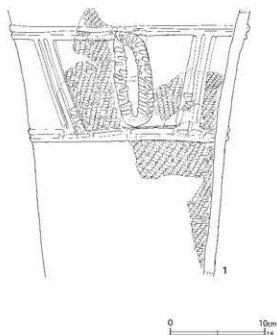
覆土は上下2層からなり、遺物は主に上下層の境界面付近を中心に出土している。所属時期は勝坂式末～加曾利EⅠ式期と考えられる。

第18号住居跡出土遺物

土器（第171～173図）

1は円筒形の深鉢で、口縁部と底部を欠失する。胴上半部に上下を2本隆帯で区画した文様帯を持つ。文様帯内部は交互刺突を伴う縦位の隆帯で分割し、窓枠状の区画を形成している。

区画の中央には隆帯による縦長の楕円文を配し、



第171図 第18号住居跡出土遺物（1）

交互ないし矢羽根状の刻みを施す。地文はRⅠ単節縦位回転の縄文である。

復元最大径は約25.4cm、現存高は約28.5cmである。胎土は砂質で、黒雲母粒子若干を含む。器面は暗灰黄褐色である。焼成はやや不良である。

2～59は破片資料である。

2・3は勝坂Ⅰ式である。2は口縁部で、円筒形の深鉢と考えられる。口縁直下に角押し文が巡り、胴部には縦位の角押し文列を描いて、交互刺突を施す。3の胴部には横位の角押し文列が巡って、三叉状の陰刻文を描く。

4・5は阿玉台式である。4は波状口縁で、波状口縁の波頂部に一対の突起を配し、これを起点として口縁直下に半円形の隆帯区画を形成している。区画内部には櫛歯状工具による集合沈線が巡り、内部には波状文を描く。5は胴部で、断面三角形の隆帯に沿って角押し文が巡る。

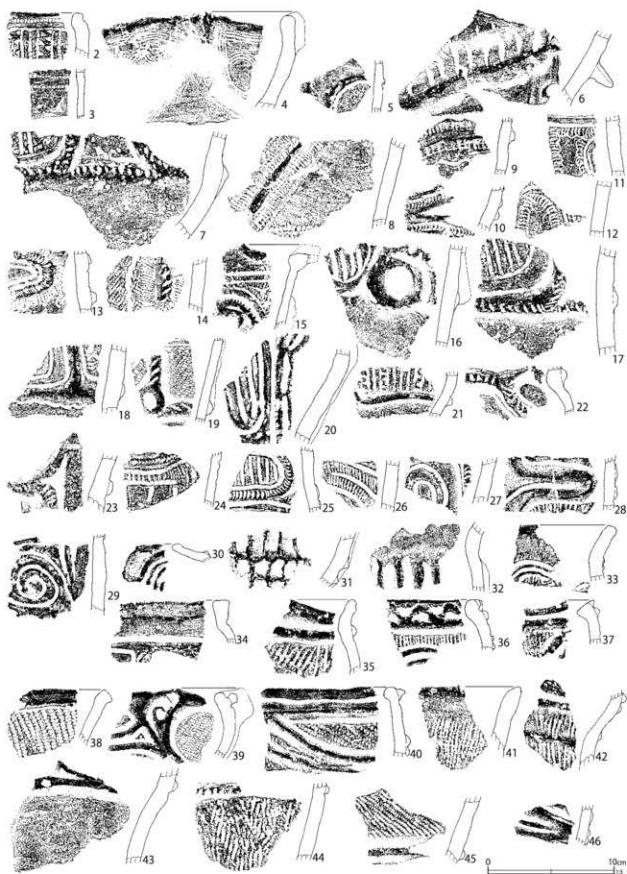
8～14は勝坂Ⅱ式である。14は楕円形の貼付文の周囲にキャタピラ文が巡る。8は隆帯による三角形の区画に沿ってキャタピラ文と三角押し文が巡る。

6・7・15～29は勝坂Ⅲ式である。6は背の高い隆帯の側面に棒状工具の刺突が並ぶ。15は口縁に貫通孔を伴う突起を配する。

16・19は隆帯の交点に円孔を伴うボタン状の貼付文が付される。7・17・21・25は楕円形の区画内部に集合沈線文を充填し、21はこれに交互刺突文を付加している。

30～34は中峠系の土器群である。30は内屈する口縁上に浮線＋沈線による渦巻文を配する。31・32は密接する隆帯により蛇腹状の文様を描く土器である。33は短く外反する無文口縁の直下に浮線＋沈線による弧状文が巡る。

35～46は加曾利EⅠ式である。35～37・39・40はキャリバー型深鉢の口縁部である。39は弧状の隆帯末端に小渦巻文を持つ。36は口縁直下に区画内部に波状の浮線が巡る。38・41は口縁部文様帯



第172图 第18号住居跡出土遺物(2)

を省略している。42・43は文様帯下端の区画で、43は頸部無文帯を持つ。

47～53は深鉢胴部および底部の破片である。47は2本隆帯の懸垂文で、横位の区切りを持つ階梯状のモチーフである。48～50は半裁竹管状工具の平行沈線文を描く。

56～59は浅鉢で、56・57は胴上半部に文様帯を持ち、渦巻文を描く。

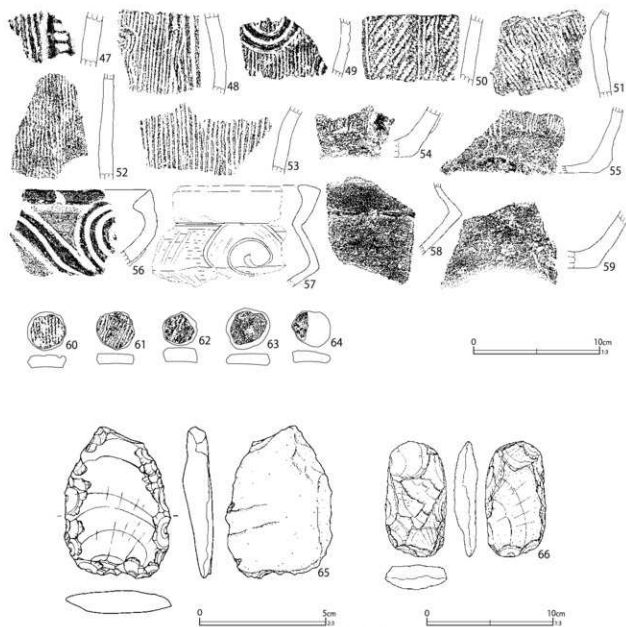
60～64は土製円盤である。

石器 (第173図)

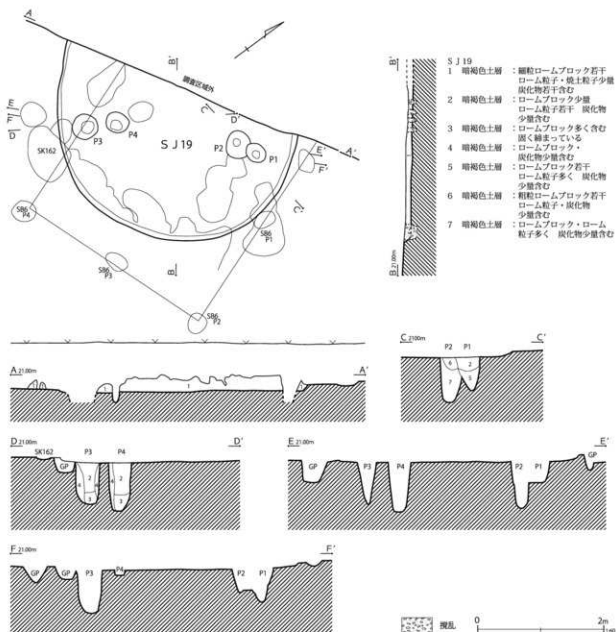
65はスクレイパーである。縦長の剥片を使用し、表面に主要剥離面、裏面に自然面を残す。表面を中心に三方向に細かな調整剥離を施している。

長さ6cm、幅4.1cm、厚さ1.2cm、重さ30.13gである。石材は安山岩である。

66は短冊形の打製石斧である。基部・刃部ともに丸みを帯びた小判型のプロポーシオンを持ち、腹面に打割面を残している。長さ9.3cm、幅4.8cm、厚さ1.9cm、重さ97.36gである。石材は砂岩である。



第173図 第18号住居跡出土遺物(3)



第 174 図 第 19 号住居跡

第19号住居跡 (第174・175図)

M・10・11グリッドに位置する。第6号掘立柱建物跡と第162号土壌に壊されているほか、近世のピットや耕作痕により破壊されており、残存状況は劣悪である。また、覆土の北西側二分の一近くが調査区域外に存在する。

楕円形の住居跡であったと思われ、長径は計測

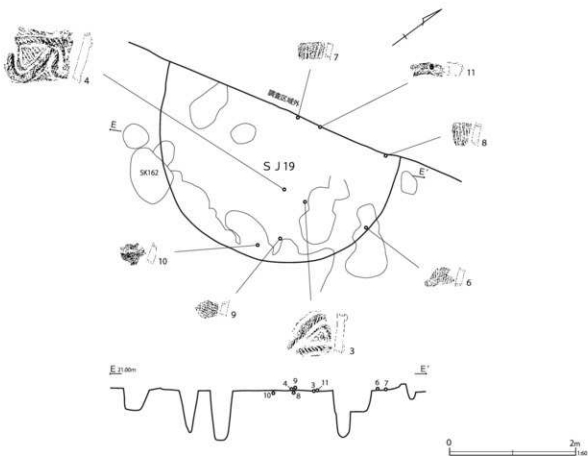
不能、短径3.87mで、主軸方向はN・54°・Wを指す。壁高は最も深い部分で0.03mである。壁溝は検出できなかった。

床面は平坦である。が跡は検出できず、調査区域外に存在するものと思われる。

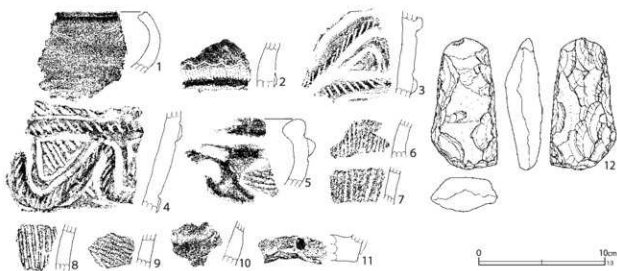
床面上から4本のピットが検出された。いずれも主柱穴と考えられ、主軸線をはさんで左右に対

第 18 表 第 19 号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	34.0	54.4	P2	44.0	71.2	P3	42.0	65.8	P4	36.0	76.5			



第 175 图 第 19 号住居跡遺物出土状況



第 176 图 第 19 号住居跡出土遺物

置されている。これらのうち、北東側に位置する2本については、P1がP2を切っている。南西側のP3・4については覆土に差異が認められなかったが時期差が想定され、上屋の建て替えが行われたものと考えられる。

覆土は単層で、遺物は床面直上でごく少量出土している。所属時期は勝坂式期と考えられる。

第19号住居跡出土遺物

土器 (第176図)

1は内湾する無文の口縁部である。2は隆帯に沿ってキャタピラ文と波状沈線が巡る勝坂Ⅱ式。3・4は勝坂Ⅲ式で、刻みを伴う隆帯により器面を分割する。

5は加曾利EⅠ式ないしⅡ式で、弧状の隆帯末端に小渦巻文を配する繋ぎ弧文的な文様を描くものと思われる。

6～9は地文のみの胴部破片で、6～8は全てRの柵糸文、9はRⅠ単節の縄文である。10は無文の胴部、11は底部で、隆帯による懸垂文の一部が残る。

石器 (第176図)

12は短冊形の打製石斧である。扁平な礫を素材とし、背腹両面に自然面が残る。長さ10.6cm、幅5.2cm、厚さ2.95cm、重さ195.85gである。石材は緑色岩である。

第20号住居跡 (第177～180図)

L・M・16グリッドに位置する。第9・13号住居跡に壊されている。また、中央を横切るように水道管が埋設されており、この部分の発掘調査はできなかった。

長径4.4m、短径4.4mの楕円形の住居跡である。長辺側北東部分の壁が張り出してテラス状に段をなしており、切り合いが存在した可能性がある。主軸方向はN・45°・Wを指す。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.38mである。壁溝は検出されなかった。

床面は平坦で南東方向に向かって緩やかに傾斜

している。主軸線上や奥壁寄りに炉跡が位置している。埋甕炉で、深鉢土器の胴上半部を正位に埋設する。土器の周囲から一回り大きい掘りかたを検出した。不整な隅丸方形で、直径46cm、深さ17cmである。土器は掘りかたの底面に接する状態で埋設されていた。

床面上から25本のビットが検出された。建て替えと考えるにはあまりに分布が密であり、一部に他の住居跡やビットとの切り合いが想定される。

これらのうち、主軸線を挟んで左右に対置されるP1～3、P18～21、P12～14・26、P5・24等は主柱穴と考えられ、4本柱の上屋を構成する可能性が高い。

主軸線南東側の壁近くにP6～11が集中している。出入り口施設とも考えられるが、規模や深さが主柱穴としたものと遜色ないため、一部に主柱穴が含まれる可能性もある。

覆土は概ね上下2層からなる。土層図中1・2層が上層、3層以下が下層に比定され、遺物は主に上層から出土している。

また、プラン東壁寄りの主柱穴付近から南東壁寄りの出入り口周辺にかけて安山岩の剥片が多量に出土した。層位のうえでは当該部分の2層から3層にかけて、緩やかな傾斜を示しつつ散布しており、住居跡の埋没過程で人為的に一括廃棄されたものと考えられる。剥片の総点数は827点、総重量は5,414gである。

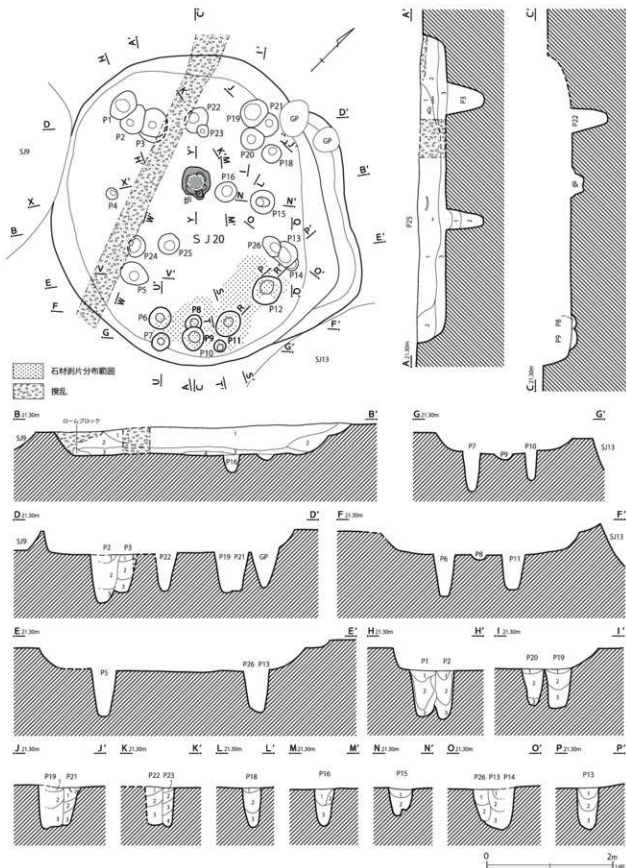
覆土中からは勝坂Ⅲ式と加曾利E式の土器が出土しているが、炉体土器の特徴から住居跡の所属時期は勝坂Ⅲ式期と考えられる。

第20号住居跡出土遺物

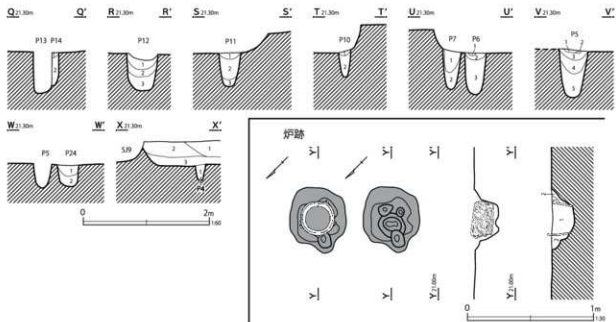
土器 (第181～183図)

1は炉体土器である。円筒形の深鉢で、胴部中段のみ残存する。

上下を刻み隆帯と平行沈線で区画した文様帯を持ち、内部にやはり刻み隆帯と平行沈線による波頭文が展開する。波頭の先端は隆起し、5単位の



第177图 第20号住居跡(1)



SJ-20 埋没部

- 1 暗褐色土層 : 焼土ブロック・炭化物若干含む
2 暗褐色土層 : ロームブロック多く 炭化物少量含む 跡まり良好

SJ-20

- 1 黒褐色土層 : ローム粒子・明白灰色土粒子わずかに含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量含む
3 暗褐色土層 : 黒色土粒子少量含む
4 暗褐色土層 : 暗褐色土粒子多く含む 跡地焼ロームを主体とする層

P11

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
3 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P12

- 1 黒褐色土層 : ロームブロック少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子わずかに含む 茶色味がある
3 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子わずかに含む

P13

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子・炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物微量含む
3 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物微量含む

P14

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む 黒色土粒子少量含む

P15

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む 炭化物微粒子非常に多く含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む 炭化物微粒子多く含む
3 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子わずかに含む 炭化物少量含む
4 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む
5 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子わずかに含む

P16

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む 炭化物微粒子非常に多く含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
3 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P17

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P18

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子わずかに含む 黒色土粒子多く含む

P19

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P110

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P111

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
3 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P112

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
3 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P113

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子わずかに含む 炭化物微量含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
3 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P114

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子わずかに含む
2 暗褐色土層 : 茶褐色土層 : ローム粒子・炭化物わずかに含む

P115

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P118

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P119

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
3 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P120

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
3 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む

P121

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む
3 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P122

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む
3 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P123

- 1 暗褐色土層 : 焼土粒子多く 炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む
3 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子少量含む

P124

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む

P125

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む

P126

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子多く 焼土粒子わずかに含む
2 暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物わずかに含む 黒色土粒子少量含む

第178図 第20号住居跡(2)

第 19 表 第 20 号住居跡柱穴計測表

ピットNo.	径径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	径径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	径径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	径径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	径径(cm)	深さ(cm)
P1	48.0	72.1	P2	48.0	75.3	P3	54.0	61.1	P4	20.0	25.2	P5	46.0	75.0
P6	36.0	67.2	P7	28.0	68.4	P8	28.0	16.3	P9	36.0	17.6	P10	20.0	46.7
P11	44.0	56.0	P12	50.0	62.0	P13	34.0	58.5	P14	22.0	?	P15	38.0	42.6
P16	34.0	62.1	P17			P18	30.0	65.0	P19	46.0	69.0	P20	36.0	57.7
P21	38.0	59.6	P22	44.0	61.3	P23	18.0	61.6	P24	34.0	32.7	P25	34.0	59.1
P26	28.0	50.1												

小突起となっている。

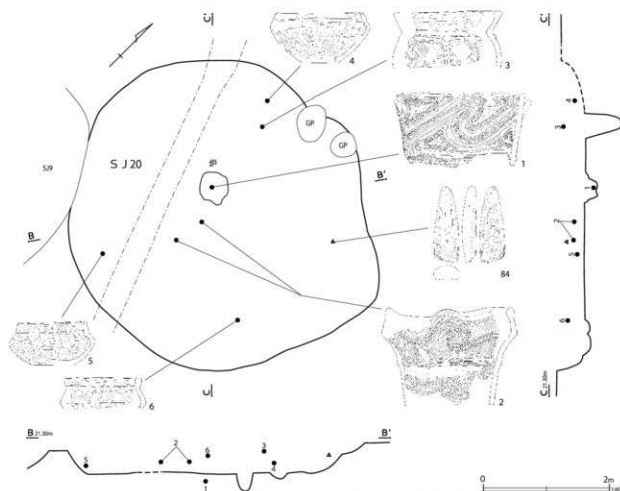
波頭文と上下の区画の間に形成された三角形のスペースには三叉文を描く。また、モチーフの交点には交互刻みを配している。胴下半部は縄文帯となっており、RL 単節縦位回転の縄文を施文する。

復元最大径は約29.1cm、現存高は約15.8cmである。胎土はシルト質である。器壁は外面黄橙色、内面灰黄褐色である。全体が被熱により脆弱となっている。

2は波状口縁の深鉢である。口縁部から胴下半部まで残存する。

器形はやや寸胴のキャリバー形で、口唇断面が肥厚して内外に稜を持つ。口縁直下には無文帯を持ち、以下胴上半部にかけて文様帯を持つ。胴部中段には横位の刻み隆帯が回り、文様帯の下端を区画している。

主文様は横位展開する渦卷文で、1と同様に刻み隆帯+平行沈線により文様を描く。主文様と下位の隆帯区画との間は刻み隆帯の楕円文で連結さ



第 179 図 第 20 号住居跡遺物出土状況 (1)

れており、余白には縦位の集合沈線を充填する。
また、1にみられた交互刻み文は本例でも頻繁に使用されている。

胴下半部は縄文帯となり、RL単節の縄文を横位回転で施文している。

復元最大径は約28.6cm、現存高は約20.7cmである。胎土は多量の砂、小礫を含む。器面は灰橙色である。焼成は不良である。

3は広口壺形土器である。口縁から胴部中段まで残存する。

胴張りで、頸部が「く」の字にくびれて口縁外反し、口唇断面は肥厚して内面に張り、口端上に平坦面を持っている。

頸部のくびれ直下に横位の隆帯が巡って文様帯の上端を区画し、さらに縦位の隆帯で器面を分割

し、内部に沈線文を描く。

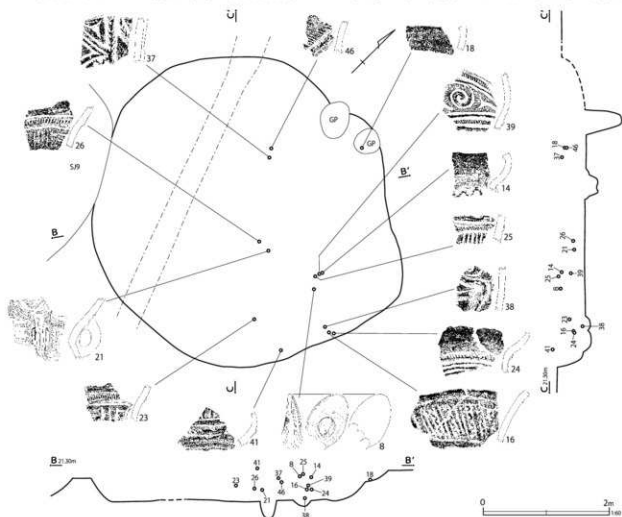
復元最大径は約23cm、現存高は約12.1cmである。胎土はシルト質である。器面は黄橙色である。焼成は比較的良い。外面に被熱による風化がみられる。

4～6は比較的小型の浅鉢で、いずれも無文である。

4は底部を欠失する。胴部上段に最大径を持ち、口縁は内傾しつつ軽微に外反する。折り返し口縁で、外面に段を持つ。

復元最大径は約20.9cm、現存高は約10.4cmである。胎土はシルト質である。器面は黒褐色～黒色である。焼成は良い。

5は胴部中段がソロバン玉状に張り出す。頸部は「く」の字に屈曲して、口縁は直立する。折り



第 180 図 第 20 号住居跡遺物出土状況 (2)

返し口縁で、外面にわずかに段を持つ。

復元最大径は約18cm、現存高は約9.3cmである。胎土は少量の砂を含む。器壁は黄橙色で、黒斑がみられる。焼成は良好である。

6は口縁から胴部中段まで残存する。胴部中段が「く」の字に張り出し頸部がくびれて口縁は直立する。折り返し口縁で、口唇断面肥厚して外面に段を持つ。

復元最大径は約18.1cm、現存高は約6.7cmであ

る。胎土は少量の砂を含む。器壁は外面暗橙色、内面灰橙色である。焼成は良好である。

7～78は破片資料である。

7・8は口縁上に直立する鱗状の突起である。いずれも側面に凹孔を持つ。8は凹孔と逆の側面に扁平な隆帯2本を貼り付けている。9は水平口縁の直下に刻みを伴う突起列が巡るものとみられる。

10は胴張りの深鉢とみられ、内湾する胴部から



第181図 第20号住居跡出土遺物(1)

口縁が直立する。折り返し口縁で、胴部との境に稜を持つ。胴部には集合沈線文を描いている。

11～13は円筒形深鉢の口縁部である。11は口唇内面が張り出し、口端上に平坦面を作り出している。無文の口縁で、胴部との境には1条の沈線が巡り、胴部には三叉文をはじめとする沈線文を描く。

12は折り返し口縁で、口唇断面が著しく肥厚して、口端上面に平坦面を持つ。胴部との境に凹線と刻みを伴う隆帯が巡る。13はやや内湾する口縁で、口唇内面に稜を持つ。口縁直下に1条の沈線が巡り、縦位の集合沈線文を描く。

16はハの字に開く口縁で、口縁直下上下を平行沈線で区画した文様帯を持つ。内部には縦位の集合沈線文を描き、部分的に交互刺突を施す。

17～20はいずれも無文の口縁部である。17は折り返し口縁で、内面に段を持つ。18は口唇内面が突出し、口端上面に平坦面を持つ。19は軽微に外反する折り返し口縁で、外面に段を持つ。20は口唇が内外面に突出して、口端上に広い平坦面を形成する。

21はキャリパー形の深鉢胴部で、括れ部分に横位の貫通孔を持つ把手を配する。器面は刻みを伴う隆帯で分帯され、三叉文等の沈線文を描く。22は円筒形深鉢の頸部ないし胴上半部とみられ、刻み隆帯によるS字状の単位文が付される。

23～30は刻みを伴う隆帯による文様帯上下の区画部分である。23は縦位の平行沈線間に交互刻みや角押し文列を描く。

25・26は集合沈線文を描く。27は斜行する平行沈線で器面を分割し、三角形の区画を形成して、内部に爪型文や三叉文を描く。胴下半部にはRの撚糸文を施文する。

28～30は刻み隆帯で文様帯内部を分割する。28の胴下半部にはRL単節縦位回転の縄文を施文する。

31～46は胴部の文様帯である。刻みを伴う隆帯

で器面を分割し、集合沈線文や爪型文、三叉文、交互刺突文等を描く。36は平行沈線文に沿って棒状工具先端の円形刺突が並ぶ。37は矢羽根状の刻みを持つ隆帯である。

38は扁平な隆帯による曲線モチーフである。39は渦巻文を挟んで三叉文を対置する。40、43～46は集合沈線文が地文的に用いられている。

47・48は地文縄文の土器である。47は刻み隆帯で楕円形の区画を描く。48は隆帯に沿って小波状沈線文を描く。

49は円筒形深鉢の胴下半部であろう。文様帯の下にRの撚糸文を施文する。

14は曾利系の深鉢口縁部である。内湾する無文口縁で、頸部にくびれを持ち、交互刺突を伴う隆帯が巡る。

15は三原田式類似の土器と考えたが、浅鉢の可能性もある。胴上半部が「く」の字に張り出して刻みを伴う隆帯が巡る。口縁直下に2条の隆帯が巡り、対向する渦巻文を描く。

50～56は加曾利EⅠ～Ⅱ式の胴部破片である。50は2本隆帯による渦巻文の一部であろう。51は1本隆帯の蛇行懸垂文である。

52～54は2本隆帯の懸垂文である。55は平行沈線の懸垂文で、沈線間の地文を磨り消している。56は扁平な1本隆帯の蛇行懸垂文である。

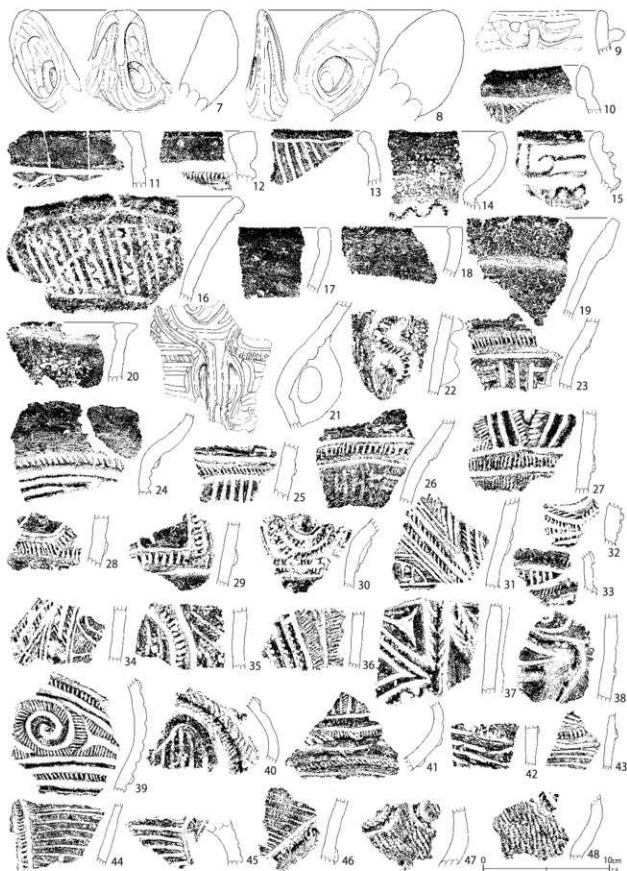
57～68は地文のみ施文する破片である。57は口縁部である。直線的に開いた後に口縁直下で内湾し、口端は外屈して段を形成する。地文はLR単節縦位回転の縄文である。

58～63は地文縄文の胴部で、地文は61がLR、他はRL単節の縄文である。58・60・62・63は0段多条の可能性もある。

64～68は地文撚糸文の胴部である。原体はRが卓越し、67のみLの撚糸文である。

69・70は深鉢底部である。地文はいずれもRの撚糸文を施文する。

71～78は浅鉢である。71は無文の浅鉢で、胴上



第 182 图 第 20 号住居跡出土遺物 (2)

半部が丸く張り出し、頸部屈曲して口縁直立する。折り返し口縁で、外面に段をなす。

72・73もこれに類似する浅鉢口縁部である。いずれも口唇断面角頭棒状で、口端上面は平坦に整形されている。74・75は胴上半部に文様帯をもつもので、扁平かつ幅広い隆帯を用いて曲線的なモチーフを描いている。文様帯下端に区画は設けていない。

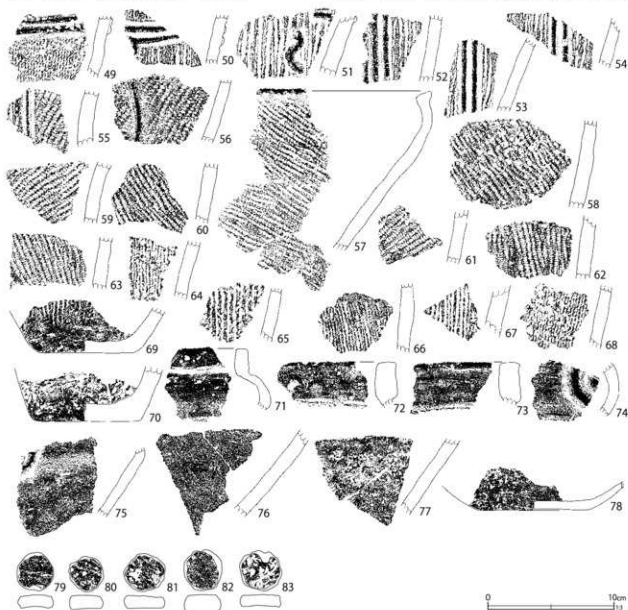
76・77は無文の胴下半部である。78は底部である。薄手の器壁で、底面は緩やかな上げ底状になっている。79～83は土製円盤を一括した。

石器 (第184図)

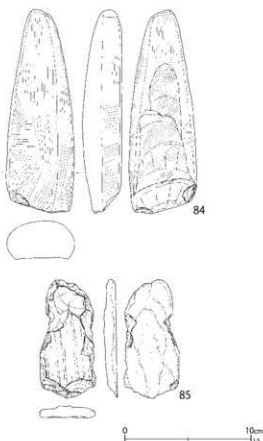
84は磨製石斧である。比較的細身で、断面楕円形である。刃部腹面がひろく剥離しており、使用に伴う破損と考えられるが、この部分にさらに研磨を加えて再使用している。先端部には刃部再生後の使用にともなう複数の剥離が観察される。

長さ17.2cm、幅5.4cm、厚さ3.1cm、重さ454.17gである。石材はシルト岩である。

85は打製石斧である。短冊形で、側縁にわずかに抉りを持つ。背面に節理面、腹面に自然面を広く残しており、加工は主に背面側に集中している。



第183図 第20号住居跡出土遺物(3)



第184図 第20号住居跡出土遺物(4)

刃部は片刃で、比較的鋭利である。

長さ9.4cm、幅4.4cm、厚さ1cm、重さ55.29gである。石材はホルンフェルスである。

第23号住居跡 (第185～188図)

L・14グリッドに位置する。第24号住居跡・第146・147・148号土壇・第1号溝跡に壊されている。

長径4.22m、短径3.77mの隅丸方形の住居跡で、主軸方向はN・60°・Wを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.33mで

ある。壁の直下に壁溝が一巡する。床面は平坦で、中央がやや下がっている。

主軸線上やや奥壁寄りで炉跡を検出した。楕円形の地床炉で、上下二段の掘り込みを持つ。長径75cm、短径58cm、深さ19cmである。主軸は住居跡本体とほぼ共通である。

床面上から5本のビットが検出された。これらのうちP1～4が主柱穴と考えられ、4本柱の上屋を構成するものと考えられる。

主軸線上南東側の壁近くにごく浅い落ち込みが存在し、ここに入出口が存在したのと考えられる。平面隅丸台形で、一端を壁溝に接している。落ち込みの底面と周囲は踏み固められていた。

覆土は上下2層からなり、土層図中14・15層が上層、16層以下が下層に比定される。遺物は覆土中からほぼ均等に出土している。所属時期は勝坂式末～加曾利EⅠ式期と考えられる。

第23号住居跡出土遺物

土器 (第190・191図)

1はキャリバー形の深鉢である。口縁から底部まで残存する。水平口縁直下に1条の隆帯と沈線が巡り、口縁部に文様帯を持つ。

隆帯による櫛歯文がおそらく4単位配置され、モチーフの間隙には縦位の集合沈線文を施文する。

頸部との境には段が存在し、横位の撫で調整による無文部が介在するが、文様帯下端の区画等は設けていない。胴部にはRの燃糸文を縦位回転で施文している。

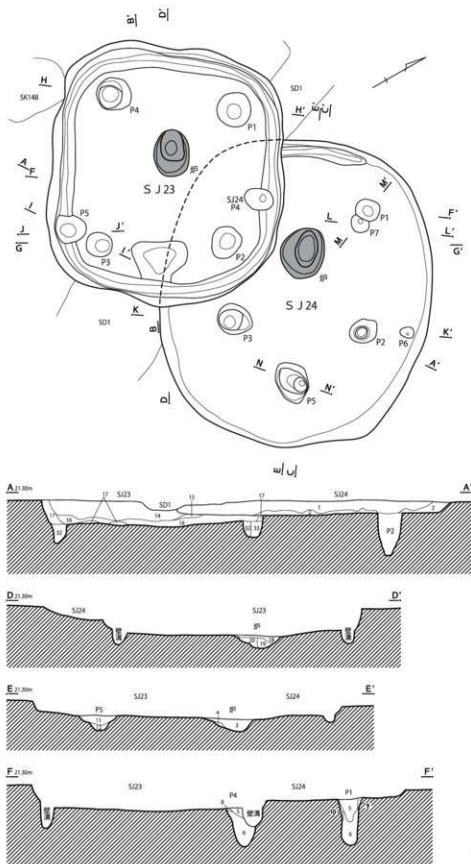
復元最大径は約20.9cm、現存高は約23cmである。胎土には多量の砂礫を含む。器壁は外面黄褐色、内面暗灰黄褐色である。焼成はやや不良であ

第20表 第23号住居跡柱穴計測表

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	54.0	86.7	P2	52.0	83.6	P3	42.0	73.5	P4	56.0	81.5
P5	48.0	40.3									

第21表 第24号住居跡柱穴計測表

ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ビットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P1	40.0	73.7	P2	48.0	65.8	P3	56.0	72.4	P4	46.0	62.5
P5	58.0	65.3	P6	22.0	22.1	P7	30.0	26.3			



第185图 第23·24号住居跡(1)

る。2は深鉢胴部である。全体に紡錘形で、頸部との境に緩やかな屈曲を持つ。地文はLの燃糸文で、縦位回転で施文している。懸垂文等はみられない。

復元最大径は約13.2cm、現存高は約14.1cmである。胎土は多量の砂・小礫・シルトを含む。器壁は外面暗褐色、内面暗灰黄褐色である。焼成は不良である。

3～34は破片資料である。

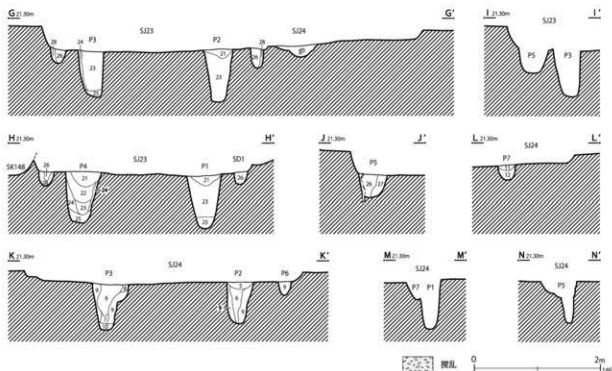
3・4は勝坂Ⅰ式で、角押し文による文様を描

く。3は山形波状口縁の一部とみられ、波頂部に隆帯による区画を設けて、内部に半裁竹管状工具による角押し文列が並ぶ。

4は細い円形竹管状の工具による角押し文である。縦位の角押し文列の間に、上下対向するU字状モチーフを描く。

丸く張り出す胴上半部と直立する折り返し口縁の間に凹線が巡る。口端上および胴部に横位の爪型文列が巡る。胎土に大量の金雲母を混入する。

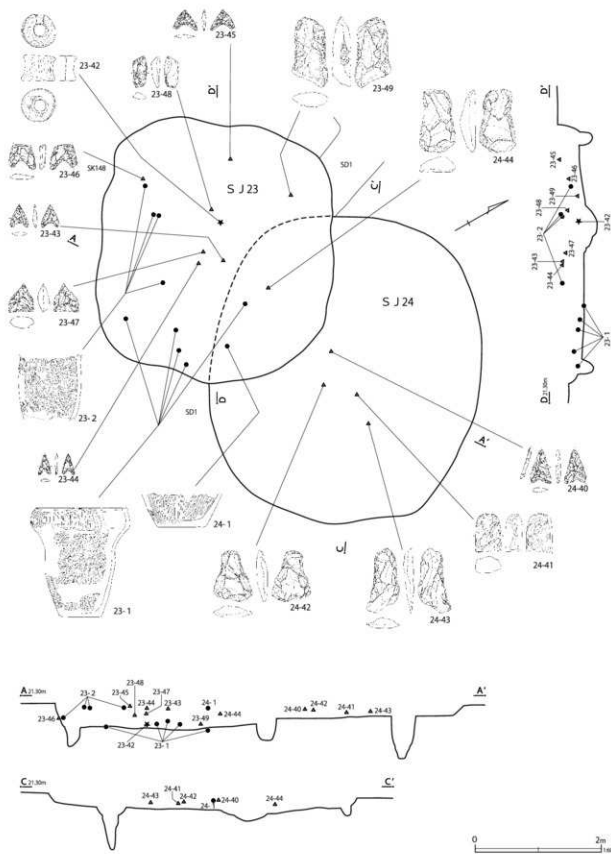
6は勝坂Ⅱ式である。口縁直下に隆帯による半



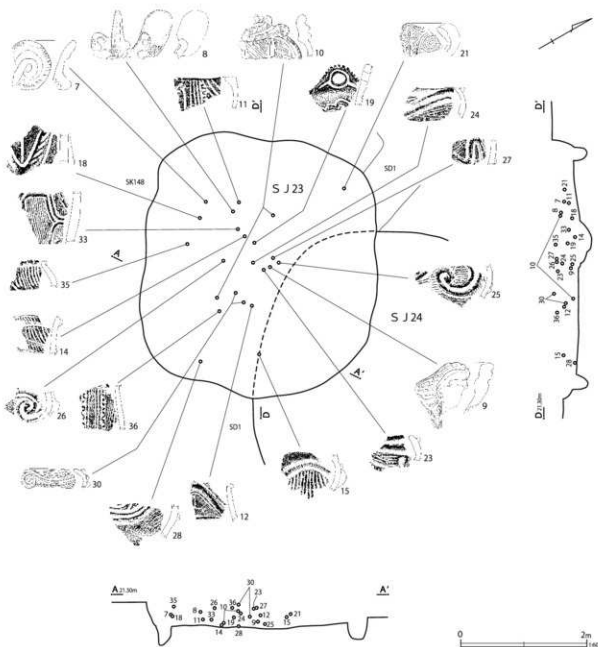
- S J 24
1 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子多く 焼土粒子少量
炭化物若干含む
2 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・焼土粒子多く
炭化物若干含む
S J 24 P1
3 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック多く 炭化物若干含む
4 暗褐色土層 : ロームブロック多く 焼土ブロック少量含む
S J 24 Pit
5 暗褐色土層 : ロームブロック多く 炭化物少量含む
6 暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物少量含む
7 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック多く ローム粒子少量含む
8 暗黄褐色土層 : 粗粒ロームブロック多く ローム粒子若干含む 細まり
浅し
9 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
10 暗褐色土層 : ローム粒子若干含む 固く締まっている
11 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干 ローム粒子少量含む
12 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
S J 23・24
13 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック少量 炭化物若干含む
14 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック多く ロームブロック若干 焼土
ブロック少量 炭化物若干含む

- 15 暗褐色土層 : ロームブロック微量 焼土ブロック少量 炭化物若干含む
16 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック多く含む
17 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 炭化物少量含む
S J 23 P1
18 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土ブロック・炭化物多く含む
19 暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土ブロック・炭化物若干含む
20 暗褐色土層 : ローム粒子・粗粒焼土ブロック多く含む
S J 23 Pit
21 暗褐色土層 : ロームブロック多く 炭化物若干含む
22 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干 炭化物少量含む
23 暗褐色土層 : ロームブロック若干 炭化物少量含む
24 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
25 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む 固く締まっている
26 暗褐色土層 : ロームブロック若干 炭化物少量含む
27 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量含む
28 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
29 暗褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック微量 炭化物少量含む
30 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子若干 炭化物少量含む
31 暗褐色土層 : ローム粒子若干
32 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック微量 ローム粒子若干 炭化物少量含む
33 暗褐色土層 : ローム粒子若干 焼土粒子・炭化物少量含む

第186図 第23・24号住居跡(2)



第 187 图 第 23・24 号住居跡遺物出土状況

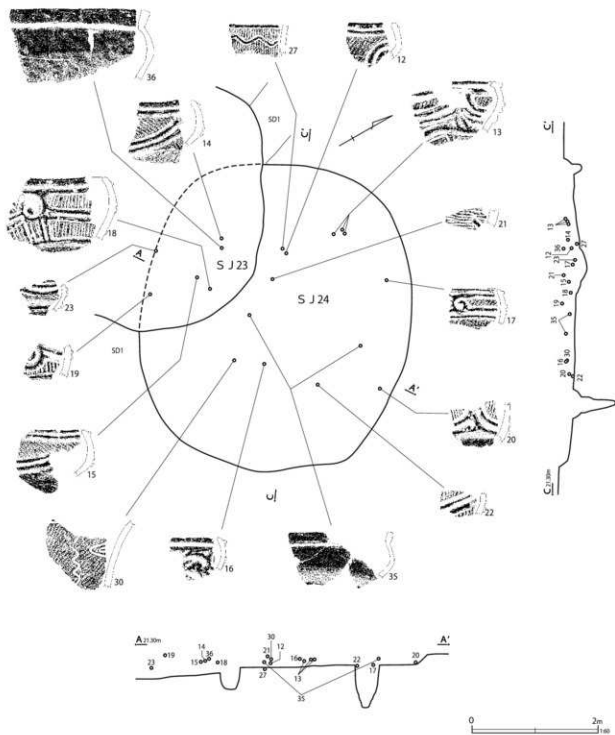


第188図 第23号住居跡遺物出土状況

円形の区画を設けている。区画内部はキャタピラ文と、半裁竹管状工具の弧状文、小波状沈線文で埋めている。

7～18は勝坂Ⅲ式である。7は口縁上に位置する円盤状の突起で、内面に渦巻文を配する。8は縦位の円盤状突起で、円形の貼瘤と一対で配置される。

9は波頭型の突起で、上面に盲孔を持つ逆円錐状の突起と対をなしており、矢羽根状の刻みを持つ縦位の隆帯へと接続している。10は胴張の深鉢で、口縁上の突起には矢羽根刻みの隆帯によるS字文を描く。胴部には刻み隆帯で楕円形の区画を構成し、内部を縦位の平行沈線で分割して、斜位の集合沈線文を充填する。



第 189 図 第 24 号住居跡遺物出土状況

11は円筒形深鉢の口縁部である。口端が内屈して、上面に広い平坦面を持つ。外面は縦位の集合沈線に加え、交互刺突文や三叉文等を描く。12は隆帯による三角形の区画内部に爪型文が巡って、

中央に三叉文を描いている。13は区画内に渦巻文を、18は刻みを伴う隆帯の区画内部に大柄の三叉文を描くものとみられる。

14は刻み隆帯の区画内部に集合沈線文を充填

している。15は胴下半部の橢圓文で、突起を伴っている。16・17は文様帯下端を区画する刻み隆帯である。17の胴下半部にはR L単節縦位回転の縄文を施文する。

19・20は中峠系の土器である。19は波状口縁の波頂部に貫通孔を穿ち、対向する三叉文を描く。胴部にはR縦位回転の燃糸文を施文し、平行沈線による小波状文を描く。

20は外反する水平口縁で、やはりR縦位回転の燃糸文を施文した上に平行沈線による小波状文が巡る。

21は曾利Ⅰ式系の土器であろう。強く内湾する小波状口縁で、外面に縦位の隆帯が貼り付けられ、浮線＋沈線による密な渦巻文を描く。

22～33は加曾利EⅠ式で、30まではキャリバー類深鉢の口縁部である。25は2本隆帯の大柄な渦巻文を描くもので、23・24も同類の文様の一部であろう。26は渦巻文の末端が突起化する。27は十字文の一部であろう。

28は文様帯下端の区画を持たず、頸部無文帯も存在しない。29は文様帯下端の区画で、やはり頸部無文帯を持たない。39は扁平に圧縮された文様帯を持つ口縁部で、加曾利EⅡ式に下る可能性がある。

31・32は胴部文様帯上端の区画である。31は2本隆帯の懸垂文が垂下する。32は平行沈線による

懸垂文である。

36は平行沈線による懸垂文に交互刺突を伴う。33の胴部には半裁竹管状工具による平行沈線と曲線的なモチーフを描く。

35は浅鉢胴上半部の文様帯であろう。頸部に交互刺突を伴う隆帯が巡り、集合沈線による密な渦巻文を描く。

37は広口壺形の器形で、波状口縁の波頂部に縦位の橋梁状把手が付される。34は深鉢底部で、R縦位回転の燃糸文を施文する。

38～41は土製円盤である。38は前期諸磯式の破片を再利用している。42は滑車型の耳飾りである。中央の貫通孔から周囲に向けて放射状に擦痕や凹溝が走っている。

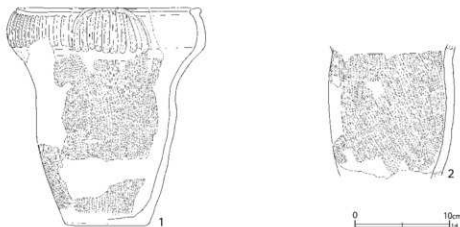
石器 (第192図)

43～47は石畿である。

43は凹基の石畿である。長さ1.85cm、幅1.4cm、厚さ0.35cm、重さ0.6gである。石材はチャートである。

44は凹基の石畿で、裏面に主要剥離面を残している。長さ1.65cm、幅1cm、厚さ0.25cm、重さ0.29gである。石材は黒曜石である。

45は凹基の石畿で、左脚先端を折損する。脚部に対して体部が短いブーメラン形のプロポーションである。長さ1.65cm、幅2cm、厚さ0.35cm、重さ0.69gである。石材はチャートである。



第190図 第23号住居跡出土遺物(1)